

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第16集

# 内 荒 遺 跡

## (遺 物 編)

昭和62年度静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第16集  
内 容 違 及 亦 <遺物編>

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますよう  
お願ひいたします。

正 誤 表

	誤	正
10頁10行目	欄	欄
86頁表No.37	C	B

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第16集

# 内荒遺跡

## (遺物編)

昭和62年度静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 序

国道1号線静清バイパス建設に伴う静岡市川合地区的埋蔵文化財発掘調査は、昭和59年5月に発足した本研究所が最初に着手した事業のひとつである。

静岡平野の北東部に位置する川合地区には、これまで遺跡の存在が知られていなかったが、昭和58年度に静岡市教育委員会により予備調査が実施され、宮下遺跡・川合遺跡・内荒遺跡の3遺跡の存在することが明かとなった。この成果を受け、本研究所では現地調査3年、資料整理2年の計5カ年に及ぶ調査計画を作成し、これに基づいて昭和59年7月から本調査を開始している。5カ年という長期間にわたる調査であり、かつ資料が膨大なものになるため、現地調査と並行して資料整理をすすめ終了したものから順次報告書にまとめることにした。本書は静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書の第3冊目にあたるもので、昭和59年度、昭和60年度の兩年度にわたって調査を実施した内荒遺跡の遺物編を収録したものである。

内荒遺跡は2カ年に及ぶ調査によって奈良時代後半から平安時代前期を主体とする時期の遺跡であることが明かとなった。柵列や溝等で方形に地割されたなかに掘立柱建物群が計画的に配置されているという特徴をもち、出土遺物にも多量の灰釉陶器、墨書き土器をはじめ、「造大神印」と陽鋳された銅印など注目すべき遺物が含まれている。安倍郡衙に比定できる可能性が大であり、静岡県はもとより全国的にみても律令期における重要な資料を提供するものであろう。

調査ならびに本書の作成にあたっては建設省をはじめとした関係機関各位に多大の援助、協力を得ている。謹筆にあたり、関係各位に深謝を呈するものである。また、調査及び整理に従事した本所員の労を多とするものである。

1988年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

## 例　　言

1. 本書は静岡市川合新田内荒85他に所在する内荒遺跡の発掘調査報告書の第2分冊である。
2. 調査は昭和59～62年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託を受け、調査指導機関静岡県教育委員会、調査実施機関財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 発掘調査は昭和59年度（1984年7月1日から1985年3月31日まで）昭和60年度の2ヵ年にわたって実施した。
4. 資料整理は昭和59～61年度に内荒遺跡・宮下遺跡・川合遺跡の現地調査に並行して出土土器類の水洗・接合等の一部整理作業をすすめ、昭和62年度に本格的に実施した。
5. 調査体制は以下のとおりである。

昭和59年度 所長 斎藤 忠  
　　調査研究部長（常務理事） 池谷和三  
　　調査研究部第二課 課長 平野吾郎  
　　　主任調査研究員 佐野五十三  
　　調査研究員 安井敏博・山田成洋・杉浦正直・飯塚晴夫  
　　　小川隆司  
昭和60年度 所長 斎藤 忠  
　　調査研究部長 岡田恭順  
　　調査研究部第二課 課長 平野吾郎  
　　　調査研究員 加藤真澄・安井敏博・山田成洋・佐藤正知  
　　　大石 泉・小川隆司  
昭和61年度 所長 斎藤 忠  
　　調査研究部長 岡田恭順  
　　調査研究部第二課 課長 平野吾郎  
　　　調査研究員 杉浦高敏・加藤真澄・杉澤正敏・山田成洋  
　　　佐藤正知・小川隆司  
昭和62年度 所長 斎藤 忠  
　　調査研究部長 山下 晃  
　　調査研究部第二課 課長 平野吾郎  
　　　調査研究員 杉澤正敏・山田成洋・大石 泉

6. 出土資料のうち綠釉陶器については化学分析を名古屋大学名譽教授山崎一雄氏に依頼し、蛍光X線分析を奈良教育大学の三辻利一氏に依頼し分析結果を付録に収録した。また木製品については樹種鑑定を山内 文氏に依頼し鑑定結果を付録に収録した。
7. 本書は静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。執筆分担は以下のとおりである。  
　　第1章第3節・第2章第1節・第4節・第5節・第3章第1節……山田成洋  
　　第1章第1節・第2節、第2章第2節・第3節、第3章第2節……大石 泉
8. 本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

# 目 次

序 例 言	
第1章 資料整理の概要	
第1節 資料整理の流れ	1
第2節 赤外線カメラの使用について	4
第3節 グリッドの訂正について	6
第2章 遺 物	
第1節 土器類・土製品	8
A. 灰釉陶器	10
B. 緑釉陶器	25
C. 須恵器	25
D. 土師器	42
E. 内黒土師器	56
F. 陶磁器	56
G. 転用硯	58
H. 瓦	60
I. 土錐	60
第2節 墨書土器	84
第3節 木製品	98
A. 容器	100
B. 食事具	109
C. 服飾具	109
D. その他の生活具	112
E. 祭祀具	112
F. 用途不明品	116
G. 井戸材	120
H. 碕板	120
I. 柱根	123
第4節 金属製品	131
A. 銅製品	131
B. 鉄製品	134
C. 鉛製品	138
第5節 石製品	140
第3章 考 察	
第1節 掘立柱建物南群出土の一括資料について	142
第2節 土器墨書の同筆について	168
付編1 内荒遺跡・宮下遺跡出土の緑釉陶片の化学分析について … 山崎一雄	175
付編2 内荒遺跡の灰釉陶器の螢光X線分析 … 三辻利一	177
付編3 内荒遺跡出土の木製品について … 山内 文	181

## 挿図目次

第1図 遺物カード	2
第2図 赤外線写真	5
第3図 グリッド修正図	7
第4図 土器グリッド別出土分布図	9
第5図 灰釉陶器法量図（碗・皿・段皿）	11
第6図 土器実測図1（灰釉陶器1）	13
第7図 土器実測図2（灰釉陶器2）	14
第8図 土器実測図3（灰釉陶器3）	15
第9図 土器実測図4（灰釉陶器4）	17
第10図 土器実測図5（灰釉陶器5）	18
第11図 土器実測図6（灰釉陶器6）	21
第12図 土器実測図7（灰釉陶器7）	22
第13図 土器実測図8（灰釉陶器8）	23
第14図 土器実測図9（灰釉陶器9）	24
第15図 土器実測図10（綠釉陶器）	25
第16図 須恵器法量図1（有台环・环蓋・碗・皿）	26
第17図 土器実測図11（須恵器1）	28
第18図 土器実測図12（須恵器2）	29
第19図 土器実測図13（須恵器3）	30
第20図 土器実測図14（須恵器4）	31
第21図 土器実測図15（須恵器5）	32
第22図 須恵器法量図2（無台环）	33
第23図 土器実測図16（須恵器6）	34
第24図 土器実測図17（須恵器7）	35
第25図 土器実測図18（須恵器8）	36
第26図 土器実測図19（須恵器9）	39
第27図 土器実測図20（須恵器10）	40
第28図 土器実測図21（須恵器11）	41
第29図 土師器法量図（無台环）	43
第30図 土器実測図22（土師器1）	44
第31図 土器実測図23（土師器2）	45
第32図 土器実測図24（土師器3）	46
第33図 土器実測図25（土師器4）	47
第34図 土器実測図26（土師器5）	49
第35図 土器実測図27（土師器6・内黒土師器）	50
第36図 土器実測図28（土師器7）	53
第37図 土器実測図29（土師器8）	54
第38図 土器実測図30（土師器9）	55
第39図 土器実測図31（陶磁器）	57
第40図 土器実測図32（転用窯）	59
第41図 土製品実測図（瓦・土鍬）	61
第42図 墨書き土器グリッド別出土分布図	84
第43図 墨書き土器実測図I	90

第44図	墨書き土器実測図2	91
第45図	墨書き土器実測図3	92
第46図	墨書き土器実測図4	93
第47図	墨書き土器実測図5	94
第48図	墨書き土器実測図6	95
第49図	木製品グリッド別出土分布図	99
第50図	木製品実測図1(曲物1)	101
第51図	木製品実測図2(曲物2)	102
第52図	木製品実測図3(曲物3)	103
第53図	木製品実測図4(曲物4・樽)	104
第54図	木製品実測図5(挽物1)	105
第55図	木製品実測図6(挽物2)	106
第56図	木製品実測図7(挽物3)	107
第57図	木製品実測図8(割物・漆椀)	108
第58図	木製品実測図9(食事具)	110
第59図	木製品実測図10(服飾具他)	111
第60図	木製品実測図11(農具)	113
第61図	木製品実測図12(その他の生活具)	114
第62図	木製品実測図13(祭祀具)	115
第63図	木製品実測図14(用途不明品1)	117
第64図	木製品実測図15(用途不明品2)	118
第65図	木製品実測図16(用途不明品3)	119
第66図	木製品実測図17(井戸材)	121
第67図	木製品実測図18(礎板)	122
第68図	木製品実測図19(柱根)	123
第69図	金属製品実測図1(銅印・帶金具・錢貨)	132
第70図	金属製品実測図2(きせる)	135
第71図	金属製品実測図3(馬銭)	136
第72図	金属製品実測図4(刀・釘・その他の鉄製品)	137
第73図	石製品実測図(砥石)	141
第74図	掘立柱建物南群土器接合関係図	144
第75図	有台坪B型式分類図	149
第76図	供膳形態器種構成図(1)	158・159
第77図	供膳形態器種構成図(2)	160・161
第78図	曲物・挽物皿法量図	166
第79図	墨書き文字集成図1	170
第80図	墨書き文字集成図2	171

#### 付編1

図1	窯址と遺跡から出土した綠釉陶片の ルビジウムとストロンチウムの含有比	176
----	---------------------------------------	-----

#### 付編2

図1	内荒遺跡 Rb-Sr 分布図	179
図2	宮下遺跡 Rb-Sr 分布図	179

## 挿表目次

第1表 整理作業工程表	2
第2表 遺構方位およびグリッド座標修正表	7
第3表 土器類地区別出土一覧表	9
第4表 出土陶磁器產地別一覧表	57
第5表 土器一覧表1	62
第6表 土器一覧表2	63
第7表 土器一覧表3	64
第8表 土器一覧表4	65
第9表 土器一覧表5	66
第10表 土器一覧表6	67
第11表 土器一覧表7	68
第12表 土器一覧表8	69
第13表 土器一覧表9	70
第14表 土器一覧表10	71
第15表 土器一覧表11	72
第16表 土器一覧表12	73
第17表 土器一覧表13	74
第18表 土器一覧表14	75
第19表 土器一覧表15	76
第20表 土器一覧表16	77
第21表 土器一覧表17	78
第22表 土器一覧表18	79
第23表 土器一覧表19	80
第24表 土器一覧表20	81
第25表 土器一覧表21	82
第26表 土器一覧表22	83
第27表 土製品一覧表	83
第28表 墨書文字一覧表1	86
第29表 墨書文字一覧表2	87
第30表 墨書土器一覧表1	96
第31表 墨書土器一覧表2	97
第32表 木製品地区別出土一覧表	99
第33表 木製品一覧表1	124
第34表 木製品一覧表2	125
第35表 木製品一覧表3	126
第36表 木製品一覧表4	127
第37表 木製品一覧表5	128
第38表 木製品一覧表6	129
第39表 木製品一覧表7	130
第40表 金属製品地区別出土一覧表	131
第41表 金属製品一覧表（きせる・馬銘・釘）	139
第42表 出土砥石一覧表	140
第43表 土器出土地点一覧表	145

第44表 供膳形態器種構成表	157
第45表 墨書き文字観察表	172
付編 1	
表1 窯址および遺跡出土の緑釉陶片のルビジウムおよびストロンチウムの量	176
付編 2	
表1 内荒遺跡出土灰釉陶器の分析データ	178
表2 各母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値	178
付編 3	
表1 内荒遺跡 樹種と木製品の関係表	184

## 図版目次

- 図版1 土器1 (灰釉陶器 1 碗)  
図版2 土器2 (灰釉陶器 2 碗)  
図版3 土器3 (灰釉陶器 3 碗・短頸壺蓋)  
図版4 土器4 (灰釉陶器 4 盆)  
図版5 土器5 (灰釉陶器 5 三足盤・段皿・耳皿)  
図版6 土器6 (灰釉陶器 6 手付瓶・長頸瓶)  
図版7 土器7 (灰釉陶器 7 長頸瓶)  
図版8 土器8 (須恵器 1 壺蓋)  
図版9 土器9 (須恵器 2 壺蓋・有台壺)  
図版10 土器10 (須恵器 3 有台壺)  
図版11 土器11 (須恵器 4 無台壺)  
図版12 土器12 (須恵器 5 碗・皿)  
図版13 土器13 (須恵器 6 長頸瓶・甕その他)  
図版14 土器14 (土師器 1 無台壺)  
図版15 土器15 (土師器 2 無台壺)  
図版16 土器16 (土師器 3 無台壺)  
図版17 土器17 (土師器 4 壺蓋・皿・有台壺・鉢 内黒土師器 無台壺・碗)  
図版18 土器18 (転用器)  
図版19 土器19・土製品 (綠釉陶器・陶磁器・土鍤)  
図版20 土器20 (技法1 灰釉陶器施釉方法)  
図版21 土器21 (技法2 須恵器底部調整)  
図版22 土器22 (技法3 土師器内面・底部調整)  
図版23 土器23 (平安時代前期供膳形壺種 1.灰釉陶器 2.須恵器 3.土師器)  
図版24 墨書文字1  
図版25 墨書文字2  
図版26 墨書文字3  
図版27 木製品1 (曲物1)  
図版28 木製品2 (曲物2)  
図版29 木製品3 (曲物3)  
図版30 木製品4 (曲物4)  
図版31 木製品5 (曲物5・櫛)  
図版32 木製品6 (挽物1)  
図版33 木製品7 (挽物2)  
図版34 木製品8 (挽物3)  
図版35 木製品9 (挽物4・削物・漆椀)  
図版36 木製品10 (櫛・火鉢板・鑊・杓子)  
図版37 木製品11 (下駄・位牌・杓子(櫛)形木製品)  
図版38 木製品12 (鋤)  
図版39 木製品13 (横槌・刀形・陽物形・その他)  
図版40 木製品14 (斎串・木簡・用途不明品)  
図版41 木製品15 (用途不明品)  
図版42 木製品16 (井戸材)  
図版43 木製品17 (礎板1)

- 図版44 木製品18（碇板2）
- 図版45 木製品19（碇板3）
- 図版46 木製品20（箸形木器・釘付き板材）
- 図版47 金属製品1（銅印・鎔帶金具・錢貨）
- 図版48 金属製品2（きせる・馬鍔・刀）
- 図版49 金属製品3（鉄釘・馬具・鉄砲玉・その他）
- 図版50 石製品（砥石）

# 第1章 資料整理の概要

当研究所では、昭和59年度発足以来、静岡県内の国道一号線バイパス関係を中心に各地域において発掘調査を行っている。現在これらの調査によって得られた資料についての整理報告作業を進めているところであるが、統一のとれた資料整理作業のまとまった形での整理マニュアルがまだ完成に至らず、各作業ごとで試行を繰り返しているところである。しかしながら昨年度より「大谷川」、本年度より「川合」「原川」などで整理作業が本格的に動きはじめ、また今後、静清バイパス関連の調査を中心として報告のための資料整理が主体として控えていることからも、この整理作業を進めるなかでマニュアルを整備していく必要が生じている。そこで「内荒遺跡（遺物編）」の整理作業の流れを報告する形で、当研究所における資料整理マニュアルの試案をしたい。

静清バイパス（川合地区）では、昭和59年度から現地調査を開始し、すでに「宮下遺跡（遺構編）」「内荒遺跡（遺構編）」を刊行している。さらに現地調査と並行して川合地区「内荒」「宮下」「川合」各遺跡の遺物に関しても、「取り上げ」「水洗」「登録」「注記」作業及び「接合」「復元」作業をも行い、現地終了後すぐさま本格的に資料整理作業を開始した。

資料整理  
マニュアル

## 第1節 資料整理の流れ

現段階では、川合地区的資料整理作業は第1表に示したような流れで整理を進めている。本節では示した一覧表に基づき各作業工程の説明を加えながら、特に遺物ごとの取扱いの違いなどに重点を置きつつ、整理作業工程について各作業ごとに述べることとする。

取り上げ 調査で出土した遺物は、土器・木製品など遺物別に分類して取り上げる。各遺物ともその日のうちに、現地にて包含層出土の場合は、層単位、グリッド単位で取り上げ、遺構内出土の場合は遺構別、覆土別に分類して取り上げることを原則としている。また、遺構に伴うもの、一括資料に関しては、出土位置・出土状況を実測及び写真撮影をした上で、仮番号を付し、取り上げている。なお、石や骨など土器と間違えやすいものについては、現地段階では土が付着しているなどで限界があるため、取り上げ後の水洗段階、注記段階で再チェックを行うようにしている。取り上げた遺物については、遺跡名（川合地区の場合はSKIという略号を用いる）、地区名、層名、グリッド名、遺構出土の場合は遺構名、その他仮番号、レベルなどの必要な事項を記入したラベルを添付している。ラベルには小包などに使用する紙袋を利用しておらず、安価で楽に袋などに取り付けることができるので重宝しているが、雨など水に弱く、長時間使用しているうちに針金の部分が取れてしまったり、破れやすくなるなどから部分的にちぎれるのが欠点である。水洗・注記・仮収納時点までこのラベルが通用していくことになるため、マイラーなどの耐水性・耐久性に富んだ素材をした専用ラベルの作成を検討している。なお、木製品については、保管時に水没けをする関係上マイラーをラベルとして使用している。

取り上げ  
ラベル

水洗 土器・石器については、当初ブラシによる洗浄を行ってきたが、昭和60年度から水量・水圧調整等の可能な動力噴霧機（有光工業㈱ SE-8型・同PK-600W型）を使用している。この機器の導入により少人数の作業員でもって、ブラシ使用時よりもかなりの効率を図ることができるとともに、軟弱な土器や木製品などにブラシのハケ目を着けてしま

水洗  
動力噴霧機

第1表 整理作業工程表

	I	II	III	IV	V	VI	VII
土 器	取り上げ 地区別 グリッド・測量用 出土位置測定	登録 水洗	注記	第1次収納 地区別 登録番号帳 コンテナ	複合・復元 実測・写真	カード作成 分類整理番号 付与	図版作成
本 製 品	取り上げ 水洗・分類	登録		地区別 ジール・ピック タブ・ラン コントローラー	実測・写真 資材貯蔵室 保存処理	カード作成	図版作成
石 製 品	取り上げ 水洗・分類	登録 地区別石製品 台帳作成 取り上げ種 点上記等	注記	地区別 ケース ↓ コンテナ	実測・写真 資材質鑑定	カード作成	図版作成
金 属 製 品	取り上げ 水洗・分類	登録 地区別金属製品 台帳作成	注記	地区別 ケース ↓ コンテナ	実測・写真 資材質鑑定 保存処理	カード作成	図版作成
自然遺物	取り上げ 水洗・分類	登録 地区別自然遺物 台帳作成		地区別 タッパー ↓ コンテナ	種別定		

1. 汚染測定 地区	測定番号	147
2. 内 容 測 定	内 容	手写
3. 部局名	新潟市立歴史博物館	
4. 15E 15N E80 N47 IV層		
5. 出 箱 NO.2-9		
6. SG-3-4-5		
7.		
8.		
9.		
10. 15-003-1		
11.		
12.		
13.		
14.		
15.		
16.		
17.		
18.		
19.		
20.		
21.		
22.		
23.		
24.		
25.		
26.		
27.		
28.		
29.		
30.		
31.		
32.		
33.		
34.		
35.		
36.		
37.		
38.		
39.		
40.		
41.		
42.		
43.		
44.		
45.		
46.		
47.		
48.		
49.		
50.		
51.		
52.		
53.		
54.		
55.		
56.		
57.		
58.		
59.		
60.		
61.		
62.		
63.		
64.		
65.		
66.		
67.		
68.		
69.		
70.		
71.		
72.		
73.		
74.		
75.		
76.		
77.		
78.		
79.		
80.		
81.		
82.		
83.		
84.		
85.		
86.		
87.		
88.		
89.		
90.		
91.		
92.		
93.		
94.		
95.		
96.		
97.		
98.		
99.		
100.		
101.		
102.		
103.		
104.		
105.		
106.		
107.		
108.		
109.		
110.		
111.		
112.		
113.		
114.		
115.		
116.		
117.		
118.		
119.		
120.		
121.		
122.		
123.		
124.		
125.		
126.		
127.		
128.		
129.		
130.		
131.		
132.		
133.		
134.		
135.		
136.		
137.		
138.		
139.		
140.		
141.		
142.		
143.		
144.		
145.		
146.		
147.		
148.		
149.		
150.		
151.		
152.		
153.		
154.		
155.		
156.		
157.		
158.		
159.		
160.		
161.		
162.		
163.		
164.		
165.		
166.		
167.		
168.		
169.		
170.		
171.		
172.		
173.		
174.		
175.		
176.		
177.		
178.		
179.		
180.		
181.		
182.		
183.		
184.		
185.		
186.		
187.		
188.		
189.		
190.		
191.		
192.		
193.		
194.		
195.		
196.		
197.		
198.		
199.		
200.		
201.		
202.		
203.		
204.		
205.		
206.		
207.		
208.		
209.		
210.		
211.		
212.		
213.		
214.		
215.		
216.		
217.		
218.		
219.		
220.		
221.		
222.		
223.		
224.		
225.		
226.		
227.		
228.		
229.		
230.		
231.		
232.		
233.		
234.		
235.		
236.		
237.		
238.		
239.		
240.		
241.		
242.		
243.		
244.		
245.		
246.		
247.		
248.		
249.		
250.		
251.		
252.		
253.		
254.		
255.		
256.		
257.		
258.		
259.		
260.		
261.		
262.		
263.		
264.		
265.		
266.		
267.		
268.		
269.		
270.		
271.		
272.		
273.		
274.		
275.		
276.		
277.		
278.		
279.		
280.		
281.		
282.		
283.		
284.		
285.		
286.		
287.		
288.		
289.		
290.		
291.		
292.		
293.		
294.		
295.		
296.		
297.		
298.		
299.		
300.		
311.		
312.		
313.		
314.		
315.		
316.		
317.		
318.		
319.		
320.		
321.		
322.		
323.		
324.		
325.		
326.		
327.		
328.		
329.		
330.		
331.		
332.		
333.		
334.		
335.		
336.		
337.		
338.		
339.		
340.		
341.		
342.		
343.		
344.		
345.		
346.		
347.		
348.		
349.		
350.		
351.		
352.		
353.		
354.		
355.		
356.		
357.		
358.		
359.		
360.		
361.		
362.		
363.		
364.		
365.		
366.		
367.		
368.		
369.		
370.		
371.		
372.		
373.		
374.		
375.		
376.		
377.		
378.		
379.		
380.		
381.		
382.		
383.		
384.		
385.		
386.		
387.		
388.		
389.		
390.		
391.		
392.		
393.		
394.		
395.		
396.		
397.		
398.		
399.		
400.		
401.		
402.		
403.		
404.		
405.		
406.		
407.		
408.		
409.		
410.		
411.		
412.		
413.		
414.		
415.		
416.		
417.		
418.		
419.		
420.		
421.		
422.		
423.		
424.		
425.		
426.		
427.		
428.		
429.		
430.		
431.		
432.		
433.		
434.		
435.		
436.		
437.		
438.		
439.		
440.		
441.		
442.		
443.		
444.		
445.		
446.		
447.		
448.		
449.		
450.		
451.		
452.		
453.		
454.		
455.		
456.		
457.		
458.		
459.		
460.		
461.		
462.		
463.		
464.		
465.		
466.		
467.		
468.		
469.		
470.		
471.		
472.		
473.		
474.		
475.		
476.		
477.		
478.		
479.		
480.		
481.		
482.		
483.		
484.		
485.		
486.		
487.		
488.		
489.		
490.		
491.		
492.		
493.		
494.		
495.		
496.		
497.		
498.		
499.		
500.		
501.		
502.		
503.		
504.		
505.		
506.		
507.		
508.		
509.		
510.		
511.		
512.		
513.		
514.		
515.		
516.		
517.		
518.		
519.		
520.		
521.		
522.		
523.		
524.		
525.		
526.		
527.		
528.		
529.		
530.		
531.		
532.		
533.		
534.		
535.		
536.		
537.		
538.		
539.		
540.		
541.		
542.		
543.		
544.		
545.		
546.		
547.		
548.		
549.		
550.		
551.		
552.		
553.		
554.		
555.		
556.		
557.		
558.		
559.		
560.		
561.		
562.		
563.		
564.		
565.		
566.		
567.		
568.		
569.		
570.		
571.		
572.		
573.		
574.		
575.		
576.		
577.		
578.		
579.		
580.		
581.		

うようなこともなくなり、洗浄時における遺物の保護などの点も改善できた。なお、詳細については当研究所発行の「所報13号」にも紹介されているので参考にされたい。

**登録** 現場での取り上げ後、水洗・分類・登録の順で整理を進めている。ただし、土器について袋単位で取り上げているため、紛失などの混乱を避け、登録を先行させている。

登録は遺物の種類別・地区別に、遺物登録台帳を作成し行っている。台帳には「登録番号」、「遺物名」「取り上げ日付」「出土地点」「出土層位」「遺構名」「グリッド」を記入することを基本とし、土器に関しては袋単位に、石器、木器、金属器等に関しては1点ずつ登録している。

登録番号は木製品が「W」、石製品が「S」、金属製品が「M」という遺物記号を頭に付し、例えば木製品ならば「W-10-088」(遺物記号、地区名、番号)などのように、取り上げ順に番号を付している。なお、なにも記号がつかないものは土器を示すことにしている。遺物の登録方法は基本的にいづれの遺物の場合でも同様であるが、木製品の場合は、取り上げ後の変化が激しいことなどもあり、取り上げ時のままの状態を台帳に略測図として作成することを行っている。

台帳登録後、今度は各遺物ともラベルに赤マジックで登録番号の逆注記を行う。この登録番号が袋単位で登録した土器を除いて、後で述べる図面番号とともに最終的に遺物番号が付されるまでの、個々の遺物を示す固有の番号ということになる。

**注記・接合** 土器・石器・金属器に関しては、ポスターカラーの白(通称ホワイト)で支障のない部位に注記を行い、透明のラッカーを塗布し消失を防いでいる。注記は破片等を含むすべての遺物に対して施しており、注記の作業量から最低必要限度の事項を記入している。例えば「SKI-10-188」(遺跡名-地区名-登録番号)等のようにである。ただ問題点として、胎土が非常に脆い土器の場合、土器の接合の際に、取扱いに注意しないと土ごと注記が剥離してしまう恐れがある。さらにこのような胎土の場合、注記が判読しにくいくこともある。この点がホワイトによる注記方法の検討・改善が課題となる。また木器については、遺物自身に注記する例もあるが、保存処理を行うことも考慮して登録の際、略測を行っており、個体識別が可能であるため、原則としてはマイラーに注記し、一時的に遺物に添付した後、ビニールバック処理の際に遺物ごとパックしてしまう方法を行っている。

**第1次収納** この段階の収納は次の作業への効率を良くするための仮収納になるため、遺物によって収納時期・形態が異なる。土器については、地区別・登録順・分類別にビニール袋単位でコンテナに収納している。なおビニール袋より抽出し、接合・復元を行った土器については、接合されたすべての破片の登録番号を「作業伝票」に記入した上で、別収納(2次収納)し、実測・写真撮影などの作業を継続していく。他の遺物に関しては、地区別・遺物別・分類別にサイズに応じて家庭用の密封容器(タッパー)、プラスチックケース、フィルムケース等に納めた上で適当なサイズのコンテナに収納している。基本的にはこの収納のまま今後も動くことになる。なお、木器については水没状態にする。取り上げ後「ホウ酸・ホウ砂水溶液」に浸し、コンテナ・水槽などに収納してきたが、蒸発や定期的な水替えに手間がかかるので、現在、すべての木器を対象に塩化ビニールフィルム(通称OVフィルム)を利用した袋に「ホウ酸・ホウ砂水溶液」ごと、家庭用ミニシーラーを利用して密封処理をしている。将来的にはPEG含浸処理を実施していく計画である。

**実測** 土器はB3判の方眼紙、木器はB2判のマイラー用紙、石器はB4判のケント紙を使用して実測を行っている。実測図完成後、「図面番号」「遺物番号」「種類名」「出土地点」「整理番号」などを記入した図面台帳を遺物ごとに作成している。「図面番号」は1枚の用

登録

遺物登録台帳

注記・接合

第1次収納

実測

紙に複数の遺物実測図が作図されているため、No.1-②のように枚番となっている。また土器の場合は、「登録番号」が複数になることもあり、他の1点登録を行っている遺物のように登録番号=遺物個体番号とはならない。そこで実測後図面登録した「図面番号」が土器個体番号となる。

**写 真** 写真撮影サイズは、白黒6×7判(プロニ判)を基本として、遺物に応じてカラースライド(35mm)、4×5判サイズも併用している。土器については原則として完形品もしくは接合・復元をしたもの、顕著な特徴をもつ土器などを撮影している。木器の場合には、現状では実測図完成後、順次行っているが、取り上げ後、裂化が著しく進むため、出土直後の新鮮な状態での撮影を必要とし、また実測に相当の時間を要することから、カード登録時の略測図の作成に併せて、写真撮影を先行させる必要があると考えている。

**カ ー ド** カード 前述してきた作業と並行して各遺物ごとにカードの作成(第1図)を行う。個々の遺物に関するすべての情報を1枚のカードに取り組み、個体の把握をしていくとするものである。土器は水色、木器は黄色、石器は緑色、金属器はピンク、土製品はあさぎ色というように、遺物ごとに色分けされたB4判のカード台紙に出土状況、図面番号、写真番号、登録番号、収納番号、遺物コード、観察事項を記入し、実測図、写真を添付し、整理収納を終えた1点1点の遺物についての最終的な個表とするものである。現状では実測図作成後にカードを作るが、木器、石器については、写真を先行させカードを作成することを考えている。

以上のような作業工程で資料整理作業を進め、報告書の完成に至ったわけであるが今後は整理の終了した各遺物・実測図・写真ネガなどについて、所定の場所に収納・保管し、必要に応じて検索活用、取り出しが迅速に行えるような管理システムの構築という問題が残っている。写真関係では、ネガファイル、写真台帳の部分がまだ未整理であり、管理・収納場所についても現在仮施設での整理作業ということもあります。これもまた確立していない。なおまた現在のところ作成したカード情報をマスターとしてパソコンに入力し始めたところであり、収納管理、研究支援の部分までには到達していないが、これらの部分を含めて今後「宮下」「川合」両遺跡の整理報告の中で整備していく予定である。

## 第2節 赤外線カメラの使用について

内荒遺跡では多数の墨書き土器が出土しており、肉眼だけでは判読しにくい墨書きについて赤外線TVカメラを利用して整理作業を進めてきた。この節ではこの赤外線TVカメラ使用について全般的な紹介を行うこととする。

### 1. 使用機器

当研究所で使用している機器は横浜松ホトニクス社製のもので、その構成は次の通りである。

- ・高性能赤外線TVカメラ C2741

　　カメラヘッド/コントロールユニット/各サイズカメラレンズ

　　特殊フィルター/

- ・赤外線投光器 C1385

- ・テレビモニタ C1846-03

- ・TVモニタ撮影用として、現場使用のカメラ(ニコンF3)

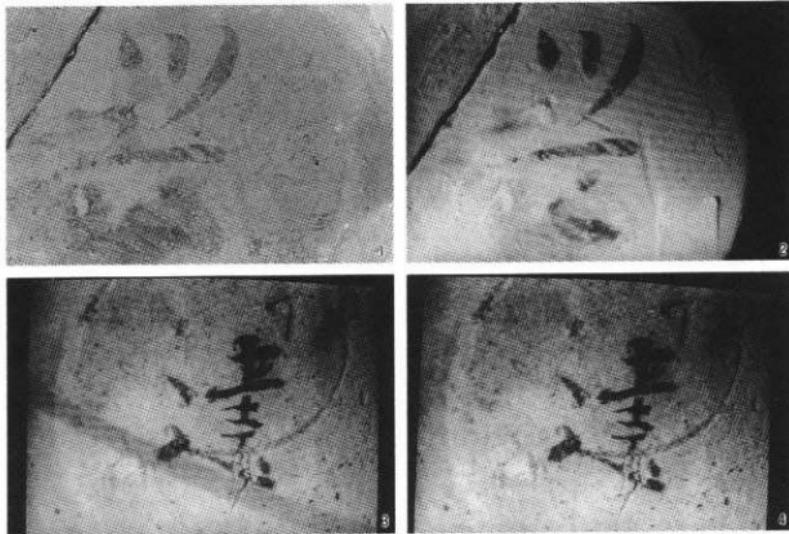
## 2. 赤外線カメラ使用における墨書の判読について

赤外線 TV を通じての墨書画像については、第2図を見ての通り、赤外線照射対象物である土器の材質によってかなりの違いを見ることができる。肉眼で墨書を観察する時に少し水をつけて墨痕を浮き上がらせることをよく行うが、その際にも「灰釉陶器」の場合は読みにくいことがある。赤外線使用時にも同様のことといえるのである。

「土師器」の場合は、肉眼で判読可能のものはより一層濃くテレビモニタに映し出され、肉眼では薄く判読しにくいものも、ある程度読むことができ、またサビなどが付着している場合でもこれを透過して判読できた。

「須恵器」の場合は、あまり光沢がなく、使いこまれば摩滅していないもの、胎土の肌理の粗いものは、ある程度濃くはっきりと映し出されるが、肌理の細かく、また使用されて光沢のあるようなものは不鮮明である。

「灰釉」の場合は、肉眼で明瞭でないものは、赤外線を通してはっきりしない。「肉眼で見える以上にはならない」というのが使用してみての実感である。逆に場合によっては肉眼のほうが余程良いときもある。水に濡らして見た方が明瞭であることもある。また「灰釉」の場合、撮影時にハレーションをおこしやすく、機器の微調整が面倒になることもある。結論としては次のようなことがいえる。つまり「土師器」「須恵器」は効果が大きく、「灰釉」はあまり期待ができなく、「山茶碗」は多少「灰釉」よりはよく映し出されるということである。



第2図 赤外線写真

その他の留意点としていくつか挙げてみる。まずサビは透過しその下の「墨書」を判読できるが、ただし「灰釉」につくサビは逆に光ってしまうこともある。また使用痕や注記等で使用したラッカーや接着剤などは反射しハレーションをおこしやすいこともある。これらの場合、こまめに赤外線照射角度の調整、ユニットの微調整を行えば、ある程度のよい状況をつくることができる。背景としては、光沢のあるものは使用しない方がよい。ハレーションをおこしやすい。白以外でもあまり状況は良くない。トレーシングペーパーと色付きの紙との組合せが意外と良いことがある。もうひとつ赤外線を通して写し込みをする場合(例えばスケールをいれる)などは、鉛筆を用いたものを使用する。マジック、サインペンなどカーボンを含まないもので書いた文字などはモニタに写らないので注意が必要である。

### 3. モニタ画像の撮影について

**画像撮影** 本書ではモニタに映写された画像(墨書)を写真撮影し、写真図版を組んでいるが、このモニタ写真撮影について、その留意点を次より述べることとする。

今回このモニタに映し出された画像を撮影するための適切な撮影条件を得るために、試験的に書く条件を設定して撮影を行ってみた。「土師器」(硬質・軟質)「灰釉」の3種類の土器についてほぼ同一条件下において撮影を試みた。撮影条件は次の通りである。

シャッタースピード……1/60 1/30 1/15 1/8 1/4

露出……各スピードに対しての適正露出と、ひと絞りづつアンダー、オーバーで。

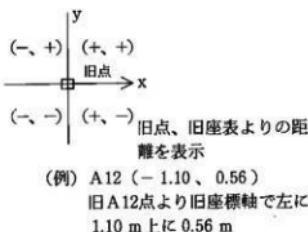
**シャッタースピード** 業者側のデモンストレーション等においては、シャッタースピード1/15以下で対応できるという説明であったが、第2図でわかるように、1/60(2)では幅は狭いが濃くはっきりと、また1/15(3)でも幅広く薄い斜めの線(走査線)が撮影されてしまう。(この走査線は肉眼ではモニターがチカチカする程度でこのような線が入っているとはわからないので確認のしようがない)モニター撮影用レンズの明るさでも多少の違いはあるが、55mm標準(F2.8)レンズの場合、1/8できれば1/4(4)で撮影するのが望ましい(これ以下のスピードでは露光不足になる)。走査線の関係で適正露出は1つではなく、2~4あるのでなるべく絞り込んだ状態での適正露出を選んで撮影した。撮影場所、周囲の照明等はあまり関係なかった。

## 第3節 グリッドの訂正について

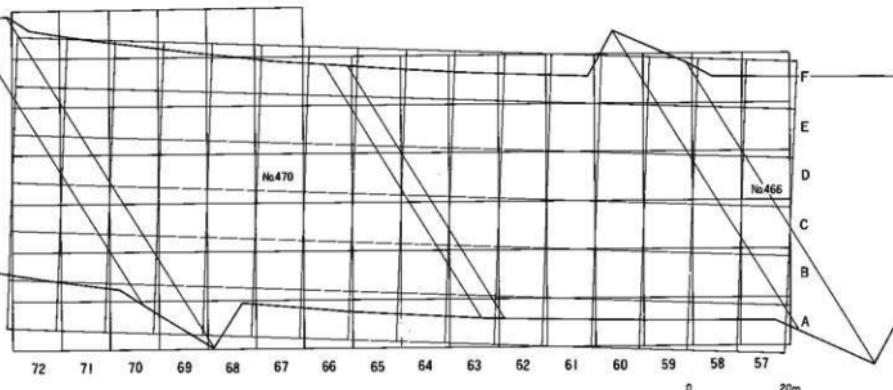
**グリッドの設定** すでに遺構編の第1章第1節で述べた通り、川合地区では調査を進めるにあたり、調査区全域に10m×10mのグリッドを設定した。グリッドの基軸線は現地調査を考慮し、直線道路部分(長尾川約600mの区間:1区~12区)のセンターラインに合わせた。発掘調査では、センターライン上に20m間隔で打たれた路線中央杭を基準杭として、グリッド杭の設定を行ったが、10・13区のグリッド杭設定作業の際、路線中央杭 NO.465(D57グリッド杭)を他の工事杭と誤認し、本来の基軸線より $2^{\circ}23'54''$ ずれてグリッド杭を設定するというミスを犯した。このミスについては、10・11区Ⅲ層調査の際に気がつき、直ちに修正作業を行ったが、12・13区についてはすでに現地調査を終了していたため、遺構実測図の面修正にとどまった。この修正作業は遺構報告書には間に合わなかったため、報告書の図版第4~7図のグリッド座標、遺構図の方針(第12図 SH 1301、第17図 SE 1301)、本文における遺構方位の記載等は未修正のままとなってしまった。このため今回の遺物編においては遺構方位正誤表及びグリッド修正図(第2表、第3図)を示し、グリッドの訂正を図りたい。なお、次章以降で報告する遺物の出土グリッドについては修正することが不可能であるため、未修正のままであることをお断りしておく。

第2表 造構方位およびグリッド座標修正表

造構	誤方位	正方位
S A 1301	N - 46° - E	N - 48° - E
S A 1302	N - 44° - W	N - 42° - W
S D 1203	N - 48° - E	N - 50° - E
S D 1301	N - 47° - E	N - 49° - E
S D 1311	N - 48° - E	N - 50° - E
S H 1301	N - 37.5° - W	N - 35.5° - W



	C		D		E		F	
57	x 0.40	y 1.45	x - 0.02	y 1.44	x -	y -	x -	y -
58	0.41	1.03	- 0.01	1.02	- 0.43	1.0	- 0.84	0.59
59	0.42	0.61	0	0.60	- 0.42	0.59	- 0.83	0.17
60	0.42	0.19	0.01	0.18	- 0.41	0.18	- 0.83	0.17
61	0.43	- 0.23	0.02	- 0.23	- 0.40	- 0.24	- 0.82	- 0.25
62	0.44	- 0.64	0.02	- 0.65	- 0.39	- 0.66	- 0.81	- 0.67
63	0.45	- 1.06	0.03	- 1.07	- 0.39	- 1.08	- 0.80	- 1.09
64	0.46	- 1.48	0.04	- 1.49	- 0.38	- 1.50	- 0.80	- 1.51
65	0.47	- 1.90	0.05	- 1.91	- 0.37	- 1.92	- 0.79	- 1.93
66	0.48	- 2.32	0.06	- 2.33	- 0.36	- 2.33	- 0.78	- 2.34
67	0.49	- 2.74	0.07	- 2.74	- 0.35	- 2.75	- 0.77	- 2.76
68	0.49	- 3.15	0.08	- 3.16	- 0.34	- 3.17	- 0.76	- 3.18
69	0.50	- 3.57	0.09	- 3.58	- 0.33	- 3.59	- 0.75	- 3.60
70			0.09	- 4.00	- 0.32	- 4.01	- 0.74	- 4.02
71							- 0.73	- 4.44



第3図 グリッド修正図

## 第2章 遺 物

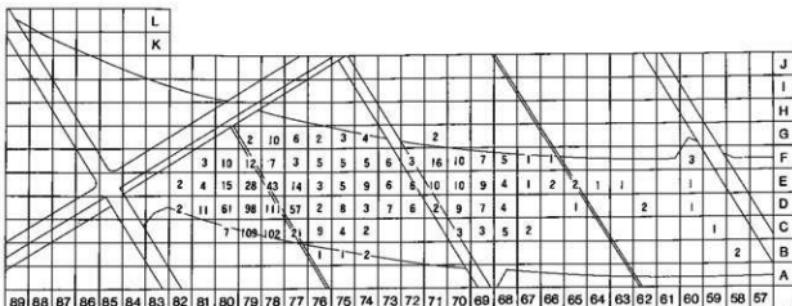
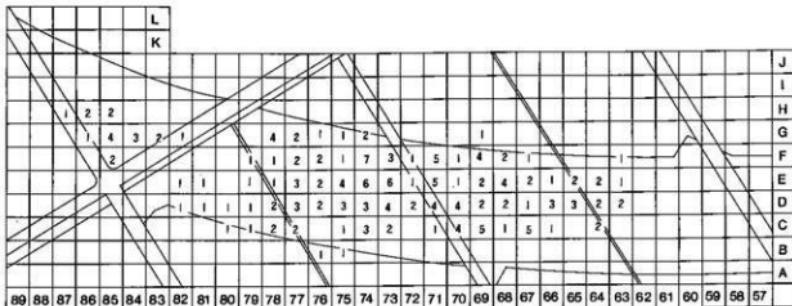
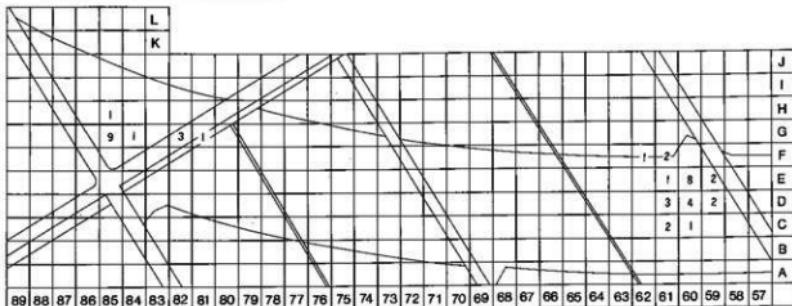
- 出土遺物の種類** 今回の発掘調査では土器類・土製品、木製品、金属製品、石製品など豊富な遺物が出土した。出土遺物の大半は奈良・平安時代の律令期に属するものであり、このほか古墳時代、中世、近世などの遺物が少量出土している。量的には灰釉陶器・須恵器・土師器などの土器類および木製品が主体を占めている。木製品は遺跡の立地が低湿地であることから保存条件に恵まれて多数出土した。内容的にも食事具・服飾具・農具などの各種日常生活用具や祭祀用具をはじめ、遺構に伴う礎板・柱根の建築材、井戸戸、杭など多彩である。土器類では猿投窯編年の黒窓14号窓式に比定される灰釉陶器が多量に出土しており注目される。県内の遺跡ではこれまでに黒窓14号窓式の灰釉陶器が内荒遺跡のようにまとまった量出土した例ではなく遺跡の性格を考えるうえで重要な資料といえよう。これら灰釉陶器に伴って須恵器・土師器のほか曲物・挽物などの木製容器類もまとまった量出土したことから平安時代前期における食膳形態のセット関係を明らかにすることができたことは大きな成果である。また、土器類には墨書き土器および硯・転用硯が含まれている。墨書き土器は灰釉陶器・須恵器・土師器の供膳形態器種に限られ、合わせて84点が出土している。84点のなかには複数箇所に墨書きされた例もあり、墨書き資料は合わせて95点である。墨書きは判読できないものも多いが「建」「岡」「主」「川万呂」などは複数例あり、このなかには同筆のものも認められる。一字墨書きが大半であり、今のところ墨書き文字から遺跡の性格を明らかにすることはできない。このほか墨書き資料に關係するものとして木簡が出土しているが、墨書きは認められない。金属製品は出土量は少ないものの「造大神印」と陽鋳された銅印、鉈尾・丸頭の鎧帶金具、皇朝十二錢のひとつである「神功開寶」などが出土しており、上述の灰釉陶器と合わせて遺跡の性格を考えるうえで重要な資料である。
- 本章ではこれら出土遺物について土器類・土製品、墨書き土器、木製品、金属製品、石製品にわけ、各節ごとにその概要を述べる。

### 第1節 土器類・土製品

- 出 土 量** 内荒遺跡からは総数1417点の土器類・土製品が出土している。この数字は発掘調査において出土した土器類・土製品を袋単位で取り上げ遺物台帳に登録した際の登録点数であり、出土遺物の個体数に直接結びつくものではない。今回出土した土器類には灰釉陶器・綠釉陶器・須恵器・土師器・内黒土師器・陶磁器があり、このなかには墨書き土器や転用硯が含まれている。土製品には瓦と土鍤があるが、いずれも出土量は少ない。
- これら土器類・土製品はII層、III層、IV層の各層から出土しているが、出土の中心は内荒遺跡の主体である13・14・15区のIV層に集中している(第3表)。ここで土器類・土製品の出土状況を各層ごとにグリッド別出土分布図でみてみよう(第4図)。この図では遺構から出土している遺物についてはその遺構が位置するグリッドにあてている。また、遺構が複数のグリッドにわたっている場合は、遺構の中心部が位置するグリッドで代表させている。
- II 層** II層 12区と16区で検出した水田遺構に伴って出土しているが出土量は少ない。12区では水田に掘削された土坑、16区では水路SD1601から出土したものが大半であり、出土土器類は古墳時代から近世・近代までの時間幅をもっている。

第3表 土器類地区別出土一覧表

出土層位	12区	13区	14区	15区	16区	計	
Ⅱ層					24	24	
Ⅲ層		7	43	182	2	104	338
Ⅳ層		54	72	232	356	11	725
トレンチ、その他		7	6	19	25	4	61
合計	68	121	433	383	143	1,148	



第4図 土器グリッド別出土分布図

III 層 III層 土器類は12区の南半を除いたほぼ全域から出土しているが全て小破片である。土器の主体は律令期の須恵器、土師器でこれに少量の陶磁器が含まれている。III層は近世のほぼ全期間を通じて水田が営まれてたと考えられる層であり、出土土器の主体をなす律令期の須恵器、土師器などは水田耕作に伴ってIV層から引き上げられたものであろう。出土遺物のなかに馬銃の齒のような耕起具があることや土器の出土範囲がIV層の出土分布とほぼ重複していることがこれを裏付けている。なお陶磁器片は17世紀代を中心とした江戸時代に属するものである。

IV 層 IV層 前述したように内荒遺跡の主体である律令期の遺構が形成されている層位であり、今回の発掘調査で出土した土器類の大半がこの層から出土したものである。遺構は13区で検出した棚列 SA 1301と16区で検出した杭列 SA 1601とで囲まれた範囲に展開しているが、土器類の出土状況もこれによく符合したりかたを示しており、遺跡の範囲外にあたる12区南半および16区での出土量は極めて少ない。一方、遺跡の中心をなす掘立柱建物南群の位置するC・D・E 77~80からは大量の土器類が集中して出土している。内荒遺跡を特徴づける黒帯14号窯式の灰釉陶器や墨書き土器の大半はこの一画から出土したものである。掘立柱建物南群における遺物の出土状態についてはすでに『内荒遺跡（遺構編）』に示したが（第6図・第7図）、土器類は掘立柱建物の周溝を中心としながらも掘立柱建物南群の全域に散布した状態で出土しており、土器類の接合作業の結果も遺構出土のものと包含層出土のものが接合する資料、複数の遺構にまたがって接合する資料が相当数にのぼった。このことから掘立柱建物南群の一画から出土した資料は掘立柱建物の廃絶に伴って廃棄されたものである可能性が強いと考えられる。

本節では出土した土器類・土製品の概要を灰釉陶器・緑釉陶器・須恵器・土師器・内黒土師器・陶磁器・転用磚・瓦・土錠の各種類ごとに述べ、墨書き土器については第2節で扱うこととする。

#### 灰釉陶器 A. 灰釉陶器

灰釉陶器には碗・皿類の供膳形態と壺・瓶類の貯蔵形態がある。このうち瓶類については須恵器との判別が難しいものもあり、ここでは確実に須恵器と認定できるもの以外は灰釉陶器として扱っている。

#### 供膳形態 a. 供膳形態

供膳形態の器種には碗、双耳碗、皿、三足盤、段皿、耳皿がある。

##### 碗 1. 碗（1~91・900~902・904~908）

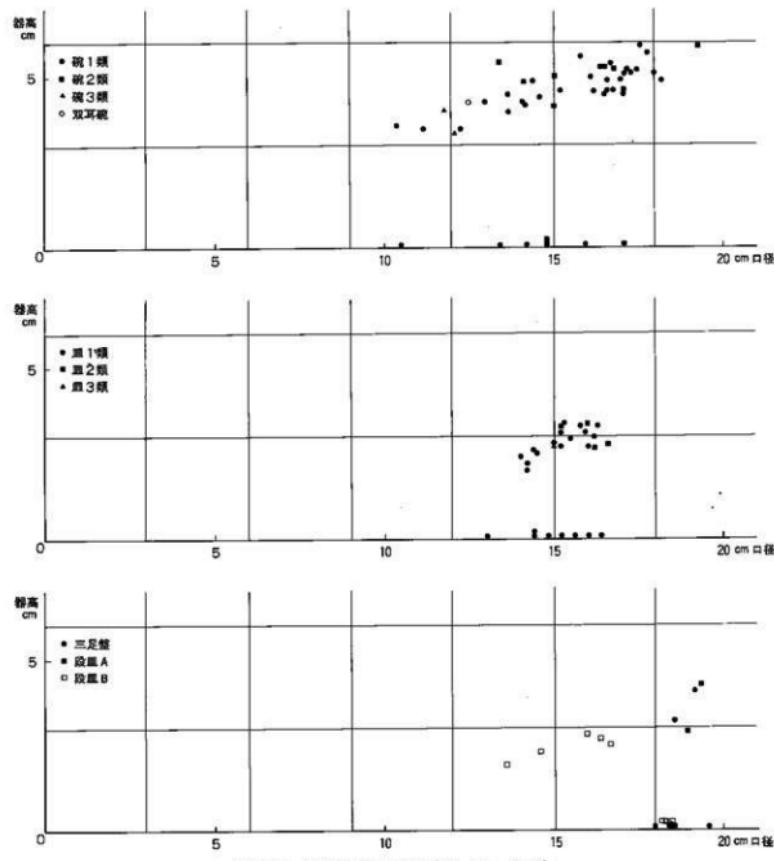
やや内溝する体部に高台のつくもの。法量は口径10.4~19.3cm、器高3.3~5.9cmの幅をもつが、口径：器高が3:1を基本としており、同一形態による法量分化が認められる。なお、器高は小型のものでも3cmをこえており、後述するように皿の器高が3cm前後に集中し1寸高が基本であったと考えられることから、1寸よりも高いことが碗の条件として考えられる。重ね焼きの方法および施釉方法、高台の形態等によって3類に分類できる。

1 類 1類（1~38・806・900~904）三又トチンを使用して重ね焼きを行うもので、猿投窯編年（橋崎・斎藤1982）の黒帯14号窯式に比定できる一群で、今回の調査で出土した灰釉碗の主体をなすものである。胎土は緻密で、白色粒子を少量含んでいる。灰白色～灰色を呈し、灰白色のものは黒斑状の吹き出しが見られるものが多い。猿投窯の製品である。施釉は刷毛塗りを原則とし、施釉部位は①内面全体、②内面全体および外面部の2種がある。また、32は底部外側および高台にまで刷毛施釉されている。灰釉の色調は淡緑色を基調とするが、

胎土の色調などによって淡黄緑色、暗緑色などを呈する。高台はすべてはりつけ高台で、断面形態が方形をなす「角高台」である。外端で接地するもの、内端で接地するもの、下端部全面で接地するものなどのバラエティーがある。下端部の中央が窪む例もある。腰の張った体部に外反する口縁部がつくものが大半であるが、口縁部が外反せず、直線的に開くものもある。23は口縁部外面に1条の沈線をもつ。底部から体部下半の外面にはロクロケズリを行う。体部下半のロクロケズリはロクロナデされるものも多い。6は底部外面中央に糸切り痕が残っている。また5・6・15・22・802にはヘラ記号が認められる。口径18.2cm～10.0cm、器高3.5cm～5.9cmを測るが、径高指数は30前後に集中している。

**2類 (39～53・905)** 三叉トチンを使用せず、直接重ね焼きを行うもので、猿投窯編年の黒笛90号窯式に比定できる一群である。施釉は1類と同様刷毛塗りであるが、施釉部位は①

**2類  
黒笛90号窯式**



第5図 灰釉陶器法量図(碗・皿・段皿)

体部内面のみ、②体部内面および外面、③体部内面および見込みに一筆いれるものの3種類がある。このほか内面全体にたっぷりとかかるものもあるが、これらは重ね焼きの際に天場に置かれた蔵灰自然釉である可能性が高い（斎藤1982）。高台は直接重ね焼きを行うために高台下端の接地面を狭くするよう工夫されており、形態にはいくつかのバリエーションがみられる。胎土は緻密で、白色粒子を少量含んでいる。灰白色～灰色を呈し、灰白色のものは黒斑状の吹き出しが見られるものが多い。灰釉の色調は淡緑色を基調とするが、胎土の色調などによって淡黄緑色、暗緑色などを呈する。1類と同じく猿投窯の製品である。

施釉部位、高台の形態などから4種類に細分できる。

a. 41・47は腰の張った体部に角高台のつくもので、形態的には1類と変わらないが直接重ね焼きを行うものである。41は内面全体にたっぷりと施釉されているのに対し47は内面体部のみの施釉で、施釉きわには重ね焼きの際の高台釉着痕をとどめている。焼成方法が三又トチソを使用していた段階から直接重ね焼きに移行した初期の段階のものと考えられる。

b. aと同様に体部形態は1類と変わらないが、直接重ね焼きを行うために高台下端の接地面を狭くするよう工夫されている。高台は定形化しておらず、直立した細長い高台の下端を内傾させて外端で接地するもの（39・40・43・44）、高台の下端を外傾させて内端で接地するもの（45・46）、しっかりした高台の外縁を斜めにとり下端の接地面を狭くしたもの（42・48）など形態にはいくつかのバリエーションがみられる。施釉は体部内面である。39・40は体部が浅身で器壁が薄くなる傾向にある。

c. 体部の内外両面に施釉するもの。49は薄手の扁平な体部にハの字状に開いた細長い高台がつく。

d. 定形化した三日月高台のつくもの。52・53はいずれも底部内面に一筆施釉している。

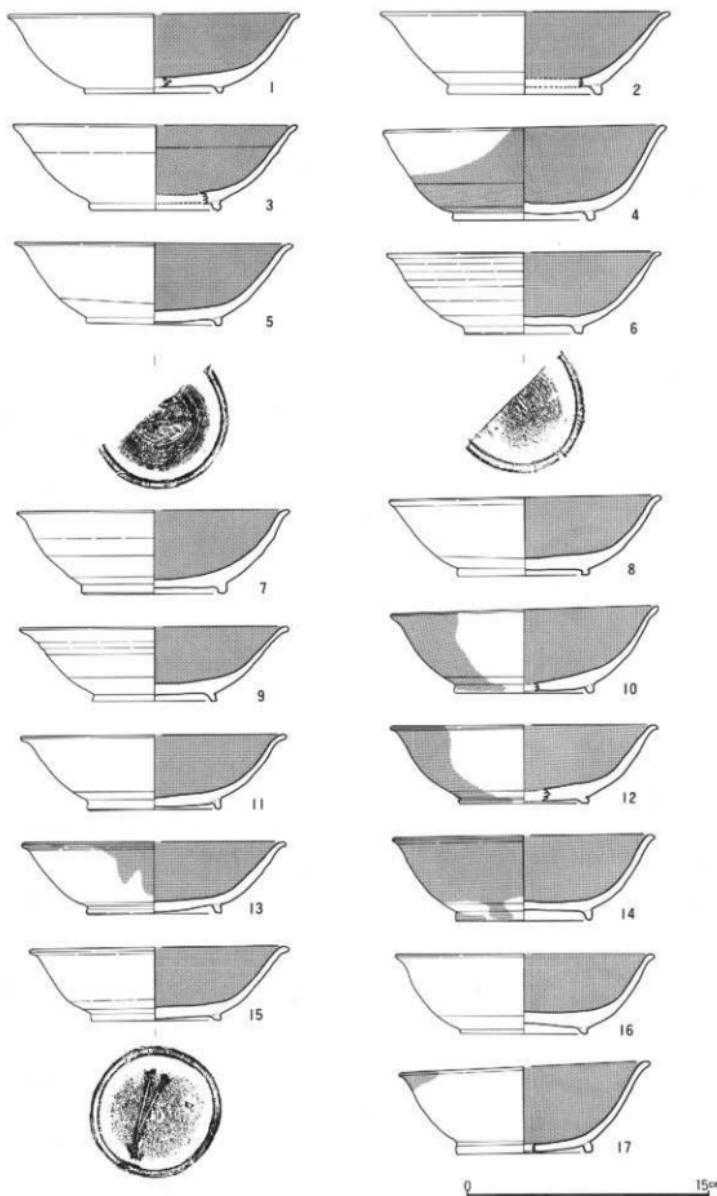
3類  
折戸53号窯式

54～91・907・908）直接重ね焼きをするもので猿投窯編年の折戸53号窯式以降の型式に比定できる一群。静岡県内でも本格的に灰釉陶器生産が行われた時期であり、窯の特定はできないが、大半が静岡県内の窯で生産されたものと考えられる。窯別、型式で細分できるが完形に復元できるものは61・907の2点のみで、あとはすべて破片であるので、ここでは細分せずに一括して扱う。胎土は1類、2類のような白色精良なものはほとんどなく、須恵器にちかい青灰色硬質のものや、灰色で軟質の焼成のものなどバラエティーがある。施釉は体部内外面に濁け掛けするのを原則とするが、発色の悪いものや無釉のものも多い。57・58は体部内外面に刷毛塗りで施釉するものであるが、釉の発色は悪く白色を呈する。高台も①三日月高台がくずれて爪状になったもの、②三日月高台がくずれて断面三角形を呈する低いもの、③細長い高台がハの字状につくもの、43よりもさらに長脚のものなどさまざまなものがある。

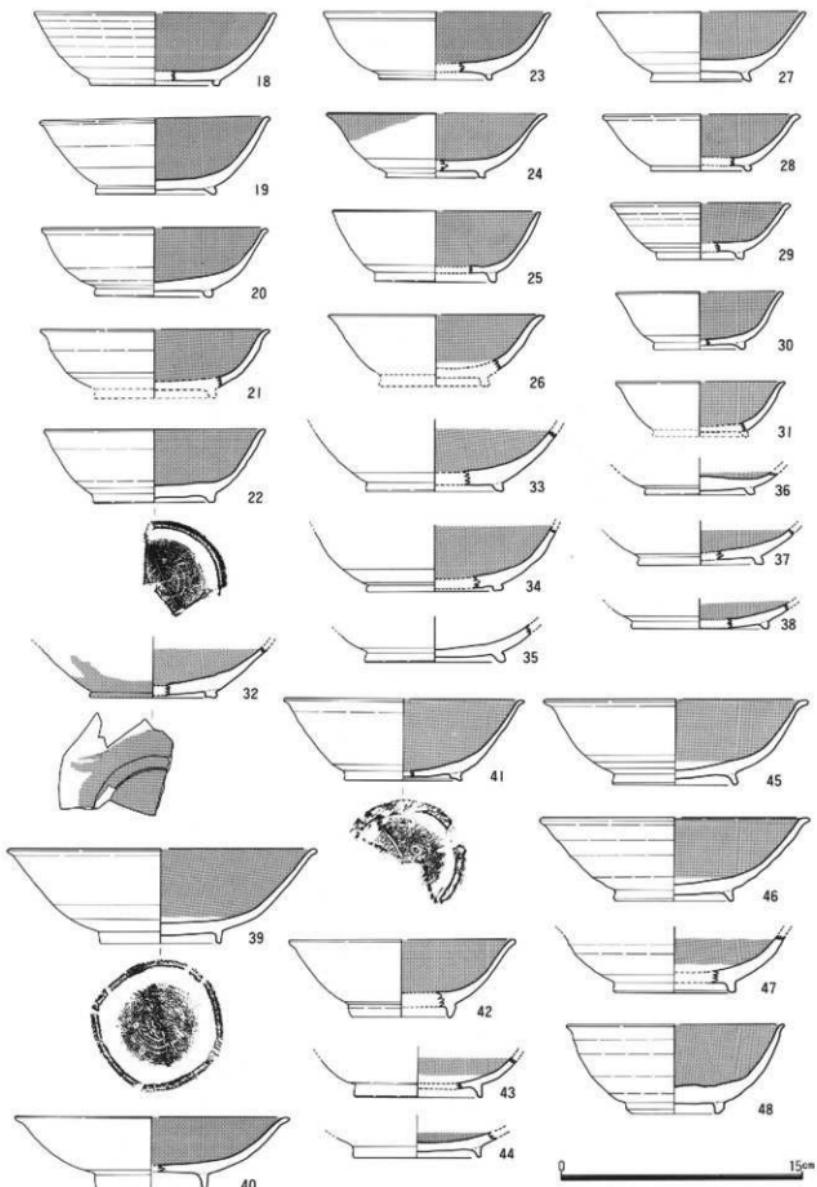
4の高台がつくものは深碗となる可能性が強い。底部外面はロクロケズリするものもあるが、大半は回転糸切り痕を残している。法量は口径では18cm台（57）、16cm台（58・59）、12cm前後（61・907）のものがある。高台径では15cm以上の大型のもの（56）もあるが、8cm前後のものと6cm前後のものの2種におさまる。

## 2. 双耳碗（903）

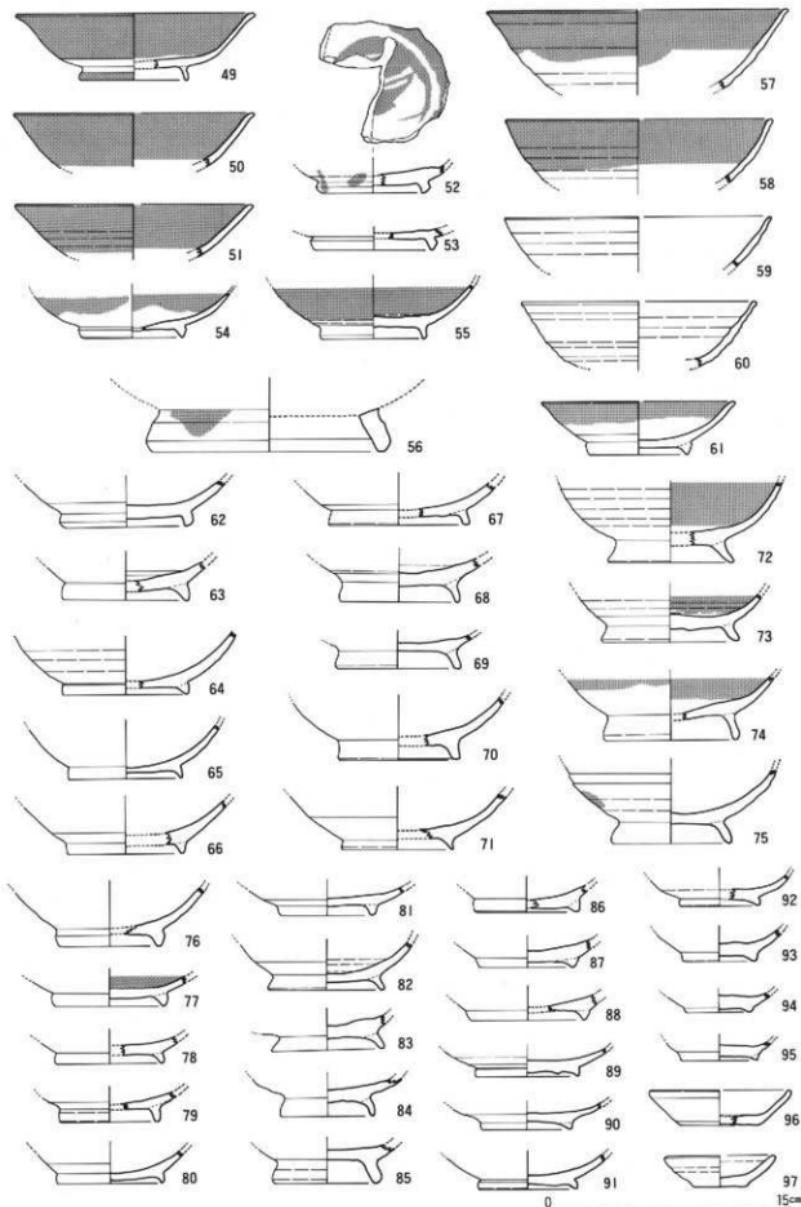
903の1点がある。ハの字に開いた角高台のつく底部から内湾して立ち上がりそのまま直線的にのびて口縁部にいたるもので、体部両側に翼状の耳をつけている。耳は表面が将棋駒のような五角形、裏面は基部の中央に角がついて六角形となるもので、表裏両面および側面をヘラケズリ整形している。底部には「建」を墨書しているが明瞭ではない。口径12.5cm、器高4.3cm。形態的には碗1類に分類できるものであるが施釉は認められない。やはり無釉



第6図 土器実測図1 (灰釉陶器1)



第7図 土器実測図2 (灰釉陶器2)



第8図 土器実測図3 (灰釉陶器3)

である27とは同形同大で胎土も共通しており同一の窯で焼かれた可能性が強い。

### 皿 □ (98~125・807・908~912)

扁平な体部に高台のつくもの。法量は碗のような分化がなく口径13.0~16.4cm、器高2.0~3.4cmのなかでまとまっている。おそらく口径5寸(15cm)、器高1寸(3cm)が皿の規格としてあったと考えられる。重ね焼きの方法および施釉方法、高台の形態など碗と同じ基準によって2類に分類できる。

1 類 黒笛14号窯式 1類 (98~120・807・908~911) 三又トチンを使用して重ね焼きを行うもので、猿投窯編年の黒笛14号窯式に比定できる一群。胎土・技法など碗1類と同じあり、猿投窯の製品である。口縁部の形態には①口縁端部を強く外に引き出して端部の外面に弱い段をつけるもの、②口縁端部の引き出しは強くなく緩やかに外反するもの、③口縁部を折り上げるだけで外には引き出さないものなどがある。施釉は刷毛塗りで内面全体を原則としているが、降灰状のものや無釉のものもある。108にはヘラ記号がある。

2 類 黒笛30号窯式 2類 (121~125・912) 三又トチンを使用せずに直接重ね焼きを行うもので、猿投窯編年の黒笛90号窯式に比定できる一群。胎土・技法など碗2類と同じあり、猿投窯の製品である。口縁部の形態は1類の1のものである。高台は直接重ね焼きを行うために高台下端の接地面を狭くするようにさまざまに工夫されており、直立した細長い高台の下端を内傾させて外端で接地するもの(121~123)、断面三角形のもの(124)、高台の下端を外傾させて内端で接地するもの(125)、定形化した三日月高台のもの(912)などがある。釉は刷毛で体部内面に施釉し、124はさらには底部内面にも一筆いれている。125は降灰状の釉で発色は悪い。つくりも雑で高台が底部の中央にはつかず体部が傾いている。122にはヘラ記号がある。

### 段 皿 □ (130~134・136~145・913・914)

体部と口縁部との境に段のつく皿。段の形態によって2種の細別器種がある。

#### 段 皿 A 段皿A (130~134)

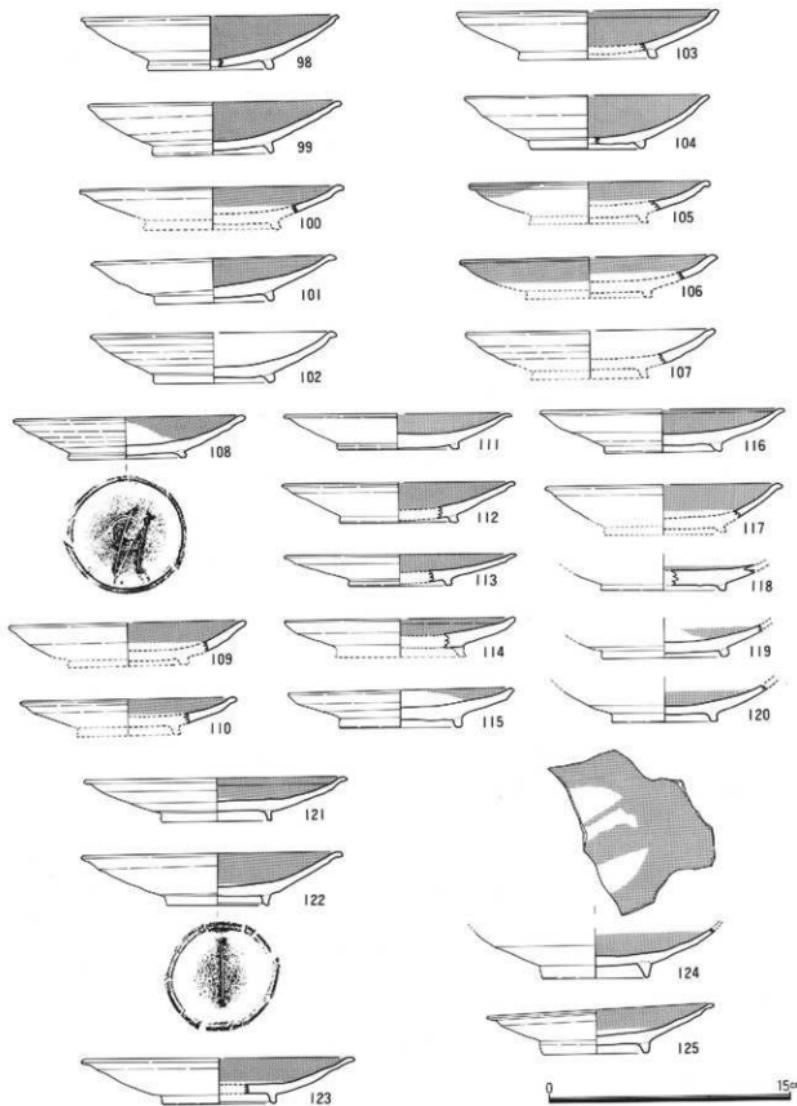
内外面に段のつく狭縁のもの。口径は18.0~19.4cmすべて18.0cm(6寸)以上のもの黒笛14号窯式である。いずれも黒笛14号窯式に比定できるものである。131は浅身の体部に長脚の高台のつくもので、内面全体に淡緑色の灰釉がたっぷりとかかっている。132は深身の体部にハの字に開く角高台のつくもので、無釉であるが底部内面には三又トチンの痕跡が残っている。133は口縁部を折り曲げるよう外反させたもので段は明瞭ではなく、むしろ後皿に近い形態のものである。胎土は灰色を呈する精良なもので内面全体に淡緑色の灰釉を刷毛塗りしている。底部を欠いているが、134の長脚の高台と胎土が同じであり同一個体である可能性が強い。

#### 段 皿 B 段皿B (136~145・913・914)

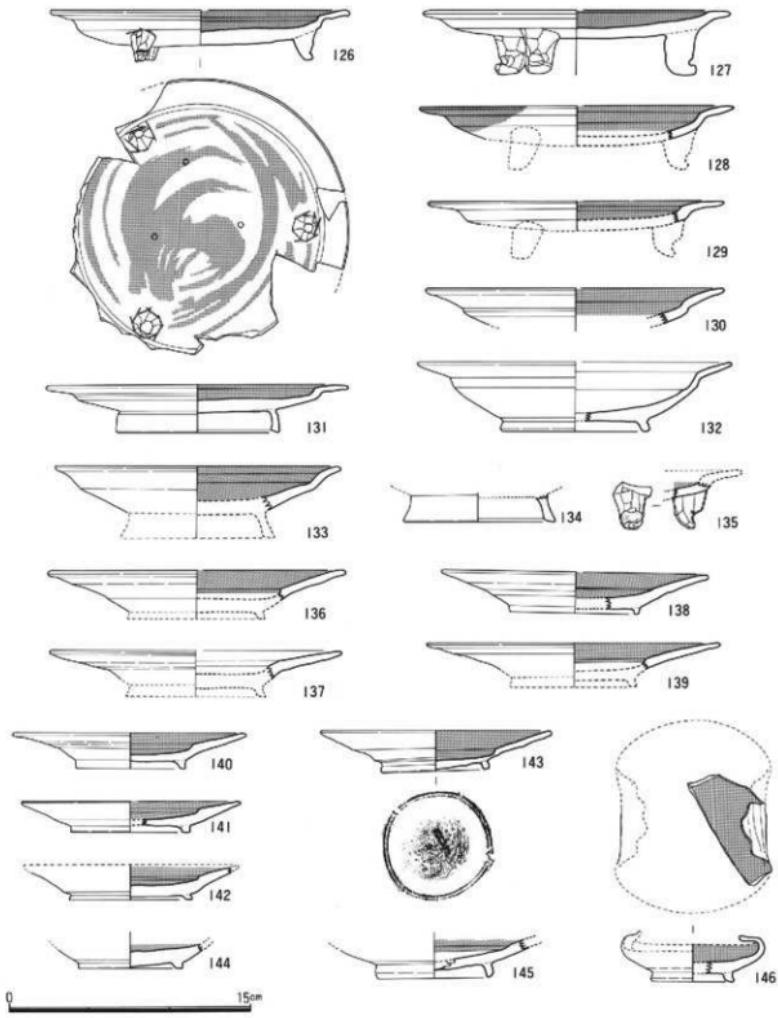
内面のみに段のつく広縁のもの。口径は13.6~18.5cmの幅があるが、15cm(5寸)と18cm(6寸)の2群にまとまる。重ね焼きの方法および施釉方法、高台の形態など碗と同じ基準によって3類に分類できる。

1 類 黒笛14号窯式 1類 (136~144・913) 黒笛14号窯式に比定できるもの。138・140~144は角高台で内面全体に淡緑色の灰釉を刷毛塗りする。137・913は釉が降灰状で無釉に近いが、913には底部内外面に三又トチンの痕跡が残っている。143の底部にはヘラ記号が認められる。

2 類 黒笛30号窯式 2類 (145・914) 黒笛90号窯式に比定できるもの。914は底部外面に「主」と墨書したもので、内面は段の部分だけに刷毛で淡緑色の灰釉を施釉し、底部には高台の重ね痕が認められる。高台は直接重ね焼きをするためにやや長めの角高台の下端を内傾させて外端で接地



第9図 土器実測図4（灰釉陶器4）



第10図 土器実測図 5 (灰釉陶器 5)

するもの。144は三日月高台で段の部分にたっぷりと釉がかかる。段は浅くて明瞭ではない。

### 5. 三足盤 (126~129・135)

輪高台のかわりに3本の獸足脚をつけた段皿。段が内外面につく段皿Aのタイプに限られる。口径は18.4~19.6cmとすべて18cm以上のものである。129は段皿Aの口縁部破片であるが135の獸足脚と同一個体である可能性が強いため三足盤として扱った。いずれも内面全体に施釉されており、126の場合はさらに底部外面にも刷毛塗りされている。獸足脚にはヘラケズリで面取りしたシャープなもの(126・135)とナデ調整されややぼてつとした感じのもの(127)の2種類がある。

### 6. 耳皿 (146・915)

口縁の側縁を両端から折り曲げた形態の皿。折り曲げた両側縁には指でつまんで縫をつけている。角高台で内面全体に灰釉を刷毛塗りしており黒窓14号窯式に比定できる。915は口径11.6cm、灰釉の発色は不良で内面の1/3ほどが黄緑色に発色している底部外面に「主」の墨書がある。146は体部から折り曲げ部分にかけての破片で口径は不明であるが915と同規模の4寸皿とみていいだろう。

このほかに灰釉陶器の範疇からはずれて山茶碗に分類される小皿が少量であるが出土している(92~97・916)。92~95・916は高台をもつもの、96・97は高台がなくなり無台となつた段階のものである。

### b. 貯蔵形態

貯蔵形態の器種としては短頸壺、手付瓶、平瓶、長頸瓶がある。手付瓶を除いて古墳時代以来の須恵器の系譜を引く伝統的な器形であり、檜崎氏のいう「原始灰釉陶器」の概念も曖昧であるため須恵器との判別は明確にしえない。ここでは灰釉のかかっているものを取りあげている。

### 7. 短頸壺 (165~168)

「薬壺」と呼ばれる、肩の張った球形の胴部に短い立ち上がりの口頸部がついた壺で、蓋をもつ。165は口頸部から体部上半部の破片から図上復元したもので底部は不明であるが、やや撫で肩で高さに較べて幅がある器形で体部は肩の付近までヘラケズリによる器面調整がなされている。口頸部はやや外傾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。灰白色の精良な胎土を用い、体部全体に暗緑色の灰釉が施されている。猿投窯産。166は口頸部を欠失している。165に較べると薄手のつくりでやや肩が張った縱長の器形となっていて後出の様相をもつ。体部下半はヘラケズリによる器面調整がなされている。胎土は165と同様の灰白色の精良なもので、頸部から肩部にかけて降灰状の灰釉がかかっている。猿投窯産。

### 8. 短頸壺蓋 (158~164)

やや湾曲した天井部に垂直で高い口縁部のつく蓋。天井部はヘラケズリし頂部に宝珠紐を付けている。口径は短頸壺の口径に較べて大きく12.0~19.5cmの幅があるが、12cm(4寸)、15cm(5寸)、19.5cm(6.5寸)の3群に分類できる。いずれも灰白色の精良な胎土を用いて、天井部には灰釉が施されている。猿投窯産。158は完形に近いもので、ほかに較べて甲高のつくりで天井部には暗緑色の灰釉が斑点状にたっぷりとかかっている。162は口縁部の破片で全形は不明であるが158とは逆に天井部が平坦で古い様相をもつ。

### 9. 手付瓶 (147~151)

小さな口頸部からなだらかなカーブを描いて胴部に続く徳利形の瓶で、口頸部から肩にかけて扁平に把手をつけたもの。大小2種類のものがあり、器高は大型のもの(148・149)

## 三 足 盤

## 耳 皿

## 黒窓14号窯式

## 小 皿

## 貯蔵形態

## 短 頸 壺

## 短 頸 壺 蓋

## 手 付 瓶

で約24cm、小型のもの（150・151）で約11cmを測る。小型のものは底部に回転糸切り痕をとめる。いずれも灰白色の精良な胎土を用いた薄手のつくりで、口頸部から体部にかけての外面および口縁の内側に灰釉が施されている。148は平底の底部にも灰釉が刷毛塗りされている。猿投窯座。なお、147は水注の注口部で胎土や釉調は148と近似している。同一個体のものであるとすればおり148は肩にこの注口がついて手付水注となる。

**平瓶 10. 平瓶（152～157・809）**

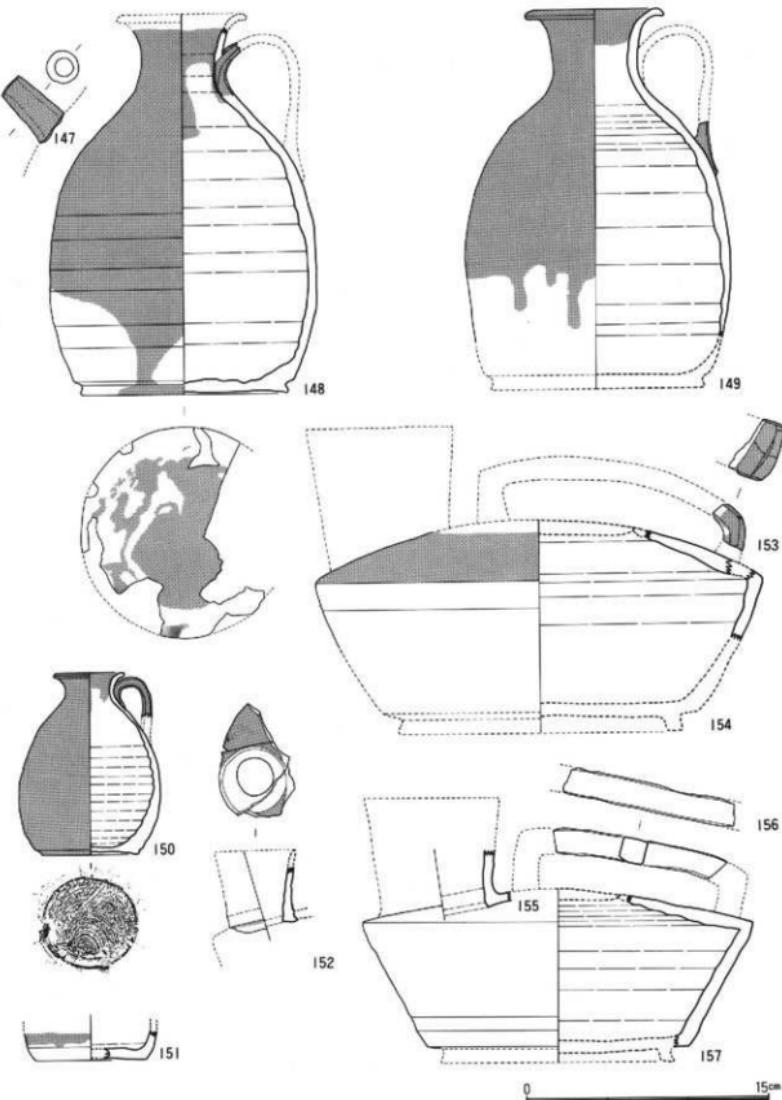
肩の部分で屈曲した扁平な体部上面に周縁に寄せて口頸部と把手をつけた瓶。大小2種類のものがあるが、みな部分的な破片ばかりで全形を知ることのできるものはない。153・154、155～157はそれぞれ胎土や釉調などからみて同一個体である可能性が高い。153・154は灰白色の精良な胎土を肩部での最大径幅約28cmの大型品で、体部上面が甲高で扁平な把手がつく。灰白色の精良な胎土で体部上面や把手には暗緑色の灰釉がたっぷりとかかっている。猿投窯座。155～157は153・154に較べて肩の屈曲が強く体部上面は平坦に近い。把手も角柱で153・154よりは古い様相をもつものである。胎土は灰色で、無釉であり須恵器であろう。152は小型品の口頸部破片である。灰白色の精良な胎土で体部上面には暗緑色の灰釉がたっぷりとかかっている。猿投窯座。809は高台のつく底部で、外面を観面にした転用窯である。灰白色の精良な胎土で、底部内面の縁寄りに降灰釉がかかっていることから平瓶の底部と考えられる。

**長頸瓶 11. 長頸瓶（167～220）**

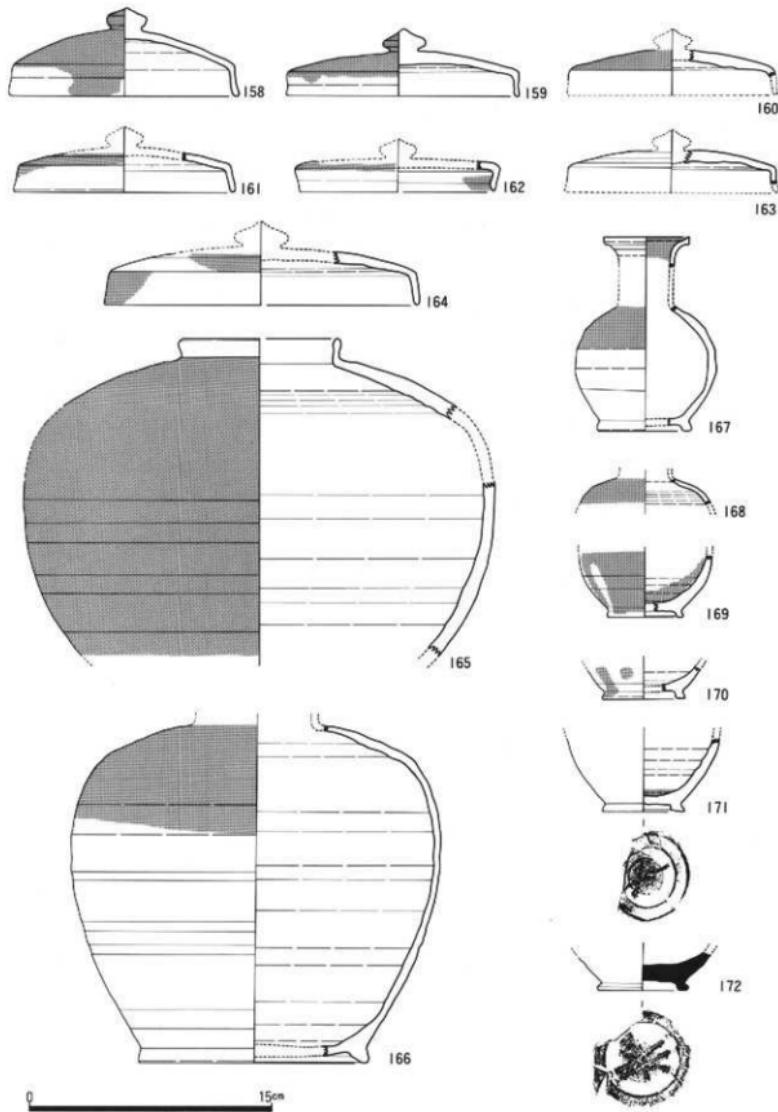
縦長の球胴に直に立ち上がる口頸部のついた瓶で、底部にはすべて高台がつく。大小2種類のものがある。

**大型長頸瓶（173～220）**では全形のわかるのは173が唯一で、あとは口頸部（176～193）、胴部（174・194～199）、底部（200～220）などの部分破片である。173は胴部がほかのものに較べて扁平で、口頸部のつくりも違いがあって古い様相をもつ須恵器である。胎土は灰色で、口頸部から肩にかけて自然釉が流れるが釉は焼けただれています。175も口頸部を欠失しているもののほぼ全形をうかがえる。口頸部が長く、胴部との接合は胴部上端をいちど円板で塞いだ後この円板に孔を穿って口頸部を差し込む三段成形の技法がとられている。177・178・191・193も175と同様の口頸部が長いタイプのものである。いずれも胎土は173にちかい。174は口頸部を欠失するが口頸部の接合は二段成形の技法によっている。二段成形の技法は195～197にもみられる。175と較べると灰白色の胎土を用いた薄手のつくりで、肩に張りがあつて胴部最大径に対して底径が小さくなっている。底部はハの字形に外に開く高台がつく。胎土の類似からもおそらく180や183などの形態の口頸部がつくと考えられる。猿投窯座で井ヶ谷78号窯式に比定できるものであろう。179は頸が太いタイプのもので口径は13.2cmを測る。胎土は灰白色の精良なもので碗皿類のものと較べても遜色なく、口頸の内外に淡緑色の灰釉が刷毛塗りされている。

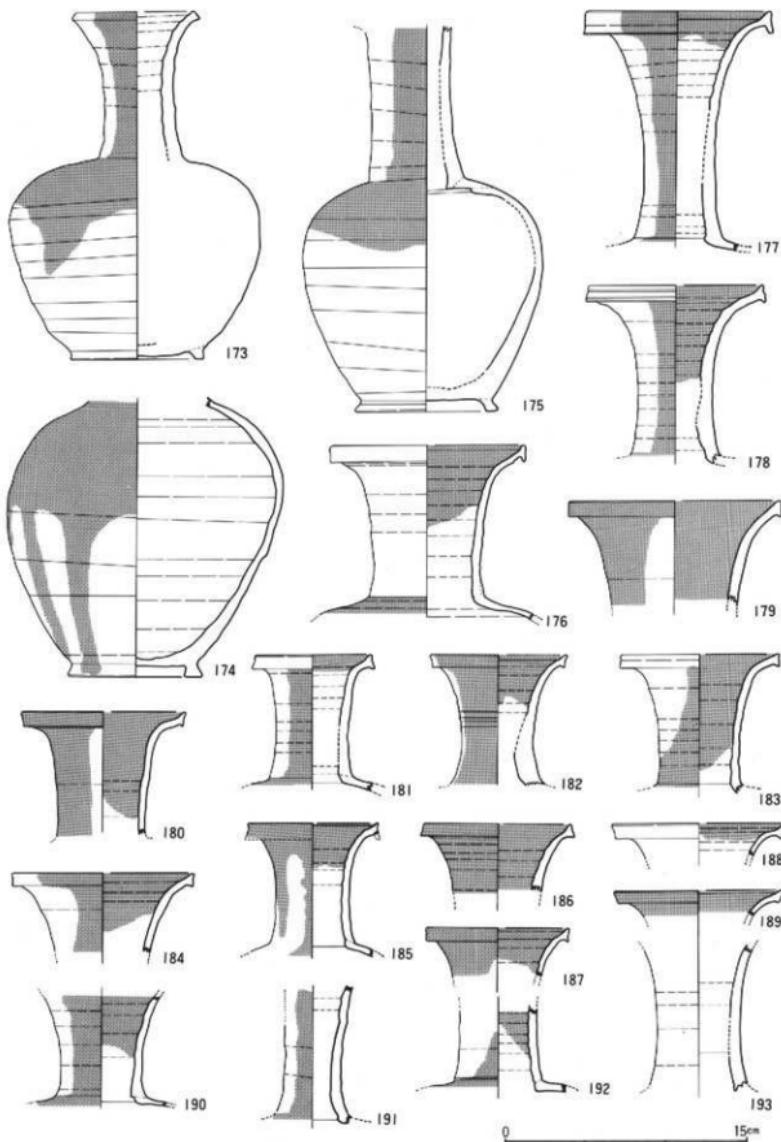
**小型長頸瓶（167～171）**では167が頸の一部を欠失するもののほぼ全形を知ることができる。胴部は撫で肩の球形を呈し底部は胴部最大径との差が少なくしっかりとしている。胎土は灰色の須恵質で口頸の内面や肩にはごまだら状の降灰釉がかかっている。171は全形を知ることはできないが、胴部最大径に較べて底径が小さく胴部が肩の張った卵形になるもので、底部にはハの字形に外に開く高台がつく。形態的には大型の174に近似している。底部外面にはヘラ記号がある。胎土は青灰白色で、底部内面には暗緑色の降灰釉がかかっている。172は171と同形の須恵器である。169、170も底部が小さく171と同形と考えられるが胎土は



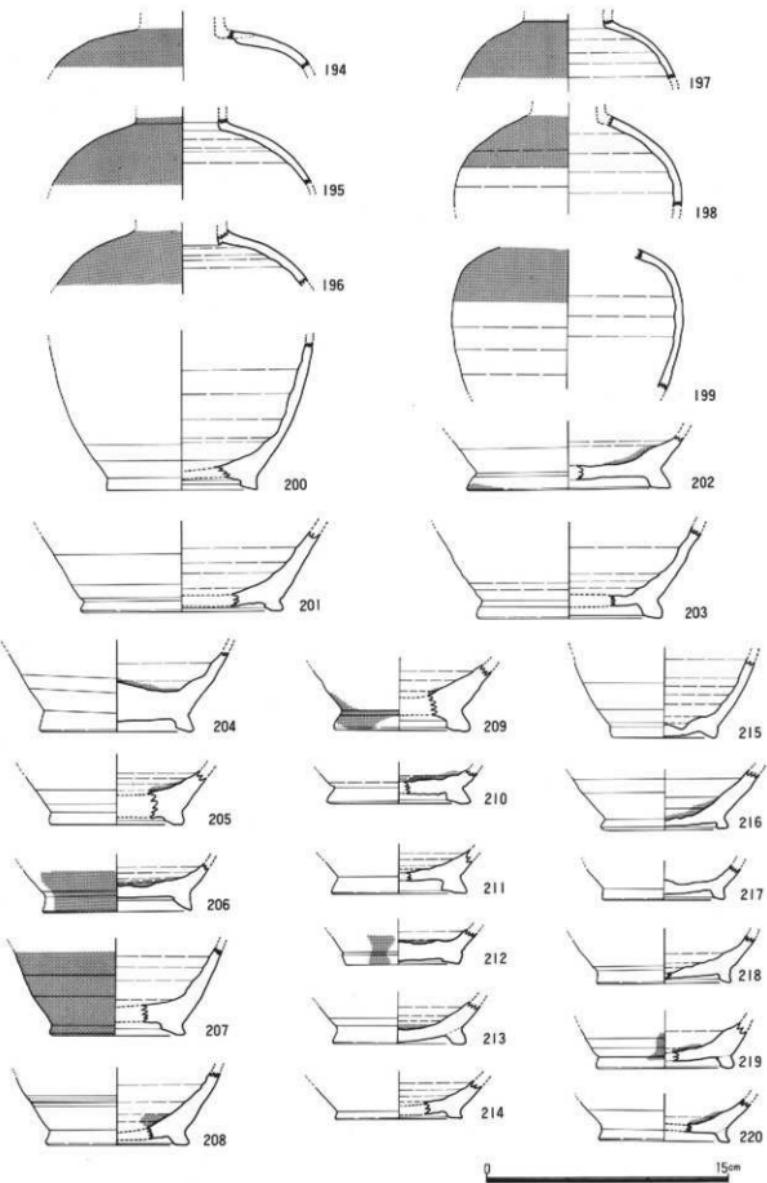
第11図 土器実測図 6 (灰釉陶器 6)



第12図 土器実測図7（灰釉陶器7）



第13図 土器実測図8（灰釉陶器8）



第14図 土器実測図9（灰釉陶器9）

灰白色の精良なもので淡緑色の灰釉がきれいに発色している。

#### B. 緑釉陶器

緑釉陶器は出土量が少なく11点が出土したのみである。いずれも碗皿類の小破片であり、口縁部5点、体部3点、底部3点である。このうち221・225・229の3点、222・226の2点、228・230の2点は接合はできないものの胎土、釉調などが極めて近似しており同一個体の破片である可能性が高い。従って出土個体数は5~6個前後になると考えられる。

出土した緑釉陶器については宮下遺跡から出土したものと併せて名古屋大学檜崎彰一・斎藤孝正両氏に観ていただき、産地に関しての教示を得た。また両氏が猿投産〔内荒遺跡13-013(実測図番号231)・宮下遺跡1-043-1〕、畿内産〔内荒遺跡15-185(同223)・宮下遺跡2-194〕、近江産〔宮下遺跡2-439〕に比定された陶片5点について名古屋大学山崎一雄氏に科学分析をお願いし、分析結果を付編に掲載した。

生地は227が硬陶であるほかは軟陶である。227は稜碗の体部で、稜部内面に1条の沈線をもつ。内面にはヘラミガキを施す。内外面に淡緑色の釉がかかり、外面の釉は透明に近い。猿投(鳴海)産\*。221・225・229は非常に軟質の焼成で胎土は黄白色を呈する。221は口径16cm前後の碗の口縁部で、口縁端部を丸くおさめる。立ち上がりは実測図よりもあさくなる可能性もあり、あるいは皿かもしれない。内外面に濃緑色の釉がかかること刺落が著しく、火を受けたためか黒色炭化した部分もある。229は切高台の底部である。内外面に濃緑色の釉がかかること刺落が著しい。畿内産。222・226は内湾して立ち上がり口縁端部をやや外に引き出す皿。焼成は221・225・229と同様に軟質で黄白色を呈する。体部外表面はロクロケズリを施す。内外面には濃緑色の釉がかかること退色して淡緑色になった部分が多い。畿内産。224は外反する口縁部の小片。焼成は良好で灰白色を呈し、内外面には濃緑色の釉がかかること刺落がある。畿内産。231は細長くて内湾気味の高台を付した底部。焼成は良好で胎土は白色を呈する。内面にはヘラミガキを施す。全面に淡緑色の釉がかかり、内外両面に三又トチンの痕跡をとどめる。猿投産。230も231と同形の高台をもつ底部である。焼成は良好で灰白色を呈し、全面に淡緑色の釉がかかり。産地は猿投に近いが不明。

\* ) 産地は檜崎・斎藤両氏の教示による。以下も同様。

#### C. 須恵器

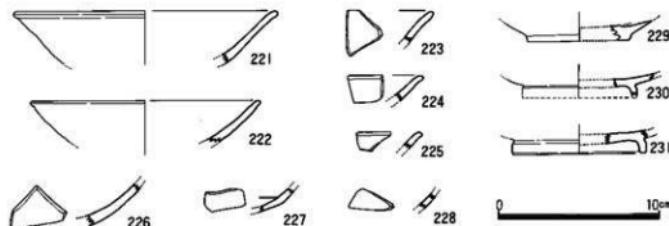
出土した須恵器には壺類、碗・皿類、高壺・鉢などの供膳形態と甕・壺・瓶類などの貯蔵形態がある。壺類や甕・瓶類などには古墳時代のものも含まれている。また、瓶類については灰釉陶器との判別が難しいものがあり、これについては灰釉陶器の項で扱った。

##### a. 供膳形態

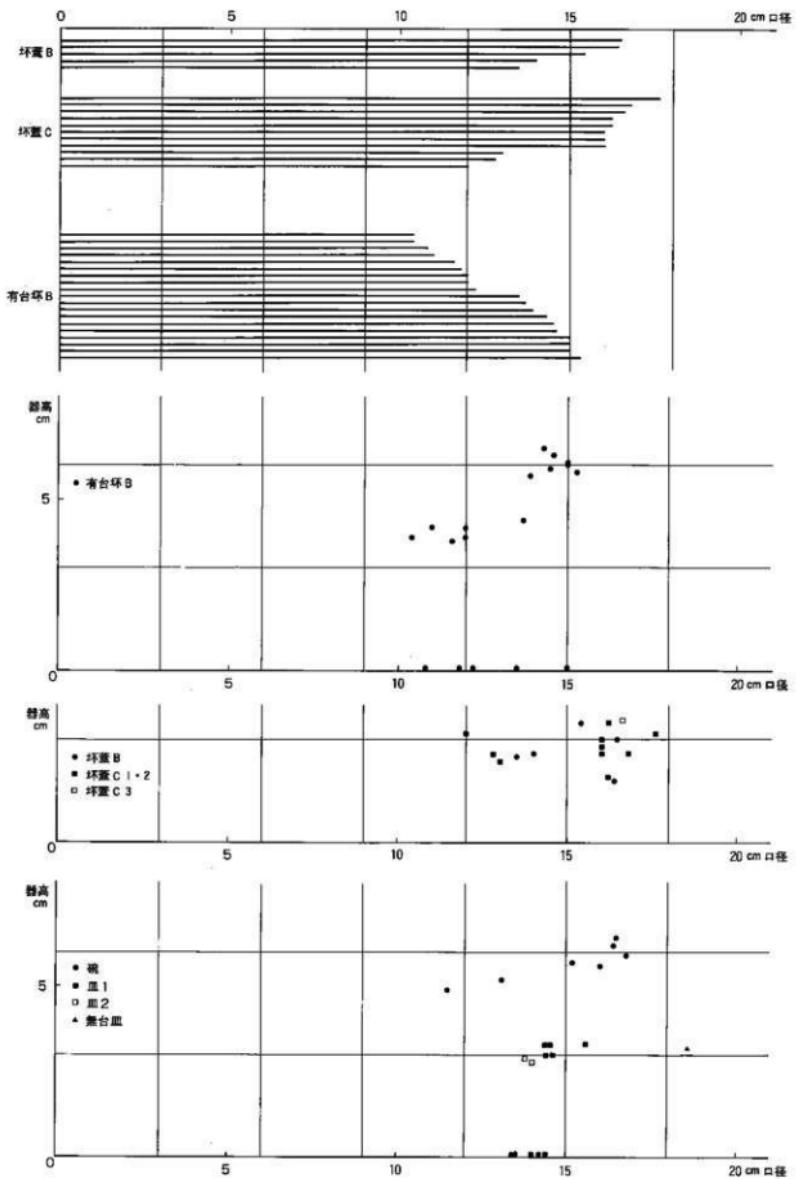
##### 緑釉陶器

檜崎彰一・  
斎藤孝正両氏による  
産地同定

山崎一雄氏による  
科学分析



第15図 土器実測図10(緑釉陶器)



第16図 須恵器法量図1 (有台環・环型・碗・皿)

供膳形態の器種には坏蓋・有台坏・無台坏・碗・皿・高坏・鉢がある。

#### 1. 坏蓋 (238~303・810~814・917~918)

有台坏および無台坏A 1類とセットになるもの。鉢の形態によって3種に大別できる。

#### 坏蓋 A (238~280・302~303・810~811)

宝珠鉢あるいは円盤状の鉢をつけた杯蓋で、有台杯Aとセットになる。湖西窯産のものと助宗窯産のもの2種に大別でき、体部の形状や鉢の形態に違いがある。円盤状の鉢をつけた杯蓋は助宗窯産に特徴的なものである。法量は口径10.4~11.5cm、12.4~14.6cm、15.2~16.8cm、17.0~19.2cm、24.4cmの5群に別れる。口径24.4cmの大型である244は受け部が垂直に折れるしっかりしたもので、頂部を欠失しているため不明である。高坏の杯部の破片であるかもしれない。なお、302・303は焼き歪みが著しく杯蓋の機能を充分にはたすことはできないと考えられるもので、本来ならば生産地において廃棄されるべきものであろう。同様の例は有台杯B (388) にも確認できる。こうした半端品が供給されている例は藤枝市御子ヶ谷遺跡でも報告されている (御子ヶ谷分類杯蓋7類)。貢納に際して数量の帳尻合わせとして持ち込まれたものであろうか。

#### 坏蓋 B (281~287)

環鉢をつけた坏蓋。頂部を回転ヘラケズリ調整で平坦につくり、頂部の外縁に環鉢をつけている。胴部内外面はノタ目が顕著で、口縁端部は垂直あるいはやや外傾気味に折りかえして受部をつくり出す。環鉢は回転ヘラケズリによって削り出したもので、有台坏Bの高台の削り出し技法と同一である。削り出しの環鉢は高さがほとんどないためまむことができず、鉢としての機能をはたしていない。口径15.4~16.5cmと13.5~14.0cmの2群に分類できる。胎土は有台坏B、無台坏Bとおなじで灰白色を呈し、軟質の焼き上がりのものが多い。有台坏Bとセットになる。助宗窯産。

#### 坏蓋 C (288~301・812~814・917~918)

無鉢もの。頂部の形態によって3類に細分できる。

1類 (288~301・812・813・918) 頂部を回転ヘラケズリ調整して平坦面をなすもの。胴部は内外面にノタ目が顕著なものが多く、頂部との境には回転ヘラケズリ調整が施される。口縁端部は垂直あるいは内側に折りかえして受部をつくり出す。口径は17.6cm、15.8~16.8cm、12.0~13.0cmの3群に分類できる。胎土は有台坏Bと同じであり、坏蓋Bとともに有台坏Bとセットになると考えられる。助宗窯産。

2類 (814) 頂部が平坦面をなす点は1類と変わらないが頂部が回転糸切り痕のもの。1類に較べて頂部径が大きく、胴部の内外面にはノタ目が残る。口縁端部は内側に折りかえして受部をつくり出す。814は頂部内面を硯に利用した転用硯で、口径15.0cm、器高2.6cm。

1類に較べて胎土は砂質である。湖西窯産か。

3類 (917) 頂部が平坦ではなく丸味をもつもの。頂部には回転ヘラケズリ調整を施し口縁端部は丸くおさめて受部をつくり出さない。頂部外面に「主」の墨書がある。口径16.6cm。

2類と同じく湖西窯産か。

#### 2. 有台坏 (304~388・815~919~925)

高台のつく坏身で坏蓋とセットになる。高台の付け方によってA、Bの2種に大別する。

#### 有台坏 A (304~348)

はりつけ高台のもの。形態、技法、胎土などによって2類に分類できる。

1類 (304~306・308~314・316~319・321) 丸味をもった底部から胴部が緩やかに屈曲して

#### 坏 盖

#### 坏 蓋 A

宝珠鉢・円盤鉢

湖 西 窯 産

助 宗 窯 産

#### 坏 蓋 B

環 鉢

助 宗 窯 産

#### 坏 蓋 C

無 鉢

1 類

助 宗 窯 産

2 類

湖 西 窯 産 か

3 類

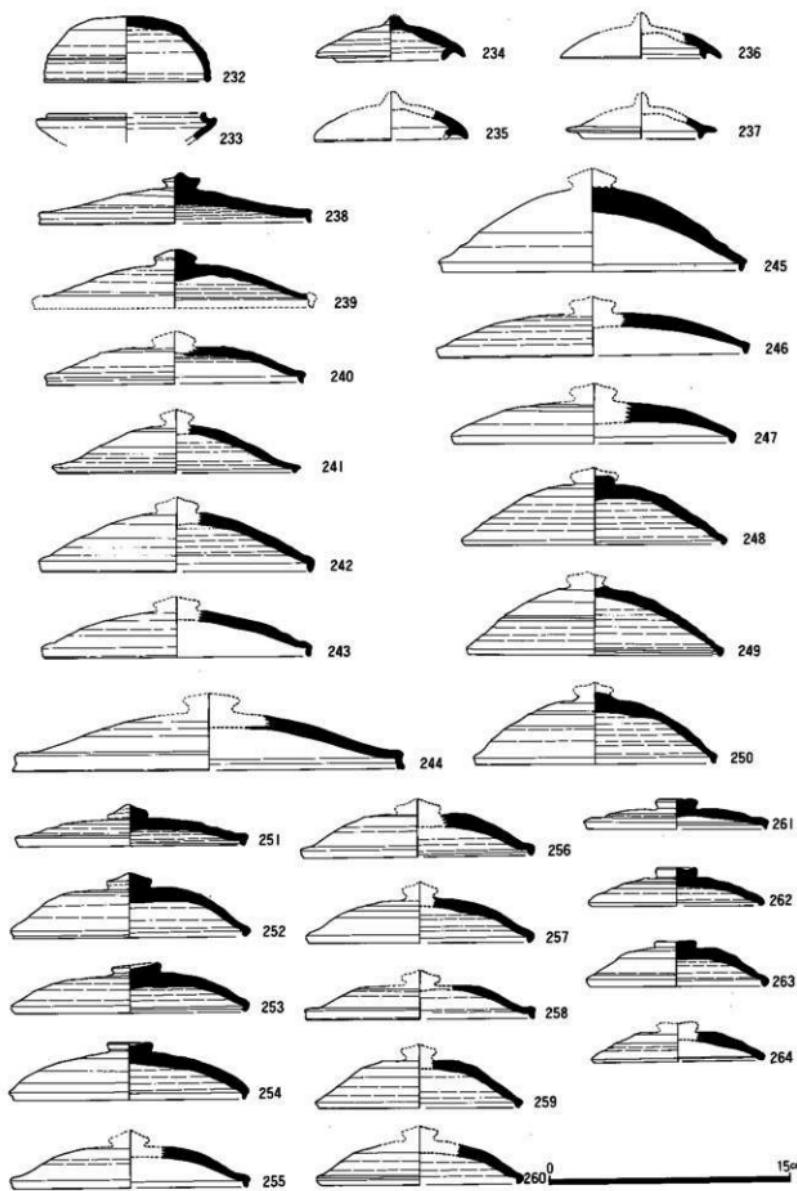
湖 西 窯 産 か

#### 有 台 坏

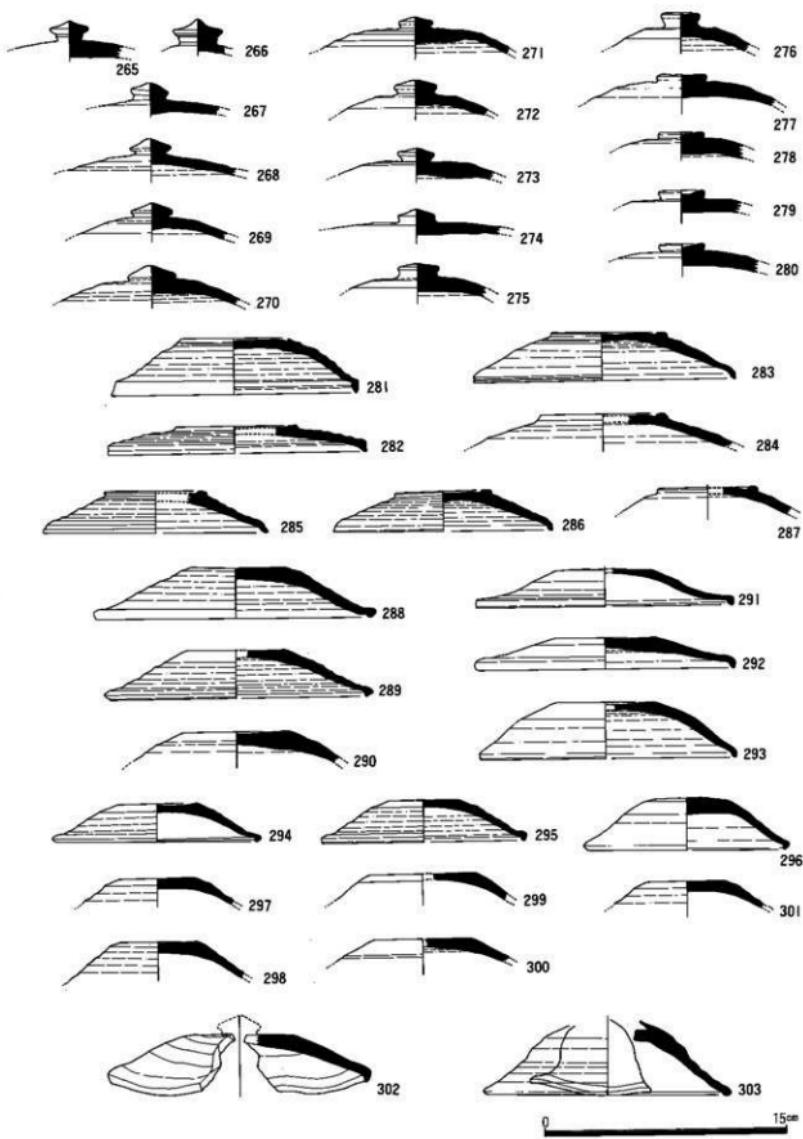
#### 有 台 坏 A

はりつけ高台

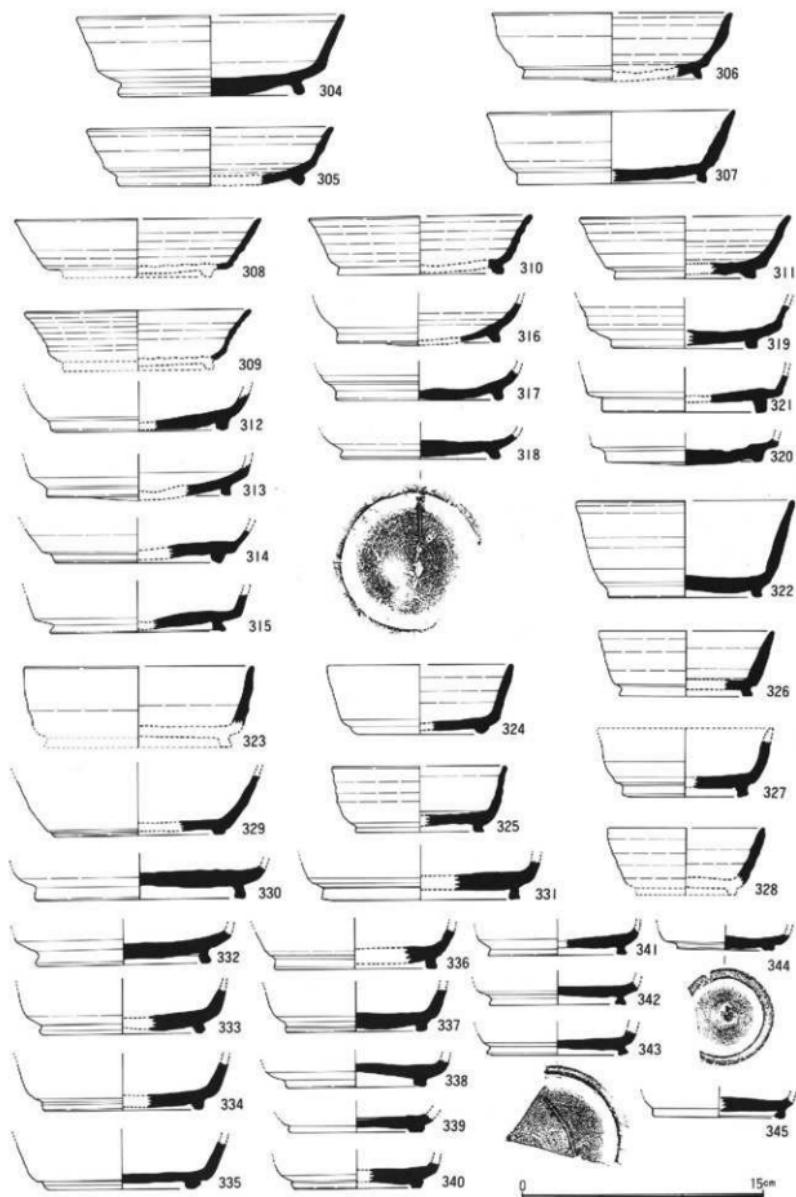
1 類



第17図 土器実測図11（須恵器1）



第18図 土器実測図12（須恵器2）



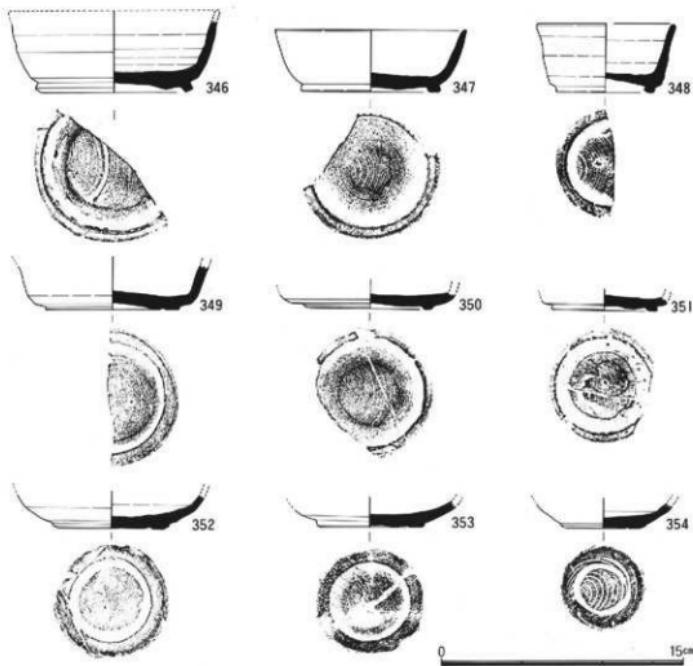
第19図 土器実測図13（須恵器3）

立ち上がる有蓋の环身で、底部の中央部分が高台より下に飛び出るものもある(313・321)。底部は回転ヘラケズリ調整を施し、底部内面や胴部内外面にはノタ目を残すものが多い。高台は底部と胴部の境よりもやや内側にハの字形に外側に開く形につけられる。法量は口径に13.4~16.6cmの幅があり、13.4~15.0cmと16.6cmの2群に別れる。胎土は砂質で白色粒子を含み淡青灰色を呈する。湖西窯産と考えられる。

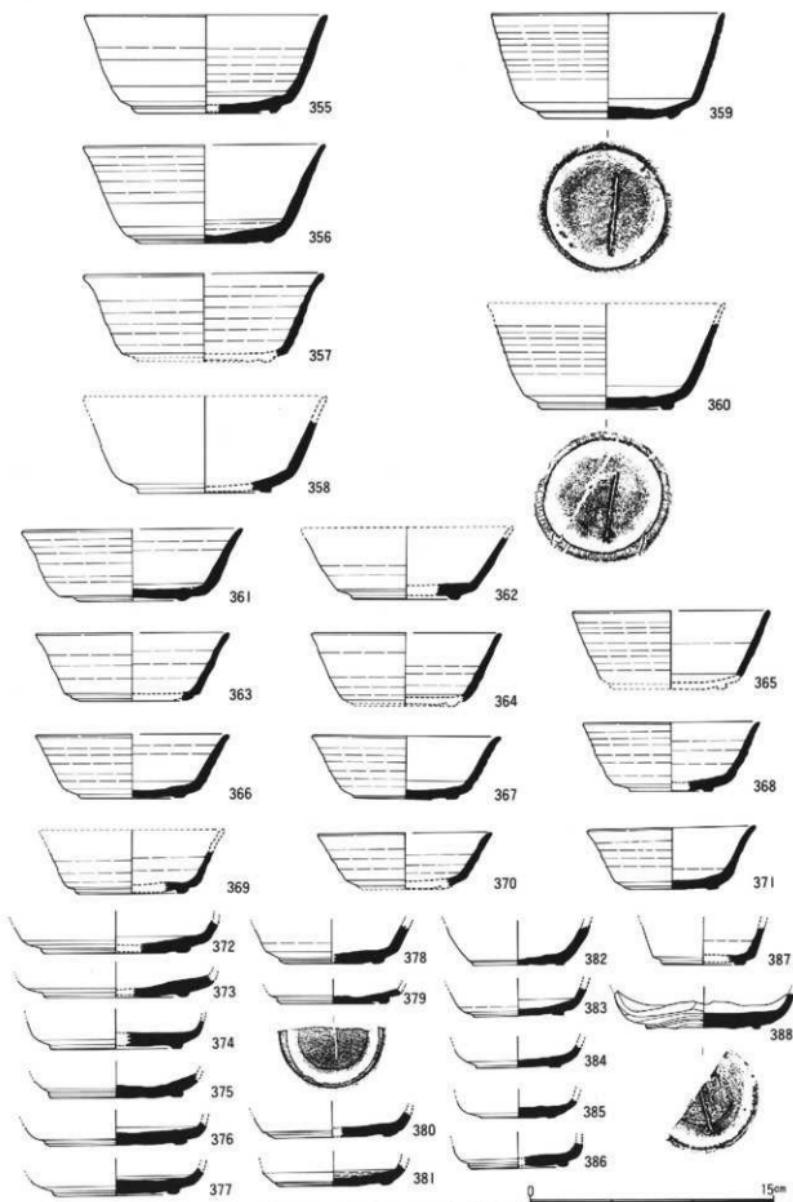
2類(307・315・320・322~348) 平坦な底部から胴部が鋭く屈曲して直線的に立ち上がる环身。胴部の立ち上がりは1類に較べて直立気味で内外面とも平滑に仕上げたものが多い。底部は回転糸切りによって切り離された後に回転ヘラケズリ調整が施され、高台は底部と胴部の境につける。底部調整をみると底部全面に丁寧な回転ヘラケズリ調整が施されるものと底部中央に回転糸切り痕を残すものの2種があり、高台の形態も前者にはハの字形に開くしっかりとした角高台、後者には幅広で低い高台のつく場合が多い。また胎土にも白色微細粒子を含むものの硬質堅緘で青灰色を呈するものと白色粒子を含み黒色の吹き出しが見られ暗灰褐色を呈するもの2種類あって後者の胎土は底部に回転糸切り痕を残すものに多くみられる。法量は口径でみると8.6~15.2cmの幅があり8.6cm、9.6~11.7cm、13.6~15.2cmの3群に分かれる。いっぽう底部破片の高台径は6.0cm~13.0cmで6.0cm、7.8~8.8cm、9.6~10.6cm、12.2~13.0cmの4群があり、12.2~13.0cm(330・331)の1群は口径が16.0~18cmにな

#### 湖西窯産

#### 2類



第20図 土器実測図14(須恵器4)



第21図 土器実測図15（須恵器5）

るものと考えられる。口径値に幅があるのに対して器高は3.8~4.3cmと4.0cm前後に集中する。322のみ口径13.6cm、器高6.0cmを測り深身のつくりである。助宗窯産と考えられる。

助宗窯産

有台坏B

削り出し高台

助宗窯産

削り出し高台のもので、助宗窯に特徴的な器種である。底部の回転ヘラケズリ調整に際して底部外縁に内外から斜めにヘラをあて回転ヘラケズリによって扁平な高台を削り出す。胴部は直線的に立ち上がるが高台を削り出した高台外側ヘラケズリ面の外縁が稜をなして鋭く屈曲するものと、高台が底部の内側につけられているため底部と胴部の境が丸味をもつものの2種がある。内面は底部と胴部の境に沈線のみられるものが多い。胴部にはノタ目が顕著に残るものが多いが、外面にノタ目が残るものと外面のみにノタ目が残り内面は平滑に仕上げられたものの2種がある。また355~356は胴部下半部に回転ヘラケズリ調整を施している。349~351は底部中央に回転糸切り痕を残す底部破片である。全形は知ることができないもので底部形態は有台坏A 2類と類似する。これとは対象的に352~354は高台の底面を含めて底部全体に回転糸切り痕を残すもので、回転ヘラケズリは高台の削り出し成形としてのみ施される。口径に較べて高台径が縮小しており、体部形態は底部から胴部が緩やかに湾曲しながら立ち上がる碗型を呈する。口径は10.4~15.3cmの幅があり、10.2~12.2cmと13.5~15.3cmの2群に分かれる。前者は器高3.8~4.2cmで集中するのに対して後者は4.4cmと5.7~6.5cmの2群がある。

### 3. 無台坏 (389~450・926)

無台坏

須恵器のなかで最も出土量の多い器種で底部成形技法の違いによって2種に大別する。

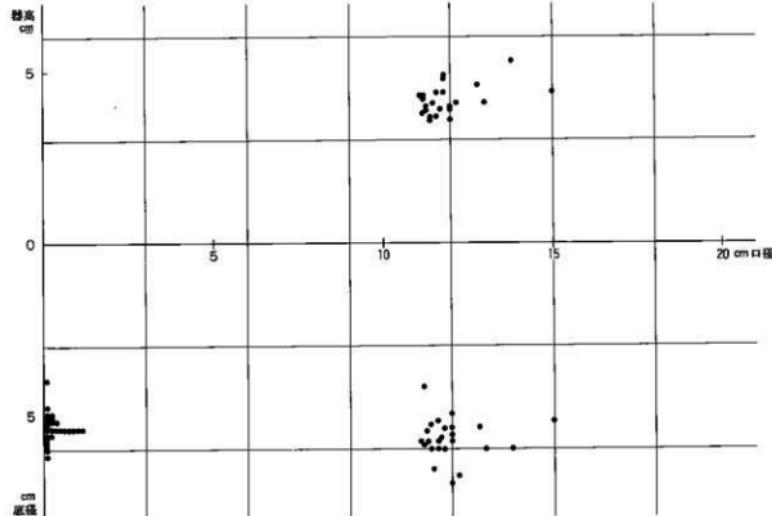
無台坏A

回転ヘラケズリ

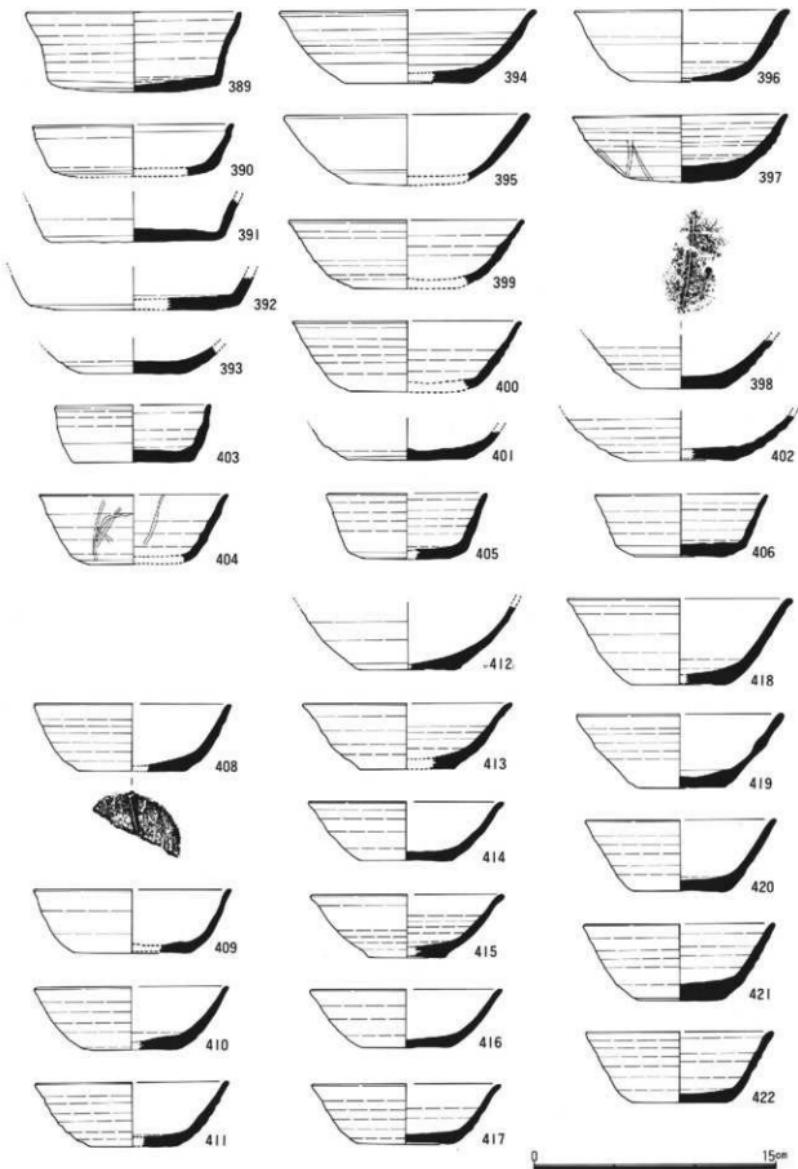
調整

#### 無台坏A (389~406)

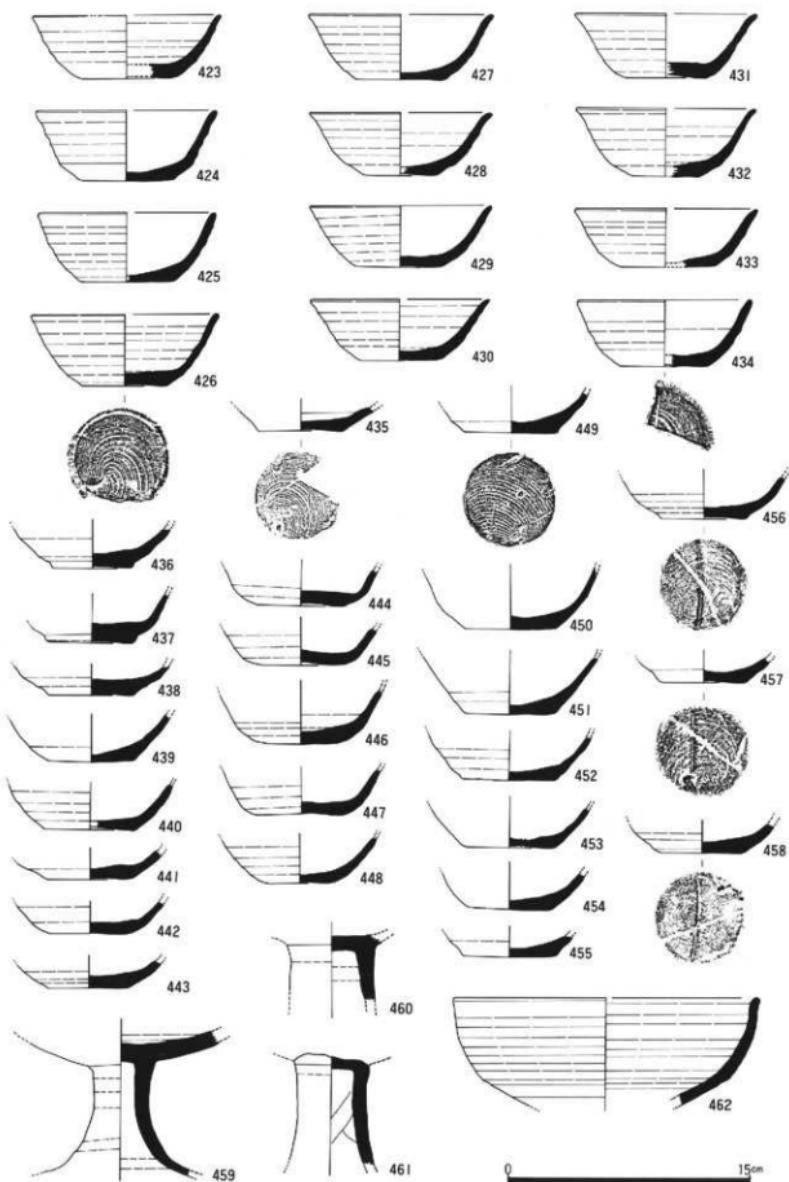
底部を回転ヘラケズリ調整するもの。形態等で細分できる。



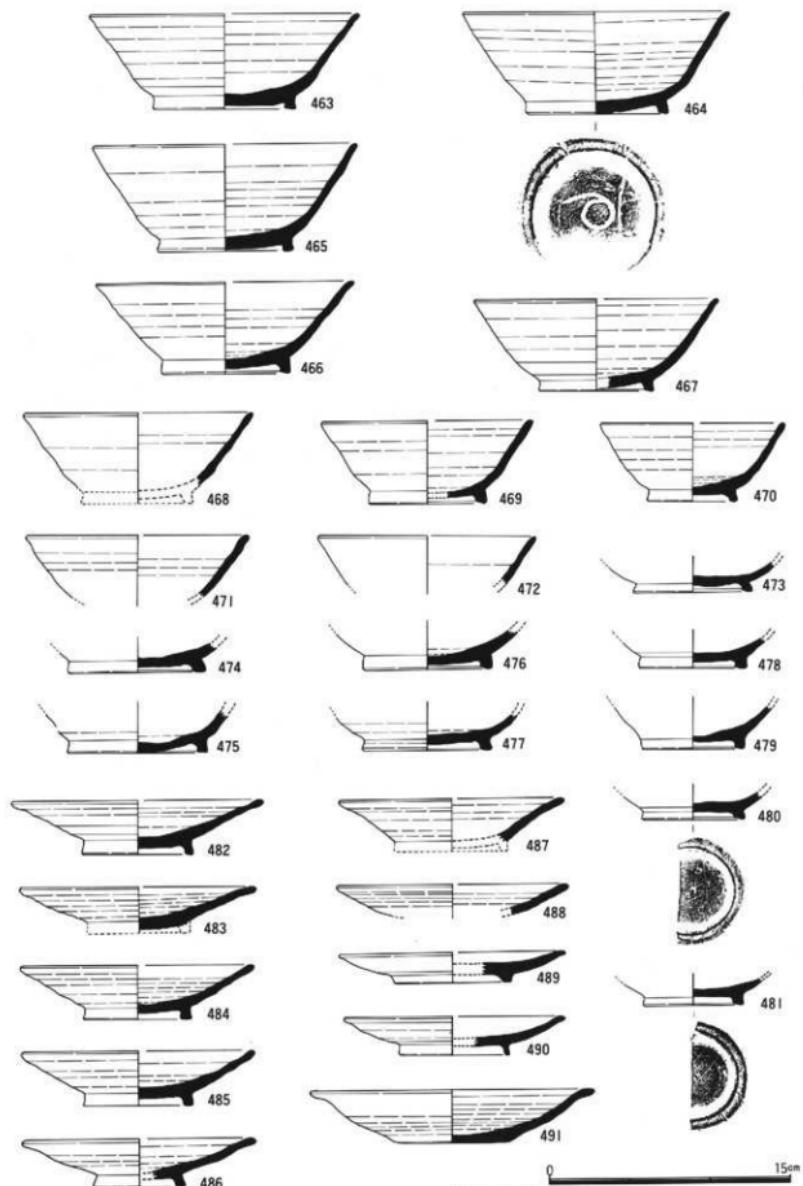
第22図 須恵器法量図2 (無台坏)



第23図 土器実測図16（須恵器 6）



第24図 土器実測図17（須恵器7）



第25図 土器実測図18（須恵器 8）

1類（389～392）湖西窯に特徴的な器種で环蓋Aとセットになる有蓋环身。底部から胸部への屈曲は明瞭で、胸部は直線的に外傾し口径と底径との差が小さい。389は口縁部がやや内湾気味に引き出されている。口径13.4cm、器高5.1cm。390は389に較べると浅身で、形態的には有台环A 1類に類似する。

2類（393～402）平底の底部から胸部がやや湾曲気味に緩やかに立ち上がる环身。口径と底径との比は約2：1となっている。底部から胸部下半にかけて回転ヘラケズリ調整を施しており胸部にはノク目の顯著なものが多い。口径13.3～16.0cm、器高4.2～8.0cm。397は底部がやや丸底気味に仕上げられ体部内外面には火憚痕が認められる。398は底部内面にヘラ記号をもつ。1類と同じく湖西窯産と思われる。

3類（403）平底の底部から胸部が鋭く屈曲し、やや湾曲気味に立ち上がる小型の环身。底部および胸部下半に回転ヘラケズリ調整を施すが、底部中央には回転糸切り痕が残っている。胎土は白色粒子を含み黒色の吹き出しが見られ暗灰褐色を呈する。同質の胎土は有台环A 2類のものにもみられ（322・323・325・339・344・347・348）、底部中央に回転糸切り痕を残す技法も共通している。口径9.7cm、器高3.5cm、底径7.4cm。助宗窯産。

4類（404～406）平底の底部から胸部が直線的に立ち上がる小型の环身。底部と胸部の境は回転ヘラケズリ調整あるいはナデ調整によって斜めに面取りされる。法量はほぼ一定で口径10.0～11.7cm、器高3.8～4.1cm、底径5.5～5.7cm。404は体部内外面に火憚痕がある。体部形態は有台环Bに類似し、胎土も無台环B・有台环Bと共に白色微細粒子を含み灰白色を呈する。

#### 無台环D（408～458・926）

底部が回転糸切り調整のもの。平底の底部から胸部がやや湾曲気味に緩やかに立ち上がる小型の环身で、形態的には無台环A 2類に近い。器形は口径と底径の比はほぼ2：1前後であるが細かく見れば口径×底径×2のもの（410・419～421・423・426・428～432・434）と口径>底径×2のもの（408・409・420・422・424・425・427・433）とに細分でき、前者は無台环A 4類にちかい。法量は412・413・418・419が口径12.8～13.8cmとやや大ぶりであるほかは口径11.1～12.2cm、器高3.6～4.8cmでほぼ一定している。この法量は無台环A 4類や土師器の無台环B、無台环Cと共に共通するものである。胎土は有台环Bと同じで灰白色を呈し、軟質の焼き上がりのものが多い。408・434・456～458は底部外面にヘラ記号をもつ。

#### 4. 瓢（463～481）

磁器碗を模倣した器種。高台をもつ底部から緩やかに屈曲した胸部が直線的に大きく開き口縁部はそのまま丸くおさめる。高台はハの字形に開くしっかりとした角高台である。体部形態は角高台のつく灰釉陶器碗1類に較べると深身のつくりで、必ずしも忠実な模倣ではない。法量は口径11.5～16.8cmの幅があり、11.5cm、13.1～15.2cm、16.0～16.8cmの3群に分かれる。器高は4.9～6.7cm。胎土は硬質堅緻で断面がチョコレート色で表面が暗灰色、暗青灰色を呈するものと軟質の焼き上がりで灰白色を呈するものがある。

#### 5. 盆（482～490）

磁器皿を模倣した器種。形態の違いで2種に細分できる。

1類（482～488）高台をもつ底部から胸部が直線的に開くもの。体部形態は灰釉陶器皿1類に較べると直線的で深身のつくりとなっている。高台は上記の碗とまったく同じでハの字形に開くしっかりとした角高台である。口縁部はそのまま丸くおさめるもの（482・484・485・488）とやや外反気味に折るもの（483・486・487）がある。胎土・色調も上記の碗と共に

1類  
湖西窯産

2類

湖西窯産  
3類

助宗窯産  
4類

無台环D  
回転糸切り痕  
調整

碗

皿

1類

通しており、この碗とセット関係になる皿としてつくられたものであろう。法量は一定で口径14.0～15.6cm、器高3.0～3.3cm。

- 2 類 2類 (489・490) 灰釉陶器皿を忠実に模倣した皿。489は灰釉陶器皿1類を模倣したもので浅身の体部に角高台をつけ、口縁部は外反気味に引き出している。胎土は白色微細粒子を含み黒色の吹き出しがみられ灰白色を呈する。口径13.8cm、器高2.9cm。490は高台がやや長脚で灰釉陶器皿2類の121や灰釉陶器碗2類の49の高台に近い。胎土は1類のものと共通する。口径14.0cm、器高2.4cm。

無 台 皿 6. 無台皿 (491)

高台をもたない平底の皿。491の1点のみである。形態的には壊蓋C 1・2類に近似しているが、口縁部を壊蓋C 1・2類のように受け部をつくらず外反気味に引き出しているので、ここでは皿に分類した。底部は摩滅しているが、回転糸切り痕を残すようである。胎土には白色微細粒子を含み黒色の吹き出しがあり淡灰白色を呈する。口径18.6cm、器高3.2cm。

鉢 7. 鉢 (482)

杯に較べて大ぶりで深身の体部であるが底部を欠損しているため全形はわからない。内外面ともノタ目が顕著に残るが胴部下半は回転ヘラケズリ調整を施す。口径19.0cm。

高 壁 壺 8. 高壺 (459～461)

3点あるがすべて脚部の破片で全形はわからない。脚部は筒状の長脚で裾部が大きく外反する。461は非常に軟質の焼き上がりで土師器に近い。

貯 藏 形 態 b. 貯藏形態

貯蔵形態の器種としては小型広口壺・短頸壺・長頸瓶・瓶子・甕等がある。

小型広口壺 9. 小型広口壺 (509～511)

口縁部を内側に折り曲げたあと短く直立させるもの。509は全形のわかる唯一のもので平底の底部から鋭く屈曲した胴部が直線的にのびる。底部外面は手持ちのヘラケズリ調整が施され、内面には降灰釉がたっぷりとたまる。口径8.0cm、器高6.9cm、底径5.5cm。510、511は口縁部破片で、口径は8.0cm、6.6cmと開きがあるが法量は509と同一と思われる。

短 頸 壺 10. 短頸壺 (506)

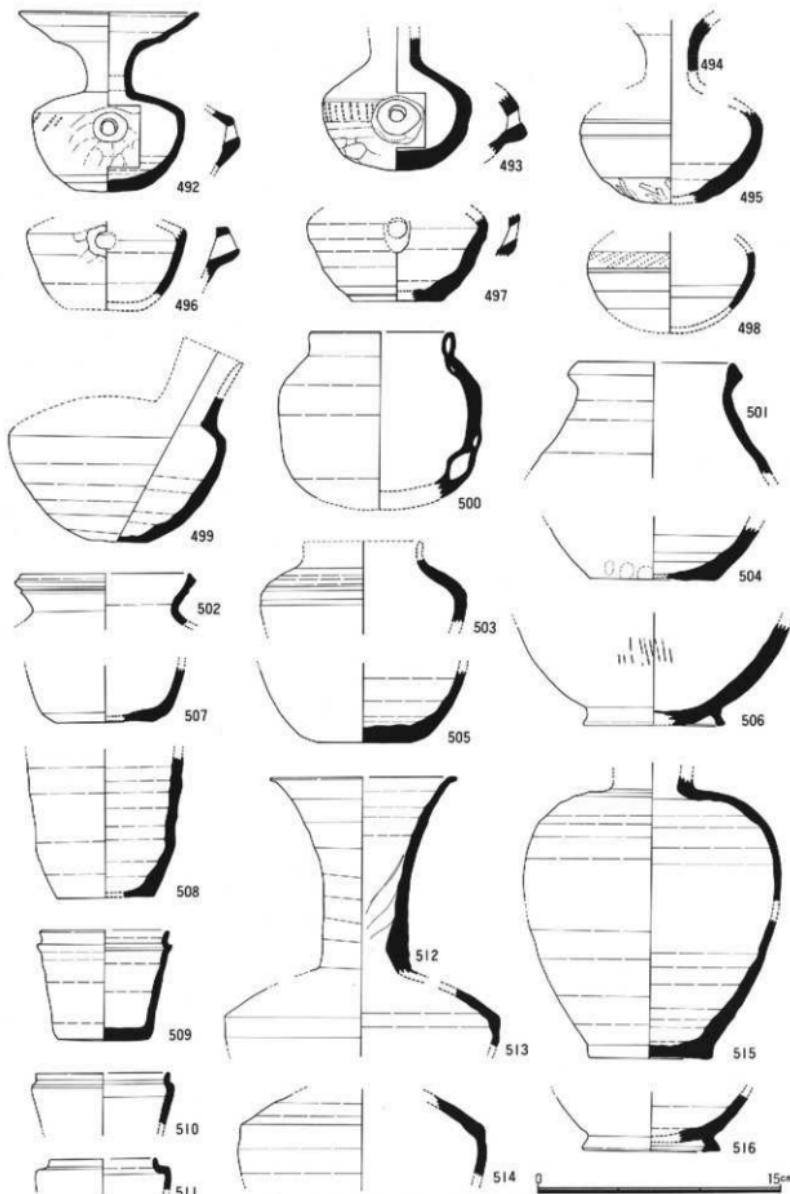
506はハの字形に開く高台を付けた球胴壺の破片で短頸壺と考えられる。胴部は厚手につけられており、ナデ調整された器面にはタクキ目と思われる痕跡がわずかに確認できる。

長 頸 壺 11. 長頸瓶 (512～516)

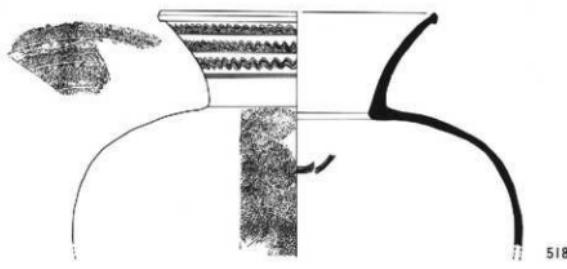
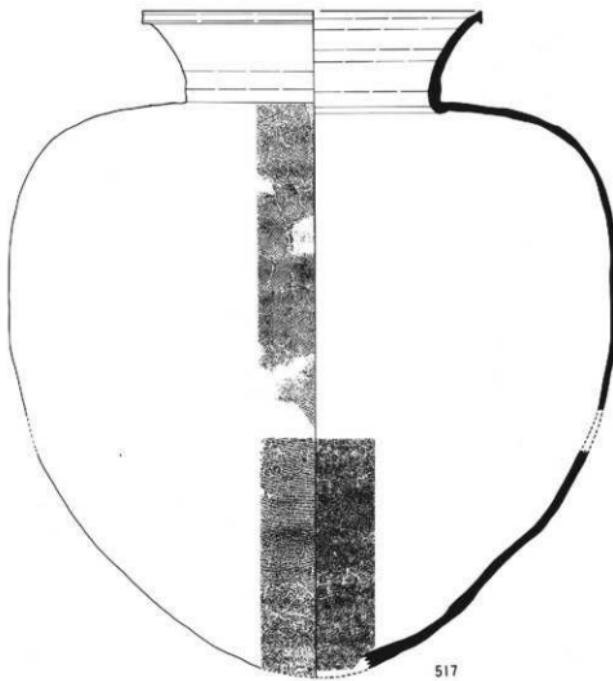
器面に灰釉がかかり灰釉陶器との判別し難いものについては灰釉陶器の項で扱ったが、なかには173のように須恵器であることが確実なものも含まれている。512は胴部との接合部でははずれた口頭部。ラッパ状に開いた口縁の端部を外反気味に丸くおさめている。体部には降灰釉がかかっている。胎土には微細砂粒を多く含み暗灰色を呈する。口径11.6cm。513・514は肩部が屈曲して稜をもつもので、体部上面には焼けただれた降灰釉がかかる。胎土には黒斑状の吹き出しがみられ灰白色を呈する。515は口頭部を欠失しているが、肩の張った胴部に回転糸切り痕が残る平底の底部がつく。底部は直立していて外見的には高台をつけた底部と変わらない。胎土には白色微細粒子を含み焼成は堅緻で灰色を呈する。516はハの字形に開く高台を付けた底部。胎土は515に共通する。

瓶 子 12. 瓶子 (507・508)

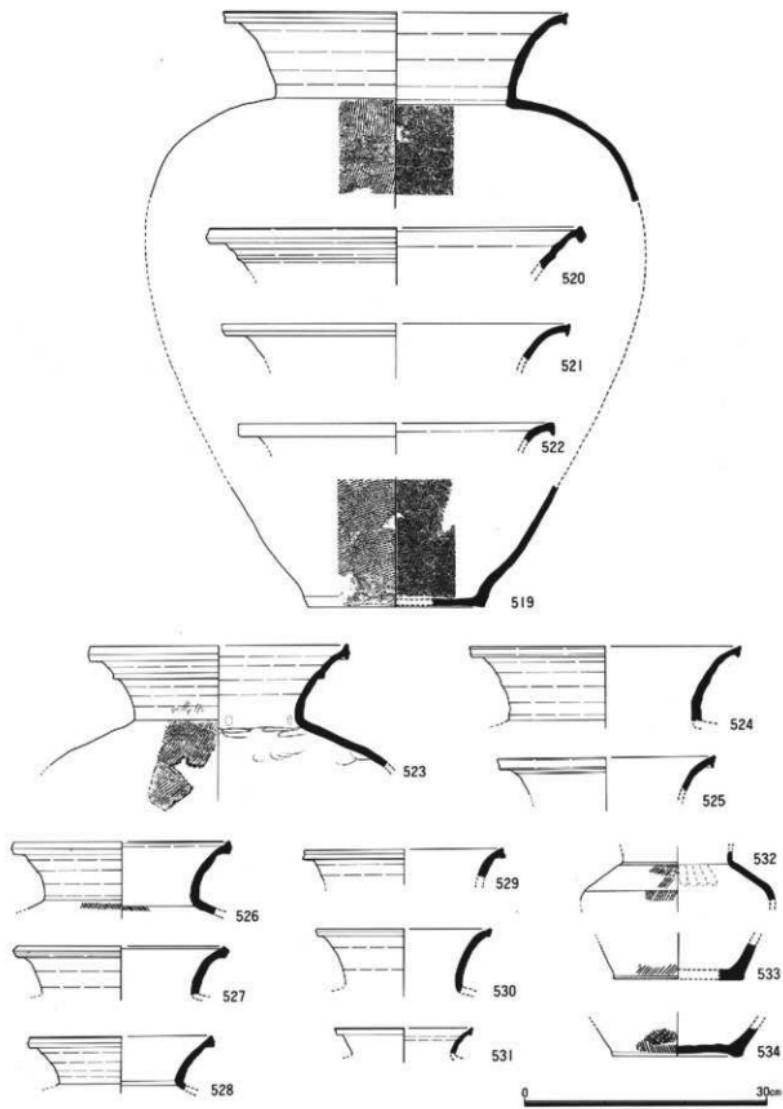
平底で筒形の体部に長細い口頭部をつけたもの。507・508の2点はいずれも体部下半部の破片で平底の底部には回転糸切り痕を残す。胎土には白色微細粒子を含み黒斑状の吹き出



第26図 土器実測図19（須恵器 9）



第27図 土器実測図20（須恵器10）



第28図 土器実測図21（須恵器11）

しがみられ灰白色を呈する。

#### 要

#### 13. 壺 (517~534)

完形に復元できるものではなく、口縁部および底部資料を中心に図化した。口縁部は大きく外反し、端部を横ナデによって上下に引き出すように面取され中央がやや窪むもの（517・519・524・525・529・531）と端部を肥厚させて中央に稜をつけて面取したもの（518・520・521・523・526～528・530）がある。518は口縁部に櫛描波状文とヘラ沈線文を組合せた文様を3段にわたって巡らせている。また520・523は断面三角形の凸帯を1条を巡らせている。法量は口径に17.0～47.0cmの幅があり、17.0cm、21.8～27.2cm、33.6～34.6cm、39.2～47.0cmの4群に分かれる。517は口径42.0cmを測る肩の張った大壺で底部は丸底と考えられる。体部の外面には平行タタキ目、内面は青海波文をナデ消している。また口縁部の内外面や体部内面には暗褐色を呈する黄土（鉄釉）が刷毛塗りされている。519は口縁部や肩の張った体部形態は517と同じであるが底部を平底につくる。体部外面には平行タタキ目、内面は青海波文の上にナデ調整を施している。平底の底部は533・534の小型の壺もある。

#### 古墳時代の須恵器

出土した須恵器にはこのほかにも少量ではあるが古墳時代の供膳形態器種である合子形の蓋環（232・233）、乳頭状の鉢をもつ蓋（234～237）や貯蔵形態器種のは壺（492～498）、横瓶（499）、短頸壺（500～505）などがある。

#### 土師器

須恵器とともに大量に出土している。出土した器種には供膳形態の無台环・有台环・环蓋・高环・鉢と煮沸形態の壺、鍋などがある。

#### 供膳形態

##### a. 供膳形態

##### 1. 無台环（535～654・932～984）

土師器のなかでも最も出土量の多い器種である。系譜・形態の違いによって3種の細別器種がある。

##### 無台环 A（536・537）

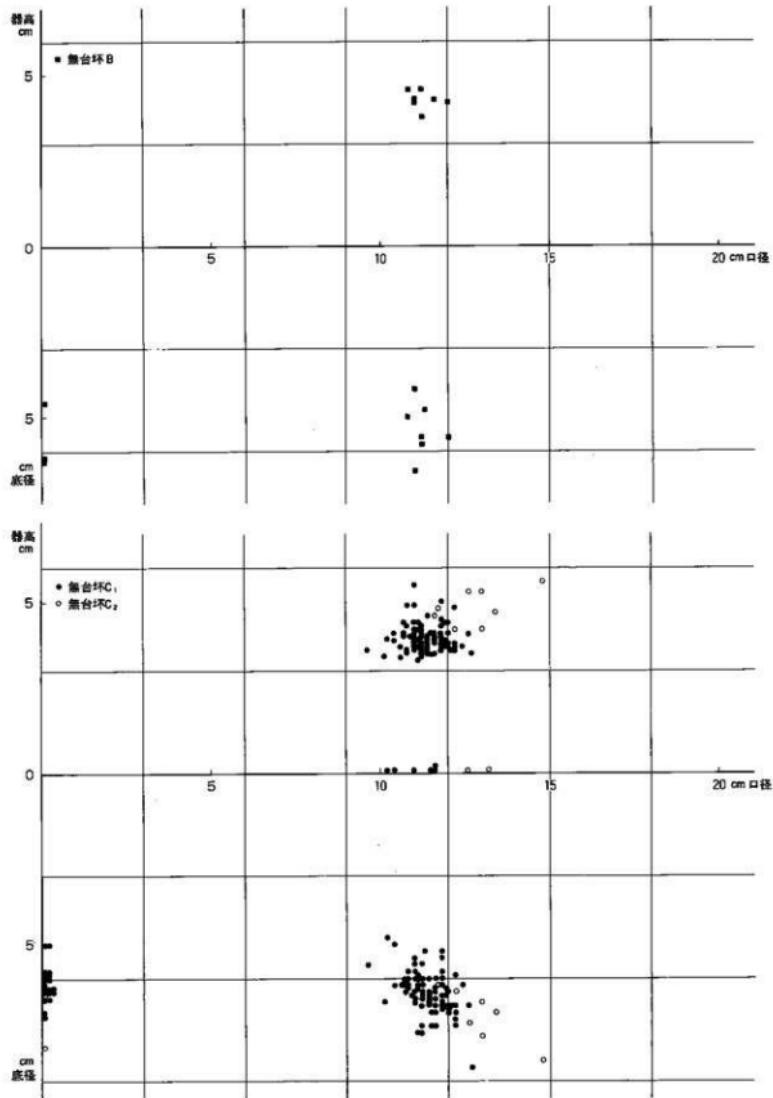
遠江　遠江に分布の主体をもつもので量的には少ない。やや丸味のある底部から体部が内湾気味に立ち上がる浅身の無台环で、体部には粘土紐の巻き上げ痕をとどめる。胎土は砂粒を含み、明橙色を呈する。536は口縁端部外縁がシャープなつくりで稜をもち、全面を丹塗りしている。法量は2点ともほぼ同じで口径11.3～11.4cm、器高3.4～3.8cm。

##### 無台环 B（539～547・932～934）

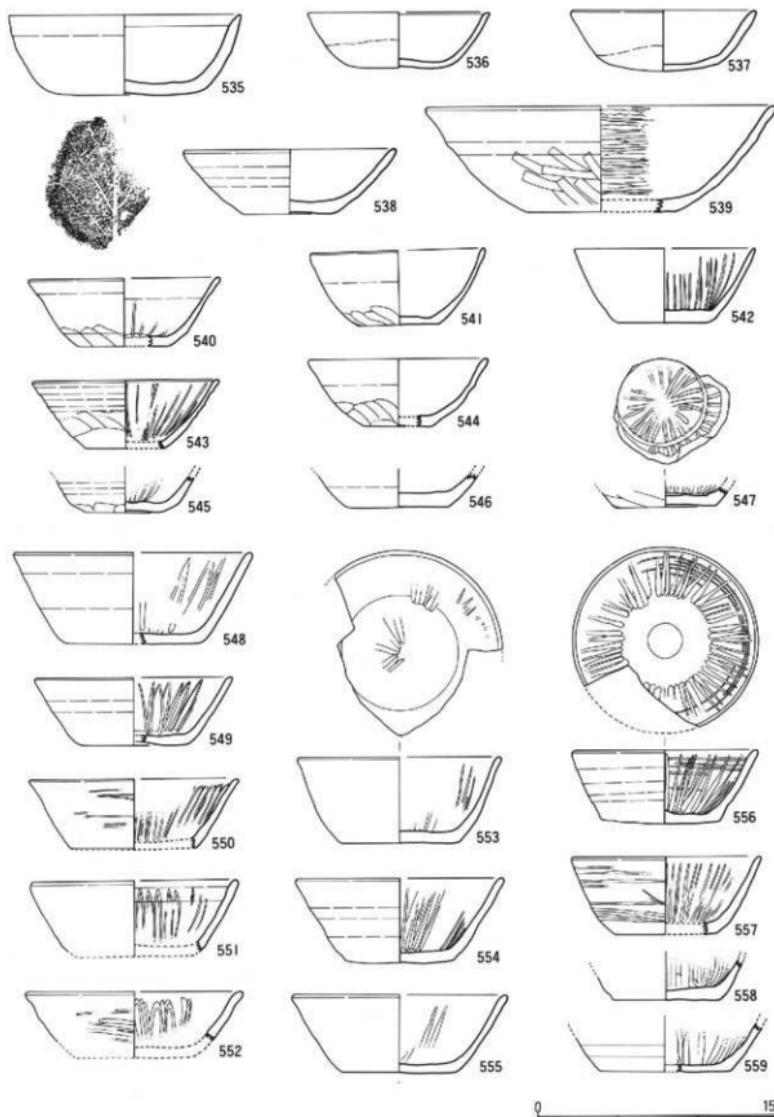
甲斐型环　「甲斐型环」と呼ばれるもの。平底で、体部は内湾して立ち上がる。全体に薄手のつくりである。胎土は精良で赤色粒子を含み、淡黄褐色を呈する。外面調整は底部および体部下半をヘラケズリ、口縁部はロクロナデ。内面はナデ調整後、体部に放射暗文を施している。547は体部のほか底部にも放射暗文を施すものである。541・544は器面が摩滅していく不明瞭であるが体部の放射暗文は認められない。法量は539の1点をのぞくと口径10.8～12.0cm、器高3.8～4.6cmの範囲におさまり、規格性が非常に強い。これに対して底径は4.2～6.6cmとやや幅をもっている。539は口径21.6cmの大型のもので、内面は丁寧にヘラミガキしている。

##### 無台环 C（548～654・935～984）

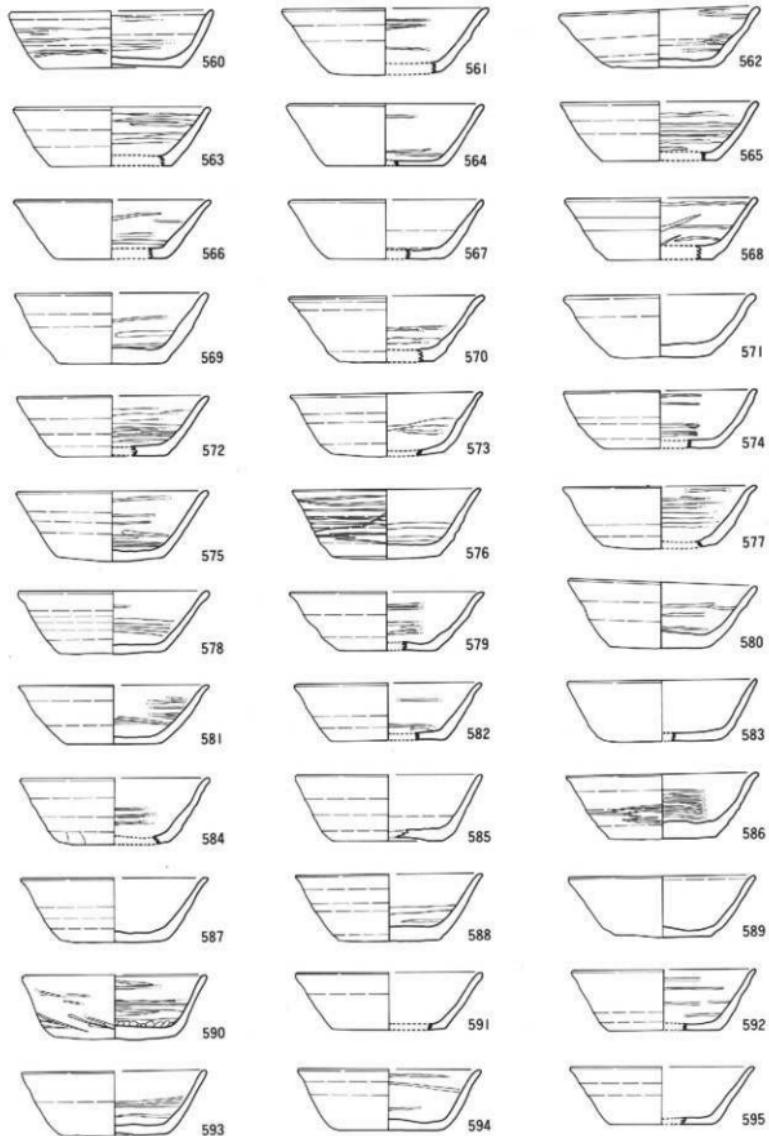
駿東型环　「駿東型环」と呼ばれるもので、出土した無台环の主体をなしている。平底で、体部は直線的に立ち上がり口縁部を丸くおさめる。胎土は砂粒や赤色粒子の粗い粒子を含み暗茶褐色～淡茶褐色を呈する。底部は回転糸切りの後ヘラケズリする。ヘラケズリは底部全面に行うもの（556・648 図版22 556参照）もあるが、大半は周縁部分に限られ底部中央には



第29図 土器法量図（無台坏）

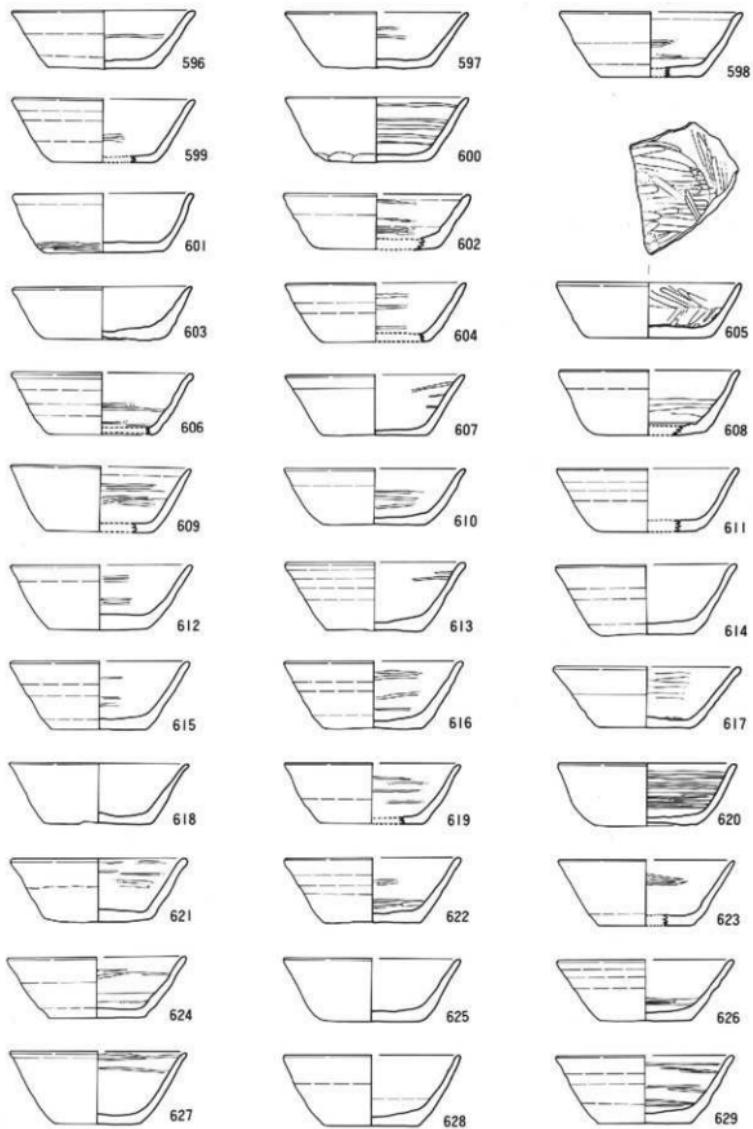


第30図 土器実測図22 (土師器 1)



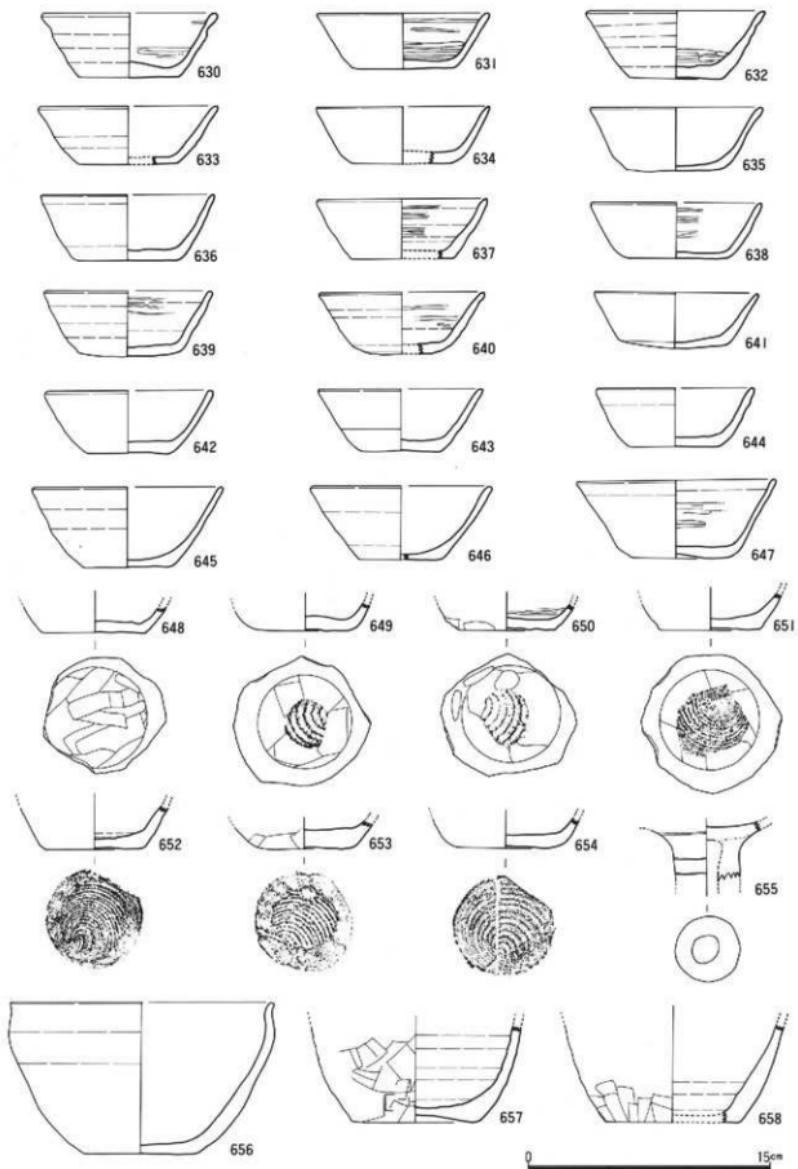
第31図 土器実測図23 (土器器 2)

0 15cm



第32図 土器実測図24（土器3）

0 15cm



第33図 土器実測図25（土師器4）

回転糸切り痕を残している(620・649～653 図版22 620参照)。また、まれには回転糸切りのままでヘラケズリを行わないものもある(654)。体部内面には①体部に放射暗文あるいは山形の縦位暗文を施すもの、②ナデ調整後に横位のヘラミガキを施すもの、③ナデ調整のみの3種類があるが量的には②のものが大半を占めており、器面が磨滅している場合②と③の判別は難しいが、③のものは極めて少ない。②の場合体部外面にも横位のヘラミガキを施すものがある。底部内面はナデ調整のものがほとんどだが、①や②のなかには少量であるが放射暗文を施したもの(553・590)やヘラミガキをしたもの(598)がある。法量は口径9.6～14.8cm、器高3.3～5.6cmの幅をもつが、大半は口径11.0～12.0cm、器高3.5～4.5cmに集中しており、無台坏Bと同様の規格となっている。これより大型のものは②のものに限定されている。

#### 有台坏 2. 有台坏 (680～700・929～930)

須恵器有台坏の分類に準じて、高台の付け方によってA、Bの2種に大別する。

##### 有台坏 A (680～685・689～700・929・930) はりつけ高台

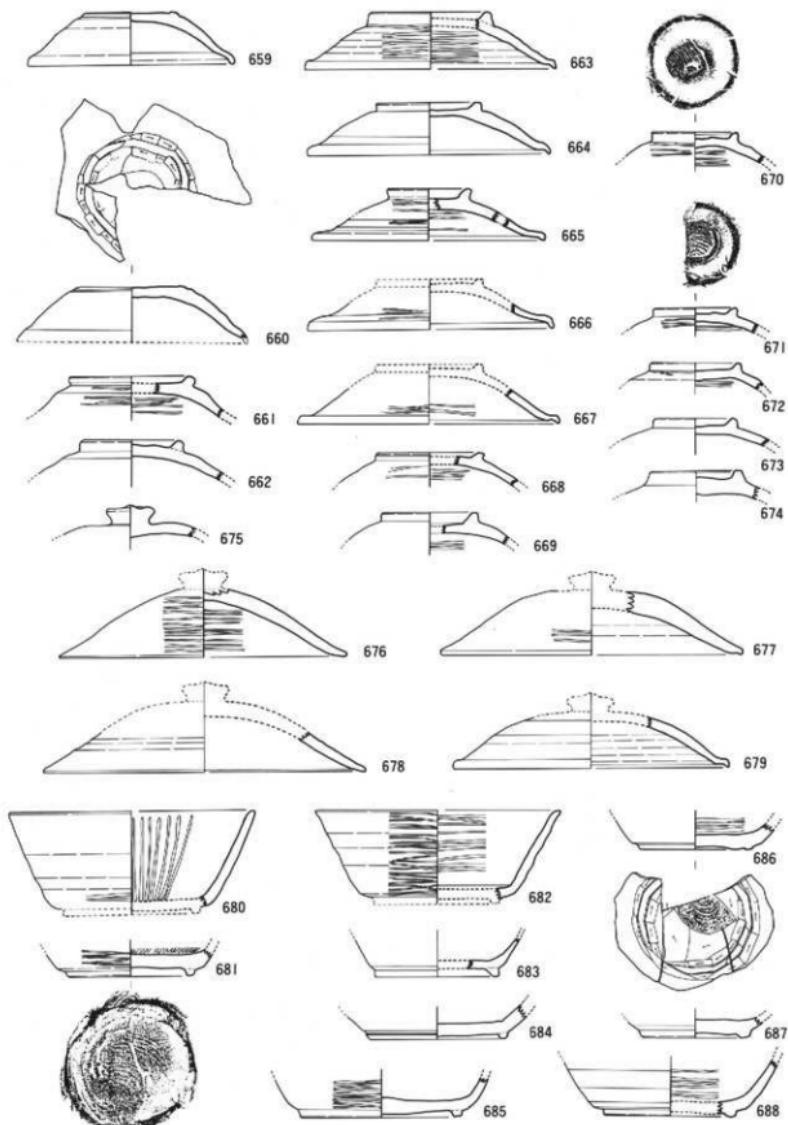
1. 類 1類 (680～685) 須恵器有台坏A 2類と同形態で、高台を底部外縁のやや内側につけ体部が直線的に開くもの。坏蓋A 1類とセットになる。底部は全面をロクロケズリするもの(684、685)と中央に回転糸切り痕を残すもの(681)がある。器面調整には外面を横位のヘラミガキし内面には放射暗文を施すa種(680・681)と内外両面に横位のヘラミガキを行うb種(682)の2種類がある。法量は口径のわかる2点はいずれも15.1cmで、高台径には7.6～8.4cmのものと10.1cmのものの2種がある。
2. 類 2類 (689～698) 腰がやや内湾した深身の坏に断面三角形の高台を底部外縁につけている。坏蓋B 2類とセット関係をなすもので胎土・器面調整とも共通しており、器面は内外面ともナデ調整後に横位のヘラミガキを行い、底部には回転糸切り痕を残している。口径は13.7～14.2cmと14cm前後にまとまり、坏蓋B 2類と重ねると1cm程度の隙間がある。
3. 類 3類 (700) 断面三角形の低い高台がつき体部が大きく開くもので、形態的には碗に近いが胎土・法量等から坏蓋A 2類と組合わせる可能性が強いことから有台坏として扱った。口径18.6cm。体部外面の下半はロクロケズリし、内面には放射暗文を施している。
4. 類 4類 (699) 体部が大きく開く形態や法量は3類と同じであるが蓋とのセット関係は不明であり確実ある可能性もある\*。底部を欠くが同形のものが宮下遺跡でも出土している。体部は指頭成形のままで粘土紐の巻き上げ痕を残している。口縁部はロクロナデし、内端には沈線を巡らす。体部成形の技法は無台坏Aと共通するもので、遠江に分布の主体をもつ。  
\*) 本書では碗・皿の器種名称を9世紀に始まる越州系磁器の碗・皿を模倣した碗・皿形態に限定して使用している。したがって碗には原則的には蓋が伴わない。

##### 有台坏 B 削り出し高台

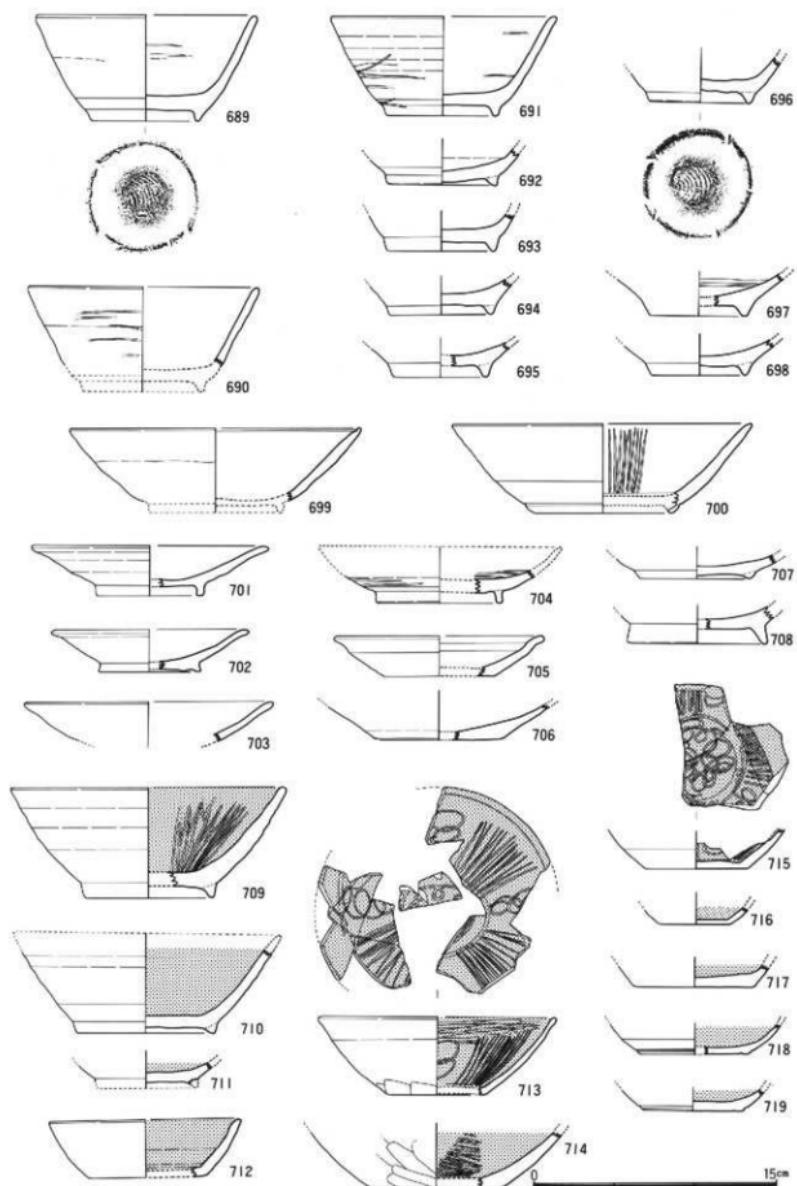
- a (686) 坏蓋B 1類とセットになるもので、手持ちのヘラケズリによって高台を削り出し、高台は不整円形を呈する。高台の内側もヘラケズリするが、中央には糸切り痕を残している。高台径7.0cm。
- b (687・688) 高台をロクロケズリによって引き出したもの。2点とも底部破片であるが、法量は大小の2種があり、687は高台径6.8cm、688は高台径8.2cm。

#### 坏 盖 3. 坏蓋 (659～679・927・928)

有台坏とセットになるもの。紐の形態で2種に大別できる。



第34図 土器実測図26（土師器 5）



第35図 土器実測図27（土師器6・内黒土師器）

**坏蓋A** (675~679) 宝珠鉢をつけるもの。完形品はないが口縁部の形態、胎土などで2類に細別できる。

**坏蓋A  
宝珠鉢**  
1 類

1類 (679) 1点ある。須恵器の坏蓋Aを模倣したもので、有台坏A 1類とセットになる。頂部が甲高で口縁端部をつまんで下に折り曲げるもの。頂部から体部にかけてロクロケズリを行う。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成は良好で茶褐色を呈する。

2 類

2類 (676~678) 3点ある。頂部が甲高で、口縁端部は外側に引き出しただけのもの。有台坏A 3類とセットになる。677~678は口縁端部内縁に浅い沈線をいれている。いずれも款質の焼成で淡黄褐色を呈する。675は内外面ともナデ調整後に横位のヘラミガキを行う。口径17.8~20.0cm。

**坏蓋B**  
環鉢  
1 類

**坏蓋B** (659~674·927) 環鉢をつけるもので、環鉢の付け方で2類に細別できる。

1類 (659·660) 削り出しの環鉢をもつもの。有台坏Bとセットになる。659、660はいずれも有台坏B aと同様で手持ちのヘラケズリによって環鉢を削り出しており、環鉢は不整な円形となっている。甲高的器形で口縁端部はつまんで下に折り曲げている。胎土はやや粗で砂粒を含み、焼成は良好で明茶褐色を呈する。659は口径12.8cm、660も口縁端部の先端を欠くが659とほぼ同大である。

2 類

2類 (661~674·927) はりつけの環鉢のもの。有台坏A 2類とセットになる。今回出土した坏蓋のなかでは主体をなすもので、口径は14.5~16.2cmとほぼ15cm前後にまとまっている。体部は内外面ともナデ調整後に横位のヘラミガキを施す。頂部は平坦で中央には回転糸切り痕を残している。胎土は無台坏Cと同じで砂粒、赤色粒子を含み明茶褐色を呈するものが多い。

**高坏**

#### 4. 高坏 (655)

脚部の破片が1点ある。脚部の破片で胎土は密で砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。坏部の内面はナデ調整、外面は坏部から脚部にかけてナデ後横位のヘラミガキを施す。

**鉢**

#### 5. 鉢 (856)

口縁部を外反させる深身のものが1点ある。胎土は2mm大の白色粒子を含み、明橙色を呈する。焼成は不良で器面が摩滅しているため器面調整は不明であるが底部には木葉痕が残っている。口径16.3cm。

**皿**

#### 6. 皿 (701~703·931)

灰釉陶器の皿を模倣したもの。体部の形態で2類に細分できる。

1類 (704·931) 体部は腰に少し張りがあって湾曲し、口縁部はそのまま立ち上がるるもの。底部の高台はやや長めの角高台で、ハの字状に外に開く。器面調整は体部の内外両面に横位のヘラミガキをし、底部内面にはさらに放射状にヘラミガキを行う。胎土は無台坏Cや有台坏A 2類・坏蓋B 2類と共にもので砂粒や赤色粒子の粗い粒子を含み淡茶褐色を呈する。931は口径15.0cm、器高3.5cmのやや深身の5寸皿で底部外面と体部外面の2ヶ所に墨書がある。

1 類

2類 (701~703) 灰釉陶器折戸53号窯式の皿を模倣したもので、体部が直線的に開き口縁部でやや外反する。底部の高台は三日月高台が退化した形態で爪形のもの(701)と扁平な三角形のもの(702)がある。701は胎土に赤色粒子を含み淡橙色を呈する。口径14.8cm、器高3.2cm。703も701と同じ胎土で口径も近い。702は胎土に砂粒を多量に含み肌色を呈する。口径12.4cm、器高2.6cm。

2 類

なお、707·708は碗皿類の高台をもつ底部破片であるが器種を確定することはできない。

## 無台皿 7. 無台皿 (705~706)

無台皿を扁平にした形態の皿。705は体部が直線的に開き口縁部で強く外反するもの。底部は平底でヘラケズリか。口径12.6cm、器高2.5cm。706は回転糸切り痕をもつ平底の底部破片。胎土は精良で淡黄褐色を呈する。須恵器無台皿491と同形のものか。あるいは須恵器环蓋C 2類と同形の环蓋になる可能性もある。

## 煮沸形态

b. 煮沸形态

煮沸形态の器種としては甕、鍋がある。甕は長胴甕と小型甕に大別でき、少量であるが球胴甕も出土している。球胴甕は貯蔵形態器種である可能性が高い。

## 長 脱 甕 8. 長胴甕 (720~752)

系譜、形態等でA、Bの2種に分類できる。

長 脱 甕 A 長胴甕A (720~746) 短く直立した頸部から口縁を横方向に強く引き出し断面がコの字形になる長胴甕。遠江に分布の主体をもつものであるが、駿河でも富士川流域にまで分布しており、内荒遺跡では長胴甕の主体をなしている。まとまった量が出土しているがすべて破片で全形を復元できるものはない。口径は19.7~27.6cmの幅があるが20cm前後のものと25~26cm前後のものの2群にまとまり、量的には後者のものが大半を占めている。非常に薄手のつくりで、胎土にはウンモ、赤色粒子、白色粒子などの微細粒子を含み淡黄褐色を呈する。口縁部は横ナデ整形が施されており、口縁端部を内側に引き上げて受け口状にするもの、端部を肥厚させ丸くおさめるもの、直線的に引き出されるものなど端部形態にはいくつかのバリエーションがみられる。胴部外面は斜一線方向の刷毛調整、内面は720~727のようにハケ目の残るものもあるが大半のものは刷毛調整後に丁寧なナデ調整を施している。また口縁部との接合部には粘土はりつけの痕跡を顯著にとどめている。底部は胴部からなだらかに続く平底で外面には刷毛調整が施されている。

長 脱 甕 B 長胴甕B (747~749) 口縁部がくの字に外反する長胴甕。駿東地域に分布の主体をもつものであるが内荒遺跡ではきわめて少ない。長胴甕Aに較べるとやや厚手のつくりで、胎土には白色粒子、褐色粒子などの微細粒子を含み茶褐色を呈する。口縁部は横ナデ調整、胴部は内外面とも刷毛調整が施されている。口径は19.4~25.5cm。

清 部 型 甕 甲 婦 型 甕 駿 東 型 甕

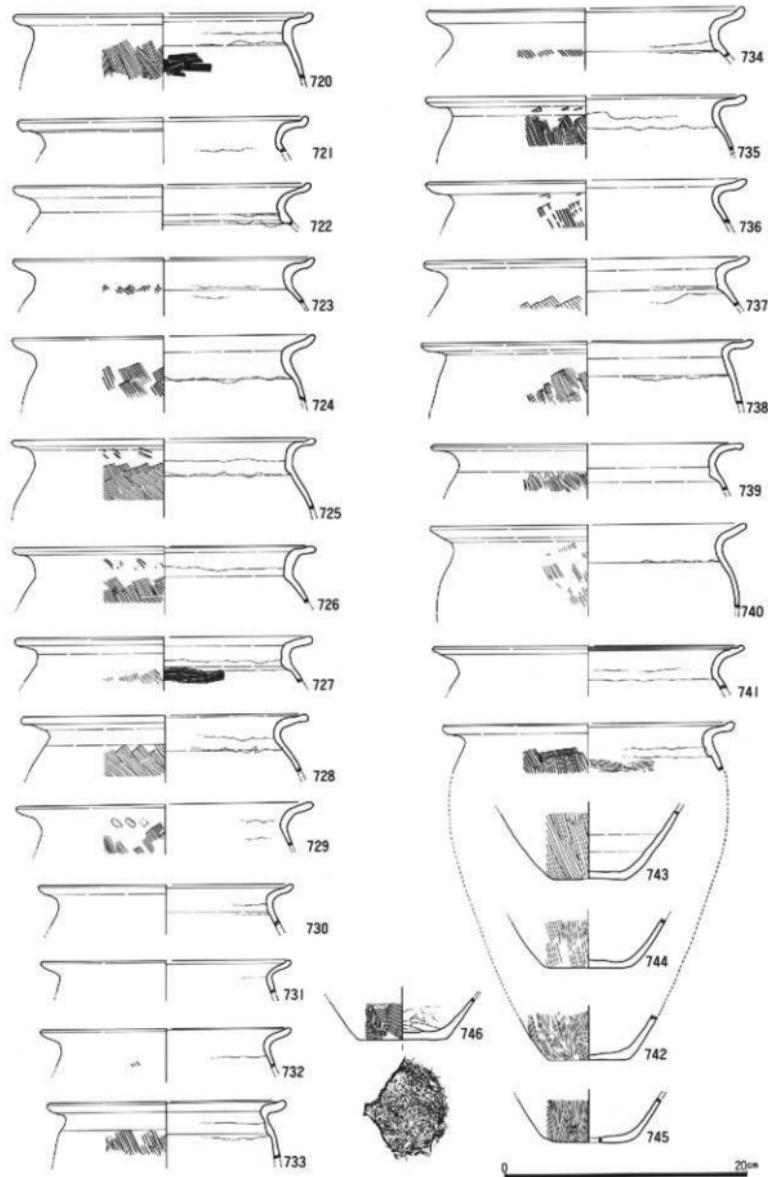
甕にはこのほか清部型甕 (750~796)、甲斐型甕 (751~794)、駿東型甕 (785~788)など系譜的に分類できる甕が出土しているが、いずれも破片で量的にも少ない。このうち駿東型甕は球胴甕で、くの字に外反した口縁部の端部内側を肥厚させ、体部にはヘラミガキ調整を施す特徴をもつ。

## 小 型 甕 9. 小型甕 (657~658~753~784)

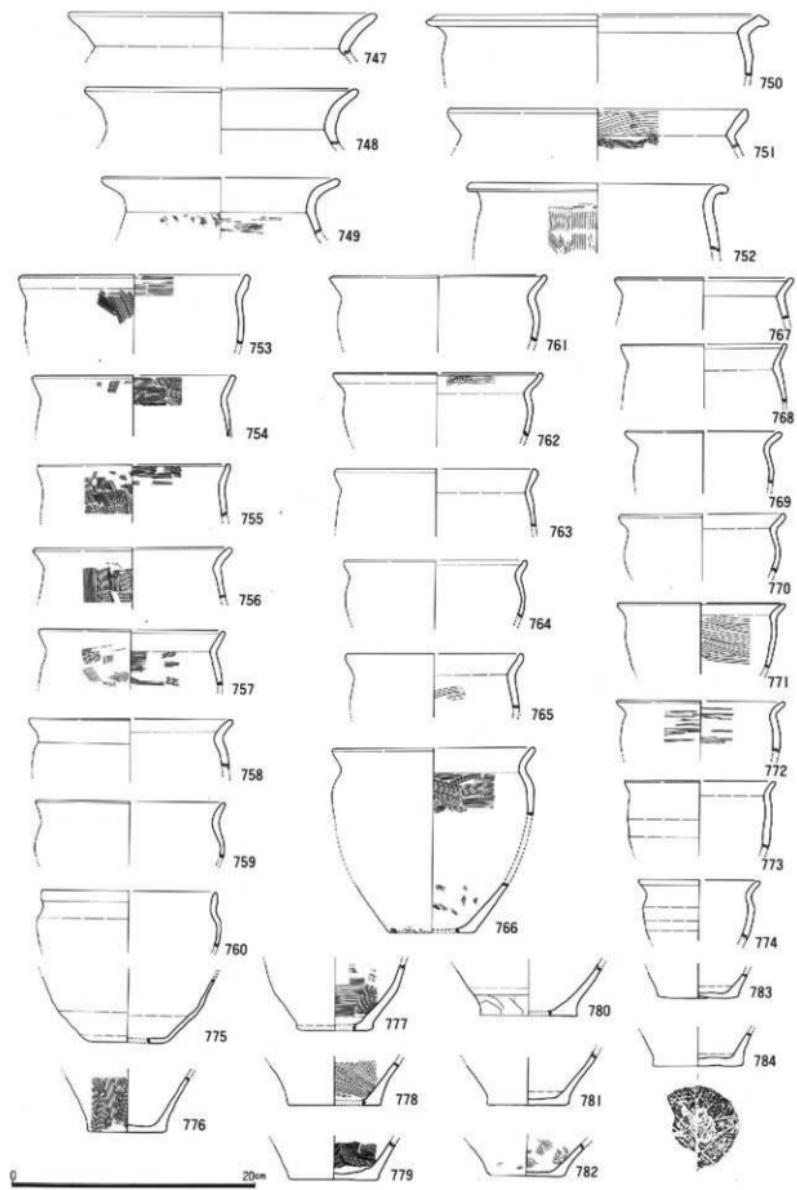
口径が16cm前後の甕で、長胴甕と同様に完形に復元できる資料がないため詳細は不明であるが、技法、胎土等で細分することができる。ここでは胎土の違いによってA、B、C、Dの4種類に大別する。

小 型 甕 A 小型甕A (753~757~761~763~765~770~772~774) 無台環Cと同じ胎土で白色粒子や赤色粒子を含み暗茶褐色を呈するもので、小型甕の主体をなす。調整方法の違いによって3種類に細分できる。

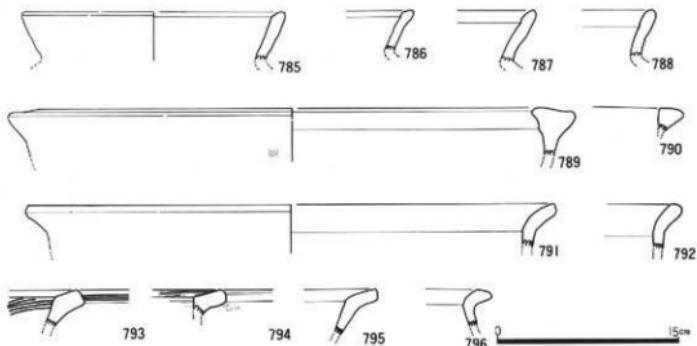
1 類 1類 (753~755~757~761~763~765~770) 口縁部はくの字に外反するが屈曲はあまり顯著ではなく端部をやや内湾気味にし端面は面取りするものが多い。器面調整は刷毛調整後にナデ調整するものがほとんどであるが、胴部内外面や口縁部内面が刷毛調整のままのものもある。刷毛調整は細密である。



第36図 土器実測図28（土器器7）



第37図 土器実測図29 (土器器 8)



第38図 土器実測図30（土器器 9）

2類 (756) クの字に外反した口縁部に横ナデ調整を施すもの。胸部外面は縦位の刷毛調整、2類 内面はナデ調整。口径16.4cm。

3類 (772~774) 器面調整にロクロナデを施すもの。1類、2類のものに較べて厚手のつくりである。772は内外面に横位のヘラミガキを施している。774は小型壺のなかで最も小型のもので口径10.0cm。

小型壺Aの底部には2種類のものがある。776~784は木葉痕をもつ平底の底部で底径6.0~8.0cm。657・658は無台環Cと同じ底部成形のもの。回転糸切りの後周縁をヘラケズリしたもので底部中央には回転糸切り痕を残している。体部下半にもヘラケズリを施す。底径8.0~8.4cm。  
底部調整

小型壺B (759~760・764) 長脚壺Aと同じ胎土でウンモ、赤色粒子、白色粒子などの微細粒子を含み淡黄褐色を呈するもの。小型壺Aに較べて薄手のつくりで肩の張った器形をなし、器面にはナデ調整を施している。3点あるが形態、技法はそれぞれ異なる。759は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部を尖らせる。口径15.7cm。760は口縁部が直立気味で胸部との境には強い横ナデ調整を施し段をつける。口径14.4cm。775の底部は760と同一個体である可能性が高い。764はクの字に外反した口縁部を横ナデ調整でやや内湾気味に引き出し端部は面取りする。口径15.0cm。

小型壺C (758) 胎土に赤色粒子や砂粒を含み明肌色を呈するもの。厚手のつくりで、器面はナデ調整。口縁部はクの字に外反し胸部との境には強い横ナデを施して段をつける。口径16.6cm。

小型壺D (771) 甲斐型壺の胎土と同じでウンモ、白色粒子を多量に含み暗茶褐色を呈するもの。口縁部はクの字に外反する。器面はナデ調整を施すが胸部内面は刷毛調整のままである。口径13.9cm。

#### 10. 鍋 (788~793・795)

鍋

口径が40cmを越える大型の鉢型土器。口縁部の破片のみで全形を知ることはできないが、口縁部の形態、胎土で3種に分類できる。

鍋A (789) 口縁部の断面が三角形を呈するもので、口縁部全体に丁寧な横ナデ調整が施されて口縁の上端は平坦面をなす。胎土は駿東型壺とおなじで白色粒子を多く含み茶褐色を

呈する。790も789と同様の口縁形態をもつものであるがかなり小型である。

鍋 B 鍋B (791-792) 口縁部が緩やかに外反するもので、横ナデ調整が施されている。胎土にはウンモ、赤色粒子、白色粒子などの微細粒子を含み淡茶褐色を呈する。

鍋 C 鍋C (793-795) 甲斐型鍋。口縁部がくの字に折れたもので、口縁の内外面および端面に粗い刷毛調整を施す。胎土にはウンモ、赤色粒子、白色粒子などを多量に含み茶褐色を呈する。

#### 内黒土師器 E. 内黒土師器

内黒土師器は内面のみを黒色処理した土師器。器種は供膳形態のものに限られ碗・無台环・有台环などが出土しているが、量的には少ない。

##### 碗 1. 碗 (709~711)

全形のわかるものは709の1点のみである。法量には大小の2種がある。いずれも軟質の焼成で、胎土は微小砂粒や赤色粒子を含むが精良なもので淡黄褐色を呈する。709は体部がわずかに内湾しながらハの字状に開く深身のもので、底部には断面三角形の低い高台をつけている。口径17.1cm、底径8.8cm、器高7.1cm。内面全体を黒色処理し、体部には放射暗文を施す。710は口縁部を欠くが底径8.5cmを測り709とほぼ同形同大である。内面を黒色処理するが体部の放射暗文は認められない。711は底部破片で、709・710よりも小型である。底径6.4cm。内面は黒色処理のみで暗文はない。

##### 無台环 2. 無台环 (712~717)

土師器の無台环に対応するB、Cの2種がある。

無台环 B 無台环B (713~717) 土師器無台环Bと同形のもので、今回出土した内黒土師器の主体をなす。胎土は淡黄褐色を呈する精良な粘土に微小砂粒や赤色粒子を含むもので、碗と同じでありおそらく同一の産であろう。外面は底部ヘラケズリ、体部から口縁部にかけてはクロナデの後下半部にヘラケズリを施す。黒色処理した内面には暗文をもつものともないものがある。713~715は内面に暗文をもつもの、713~715は底部に螺旋暗文、体部は8分割して放射暗文と螺旋暗文を交互に配置する、714は大型の体部下半の破片で横位のヘラミガキを施す。716~717は暗文をもたないもの。716は薄手の仕上がりで底径も4.0cmと小型である。

無台环 C 無台环C (712) 土師器無台环Cと同形のもので712の1点がある。胎土は淡褐色を呈し少量の砂粒を含んでいる。器面があれでいるため詳細は不明だが、体部外面はナデ調整、内面にはナデ調整後に横位のヘラミガキを施すようである。

##### 3. 有台环 (718~719)

無台环Bの底部外縁および体部下端をクロケズリし、削り出し高台をつけたもの。胎土も無台环Bと同じである。このタイプの有台环は土師器にはみられない。

このほか小破片のため図示してはいないが、口縁端部上面を平坦に面取りし断面が三角形を呈する口縁部破片が出土している。口径の復元はできないがかなり大型のもので、器種は不明であるが、鉢になる可能性がある。口縁部外面はナデ調整、口縁端部上面から内面にかけて横位のヘラミガキを施し黒色処理している。C79IV層出土。

#### 陶磁器 F. 陶磁器

総数102点の陶磁器が出土したが、大半が小破片で全形を知ることのできるものはごくわずかである。出土層位はII層19点、III層43点、IV層17点、トレンチその他23点でIII層からの出土が約半分を占めている。II層出土の大半は16区のSD1601から出土したものである。また、IV層出土品についてはIV層遺構の形成年代である奈良・平安時代よりも時期的には後出のものであり、後世の耕作によってIV層に紛れ込んだものと考えられる。

出土した陶磁器は国内産陶磁器と中国からの輸入陶磁器に大別できるが、後者は極少量に限られる。陶磁器についてはまったく不明であるため、今回の出土陶磁器の整理にあたっては産地・年代などの全般にわたり瀧井康宏氏の教示を得た。以下の記述はこれに基づく。

### 1. 国内産陶磁器 (797~803)

国内産陶磁器

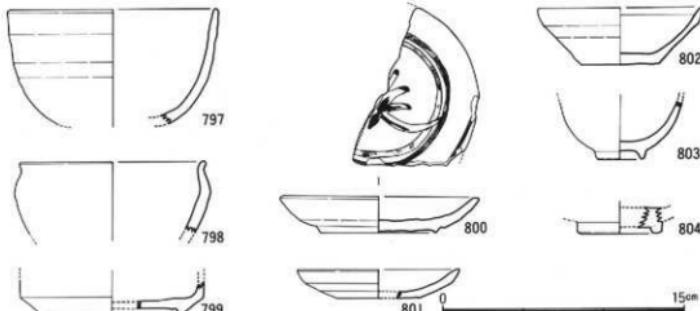
100点ある。このうち染め付けのなかには中国産の可能性があるものも若干含まれる。瀬戸焼のなかには鎌倉期に遡るものもあるが、大半は江戸期なかでも17世紀代に比定できるものである。また、胎土・技法等の特徴から産地は伊万里焼、京焼、美濃・瀬戸焼、志戸呂焼その他に分類できる。第4表に各出土層位の産地別出土点数を示した。( ) 内は江戸期に属する点数である。この表をみると伊万里焼と美濃・瀬戸焼がそれぞれ出土量の30%以上を占めている。

伊万里焼のほとんどは初期伊万里に属するもので、器種には碗、徳利などがある。803は「くらわんか」と呼ばれる雑器の白磁小碗で、胎土は灰白色を呈する。17世紀末頃。

美濃・瀬戸焼は産地を美濃、瀬戸のどちらかに限定することは難しいが、かなりのものは美濃と考えられる。志野の小皿(800)、天目茶碗(798)や鉄釉の香炉などがある。798は天目茶碗の口縁部。胎土は白色堅致で内外面にたっぷりと釉がかかる。800は志野の鉄砂小皿で、底部は削り出しの低い高台がつく。底部内面と口縁内端に文様を描き、器面全体に灰色の釉がたっぷりとかかっている。高台の内側には三又トチの痕跡が残る。口径12.3cm。17世紀。801は灯明皿。口縁部の直下までロクロケズリし、底部はロクロケズリによって段をついている。内面のみに施釉するが外面にも一部釉だれがある。口径9.8cm。17世紀。

第4表 出土陶磁器産地別一覧表

産地 出土層位	伊万里	京都	美濃・瀬戸	志戸呂	不明その他	計
II層	8(8)	0( )	6(4)	2(1)	3(0)	19(13)
III層	10(9)	3(2)	23(19)	7(6)		43(36)
IV層	5(5)	3(2)	4(1)	3(2)		15(10)
トレンチその他	10(8)	0( )	6(3)	1(1)	6(2)	23(14)
計	33(30)	6(4)	39(27)	13(10)	9(2)	100(73)



第39図 土器実測図31(陶磁器)

京焼としたものは産地の同定が難しくあるいは九州（唐津・薩摩）の可能性も考えられる。797は口縁部が直立した深身の碗で、内外面には木灰に長石を混ぜた釉をかける。釉には嵌入が認められる。17世紀か。

志戸呂焼にはすり鉢、徳利、碗皿、天目茶碗などの器種がある。802は小型の碗で、体部が直線的に開き、口縁部でやや直立気味となる。口縁部の外面には明瞭な段をつける。底部は糸切り未調整。内面に降灰釉がかかるが施釉はない。胎土は硬質堅致で器面全体は赤茶褐色を呈する。江戸期のものであることは確実であるが、年代は定かではない。足立順司氏の教示によれば、同じものは掛川市原川遺跡からも出土しているが、窯跡での表探資料には未見であるとのことである。

**輸入陶磁器 2. 輸入陶器 (804)**

輸入陶磁器として確実なものは青磁碗の破片が2点出土したのみである。804は底部の小片で、断面方形の高台を割り出しでついている。胎土は硬質堅致で灰白色を呈し、底部内面および高台の外縁に綠褐色の釉がたっぷりとかかる。元あるいは明か。もう1点はF76IV層から出土したもので体部内面の施釉部分が剥離した小片である。

**転用覗 G. 転用覗**

内荒遺跡では第2節で述べるように85点の墨書き土器が出土しているが、円面覗・風字覗などの陶覗の出土ではなく、これら定形化した陶覗にかわるものとして転用覗が11点出土している。転用覗は「別の用途に供されるべき器物を覗として用いた」ものでA. 本来用途の異なる器物を焼成前に改作して覗としたものとB. 焼成後の廃棄品を覗として転用したものの2種類に大別できる（檜崎1982）。今回の調査ではこの両者が出土している。

**転用覗 A 1. 転用覗 A (805)**

1点ある。灰釉陶器の碗を模倣した須恵器碗であるが、腰部には縦に細長い長方形の透かし孔を4箇所にいたしたもの。この透かし孔は焼成前につけられており透脚円面覗を意識して改作したものと考えられる。覗面となる高台底部外面は平坦ではなく中央に向かってわずかに盛り上がり中央部は高台よりもやや高くなっている。高台は灰釉陶器碗1類に特徴的な角高台の形態の低いはりつけ高台で径8.3cm、高さは外縁0.6cm、内縁0.3cmを測る。軟質の焼きで器面があれていますため覗面の使用痕は観察できない。

**転用覗 B 2. 転用覗 B (806~815)**

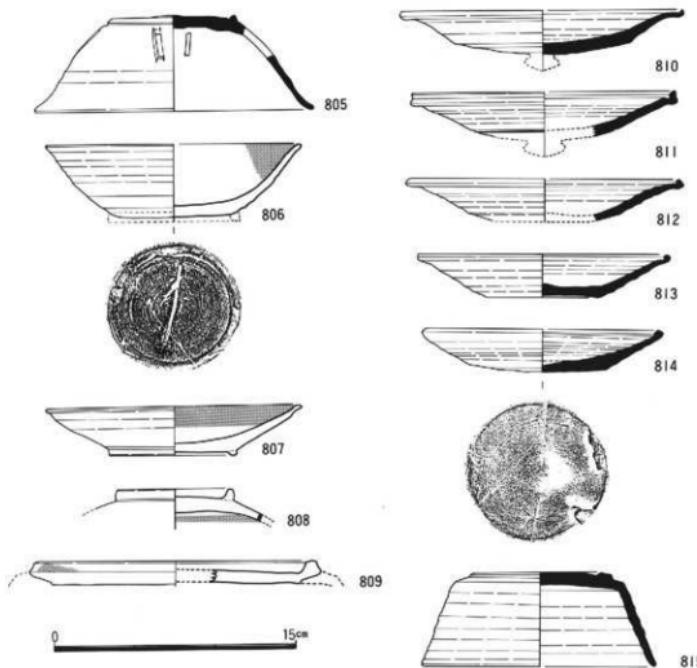
灰釉陶器と須恵器の2種類があり、器種としては灰釉陶器では碗・皿・平瓶、須恵器では壺蓋・有台壺が転用されている。

806は灰釉陶器碗1類で、底部内面を覗面として使用している。高台がとれており、碗として使われなくなったものを転用したと考えられるが、高台を欠いて座りの悪いことから他の壺・碗などと組合わせて使用したのであろう。内面は口縁付近に降灰状の釉がかかるほかは無釉で、底部から体部にかけて摩滅しておりこの部分にかすかに墨痕が認められる。

807は灰釉陶器皿1類で、口縁部を一部欠くがほぼ完形に近く接合復元でき、完形あるいは口縁が欠けて破損品となった状態で覗に転用したもの。底部の内外面を覗面として使用している。内面は806と同様に口縁付近に降灰状の釉がかかるほかは無釉で、底部はよく摩滅しこの部分にかすかに墨痕が認められる。底部外面は内面ほど顕著ではないが高台内側が摩滅しており、かすかだが黒墨および朱墨の墨痕が認められる。808は灰釉陶器皿3類の底部破片で、外面の高台内側を覗面に使用したもの。破損した体部の外周を部分的

に打ち欠いて座りを良くしている。底部の中央から高台の内縁にかけて墨痕が認められるが器面の摩滅は顕著ではない。809は灰陶器瓶類の高台底部で、高台径17.4cmを測る。底部内面の縁寄りに降灰釉がかかることから平瓶の底部と考えられる。底部外面を観面として使用しており器面は滑らかで墨痕が残る。高台部分だけがきれいにはずれたかたちとなっており、ちょうど無脚円面觀に近い形状を呈する。

810～814は坏蓋の内面を観面として使用した転用硯。810は宝珠鉢のつく坏蓋A、813・814は無鉢の坏蓋C、811・812は頂部を欠くため明確ではないが、811は坏蓋A、812は坏蓋Cあるいは環鉢の坏蓋Bである可能性が高い。これら坏蓋を転用硯として逆位で使用する場合、813・814の坏蓋Cは平坦な頂部が平底となるため単独での使用も可能であるが、810の坏蓋Aは宝珠鉢の有無にかかわらず頂部が甲高であるため座りが不安定であり、坏身と組合わせて使用した可能性が高い。810は器面の摩滅は顕著ではないが、墨痕が今回出土した転用硯のなかでは最も良く残っており、部分的には朱墨と思われる赤褐色の付着物も認められる。814は頂部が広くて非常に座りが良い。内面中央から体部の一部にかけてノタ目がすり減るほど平滑となっており、硯としてかなり使い込んだものであることが伺われる。墨痕は平滑な部分ではかすかに残るだけで、口縁部にかけての周縁部分に顕著に残っている。



第40図 土器実測図32（転用硯）

815は有台坏Bで、底部外面を覗面に使用したもの。底部中央を平坦にロクロケズリするのに対し、周縁部は高台を削り出すため斜めのロクロケズリを施しており、ちょうど覗面の「陸」と「海」に対応するかたちになっている。「陸」にあたる底部中央の平坦面が滑らかになっていて墨痕が認められる。

\*）横崎彰一1982：「日本古代の陶器－とくに分類について－」『考古学論考』平凡社

## 瓦

### H. 瓦

瓦はわずか5点が出土したのみである。すべて平瓦の破片であり、このうち4点を図示した。816と817、818と819は接合はできないがそれぞれ同一個体の破片である。

816・817は胎土は白色砂粒を含み、軟質の焼成で淡橙色を呈する。凸面には粗い斜格子のタキ目、凹面には布目が残るが、軟質で器面全体が摩耗しているため布目は判然とはしない。816は側面と端面がいきており、両面が鈍角に開いていることから狭縁端部の破片と考えられる。817も側面の一部がいきている。F79IV層出土。

818・819は硬質の焼成で淡灰色を呈する。818は端部破片で、凹凸両面はヘラケズリ調整、端面および側面は斜めに面取りしている。

図示しなかった1点はSD1301から出土したもので、胎土は砂粒を含み灰白色を呈する。

須恵質であるが焼きが悪いため器面は摩耗している。

## 土 錫

### I. 土錫

合わせて18点が出土している。出土層位はII層1点、III層6点、IV層11点で、IV層では遺構から出土したものも多い。胎土から土師質のものと須恵質のものに大別できるが、量的には土師質のものが15点で大半を占め、須恵質のものは3点のみである。

#### 土師質土錫 1. 土師質土錫 (820~834)

すべて両端ですぼまる円筒形のもの。器面には指頭痕をとどめ、両端も面取りをせずつくりはなしの粗製のものが大半である。主に重量によって4群に分類できる。

1 群 1群 重量が100gを越すもので、820の1点のみである。820は片側の端部を欠失しており残存重量は109.2gであるが、完形では150g前後になると思われる。

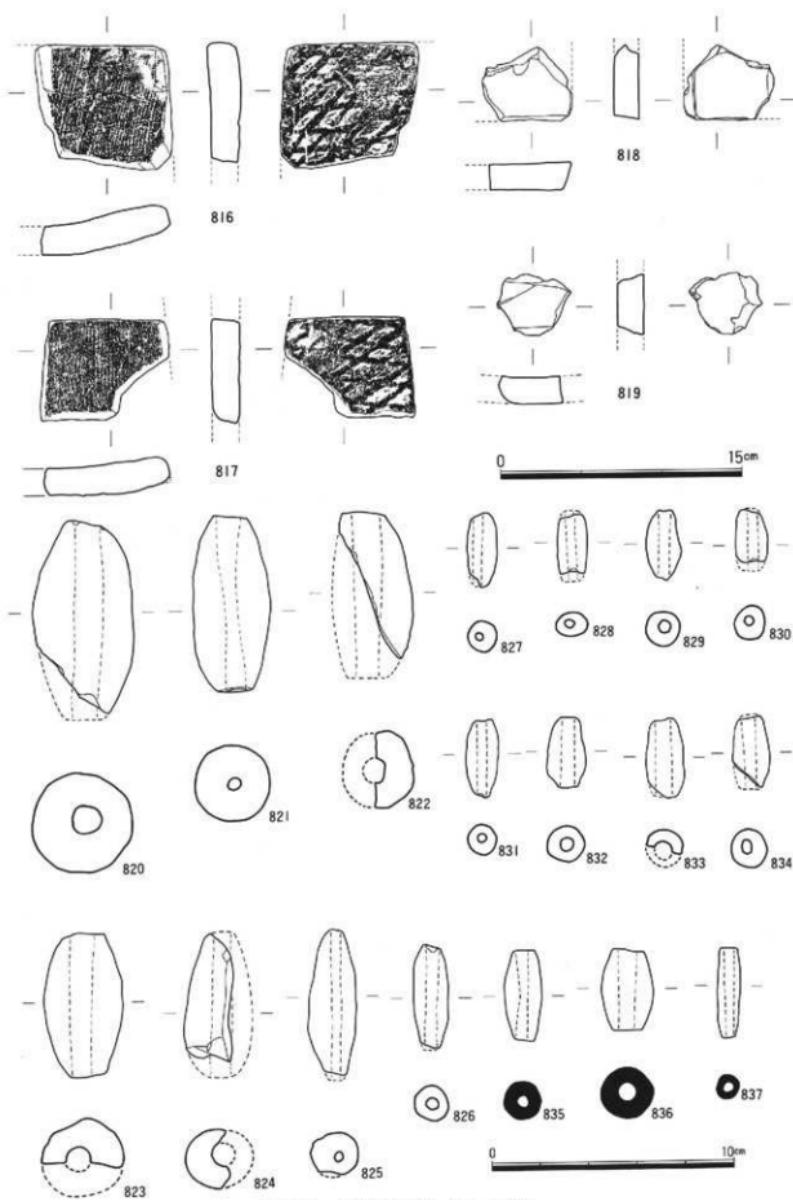
2 群 2群 重量が50~100gのもの。821~824の4点で、このうち完形品は821の1点のみで64.6gであるが、他の3点もほぼ同規模に復元できる。821はつくりの丁寧なもので器面はナデ調整され、端部も片側は面取りされる。形態はほぼ左右対称の紡錘形を呈する。

3 群 3群 825の1点である。825は一部を欠失し残存重量16.3gであるが、もとは20g前後であろう。他の土師質土錫に較べると細長い形態のもので、胎土も異なっており砂粒を含まない精製された土師器無台坏B類に近い。

4 群 4群 重量10g以下の小型のもので826~834の9点がある。4群はさらに5g以上の826と5g未満の827~834の2群に細分できる。826は完形品で7.1g。5g未満のものに較べると長身であり、その分重量がある。

#### 須恵質土錫 2. 須恵質土錫 (835~837)

3点とも形態・重量は異なるが、いずれも土師質土錫に較べるとつくりは丁寧で、器面をナデ調整し端部は面取りしている。835は紡錘形を呈する完形品で9.9g。836は835に較べて太身で棗玉状を呈する。14.8gの完形品。837は2.8gの完形品で、今回出土した土錫のなかで最も細身かつ軽量のものである。端部の面取りは片面のみ。焼成は軟質で灰白色を呈する。



第41図 土製品実測図（瓦・土錘）

第5表 土器一覽表1

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地點	備考
			口径	器高	底径		
第 6	内荒3-1	灰釉 碗	18.2	4.9	8.7	D79 SD1540 E78 IV層	内面トチ
	内荒16-1	灰釉 碗	18.0	5.1	9.7	D79 SD1523 C78 IV層 D78 IV層 D79 IV層	
	内荒16-3	灰釉 碗	17.8	5.7	9.0	D78 SD1514-15 D78-79 SD1510 F79 IV層 E79 IV層	
	内荒18-3	灰釉 碗	17.6	5.9	9.0	C79 SD1525-26 C79 IV層 C78 IV層 C77 IV層	内面トチ
	内荒14-1	灰釉 碗	17.3	5.1	8.5	C79 SD1527 C79 SD1526 D79 IV層 C78 IV層	ヘラ記号 内外面トチ
	内荒9-1	灰釉 碗	17.1	5.1	7.5	C79 SD1525 C79 IV層	ヘラ記号
	内荒105-1	灰釉 碗	17.0	5.2	8.8	D71 IV層 E71 IV層	
	内荒3-3	灰釉 碗	17.0	4.9	8.3	E77 III層 D77 III層 D77 IV層 表採	内面トチ
	内荒2-5	灰釉 碗	16.8	4.6	7.8	D79 SD1513 C79 SD1530 E79 E79 IV層 E80 IV層	
	内荒13-4	灰釉 碗	16.7	5.4	8.7	D79 SD1516 D79 SD1523 D80 IV層 D79 IV層	
図 10	内荒14-3	灰釉 碗	16.6	4.6	8.4	E78 SD1479 C77 IV層 D77 IV層	内面トチ
	内荒12-5	灰釉 碗	16.6	4.9	8.1	C79 SD1527 C78 IV層 C79 IV層	
	内荒10-2	灰釉 碗	16.5	4.5	8.5	C79 SD1527 C78 IV層	内面トチ
	内荒1-5	灰釉 碗	16.4	5.3	8.5	D78 SD1544 D78 SD1522 D80 IV層 D78 IV層	
	内荒13-1	灰釉 碗	16.2	4.6	8.1	E78 SD1488 D79 SH1501 D79 SD1512 F79 III層 E80 IV層 D79 IV層 E79 IV層	ヘラ記号
	内荒14-2	灰釉 碗	16.1	5.0	7.9	D79 SD1513 E78 IV層	
	内荒12-1	灰釉 碗	15.7	5.6	8.6	SD1420	内外面トチ
	内荒9-2	灰釉 碗	15.2	4.6	8.1	E79 III-IV層 E78 IV層 E79 IV層 E80 IV層	
	内荒12-4	灰釉 碗	14.4	4.9	7.5	D79 SP1502 D78 IV層 C79 IV層	内面トチ
	内荒13-2	灰釉 碗	14.1	4.3	7.4	D79 SWS IV層上	
図 22	内荒105-4	灰釉 碗	14.2			D79 IV層	
	内荒8-3	灰釉 碗	13.7	4.5	7.3	D79 SD1513 D80 E80 IV層	内面トチ ヘラ記号
	内荒2-1	灰釉 碗	14.2	4.2	7.1	D78-79 SD1510	外面トチ
	内荒1-3	灰釉 碗	13.7	4.0	6.3	D77 IV層	
	内荒9-3	灰釉 碗	13.1	4.4	7.6	E77 IV層 E76 III層	
	内荒104-4	灰釉 碗	13.4			C77 IV層	
	内荒2-2	灰釉 碗	13.0	4.3	6.3	D79 SD1503	
	内荒1-1	灰釉 碗	12.3	3.5	6.3	D79 SD1516 E79 IV層 E79 III層	
	内荒14-4	灰釉 碗	11.2	3.5	5.5	E79 SH1502 P1505 D79 IV層	
	内荒15-3	灰釉 碗	10.4	3.6	5.8	D81 IV層 E78 IV層	
	内荒105-6	灰釉 碗	10.5			表採	
	内荒6-3	灰釉 碗			7.8	E78 SD1484	
	内荒6-4	灰釉 碗			8.5	D79 IV層	
	内荒8-2	灰釉 碗			8.5	SD1510	
	内荒23-3	灰釉 碗			8.8	D79 SD1513 C79 SD1513 D79 IV層	
	内荒4-3	灰釉 碗			6.8	C76 IV層	
	内荒8-1	灰釉 碗			7.8	D78 IV層	内面トチ
	内荒6-2	灰釉 碗			8.5	F79 IV層	
	内荒20-2	灰釉 碗	19.3	5.9	7.5	SP1548 C79 SD1526 E78 SD1482 D79 SD1503 E78 SD1510 C79 SD1527 C77 IV層	ヘラ記号

第6表 土器一覧表2

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地點	備考	
			口径	器高	底径			
7	40	内荒7-1	灰釉 碗	17.1	4.6	7.0	C78 D78 IV層	ヘラ記号
	41	内荒16-4	灰釉 碗	15.0	5.0	7.6	C79 SD1524 C78 IV層 D78 IV層	
	42	内荒66-4	灰釉 碗	14.1	4.8	6.4	D79 SP1556 D80 SP1518 D80 IV層 D81 IV層	
	43	内荒156-8	灰釉 碗			8.0	F71 III層 G69 III層上	
	44	内荒66-3	灰釉 碗			8.0	E78 SD1510 C79 IV層 D81 IV層	
	45	内荒1-4	灰釉 碗	16.5	5.3	8.0	D77 SP1502 D78 SD1517 C79 SD1526 D80 IV層 C79 IV層	
	46	内荒3-2	灰釉 碗	16.8	5.2	7.4	D79 SD1503 D79 SD1511 D78 IV層 D79 IV層 E78 IV層 E79 IV層	
	47	内荒6-1	灰釉 碗			7.6	G78 III層	
8	48	内荒201-7	灰釉 碗	13.4		5.4	E76 III層 E78 IV層 F77 III層 F78 IV層	
	49	内荒20-1	灰釉 碗	15.0	4.1	6.8	C79 SD1527 G74 SD1403 C78 IV層 D77 IV層 D78 IV層	
	50	内荒104-1	灰釉 碗	14.8			C79 SD1525-26 D79 C79 IV層	
	51	内荒104-3	灰釉 碗	14.8			SD1530	
	52	内荒198-4	灰釉 碗			6.4	SD1601 西側試掘坑	
	53	内荒201-2	灰釉 碗			8.2	C79 IV層	
	54	内荒156-4	灰釉 碗			6.4	表採	
	55	内荒156-7	灰釉 碗			6.4	F71 IV層 E71 III層上	
	56	内荒104-5	灰釉 碗			15.2	D77 SD1492 F73 IV層	
	57	内荒105-2	灰釉 碗	18.8			473-474 南 III層	
	58	内荒201-1	灰釉 碗	16.4			北側排水溝 IV層	
	59	内荒104-9	灰釉 碗	16.6			北側排水溝 III層	
	61	内荒1-2	灰釉 碗	12.1	3.3	6.6	III層	
	62	内荒156-6	灰釉 碗			7.4	III層	
	63	内荒26-4	灰釉 碗			7.8	E77 III層 E77 IV層	
	64	内荒107-5	灰釉 碗			7.8	D70 III層	
	65	内荒107-4	灰釉 碗			7.0	D70 III層	
図	66	内荒25-5	灰釉 碗			7.2	D74 III層 D73 IV層	
	67	内荒25-3	灰釉 碗			8.8	G77 IV層	
	68	内荒26-3	灰釉 碗			7.4	D81 IV層	
	69	内荒198-5	灰釉 碗			7.6	C67 III層	
	70	内荒156-1	灰釉 碗			7.6	E68 III層下	
	71	内荒155-2	灰釉 碗			7.0	G76 IV層	
	72	内荒107-6	灰釉 碗			8.0	C70 IV層上	
	73	内荒36-2	灰釉 碗			8.6	F73 IV層	
	74	内荒26-2	灰釉 碗			8.4	E79 IV層	
	75	内荒198-3	灰釉 碗			7.2	C69 III層	
	76	内荒199-4	灰釉 碗			6.2	C69 IV層	
	77	内荒26-6	灰釉 碗			6.8	C78 SD1533	
	78	内荒25-1	灰釉 碗			6.8	C78 IV層	
	79	内荒23-1	灰釉 碗			6.1	E80 SD1505 E80 IV層	
	80	内荒26-1	灰釉 碗			6.6	北側排水溝 III層	

第7表 土器一覧表3

図 番号	実測図番号	器種	法量cm			出土地點	備考
			口径	器高	底径		
第 8	81	内荒24-2	灰釉 碗		5.9	E79 III・IV層	
	82	内荒24-4	灰釉 碗		7.2	D74 IV層 E76東トレンチ	
	83	内荒198-2	灰釉 碗		7.0	C69 III層	
	84	内荒199-2	灰釉 碗		5.8	C64 III層	
	85	内荒156-3	灰釉 碗		6.8	C69 IV層	
	86	内荒66-2	灰釉 碗		6.5	E80 IV層	
	87	内荒24-1	灰釉 碗		6.0	N474東側 III層	
	88	内荒24-6	灰釉 碗		7.4	G78 SD1410	
	89	内荒159-7	灰釉 碗		6.4	E69 III層下	
	90	内荒24-3	灰釉 碗		5.7	D75 IV層 C75北トレンチ	
第 9	91	内荒161-1	灰釉 碗		6.0	F72 III層	
	92	内荒163-1	山茶碗 小皿		5.0	D67 III層	
	93	内荒156-2	山茶碗 小皿		4.8	G69 IV層下	
	94	内荒198-1	山茶碗 小皿		4.0	C69 III層	
	95	内荒199-1	山茶碗 小皿		4.8	SD1601	
	96	内荒28-2	山茶碗 小皿	8.8	2.2	D70 IV層	
	97	内荒50-5	山茶碗 小皿	6.9	2.0	3.4 D81 III層	
	98	内荒10-4	灰釉 盆	16.0	3.3	7.8 D78 SD1514-15 D78-79 SD1515 D80-81 SD1520 D80 IV層 表採	
	99	内荒12-2	灰釉 盆	15.8	3.3	7.6 E73 IV層 C79 IV層 D78 IV層 SD1523	
	100	内荒104-6	灰釉 盆	16.4			
第 10	101	内荒4-2	灰釉 盆	15.2	2.8	7.4 D79 IV層	
	102	内荒2-6	灰釉 盆	15.2	3.1	7.5 C78 SD1528 C78 IV層	
	103	内荒8-5	灰釉 盆	16.2	3.0	8.7 D78 SD1540 C79 SD1527 C79 SD1525-26	
	104	内荒2-4	灰釉 盆	15.3	3.4	7.2 D79 SH1501 D79 IV層	
	105	内荒23-5	灰釉 盆	15.2		D79-80 SD1529 C79 IV層 E79 III・IV層	
	106	内荒104-7	灰釉 盆	16.0		C79 SD1525-26 C79 IV層	
	107	内荒104-8	灰釉 盆	15.6		D81 IV層	
	108	内荒12-3	灰釉 盆	14.4	2.6	7.2 C79 SD1525-26 C78 IV層 C79 IV層 D79 IV層 D79 IV層上	
	109	内荒200-4	灰釉 盆	14.4		D78 SD1540 E78 IV層 F78東トレンチ	外面トナン ヘラ記号
	110	内荒200-1	灰釉 盆	13.0		D81 IV層	
第 11	111	内荒9-4	灰釉 盆	14.2	2.2	7.7 D80 SD1517 D80 SEN IV層	内面トナン
	112	内荒7-2	灰釉 盆	14.5	2.5	7.4 E79 IV層	
	113	内荒200-2	灰釉 盆	14.2	2.0	6.4 D77 SD1491 D77 SD1498	
	114	内荒28-6	灰釉 盆	14.4		C80 D79 IV層	
	115	内荒10-1	灰釉 盆	14.0	2.4	7.7 E77 IV層 D78 IV層 C79 IV層	
	116	内荒10-3	灰釉 盆	15.2	2.7	7.4 E78 SD1515 C79 SD1525-26 C79 NEN IV層	
	117	内荒97-1	灰釉 盆	14.8		D78 SD1514-15	
	118	内荒4-6	灰釉 盆			7.8 D78 SD1540 D78 IV層	
	119	内荒8-4	灰釉 盆			7.9 E78 IV層 E77 IV層	
	120	内荒4-5	灰釉 盆			6.5 D80 IV層 表採	

第8表 土器一覧表4

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地點	備考	
			口径	器高	底径			
9 図	121	内荒17-1	灰釉	皿	16.2	2.7	6.9 D78 SD1540 D79 IV層 C79 IV層	重ね焼き (径6.8) ヘラ記号
	122	内荒21-1	灰釉	皿	15.2	3.3	6.4 D78-79 SD1515 D80 SD1518 D79 IV層 C78 IV層	ヘラ記号
	123	内荒23-2	灰釉	皿	16.6	2.8	7.0 C79 SD1525-26 D78 IV層	
	124	内荒49-2	灰釉	皿			6.6 F71 IV層	
	125	内荒5-3	灰釉	皿	14.2	2.7	6.4 C77 SD14123	
10 図	126	内荒22-1	灰釉	三足盤	18.6	3.2	D79 SD1515 D80 IV層	外面トテン
	127	内荒18-4	灰釉	三足盤	19.2	4.1	D78 IV層 E79 IV層 C78 IV層 D79 IV層	
	128	内荒17-4	灰釉	三足盤	19.6		C78 SD1528 SP1520 D79 IV層上 C77 IV層 C78 IV層 表採	
	129	内荒92-10	灰釉	三足盤	18.4		G75 III層	
	130	内荒90-1	灰釉	段皿	18.6		C79 SD1525-26	
	131	宮下13-3	灰釉	段皿	19.0	2.9	10.0 D80 IV層	
	132	内荒200-3	灰釉	段皿	19.4	4.3	9.2 C79 SD1525 C79 SD1525-26 D79 IV層 D79 IV層 上 C79 IV層 C-D79 IV層 C79 SD1527 D79 IV層	内面トテン
	133	内荒23-6	灰釉	段皿	18.0			
	134	内荒92-4	灰釉	脚部			9.6 G78 SD1410	
	135	内荒107-1	灰釉	三足盤			E74 トレンチ内	
	136	内荒92-5	灰釉	脚部	18.5		D78 IV層 E78 IV層	
	137	内荒92-8	灰釉	段皿	18.2		D80 SD1517 覆土下層	
	138	内荒15-2	灰釉	段皿	16.7	2.5	8.1 D78-79 SD1510 D79 SD1503 D79 IV層	
	139	内荒53-2	灰釉	段皿	18.3		C79 SD1525-26 C78 IV層 D79 IV層	
	140	内荒15-1	灰釉	段皿	14.6	2.3	6.8 D80-81 SD1520 C79 SD1525-26 C79 SD1525-26 C79 IV層	
11 図	141	内荒2-3	灰釉	段皿	13.6	1.9	7.5 E80 IV層	
	142	内荒92-1	灰釉	段皿			7.8 SD1601	
	143	宮下12-5	灰釉	段皿	14.3	2.7	6.6 D80 IV層	
	144	内荒4-4	灰釉	段皿			6.4 D78 IV層	ヘラ記号
	145	内荒25-2	灰釉	段皿			7.3 F75 III層	
	146	内荒53-1	灰釉	耳皿		3.1	5.0 SP1577 D79 SD1523	
12 図	147	内荒130-3	灰釉水注口				C79 IV層	
	148	内荒81-2	灰釉	手付瓶			12.7 C78 SD1528 E78 SD1522 C78 SD1534 C78 D80 SP1518 D78 IV層 D79 SWS IV層上 C78 IV層 D80 IV層	
	149	内荒38-2	灰釉	手付瓶	8.6		D80 D79 SD1503 D79 SD1513 SD1515 D78 IV層 D79 SWS IV層 E79 IV層 E80 IV層	
	150	内荒41-2	灰釉	手付瓶	4.1	11.2	5.8 D79 SD1529 D80 SD1519 D79 IV層 C78 IV層 灰化物を含むIV層	
	151	内荒35-6	灰釉	手付瓶			6.8 D72 IV層	
	152	内荒130-1	灰釉	平瓶			D78 SD1515 D78 IV層	
	153	内荒129-3	灰釉	平瓶			C76 IV層	
	154	内荒129-1	灰釉	平瓶			D79 SH1501 E78 SD1515 C78 IV層上 D78 IV層	
	155	内荒133-3	灰釉	平瓶			C76 IV層	
	156	内荒130-2	灰釉	平瓶			C77 IV層	
	157	内荒123-6	灰釉	平瓶			D70 IV層	
							G69 III層下	

第9表 土器一覧表5

図	番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
				口径	器高	鉢径 鉢高		
第12	158	内荒15-5	灰釉短頸壺蓋	14.3	5.4	2.4	D79 SD1513	
	159	内荒18-2	灰釉短頸壺蓋	14.5	4.1	1.4		
	160	内荒203-1	灰釉短頸壺蓋			2.6	D80	
	161	内荒79-5	灰釉短頸壺蓋	13.7		1.4	E69 III層下	
	162	内荒133-5	灰釉短頸壺蓋	12.0			SD1601	
	163	内荒133-4	灰釉短頸壺蓋				E71 III層	
	164	内荒17-2	灰釉短頸壺蓋	19.5			D79 SD1513 D79 SD1503 E73 IV層 E79 IV層	
	165	内荒80-6	灰釉 短頸壺	9.8			D78 IV層	
	166	内荒84-1	灰釉 短頸壺			14.2	C78 SD1525 D78-79 SD1510 D80 SD1529 C77 IV層 D78 IV層	
第13	167	内荒83-2	灰釉 長頸瓶		5.2	5.8	D79 SD1503 E78 SD1484 D77 D77 IV層	
	168	内荒135-4	灰釉 長頸瓶				C77 IV層	
	169	内荒37-1	灰釉 長頸瓶			4.8	G74 IV層 F75 IV層	ヘラ記号
	170	内荒36-4	灰釉 長頸瓶			5.1	F75 IV層 F76 IV層 F76東トレンチ	
	171	内荒34-6	灰釉 長頸瓶			5.0	G78 IV層	ヘラ記号
	172	内荒201-3	須恵 長頸瓶			5.6	排水構内 II層	ヘラ記号
	173	内荒21-3	灰釉 長頸瓶	7.0	21.7	8.2	D70 IV層上面	
	174	内荒116-3	灰釉 長頸瓶			8.3	C69 III層 D69 IV層 D70 IV層 D71 III層	
	175	内荒83-1	灰釉 長頸瓶			8.8	E73 IV層 D74 III層 D79 IV層 D73 IV層 D73北トレンチ	
第14	176	内荒87-1	灰釉 長頸瓶	12.0			E78 SD1487 C78 IV層	
	177	内荒99-1	灰釉 長頸瓶	11.5			F70 IV層 G69 III層下	
	178	内荒86-1	灰釉 長頸瓶	10.9			D73北トレンチ	
	179	内荒85-1	灰釉 長頸瓶	13.2			C79 IV層 E81 IV層	
	180	内荒85-2	灰釉 長頸瓶	10.2			C78 SD1529 D79 SD1523 D77 SD1492 D77 IV層	
	181	内荒99-2	灰釉 長頸瓶	7.3			E74 IV層 南側壁	
	182	内荒85-3	灰釉 長頸瓶	8.3			F71 IV層	
	183	内荒53-4	灰釉 長頸瓶	9.7			E79 III・IV層 E80 IV層	
	184	内荒116-5	灰釉 長頸瓶	11.2			D78-E78 SD1540 E78 SD1525 D77 IV層 D78 IV層	
第15	185	内荒116-6	灰釉 長頸瓶	8.0			E77 III層 E70 IV層	
	186	内荒80-4	灰釉 長頸瓶	9.2			F70 IV層 E71 III層下 E71 III層 G71 IV層	
	187	内荒80-1	灰釉 長頸瓶	8.9			E71 IV層	
	188	内荒79-4	灰釉 長頸瓶	10.8			SID14139	
	189	内荒79-8	灰釉 長頸瓶	10.4			G77 IV層	
	190	内荒86-2	灰釉 長頸瓶				D78-79 SD1510 D78 IV層	
	191	内荒53-3	灰釉 長頸瓶				C79 SD1525-26	
	192	内荒80-8	灰釉 長頸瓶				D73 III層	
	193	内荒146-6	灰釉 長頸瓶				F74 III層	

第10表 土器一覧表 6

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
			口径	器高	底径		
	194	内荒135-5	灰釉	長頸瓶		西側集水ますの水路	
	195	内荒135-1	灰釉	長頸瓶		SD1527 D78 SWS SD1522 D79 SD1516 D77 SD14100 E79 SH1502 C78 IV層 D79 IV層上 E78 IV層 G78 III層 D80 SD1517 稲土下	
	196	内荒134-1	灰釉	長頸瓶		E68 IV層	
	197	内荒135-2	灰釉	長頸瓶		SD1517 D80 IV層	
	198	内荒135-3	灰釉	長頸瓶		D79 SD1513 D80 IV層 D81 IV層 D79 IV層 D80 IV層	
	199	内荒134-2	灰釉	長頸瓶		D79 SD1513 P1505 C79 SD1526下	
	200	内荒35-3	灰釉	長頸瓶	9.3	E77 IV層 E77 III層	
	201	内荒34-1	灰釉	長頸瓶	12.6	排水溝	
	202	内荒35-5	灰釉	長頸瓶	12.6	D79 SD1513	
	203	内荒35-4	灰釉	長頸瓶	11.4	D78-79 SD1510 D78 IV層 D79 IV層	
第 204	内荒29-1	灰釉	長頸瓶		9.6	C79 IV層上	
	205	内荒34-2	灰釉	長頸瓶	8.3	III層	
14	206	内荒36-3	灰釉	長頸瓶	9.0	D73 IV層	
	207	内荒36-5	灰釉	長頸瓶	8.6	表探	
図 208	208	内荒158-2	灰釉	長頸瓶	8.8	C67 IV層	
	209	内荒34-5	灰釉	長頸瓶	8.8	E70 IV層	
210	内荒155-8	灰釉	長頸瓶		8.9	D69 IV層 F68 直層下 E69 III層下	
	211	内荒35-1	灰釉	長頸瓶	8.4	F74 III層	
212	内荒34-4	灰釉	長頸瓶		7.6	表探	
	213	内荒36-6	灰釉	長頸瓶	8.4	D72 IV層	
214	内荒36-1	灰釉	長頸瓶		7.9	D66 III層	
	215	内荒35-2	灰釉	長頸瓶	6.6	SD14137 G78 IV層	
216	内荒158-3	灰釉	長頸瓶		7.9	F69 IV層	
	217	内荒158-4	灰釉	長頸瓶	8.0	G78 SD1410	
218	内荒155-7	灰釉	長頸瓶		8.3	G69 III層下	
	219	内荒34-3	灰釉	長頸瓶	8.4	北側排水溝 III層	
220	内荒37-2	灰釉	長頸瓶		8.0	E69 IV層	
	221	内荒91-1	綠釉	碗	16.4	E77 SD1487 E77 IV層 E78 IV層	
222	内荒91-2	綠釉	碗		14.3	G74 III層	
	223	宮下11-1	綠釉	碗		C79 IV層	
224	内荒91-4	綠釉	碗			D69 IV層	
	225	内荒91-3	綠釉	碗			C79 IV層
226	内荒91-5	綠釉	碗			G74 IV層	
	227	内荒91-6	綠釉	稜碗		F71 IV層	
228	内荒91-9	綠釉	碗			北側排水溝	
	229	内荒91-8	綠釉	碗	6.4	F75 IV層	
230	内荒91-7	綠釉	碗		7.0	G69 III層下	
	231	宮下11-3	綠釉	碗	8.0	F77 III層	
第 17 図	口径 器高 最大径						
	232	内荒46-4	須恵	壺蓋	4.1	10.4 D73 IV層 F74 III層 D73 IV層 D75 III層	
	233	内荒150-1	須恵	壺身	9.8	11.0 473-474 北側排水溝内 IV層	

第11表 土器一覧表7

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
			口径	器高	最大径		
第 234	内荒48-2	須恵 坏蓋	6.6	2.7	9.3	C79 NWN SD1526 IV層	
17 235	内荒150-2	須恵 坏蓋			9.6	SD1510	
図 236	内荒202-2	須恵 坏蓋	8.0		10.0	G85-86 SD1601	
237	内荒150-3	須恵 坏蓋	7.3		9.4	E81 IV層	
図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
			口径	器高	最大径		
238	内荒11-5	須恵 坏蓋	17.0	3.1	1.8	E72 IV層	
	239 内荒147-7	須恵 坏蓋			0.9	F71 IV層	
					2.6		
					1.0		
240	内荒151-1	須恵 坏蓋	16.0			G69 III層下	
241	内荒139-5	須恵 坏蓋	15.0			F80 III-IV層	
242	内荒139-3	須恵 坏蓋	16.8			E68 III層下	
243	内荒140-5	須恵 坏蓋	16.0	4.0		D70 III層	
244	内荒139-4	須恵 坏蓋	24.4			D79 SD1513	
245	内荒151-2	須恵 坏蓋	18.4			E68 III層下	
246	内荒139-2	須恵 坏蓋	19.2			E69 SD1308 E69 IV層	
第 247	内荒151-3	須恵 坏蓋	17.3			E69 IV層	
248	内荒88-4	須恵 坏蓋	16.6			D78 SD1514 D77 IV層 E75 III層	
17 249	内荒47-2	須恵 坏蓋	16.0			D80 D80 SD1518 D79 IV層 D80 IV層	
250	内荒47-3	須恵 坏蓋	15.2			D80 SD1518 C79 IV層	
図 251	内荒44-3	須恵 坏蓋	14.6	2.6	2.2	F72 IV層	
					0.9		
	252 内荒52-1	須恵 坏蓋	14.5	4.0	2.7	F69 III層 D70 III層 D71 III層下 D71 IV層 D70	
					1.0	IV層	
253	内荒42-1	須恵 坏蓋	14.8	3.1	3.0	G69 III層下	
					0.6		
254	川合207	須恵 坏蓋	14.2	3.5	2.8	F40 IV層粘土	
					2.3		
255	内荒140-2	須恵 坏蓋	14.6			F72 III層	
256	内荒140-3	須恵 坏蓋	14.2			E71 IV層	
257	内荒11-2	須恵 坏蓋	14.2			G78 III層 G78 IV層 D77 SWS IV層上 表採	
258	内荒140-6	須恵 坏蓋	14.2			SD1317 E69 III層 E68 III層下 G69 III層下 北側排水溝	
259	内荒149-2	須恵 坏蓋	12.6			F79	
260	内荒139-6	須恵 坏蓋	12.4			北側排水溝 III層	
261	内荒160-6	須恵 坏蓋	11.1	1.8		西側排水溝	
262	内荒88-3	須恵 坏蓋	11.0	2.4		G77 IV層 G78 III層	
263	内荒40-4	須恵 坏蓋	11.5	2.8		F71 IV層	
264	内荒151-6	須恵 坏蓋	10.4			E79 IV層 F80 III-IV層	
第 265	内荒160-2	須恵 坏蓋			2.4	F69 III層	
	266 内荒160-4	須恵 坏蓋			1.5		
					3.0	F78 IV層	
					1.6		
18 267	内荒166-4	須恵 坏蓋			2.3	C70 IV層上	
					1.0		
268	内荒147-3	須恵 坏蓋			2.5	E69 III層下	
					1.0		
269	内荒147-4	須恵 坏蓋			2.6	D73 IV層	
					0.9		

第12表 土器一覽表 8

団	番号	実測団番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
				口径	器高	鉢径 鉢高		
第18団	270	内荒147-5	須恵 坏蓋			3.0	D70 SD1317	
	271	内荒146-1	須恵 坏蓋			0.9		
	272	内荒146-2	須恵 坏蓋			2.1	F70 IV層	
	273	内荒166-6	須恵 坏蓋			0.7		
	274	内荒147-6	須恵 坏蓋			2.6	G69 III層下	
	275	内荒147-2	須恵 坏蓋			0.9		
	276	内荒147-1	須恵 坏蓋			2.3	F69 II層	
	277	内荒147-8	須恵 坏蓋			0.8		
	278	内荒166-5	須恵 坏蓋			2.2	E68 IV層	
	279	内荒160-5	須恵 坏蓋			0.8		
第18団	280	内荒160-1	須恵 坏蓋			2.6	F80 IV層	
						2.4	G78 IV層	
						0.9		
						3.0	F70 IV層	
						0.4		
						2.8	G78 IV層	
						0.4		
						2.8	E73 IV層	
						0.5		
						2.8	E73 IV層	
第18団				口径	器高	環徑		
	281	内荒38-1	須恵 坏蓋	15.4	3.5	7.8	D79 SD1503 D78 IV層	
	282	内荒27-6	須恵 坏蓋	16.4	1.7	7.4	D78 IV層 E79 III・IV層	
	283	内荒47-4	須恵 坏蓋	16.5	3.0	7.1	E78 SD1515	
	284	内荒167-1	須恵 坏蓋			7.8	C78 IV層	
	285	内荒48-1	須恵 坏蓋	14.0	2.6	6.4	E79 SD1503	
	286	内荒39-4	須恵 坏蓋	13.5	2.5	6.0	D78-79 SD1510	
	287	内荒203-4	須恵 坏蓋			6.4	C77 IV層	
				口径	器高	頂徑		
	288	内荒64-2	須恵 坏蓋	17.6	3.2	5.8	C79 SD1513 D78-79 SD1515 D77 SD1495 D77 IV層 E77 IV層	
第18団	289	内荒27-4	須恵 坏蓋	16.0	3.0	6.2	D78 SD1514-15 D78-79 SD1510 D79 SD1513 D78 IV層	
	290	内荒146-4	須恵 坏蓋			6.6	C78 IV層	
	291	内荒11-4	須恵 坏蓋	16.0	2.8	5.9	E79 III・IV層 E79 IV層 E80 IV層	
	292	内荒28-5	須恵 坏蓋	16.2	1.9	6.4	D80 SD1517	
	293	内荒27-5	須恵 坏蓋	16.2	3.5	5.9	D79 SD1523 D79 C79 IV層	
	294	内荒11-1	須恵 坏蓋	13.0	2.4	5.9	D77 SD1407	
	295	内荒50-3	須恵 坏蓋	12.8	2.6	4.4	D79 SD1513 C79 SD1525-26 D79 IV層	
	296	内荒149-8	須恵 坏蓋	12.0	3.2	4.4	C78 IV層 C77 IV層	
	297	内荒149-4	須恵 坏蓋			4.6	D78 SD1523	
	298	内荒149-6	須恵 坏蓋			4.8	E80 IV層	
第303団	299	内荒178-1	須恵 坏蓋			6.3	D79 IV層	
	300	内荒203-5	須恵 坏蓋			6.0	E79 IV層 E78 IV層	
	301	内荒204-3	須恵 坏蓋			4.4	C79 IV層	
	302	内荒161-4	須恵 坏蓋	15.8			G77 IV層	
	303	内荒161-5	須恵 坏蓋	15.4			G69 III層下 F70 IV層	

第13表 土器一覧表 9

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
			口径	器高	底径		
304	内荒89-1	須恵 有台坏	16.6	5.0	11.6	SD1318	
305	内荒50-2	須恵 有台坏	14.0	3.5	10.2	D77 SD1498	
306	内荒65-6	須恵 有台坏	15.0	4.1	11.0	G69 III層	
307	内荒211-1	須恵 有台坏	15.2	4.4	11.6	F68 III層下	
308	内荒199-6	須恵 有台坏	15.0			E69 IV層上 北側排水溝	
309	内荒199-7	須恵 有台坏	13.8			F69 III層上 E69 IV層	
310	内荒205-1	須恵 有台坏	13.4	3.6	10.2	13区 IV層	
311	内荒28-1	須恵 有台坏	13.1	3.8	8.8	E69 IV層上	
312	内荒177-3	須恵 有台坏			11.0	E74 IV層 E73 IV層	
313	内荒174-5	須恵 有台坏			11.4	E69 SD1309 D70 III層	
314	内荒172-5	須恵 有台坏			10.4	F71 IV層	
315	内荒175-6	須恵 有台坏			10.9	F76 IV層	
316	内荒174-1	須恵 有台坏			10.2	C71 III層	
317	内荒177-7	須恵 有台坏			10.4	E74 SD1333	ヘラ記号
318	内荒177-9	須恵 有台坏			10.0	D78 IV層	
319	内荒173-3	須恵 有台坏			9.1	F71 IV層	
320	内荒176-2	須恵 有台坏			10.2	F79 IV層	
321	内荒172-9	須恵 有台坏			9.7	E69 IV層	
322	内荒28-4	須恵 有台坏	13.6	6.0	9.5	F70 IV層	
19	323	内荒205-2	須恵 有台坏	14.2		F71 SX1301 E72 III層 F71 IV層 D73 IV層	
324	内荒27-2	須恵 有台坏	11.6	4.3	8.4	E71 IV層	
325	内荒65-2	須恵 有台坏	10.8	4.1	8.0	E71 III層	
326	内荒65-5	須恵 有台坏	10.8	4.1	8.2	G69 III層	
327	内荒173-6	須恵 有台坏			7.8	III層	
328	内荒199-8	須恵 有台坏	9.6			F71 IV層	
329	内荒176-9	須恵 有台坏			10.6	D80 IV層	
330	内荒173-1	須恵 有台坏			13.0	F70 IV層	
331	内荒173-2	須恵 有台坏			12.2	E71 III層	
332	内荒175-7	須恵 有台坏			10.5	D73 III層 C75 IV層	
333	内荒172-3	須恵 有台坏			10.2	G69 III層	
334	内荒173-8	須恵 有台坏			10.0	III層	
335	内荒172-7	須恵 有台坏			9.6	北側排水溝	
336	内荒177-1	須恵 有台坏			10.0	SD14137	
337	内荒172-2	須恵 有台坏			8.8	E71 IV層	
338	内荒175-8	須恵 有台坏			8.6	F75 III層	
339	内荒205-3	須恵 有台坏			8.2	G69 II層下	
340	内荒175-9	須恵 有台坏			7.8	G75 IV層	
341	内荒181-9	須恵 有台坏			9.2	D78 SH1403	
342	内荒177-6	須恵 有台坏			8.4	E73 III層	
343	内荒173-4	須恵 有台坏			8.8	F70 IV層	ヘラ記号
344	内荒176-3	須恵 有台坏			6.0	F72 IV層	ヘラ記号
345	内荒173-5	須恵 有台坏			8.2	D70 II層	ヘラ記号

第14表 土器一覧表10

団	番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地點	備考
				口径	器高	底径		
第	346	内荒43-1	須恵 有台坏	11.7	3.8	9.8	F73 IV層	
	347	内荒172-1	須恵 有台坏		8.4	F70 IV層 G69 III層下		
	348	内荒46-2	須恵 有台坏		8.6	6.0	D78 NWN IV層	
	349	内荒138-1	須恵 有台坏			8.3	F76 IV層	
20	350	内荒177-4	須恵 有台坏			7.9	E77 IV層 E78 IV層	
	351	内荒177-5	須恵 有台坏			6.6	D72 III層	
	352	内荒114-2	須恵 有台坏			7.2	B58 IV層	
	353	内荒150-9	須恵 有台坏			6.6	D78 IV層 C78 IV層	
団	354	内荒150-11	須恵 有台坏			4.8	F71 III層	
					口径	器高	高台径	
	355	内荒30-3	須恵 有台坏		15.0	6.0	8.6	D79 IV層
	356	内荒30-4	須恵 有台坏		15.0	6.1	8.7	E79 SH1502 D80 IV層 IV層 SP1548
第	357	内荒137-6	須恵 有台坏		15.0		D77 SD14100 C78 SD1528 D76 IV層 D77 IV層	
	358	内荒164-8	須恵 有台坏			8.0	C79 NEN SD1525・26	
	359	内荒137-1	須恵 有台坏		14.3	6.5	8.0	SD1514
	360	内荒150-12	須恵 有台坏			8.0	D79 SD1413 SD1527	ヘラ記号
21	361	内荒39-5	須恵 有台坏		13.7	4.4	6.5	D79 IV層
	362	内荒138-10	須恵 有台坏			6.6	D78-79 SD1510	
	363	内荒150-6	須恵 有台坏		12.0	4.2	7.5	SP1505 SP1535
	364	内荒137-8	須恵 有台坏		11.8		E79 IV層	
第	365	内荒150-10	須恵 有台坏		12.2		C77 IV層	
	366	内荒27-1	須恵 有台坏		12.0	3.9	6.5	D78-79 SD1510 E79 IV層 排水溝
	367	内荒138-4	須恵 有台坏		11.6	3.8	6.5	D78-79 SD1510 C78
	368	内荒42-2	須恵 有台坏		11.0	4.2	5.1	D78 SD1515 E79 SH1502 E79-D80 SD1503 D79 IV層 C79 IV層
団	369	内荒138-8	須恵 有台坏			7.0	D78 IV層	
	370	内荒137-7	須恵 有台坏		10.8		C78 IV層	
	371	内荒30-1	須恵 有台坏		10.4	3.9	5.8	C79 SD1525-26 D80 SD1517 C78 IV層上 C79 IV層
	372	内荒163-5	須恵 有台坏			9.0	C77 IV層	
373	内荒164-2	須恵 有台坏				8.6	C77 IV層	
	374	内荒164-1	須恵 有台坏		8.0			
	375	内荒163-8	須恵 有台坏		8.2	E75 SD1430		
	376	内荒163-6	須恵 有台坏		8.2	E73 III層		
377	内荒163-7	須恵 有台坏				7.4	D78-79 SD1510 C76 IV層	
	378	内荒138-2	須恵 有台坏		6.0	E77 III層		
	379	内荒176-4	須恵 有台坏		7.0	C77 IV層		
	380	内荒164-4	須恵 有台坏		7.2	C79 IV層		
381	内荒204-5	須恵 有台坏				7.0	SD1601	
	382	内荒138-5	須恵 有台坏		5.6	D75 IV層		
	383	内荒138-6	須恵 有台坏		5.6	C78 IV層	ヘラ記号	

第15表 土器一覧表11

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
			口径	器高	高台径		
21 図	384	内窓138-7	須恵 有台坏		5.2	E77 SD1490 E77 IV層	
	385	内窓138-9	須恵 有台坏		4.8	G78 III層 F79 III層	
	386	内窓163-3	須恵 有台坏		6.0	SD14137	
	387	内窓150-5	須恵 有台坏		5.2	F71 IV層	
	388	内窓161-3	須恵 有台坏		7.0	D78 IV層	ヘラ記号
23 図			口径	器高	底径		
	389	内窓46-6	須恵 無台坏	13.4	5.1	4.9 G78 SD1410 G77 IV層 表採	
	390	内窓205-4	須恵 無台坏	12.5	2.6	8.2 F71 IV層	
	391	内窓181-10	須恵 無台坏			11.2 G69 III層上 F70 IV層	
	392	内窓181-4	須恵 無台坏			10.0 F72 III層 E71 III層 D71 IV層	
	393	内窓204-1	須恵 無台坏			6.0 F71 SX1301	
	394	内窓32-4	須恵 無台坏	16.0	8.0	F71 IV層	
	395	内窓164-7	須恵 無台坏	15.0		表採	
	396	内窓43-3	須恵 無台坏	13.8	4.4	6.4 D72 IV層	
	397	内窓33-1	須恵 無台坏	13.3	4.2	6.8 D73 IV層 E72 IV	
	398	内窓146-3	須恵 無台坏			5.4 D79 SD1523 D80 SD1517 C80 III層 D80 IV層	
	399	内窓199-3	須恵 無台坏	14.4		E78 IV層	
	400	内窓205-5	須恵 無台坏	14.2		E71 III層	
	401	内窓174-8	須恵 無台坏			7.4 E71 IV層	
	402	内窓175-3	須恵 無台坏			6.8 F68 SD1304	
	403	内窓65-3	須恵 無台坏	9.7	3.5	7.4 F71 IV層	
	404	内窓159-1	須恵 無台坏	11.7		G78 SD1416	
	405	内窓88-1	須恵 無台坏	10.0	4.1	5.5 E78 III層 E71 IV層	
	406	内窓32-3	須恵 無台坏	10.6	3.8	5.7 C79 SD1525-26 C78 IV層 C79 IV層	
	408	内窓32-1	須恵 無台坏	12.2	4.1	6.8 D79 SD1523	
	409	内窓175-2	須恵 無台坏	12.0	3.9	7.0 北側排水溝	
	410	内窓45-6	須恵 無台坏	12.0	3.9	5.8 C79 SD1525 下層	
	411	内窓202-4	須恵 無台坏	11.8	4.9	5.4 D79-E79 SD1503	
	412	内窓28-3	須恵 無台坏			6.2 E69 SD1301	
	413	内窓43-2	須恵 無台坏	13.0	4.1	6.0 C76 IV層	
	414	内窓45-4	須恵 無台坏	12.0	3.6	5.6 C78 SD1528	
	415	内窓50-1	須恵 無台坏	12.0	4.0	5.0 E78 IV層	
	416	内窓45-5	須恵 無台坏	12.0	3.6	5.4 C79 NWN SD1530	
	417	内窓49-4	須恵 無台坏	11.6	3.7	5.8 D79 SD1503-11	
	418	内窓50-4	須恵 無台坏	13.8	5.3	6.0 IV層	
	419	内窓27-3	須恵 無台坏	12.8	4.6	5.4 E78 SD1515 E79 III・IV層	
	420	内窓45-1	須恵 無台坏	11.8	4.4	6.0 C79 IV層	
	421	内窓40-1	須恵 無台坏	11.8	4.8	5.4 C79 NEN SD1526	
	422	内窓40-2	須恵 無台坏	11.6	4.4	6.0 C79 NEN SD1526	
24 図	423	内窓32-2	須恵 無台坏	11.7	3.9	5.7 D78-79 SD1510	
	424	内窓47-6	須恵 無台坏	11.2	4.3	5.9 E79 SD1503	
	425	内窓43-5	須恵 無台坏	11.1	4.3	5.8 C77 SD14111	

第16表 土器一覧表12

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地點	備考
			口径	器高	底径		
426	内荒40-3	須恵 無台坏	11.6	4.4	5.2	D78-79 SD1510	
427	内荒43-6	須恵 無台坏	11.5	4.1	6.6	D78 SWS SD1522	
428	内荒45-2	須恵 無台坏	11.3	3.9	4.5	C78 SD1529 D78 SWS SD1522	
429	内荒49-1	須恵 無台坏	11.4	3.7	5.3	C79 SP1548	
430	内荒49-5	須恵 無台坏	11.2	3.8	5.0	E78 SD1484	
431	内荒49-3	須恵 無台坏	11.3	4.0	4.8	C79 SD1527 下層	
432	内荒45-3	須恵 無台坏	11.2	4.2	4.2	D80-81 P1520	
433	内荒43-4	須恵 無台坏	11.4	3.6	6.0	C77	
434	内荒159-3	須恵 無台坏			5.4	E79 III・IV層	
435	内荒206-2	須恵 無台坏			5.1	E71 III層 F73 IV層	
436	内荒179-3	須恵 無台坏			4.8	C79 SD1525-26	
437	内荒178-3	須恵 無台坏			5.4	E79 SD1503	
438	内荒178-4	須恵 無台坏			5.4	C77 IV層	
439	内荒180-4	須恵 無台坏			5.3	D78	
440	内荒179-4	須恵 無台坏			5.6	C77 IV層	
第 441	内荒180-5	須恵 無台坏			5.2	SD14123	
442	内荒178-7	須恵 無台坏			5.2	SP1534	
24	443 内荒178-6	須恵 無台坏			5.0	SD1525 下層	
444	内荒179-2	須恵 無台坏			5.4	C79 SD1525-26	
园 445	内荒179-1	須恵 無台坏			6.2	D78 SD1514	
446	内荒50-6	須恵 無台坏			5.4	D80 SD1517	
447	内荒180-2	須恵 無台坏			5.6	E79 III・IV層	
448	内荒178-8	須恵 無台坏			4.0	D78 IV層	
449	内荒178-5	須恵 無台坏			5.8	E79 III・IV層	
450	内荒178-2	須恵 無台坏			5.7	E78 IV層	
451	内荒180-3	須恵 無台坏			5.4	E79 IV層	
452	内荒181-7	須恵 無台坏			6.0	C79 IV層	
453	内荒180-7	須恵 無台坏			5.4	C79 SD1525-26 D80 IV層 C78 IV層	
454	内荒180-9	須恵 無台坏			5.1	E78 IV層	
455	内荒179-9	須恵 無台坏			5.9	不明	
456	内荒179-6	須恵 無台坏			5.4	E78 SD1510	
457	内荒179-8	須恵 無台坏			5.4	C79 SP1579	
458	内荒206-1	須恵 無台坏			5.2	SD1527 下層	
459	内荒99-3	須恵 高坏				E71 IV層	
460	内荒107-1	須恵 高坏				D71 III下層	
461	内荒149-9	須恵 高坏				表探	
462	内荒154-4	須恵 鉢	19.0			F75 III層 G74 IV層	
第 25	463 内荒31-1	須恵 瓶	16.8	5.9	8.9	D78 SD1503 D80-81 SD1520 D81 IV層 D79 IV層	
464	内荒31-3	須恵 瓶	16.5	6.4	8.8	C79 SD1525-26 D79 SD1512 D79 SD1513 E78 SD1515 D78 SD1534 C78 IV層 C79 IV層 D78 IV層 D79 IV層	
园 465	内荒31-2	須恵 瓶	16.4	6.7	8.5	D78 IV層 D78-79 IV層 IV層上面	

第17表 土器一覧表13

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
			口径	器高	底径		
466	内荒44-1	須恵 碗	16.0	5.6	8.0	D79 SP1579 C79 IV層 D79 IV層	
467	内荒88-2	須恵 碗	15.2	5.7	7.1	C80 SD1531 D79 SD1523 D79 SH1501 D79- D80 SD1529 SP1526 C78 IV層 C79 IV層 D79 IV層 D80 IV層 F77 III層	
468	内荒154-2	須恵 碗	14.2			SD1526 C79 IV層	
469	内荒39-6	須恵 碗	13.1	5.2	7.3	C79 SD1525-26 C79 SD1527 C79 NWN NWS SD1525	
470	内荒46-5	須恵 碗	11.5	4.9	5.7	D79 SD1413 C79 NWN IV層 SD1526 B76 IV層 C75 IV層 D72 III層 D79 IV層	
471	内荒154-6	須恵 碗	13.4			C79 NEN SD1525-26 C78 IV層	
472	内荒154-3	須恵 碗	13.5			C78 IV層	
473	内荒157-8	須恵 碗			7.4	D78-79 SD1510	
474	内荒157-5	須恵 碗			8.4	C79 IV層	
475	内荒157-9	須恵 碗			8.6	G78 SD1410	
476	内荒155-6	須恵 碗			8.0	D80 IV層	
477	内荒157-7	須恵 碗			8.0	D78 IV層	
25	478	内荒157-6	須恵 碗		6.8	E78 IV層	
479	内荒157-4	須恵 碗			6.4	E79 SD1503	
480	内荒157-1	須恵 碗			6.4	D79 SD1503	△ラ記号
481	内荒157-2	須恵 碗			6.2	E79 III-IV層	△ラ記号
482	内荒44-5	須恵 皿	15.6	3.3	7.0	C79 IV層 D79 IV層	
483	内荒46-1	須恵 皿	14.6	3.0	6.4	C79 SD1525-26 D78 SD1514-15 C79 SD1530 C79 NWN SD1526 IV層 E79 III-IV層	
484	内荒47-1	須恵 皿	14.5	3.3	6.7	D79 SD1513 C79 SD1525-26 C79 SD1530 C79 IV 層	
485	内荒44-4	須恵 皿	14.4	3.3	6.8	C79 NEN SD1525 C79 SD1525-26	
486	内荒46-3	須恵 皿	14.4	3.0	5.7	D80 IV層	
487	内荒195-1	須恵 皿	14.0			E78 IV層	
488	内荒195-2	須恵 皿	14.4			F78 IV層 F79 III層	
489	内荒202-5	須恵 皿	13.8	2.9	7.2	C79 SD1524 E79 III-IV層	
490	内荒47-5	須恵 皿	14.0	2.4	7.1	III層	
491	内荒148-1	須恵 無台皿	18.6	3.2	6.0	C78 IV層	
	492	内荒145	須恵 鉢	11.2		4.0 E71 IV層 F72 IV層 E71 III層	
	493	内荒99-4	須恵 鉢			F71 SP1303	
	494	内荒149-11	須恵 鉢			E79 SD1308	
	495	内荒167-4	須恵 鉢			F71 IV層	
第	496	内荒167-2	須恵 鉢			F79 G79 北側へ抜張し左部分の上	
	497	内荒29-2	須恵 鉢		5.4	D73 IV層 D72 IV層	
26	498	内荒167-3	須恵 鉢			D70 IV層 C71 III層 西側排水溝	
	499	内荒29-3	須恵 平瓶		3.6	G75 IV層 F75 北トレンド	
固	500	内荒133-6	須恵 短頸壺	8.8		D72 IV層 G74 III層	
	501	内荒124-3	須恵 短頸壺	9.6		E73 III層 F73 IV層	
	502	内荒123-5	須恵 短頸壺	10.4		E82 IV層	
	503	内荒166-7	須恵 短頸壺			E71 IV層	
	504	内荒202-6	須恵 短頸壺		9.8	表採	

第18表 土器一覧表14

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地點	備考	
			口径	器高	底径			
第 26 図	505	内荒134-5	須恵	短頸壺		5.6	F71 IV層	
	506	内荒155-4	須恵	短頸壺		8.8	D78 SD1514-15	
	507	内荒134-3	須恵	瓶子		6.0	E79 IV層	
	508	内荒134-4	須恵	瓶子		6.0	D73 IV層 D74 III層 D73北トレンチ	
	509	内荒51-1	須恵	小型 広口壺	8.0	5.5	C79 NEN SD1525 C79 IV層 D79 IV層	
	510	内荒123-1	須恵	小型 広口壺	8.0		C79 IV層	
	511	内荒107-2	須恵	小型 広口壺	6.6		北側排水溝	
	512	内荒85-4	須恵	長頸壺	11.6		D73 IV層	
	513	内荒136-3	須恵	長頸壺			F73 IV層 E73 IV層	
	514	内荒136-1	須恵	長頸壺			C70 IV層上	
第 27 図	515	内荒81-1	須恵	長頸壺		7.7	C78 SD1528 C78 D78 IV層 D80 IV層	
	516	内荒158-1	須恵	長頸壺		8.5	G78 SD1410	
	517	内荒93-1	須恵	甕	42.0		D80 SD1518 C77 SD14109 D80-81 SD1520 E78 SD1515 C79 NEN SD1525-26 D80-81 SD1520 SD1524 D78 SD1515 D80 SEN SD1517 C78 SD1533 C79 SD1527 C79 SD1530 D78 SD1540 E80 IV層 D80 IV層 D81 IV層 C78 IV層 F79 IV 層 D79 IV層 E78 IV層 C78 III層 C79 IV層 E79 IV層	
	518	内荒171	須恵	甕	34.6		C78 SD1534 SD1527 C78 SD1528 D80-81 SD1520 F78 IV層 D80 IV層 E80 IV層 C78 IV層 C79 IV層 C78 IV層 表採	
	519	内荒94-1	須恵	甕	42.2	22.0	C79 SD1526 D80 SD1517 SD1540 C77 SD14109 D79 SD1503 SD1518 D80-81 SD1520 SD1527 SD1523 SD1525-26 C77 IV層 C79 NES IV層上 D79 IV層 E80 IV層 F81 IV層 C78 IV層 D79 IV 層 D80 IV層 C79 IV層 SD1525 水邊部 D81 IV層 F79 III層	
	520	内荒128-1	須恵	甕	47.0		D79 SD1503 E80 V層 D80 SD1517 覆土下層	
	521	内荒127-1	須恵	甕	43.0		C78 IV層	
	522	内荒128-2	須恵	甕	39.2		E69 IV層 C67 III層 F68 III層下 E68 III層下 D69 IV層 E69 III層 E69 III層下 F69 III層 E71 IV層 E68 III層 E68 IV層 表採	
	523	内荒197	須恵	甕	31.8		D78 IV層 C77 IV層 D77 IV層	
	524	内荒127-2	須恵	甕	33.6		D80 SD1518 D77 SD1498 C78 IV層 E78 IV層 試掘坑表採 南壁	
第 28 図	525	内荒127-3	須恵	甕	27.0		F77 III層 E78 IV層	
	526	内荒126-2	須恵	甕	27.2		D73 III層 D73 IV層 D74 III層	
	527	内荒126-1	須恵	甕	26.8		E73 IV層	
	528	内荒126-3	須恵	甕	23.0		SD1510	
	529	内荒128-3	須恵	甕	24.4		C78 SD1528 C78 IV層 E79 IV層 D78 IV層	
	530	内荒125-1	須恵	甕	21.8		G77 IV層	
	531	内荒80-7	須恵	甕	17.0		G77 IV層	
	532	内荒124-1	須恵	甕				
	533	内荒125-3	須恵	甕		16.0	D73 III層	
	534	内荒125-2	須恵	甕		16.0	F79 IV層	

第19表 土器一覽表15

団	番号	実測団番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
				口径	器高	底径		
	535	内荒54-6	土師 無台坏	14.3	4.9	9.0	F69 IV層	
	536	内荒54-5	土師 無台坏	11.3	3.4	6.5	不明	
	537	内荒61-2	土師 無台坏	11.4	3.8	7.0	C79 NEN SD1525	
	538	内荒209-1	土師 無台坏	13.0	4.0	5.6	E71 IV層	
	539	内荒207-1	土師 無台坏	21.6	6.5	9.2	C79 IV層	
	540	内荒73-4	土師 無台坏	12.0	4.2	5.6	D79 SD1513	
	541	内荒72-6	土師 無台坏	10.8	4.6	5.0	D78 SWS IV層	
	542	内荒75-6	土師 無台坏	11.2	4.6	5.6	G78 SD1416	
	543	内荒166-2	土師 無台坏	11.6	4.3	4.8	C79 IV層上	
第	544	内荒166-1	土師 無台坏	11.0	4.2	4.2	D78 IV層	
	545	内荒210-6	土師 無台坏			4.6	D79	
30	546	内荒210-5	土師 無台坏			6.3	D79 IV層	
	547	内荒210-8	土師 無台坏			6.2	C76 SD14115	
団	548	内荒62-1	土師 無台坏	14.8	5.6	8.4	D78-79 SD1515	
	549	内荒55-5	土師 無台坏	12.2	4.2	6.4	E78 SD1510	
	550	内荒166-3	土師 無台坏	13.0	4.2	7.7	D79 SD1503	
	551	内荒207-4	土師 無台坏	12.6			C78 SD1533 C78 IV層	
	552	内荒210-9	土師 無台坏	13.2			E78 SD1510	
	553	内荒63-2	土師 無台坏	12.6	5.3	7.3	C79 SD1525-26	
	554	内荒63-3	土師 無台坏	13.0	5.3	6.7	C79 SD1525	
	555	内荒54-2	土師 無台坏	13.4	4.7	7.0	C78 SP1530	
	556	内荒57-4	土師 無台坏	11.6	4.6	7.4	E78 SD1510	
	557	内荒165-6	土師 無台坏	11.7	4.8	6.2	SD1513	
558	内荒208-3	土師 無台坏				6.5	D77 SWS IV層	
	559	内荒58-4	土師 無台坏			8.0	D70 IV層	
第	560	内荒58-2	土師 無台坏	12.7	3.5	8.6	F71 IV層	
	561	内荒165-2	土師 無台坏	12.6	4.1	6.8	C78 SD1533	
	562	内荒61-3	土師 無台坏	12.4	3.7	6.2	D80-81 SD1520	
	563	内荒152-4	土師 無台坏	12.2	3.6	7.4	E72 IV層	
	564	内荒152-3	土師 無台坏	12.2	3.8	7.2	SD1517	
	565	内荒144-6	土師 無台坏	12.2	3.7	7.0	SP1509	
	566	内荒152-6	土師 無台坏	12.2	3.7	6.8	D79 SD1413	
	567	内荒152-2	土師 無台坏	12.1	3.6	6.8	D77 IV層	
	568	内荒165-4	土師 無台坏	12.0	3.8	6.4	SD1510	
	569	内荒60-5	土師 無台坏	12.0	4.4	6.9	D76 IV層	
31	570	内荒153-1	土師 無台坏	12.0	5.8	4.1	SD1525 水溜部	
	571	内荒72-4	土師 無台坏	11.9	3.9	6.3	C79 SD1525	
	572	内荒165-5	土師 無台坏	11.9	3.7	6.8	C79 SD1526	
	573	内荒72-5	土師 無台坏	11.8	4.1	6.9	D80-81 SD1520 下層	
	574	内荒207-2	土師 無台坏	11.8	3.6	6.8	G78 SD1410	
	575	内荒62-5	土師 無台坏	11.9	4.4	6.5	C79 NEN SD1526 C79 SD1525-26	

第20表 土器一覽表16

図	番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
				口径	器高	底径		
	576	内荒76-4	土師 無台坏	11.8	4.3	6.7	D79 SD1503	
	577	内荒165-1	土師 無台坏	11.8	3.8	6.7	C79 IV層上	
	578	内荒63-1	土師 無台坏	11.8	3.9	6.5	C79 SD1525・26 C79 SD1527	
	579	内荒76-8	土師 無台坏	11.8	3.6	6.2	D79 SD1515	
	580	内荒71-2	土師 無台坏	11.8	4.8	6.0	D79 SD1529	
	581	内荒60-6	土師 無台坏	11.8	3.7	5.8	E78 SD1503	
	582	内荒153-3	土師 無台坏	11.6	3.5	7.0	SD1527	
第	583	内荒55-2	土師 無台坏	11.6	3.8	6.8	F71 III層 E71 III層 北側排水溝	
	584	内荒144-5	土師 無台坏	11.6	4.1	6.8	E78 SD1487	
31	585	内荒55-4	土師 無台坏	11.6	4.1	6.8	D78-79 SD1510	
	586	内荒76-5	土師 無台坏	11.6	4.0	6.6	C79 SD1525・26	
回	587	内荒70-3	土師 無台坏	11.6	4.0	6.4	D78 IV層	
	588	内荒71-6	土師 無台坏	11.6	4.2	6.3	D80 SD1518	
	589	内荒59-3	土師 無台坏	11.6	3.8	6.0	D79 SD1513	
	590	内荒58-3	土師 無台坏	11.5	4.1	7.4	西側排水溝	
	591	内荒153-6	土師 無台坏	11.4	3.5	7.0	C78 SD1528	
	592	内荒152-1	土師 無台坏	11.4	3.7	6.8	SD1525	
	593	内荒60-2	土師 無台坏	11.4	4.0	6.8	D78-79 SD1515	
	594	内荒55-3	土師 無台坏	11.4	3.8	6.7	D78 SWS SD1522	
	595	内荒74-2	土師 無台坏	11.4	3.6	6.6	D79	
	596	内荒71-3	土師 無台坏	11.4	3.6	6.6	D80 SEN SD1517	
	597	内荒74-1	土師 無台坏	11.4	3.5	6.6	C78-79 SD1510	
	598	内荒144-1	土師 無台坏	11.4	4.0	6.2	SD1531	
	599	内荒73-1	土師 無台坏	11.4	3.9	6.4	D78 SWS SD1522	
	600	内荒76-1	土師 無台坏	11.4	4.0	6.4	D78-79 SD1510	
	601	内荒72-3	土師 無台坏	11.2	3.6	7.4	F79 III層 F79 IV層	
	602	内荒152-5	土師 無台坏	11.2	3.4	7.4	D78 IV層	
	603	内荒207-3	土師 無台坏	11.1	3.3	7.6	不明	
第	604	内荒70-1	土師 無台坏	11.0	3.6	6.7	C78 SH1504 柱穴4	
	605	内荒206-5	土師 無台坏	11.2	3.4	7.6	G78 SD1410	
32	606	内荒153-2	土師 無台坏	11.2	3.8	6.8	C78 SD1529	
	607	内荒74-5	土師 無台坏	11.2	3.8	6.5	C78 SD1518	
回	608	内荒70-6	土師 無台坏	11.2	4.1	6.6	F80 IV層 D78 SES IV層上	
	609	内荒144-2	土師 無台坏	11.2	4.0	6.5	C77 SD15109	
	610	内荒60-1	土師 無台坏	11.2	3.5	6.4	C79 SP1555	
	611	内荒70-2	土師 無台坏	11.2	3.8	6.2	D79 D78 IV層	
	612	内荒62-2	土師 無台坏	11.2	4.0	6.0	C79 SD1525・26	
	613	内荒70-4	土師 無台坏	11.2	4.2	6.0	C78 SD1528	
	614	内荒71-1	土師 無台坏	11.2	4.3	6.0	D78	
	615	内荒73-2	土師 無台坏	11.2	4.2	6.0	C78 SD1528	
	616	内荒70-5	土師 無台坏	11.1	4.2	6.2	C79 IV層	

第21表 土器一覧表17

図	番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地點	備考
				口径	器高	底径		
第	617	内荒207-5	土師 無台坏	11.2	3.8	5.6	不明	
	618	内荒76-6	土師 無台坏	11.0	3.8	6.6	E78 IV層	
	619	内荒144-4	土師 無台坏	11.0	3.7	6.4	D77 SD1494	
	620	宮下43-2	土師 無台坏	11.0	3.9	6.3	D80-81 SD1520	
	621	内荒61-1	土師 無台坏	10.9	4.0	6.5	C79 IV層 SD1525	
	622	内荒60-4	土師 無台坏	11.0	4.0	6.0	C78-79 SH1504 柱穴4	
図	623	内荒75-3	土師 無台坏	11.0	4.1	6.0	D80 IV層	
	624	内荒74-6	土師 無台坏	11.1	3.7	6.0	D78 SD1523	
	625	内荒71-5	土師 無台坏	11.0	3.9	5.8	C78 IV層	
	626	内荒71-4	土師 無台坏	11.0	3.8	5.6	D78 SD1514-15	
	627	内荒76-7	土師 無台坏	11.0	5.5	5.4	E79 III-IV層	
	628	内荒74-3	土師 無台坏	11.0	4.4	5.8	C78 SD1518	
第	629	内荒60-3	土師 無台坏	11.0	4.2	5.8	C78-79 SD1540	
	630	内荒57-2	土師 無台坏	10.8	4.9	6.2	C78 SD1528	
	631	内荒62-3	土師 無台坏	10.8	3.5	6.3	D79 SD1513 D78 SD1515	
	632	内荒209-2	土師 無台坏	10.8	4.3	5.8	C79 SD1525-26 C79 IV層	
	633	内荒153-4	土師 無台坏	10.8	3.6	6.0	SD1540	
	634	内荒56-5	土師 無台坏	10.8	3.6	6.0	F71 IV層	
	635	内荒62-4	土師 無台坏	10.7	4.0	6.1	D79	
	636	内荒74-4	土師 無台坏	10.7	4.0	6.0	D78-79 SD1510	
	637	内荒56-4	土師 無台坏	10.6	3.7	6.2	F71 IV層	
	638	内荒54-4	土師 無台坏	10.6	3.4	6.2	F71 IV層	
	639	内荒55-1	土師 無台坏	10.4	4.1	6.2	D69 IV層	
	640	内荒165-3	土師 無台坏	10.2	3.9	4.8	F78 IV層	
	641	内荒76-9	土師 無台坏	10.1	3.4	6.7	D78 IV層	
図	642	内荒59-1	土師 無台坏	10.4	3.9	5.0	D78 IV層	
	643	内荒73-6	土師 無台坏	10.2	3.9	4.8	D79 SD1513	
	644	内荒59-2	土師 無台坏	9.6	3.6	5.6	D78 SD1514	
	645	内荒72-2	土師 無台坏	11.8	5.0	5.4	D80 SD1518 D80-81 SD1520	
	646	内荒72-1	土師 無台坏	11.3	4.6	5.2	D80-81 SD1520	
	647	内荒57-1	土師 無台坏	12.2	4.8	5.9	C78 SD1528	
	648	内荒213-2	土師 無台坏			6.3	C77 IV層	
	649	内荒169-6	土師 無台坏			5.8	C78 SD1528	
	650	内荒169-1	土師 無台坏			5.9	SD1526	
	651	内荒168-4	土師 無台坏			6.2	C78 IV層	
	652	内荒168-8	土師 無台坏			6.0	SH1504 柱穴12	
	653	内荒168-5	土師 無台坏			5.0	D79 IV層	
	654	内荒213-1	土師 無台坏			6.0	D70 IV層 F69 III層	
	655	内荒161-7	土師 高坏				E79 IV層	
656	内荒115-1	土師 鉢	16.3	9.3	7.0	E71 IV層		
	657	内荒108-4	土師 小型壺			8.0	D79 SD1413	
	658	内荒109-3	土師 小型壺			8.4	E78 IV層 E79 III-IV層 D79 IV層	

第22表 土器一覽表18

団	番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
				口径	器高	底径		
	659	内荒117-3	土師 坏蓋	12.8	3.3	5.4	SD1527	
	660	内荒117-4	土師 坏蓋			6.8	D79 IV層	
	661	内荒116-2	土師 坏蓋			7.8	C79 IV層	
	662	内荒116-1	土師 坏蓋			6.4	E79 IV層	
	663	内荒97-4	土師 坏蓋	15.6	3.6	7.6	D79 SD1503	
	664	宮下58-1	土師 坏蓋	14.8	3.2	6.4	E78 SD1510 排水溝	
	665	内荒209-5	土師 坏蓋	14.5	3.2	5.2	D78 SD1514 D79 SD1413 D79 IV層	
	666	内荒209-3	土師 坏蓋	15.0			C78 SD1528 D78 IV層	
第	667	内荒115-2	土師 坏蓋	16.2			D79 SD1413 C79 SD1513 D78 SD1515 C78 IV層	
	668	内荒116-3	土師 坏蓋			6.6	D79 IV層 C78 IV層	
34	669	内荒112-5	土師 坏蓋			6.0	SD1578 D79 IV層	
	670	内荒113-1	土師 坏蓋			5.5	C79 SD1526 C79 NEN SD1525	
団	671	内荒112-7	土師 坏蓋			3.2	D78 SP1534	
	672	内荒112-2	土師 坏蓋			5.6	C78 IV層 D79 IV層	
	673	内荒113-8	土師 坏蓋			5.2	D79 SH1501	
	674	内荒112-3	土師 坏蓋			5.6	D79 SD1413	
	675	内荒117-1	土師 坏蓋			3.0	E80 IV層	
	676	内荒209-4	土師 坏蓋	17.8		1.2	C79 SD1526	
	677	内荒115-4	土師 坏蓋	18.8			SH1504 柱穴2	
	678	内荒208-1	土師 坏蓋	20.0			D79 SD1503	
	679	内荒115-3	土師 坏蓋	17.0			D78 SD1528	
				口径	器高	底径		
第	680	内荒98-5	土師 有台坏	15.1			D78	
	681	内荒98-2	土師 有台坏			7.8	C78 SD1528 C78 IV層	
	682	内荒97-3	土師 有台坏	15.1			SD1510	
	683	内荒209-6	土師 有台坏			7.6	D78 D78 IV層 D79 IV層	
34	684	内荒112-11	土師 有台坏			8.4	C78 SD1528 C78 IV層	
	685	内荒98-1	土師 有台坏			10.1	F79 IV層	
団	686	内荒98-4	土師 有台坏			7.0	C79 IV層 D79 IV層上 SD1529 下層	
	687	内荒113-4	土師 有台坏			6.8	D78 SD1515	
	688	内荒98-3	土師 有台坏			8.2	G74 IV層	
第	689	内荒64-1	土師 有台坏	13.7	6.6	6.8	D79 SD1511 D79 SD1503	
	690	内荒210-1	土師 有台坏	14.2			C77 IV層	
	691	内荒61-4	土師 有台坏	14.0	6.2	6.8	D78 SWS SD1522 E79 SD1503	
	692	内荒113-2	土師 有台坏			7.0	E79 III - IV層	
	693	内荒112-4	土師 有台坏			6.6	C78 SD1533 C77 IV層	
	694	内荒113-7	土師 有台坏			6.4	D79 IV層	
35	695	内荒113-3	土師 有台坏			6.0	C79	
	696	内荒113-5	土師 有台坏			6.4	SD1526 下	

第23表 土器一覽表19

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地點	備考
			口径	器高	底径		
	697	内荒112-1	土師 有台坏		6.0	SD1510	
	698	内荒113-6	土師 有台坏		6.0	C79 IV層	
	699	内荒206-4	土師 有台坏	17.8		C79 IV層	
	700	内荒208-2	土師 有台坏	18.6	6.1	10.0 D78 SD1523 SD1517 C78 IV層 C77 IV層	
	701	内荒54-1	土師 直	14.8	3.2	6.7 F73 IV層	
	702	内荒97-2	土師 直	12.4	2.6	6.5 D78・79 SD1510	
	703	内荒208-6	土師 直	15.4		D77 IV層	
	704	内荒116-4	土師 直			7.8 D79 SP1512 F80 III・IV層 E80 IV層	
	705	内荒208-4	土師 無台皿	12.6	2.5	6.8 D77 IV層	
	706	内荒115-5	土師 無台皿			7.8 C77 IV層	
	707	内荒112-9	土師 碗			7.0 D78・79 SD1510	
	708	内荒112-10	土師 碗			8.8 表採	
35 回	709	内荒196	内黒土師 碗	17.1	7.1	8.8 E79 SD1503 E79 IV層	
	710	内荒97-5	内黒土師 碗			8.5 D72 IV層 E79 III・IV層	
	711	内荒107-9	内黒土師 碗			6.4 G74 III層 E77 IV層 G74 IV層	
	712	内荒114-3	内黒土師 無台坏	12.0	3.6	7.0 C79 SD1525-26	
	713	内荒78-1	内黒土師 無台坏	14.6	4.8	6.0 D80 SP1518 D80 SD1517	
	714	内荒114-1	内黒土師 無台坏			8.2 C79 IV層	
	715	内荒114-5	内黒土師 無台坏			6.2 D80 SD1519 D80 SD1517 下層	
	716	内荒212-3	内黒土師 無台坏			4.0 D80 IV層	
	717	内荒208-5	内黒土師 無台坏			7.4 C78 SD1528	
	718	内荒107-7	内黒土師 有台坏			6.6 SD1523	
36 回	719	内荒107-8	内黒土師 有台坏			6.1 E79 III・IV層 E79 IV層	
	720	内荒118-4	土師 長胴甕	24.8		SD1527	
	721	内荒103-4	土師 長胴甕	24.0		SD1515 D78 IV層	
	722	内荒101-7	土師 長胴甕	24.4		D78 IV層	
	723	内荒141-3	土師 長胴甕	25.0		C78 SD1533	
	724	内荒141-2	土師 長胴甕	25.0		C78 SD1528	
	725	内荒100-2	土師 長胴甕	25.1		D78・79 SD1510	
	726	内荒141-1	土師 長胴甕	25.0		D79 SD1413	
	727	内荒119-1	土師 長胴甕	24.6		C78 IV層	
	728	内荒100-4	土師 長胴甕	23.7		SD1515	
	729	内荒101-2	土師 長胴甕	24.4		SD1515	
	730	内荒102-4	土師 長胴甕	21.0		D78 SD1514	

第24表 土器一覽表20

区	番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
				口径	器高	底径		
第	731	内荒141-4	土師 長胴甌	20.6			不明	
	732	内荒141-5	土師 長胴甌	20.6			SD14137	
	733	内荒118-5	土師 長胴甌	19.7			C79 IV層	
	734	内荒141-6	土師 長胴甌	26.2			D78 SD1514	
	735	内荒100-1	土師 長胴甌	26.4			D78-79 SD1510	
	736	内荒101-3	土師 長胴甌	26.6			D79 SD1413	
	737	内荒118-2	土師 長胴甌	26.4			G78 IV層	
	738	内荒118-1	土師 長胴甌	27.6			E80 III - IV層	
	739	内荒119-2	土師 長胴甌	25.6			D79 SD1413	
	740	内荒102-2	土師 長胴甌	25.8			D78 SWS IV層上	
固	741	内荒103-5	土師 長胴甌	25.8			D79 SD1413	
	742	内荒121-2	土師 長胴甌	23.8			6.7 D78-79 SD1510	
	743	内荒109-2	土師 長胴甌				6.2 D77 SD14101 D77 IV層	
	744	内荒143-6	土師 長胴甌				6.8 D78 SD1540	
	745	内荒143-7	土師 長胴甌				6.8 SD1517	
	746	内荒108-6	土師 長胴甌				7.2 D78-79 SD1510	
	747	内荒102-6	土師 長胴甌	25.5			D79 SD1413 SD1515	
第	748	内荒103-6	土師 長胴甌	22.2			D80 IV層	
	749	内荒119-4	土師 長胴甌	19.4			G78 SD1410	
	750	内荒194-1	土師 長胴甌	26.5			E71 III層	
	751	内荒119-6	土師 長胴甌	24.8			E79 IV層	
	752	内荒103-3	土師 長胴甌	21.6			北側排水溝 III層	
	753	内荒110-2	土師 小型甌	19.0			D77	
	754	内荒111-2	土師 小型甌	16.8			C79 SD1525-26	
	755	内荒111-6	土師 小型甌	16.0			E78 SD1510	
	756	内荒111-3	土師 小型甌	16.4			SD14139	
	757	内荒110-3	土師 小型甌	15.4			C78 SD1528	
固	758	内荒120-1	土師 小型甌	16.6			C79 SD1525 SP1553	
	759	内荒122-3	土師 小型甌	15.7			C78 SD1528 D79 III層	
	760	内荒110-5	土師 小型甌	14.4			G78 IV層	
	761	内荒110-1	土師 小型甌	17.6			D79 IV層	
	762	内荒142-2	土師 小型甌	17.0			C78 SD1534	
	763	内荒120-5	土師 小型甌	16.8			C78 SD1528	
	764	内荒120-2	土師 小型甌	15.0			D78 SD1540	
第	765	内荒142-3	土師 小型甌	14.4			D78 IV層	
	766	内荒121-1	土師 小型甌	16.6			7.0 D78-79 SD1510	
	767	内荒142-4	土師 小型甌	14.6			C79 NEN SD1525	
	768	内荒111-1	土師 小型甌	13.4			SP1511	
	769	内荒120-4	土師 小型甌	13.0			D79 SD1513 SD1515	
	770	内荒111-5	土師 小型甌	13.8			D79 SD1512	
	771	内荒142-1	土師 小型甌	13.9			G78 SD1410	

第25表 土器一覧表21

団	番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考
				口径	器高	底径		
第	772	内荒120-6	土師 小型甕	13.8			F80 SD1506	
	773	内荒108-1	土師 小型甕	12.4			E78 SD1510	
	774	内荒110-4	土師 小型甕	10.0			C78 IV層上	
	775	内荒109-4	土師 小型甕			6.0	G78 IV層	
	776	内荒108-5	土師 小型甕			6.4	G78 SD1410	
	777	内荒143-4	土師 小型甕			6.4	C78 SD1528	
37	778	内荒143-2	土師 小型甕			7.8	C78 IV層	
	779	内荒143-3	土師 小型甕			7.6	P1517	
	780	内荒108-3	土師 小型甕		8.0	D79 SD1503	D78・79 SD1510 SD1511	
	781	内荒108-2	土師 小型甕			6.8	C78 SD1528	
	782	内荒143-5	土師 小型甕			6.4	G78 IV層	
	783	内荒142-6	土師 小型甕			6.6	E75 SD1432	
団	784	内荒143-1	土師 小型甕			7.4	C78 SP15155	
	785	内荒211-6	土師 球胴甕	21.6			F71 SX1301	
	786	内荒215-5	土師 球胴甕				F74 III層	
	787	内荒215-3	土師 球胴甕				D70 III層	
	788	内荒215-6	土師 球胴甕				E70 SD1520 E70 IV層 E69 IV層上 D68 IV層	
	789	内荒214-1	土師 鍋	46.6			F69 III層下 E69 III層下 G69 III層下 F68 III層下	
38	790	内荒215-7	土師 鍋				E70 IV層 F70 IV層	
	791	内荒215-1	土師 鍋	43.6			SD1525 C79 IV層	
	792	内荒215-2	土師 鍋				SD1525・26	
	793	内荒214-2	土師 鍋				G78 SD1410	
	794	内荒214-3	土師 鍋				G74 III層	
	795	内荒214-6	土師 鍋				F77 東トレンチ	
団	796	内荒214-5	土師 甕				D69 III層	
	797	内荒216-4	碗	12.5			G84 III層	京都 唐津
	798	内荒217-1	天目茶碗	11.2			C78 III層	美濃 濑戸
	799	内荒216-2	鉢			8.6	表探	
	800	内荒217-4	志野 小皿	12.3	2.3	7.2	G82 III層	美濃 濑戸
	801	内荒216-1	灯明皿	9.8	1.8	5.0	D65 III層	美濃 濑戸
団	802	内荒54-3	碗	10.0	3.5	4.8	F81 IV層	志戸呂
	803	内荒216-5	白磁 小碗			2.8	表探	伊万里
	804	内荒217-2	青磁 碗			5.2	F76 IV層	
	805	内荒22-2	須恵 円面鏡	8.3	5.9	17.0	D78 SH1403	
	806	内荒5-2	灰釉 碗	15.9			C80 SD1531 D80 IV層 D79 IV層 C79 NEN IV層 C79 IV層	転用鏡 外面トナン ヘラ記号
	807	内荒12-1	灰釉 皿	15.9	3.1	8.0	C79 SD1525・26 C79 IV層 C79 NEN IV層上 D74 IV層	転用鏡 外面トナン ヘラ記号
団	808	内荒4-1	灰釉 皿			7.2	E78 IV層	転用鏡
	809	内荒133-1	灰釉 平瓶			17.4	C79 SD1526 SD1530	転用鏡
	810	内荒11-3	須恵 坏蓋	17.6			E76 SD14115 E75 IV層	転用鏡

第26表 土器一覧表22

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考	
			口径	器高	底径			
811	内荒140-1	須恵 坏蓋	16.4			F72 III層	転用硯	
812	内荒139-1	須恵 坏蓋	16.8				転用硯	
40	内荒49-6	須恵 坏蓋	15.8	2.6	7.1	C77 IV層	転用硯	
814	内荒39-3	須恵 坏蓋	15.0	2.6	9.0	C79 SD1525-26	転用硯	
815	内荒15-4	須恵 有台坏	14.6	6.3	8.8	C79 SD1525-26 C79 PI511 C78 SD1528 C79 NEN SD1525 C78 IV層	転用硯	
第 75 図	838	内荒202-1	須恵 高台坏	14.6	5.5	6.6	D78 - 79 SD1510	

第27表 土製品一覧表

図 番号	実測図番号	遺物	法量cm			出土地点	備考	
			長さ	幅	厚さ			
816	内荒106-2	平瓦	(6.3)	(8.0)	2.0	F79 IV層	土師質	
817	内荒106-1	平瓦	(7.75)	(8.5)	2.0	F79 IV層	816と同一個体	
41	内荒106-3	平瓦	(4.5)	(5.6)	1.7	E78 III層	須恵質	
819	内荒106-4	平瓦	(3.75)	(4.65)	1.7	D78 IV層	818と同一個体	
			長さ	中央 部径	重量g			
820	内荒95-3	土錐	7.8	4.2	109.2	E78 SD1487 IV層	土師質	
821	内荒96-9	土錐	7.2	3.2	64.6	E71 III層	土師質	
822	内荒95-2	土錐	6.0	3.2	28.6	F74	土師質	
823	内荒95-1	土錐	5.8	3.3	37.7	E74 II層	土師質	
824	宮下62-8	土錐	5.2	2.5	15.9	E71 IV層	土師質	
825	内荒95-4	土錐	6.0	2.0	16.3	G78 III層	土師質	
826	内荒95-5	土錐	4.2	1.4	7.1	D81 IV層	土師質	
41	827	宮下62-6	土錐	3.1	1.2	3.8	E78 SD1510 IV層	土師質
828	内荒95-10	土錐	2.5	1.2	3.0	D79 IV層	土師質	
829	内荒95-8	土錐	2.8	1.4	3.7	C79 SD1525-26	土師質	
830	内荒95-11	土錐	2.3	1.4	3.0	C79 SD1525-26	土師質	
831	内荒95-9	土錐	3.1	1.3	4.3	E78 SD1410 IV層	土師質	
832	内荒95-7	土錐	2.8	1.6	4.9	C79 SD1525-26	土師質	
833	宮下62-7	土錐	3.3	1.5	3.5	F71 III層	土師質	
834	内荒96-10	土錐	(2.8)	1.6	4.3	F71 SX1301	土師質	
835	内荒95-6	土錐	3.7	1.6	9.9	D81 IV層	須恵質	
836	内荒96-7	土錐	3.3	2.1	14.8	F71 III層	須恵質	
837	内荒96-8	土錐	3.7	1.0	2.8	E71 III層	須恵質	

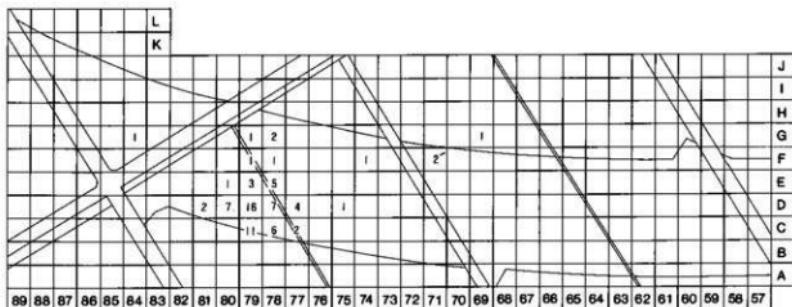
( )は残存値

## 第2節 墨書土器

内荒遺跡から出土している墨書が記された、いわゆる墨書土器の点数は墨書として一応確認されたもので85点を数える。このうちひとつの土器に2ヶ所以上の墨書を施しているものが10字あり、書の数では95字ということになる。前述したように、赤外線TVカメラを使用しても灰釉陶器などは非常に不鮮明であり、判読可能と確認したものは57点65字となつた。出土している土器の種類は土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗で、大部分は土師器の坏身である。それぞれの内訳は土師器の坏身が55点（全体の64.7%）でそのうち2ヶ所に墨書を施したもの8点、3ヶ所に書いてあるものが1点である。土師器の蓋は2点（2.3%）皿が1点出土している。須恵器は坏身が8点（11.8%）、うち1点は2ヶ所に墨書がある。須恵器の蓋も2点（2.3%）確認している。灰釉陶器は碗が9点（10.6%）、皿が7点（8.2%）となっている。この灰釉陶器のうち1点は双耳碗であり、皿のうち2点は耳皿である。以上のような数字からもわかるように土師器の占める割合が非常に多くなっている。それも坏身が大部分を占めている。

さて、内荒遺跡は調査区東から13区・14区・15区・16区の4地区に分け調査を行つたが、それぞれ各区の出土状況をみていくことにする。

- 13 区 13区 第IV層から3点4字出土している。いずれも調査区北西端部分で遺構に伴わないものである。ただし、同部分で井戸（SE 1301）が検出されていることなどから、調査区北側の未調査部分に、これらに連絡する遺構の存在も考えられる。灰釉陶器は一つも出土していない。山茶碗が一点出土しているが、時期的には新しいものである。
- 14・15 区 官衛的造構 捩立柱建物群 14-15区 遺構の検出状況からひとつの調査区として考えられる。この調査区は、内荒遺跡の主体である平安前期の官衛的造構と考えられる部分の中心となるところであり、撪立柱建物群が検出された地区である。墨書土器の出土もすべてこの造構に関係する第IV層もしくはこの建物群の遺構に伴うものである。75点84字を数え、内荒出土墨書土器の大部分を占めるものとなっている。（14区で23.8%、15区で70.0%）さらにその出土位置を検討すると、SA 1402北側の撪立柱建物北群（5点）と、撪立柱建物南群（65点）と、SD 1407東側の畝状造構群（5点）の3地域に集中していることがわかる。そして北群、南群ではその
- 撪立柱建物北群  
撪立柱建物南群  
畝状造構群



第42図 墨書土器グリッド別出土分布図

半數以上が掘立柱建物の周溝内で出土していることも注目されるところである。南群では SH 1501、SH 1504の周溝や、その南で検出された SD 1523、SD 1526などから数点出土しており、調査区外にあたる南側で掘立柱建物南群がさらに広がっていることを示している。北群では SH 1401の周溝に伴って数点出土している。また、畠状遺構第1群内でも数点確認されているが、SD 1430内のものは SH 1402との関係も考えられるところである。なお、土器の種類は土師器が圧倒的に多いのは前述した通りであり、遺構などにより土器の種類別の分類をすることは難しい。

16区 第IV層より2点出土している。いずれも灰釉陶器である。

16 区

なお、各グリッドからの出土状況は、第42図の通りである。

#### 文字の種類について

確認された文字資料のうち、判読可能なものが65字。そのうち58字が一文字であり、5字が二文字、3文字が二字となる。文字の種類としては、「建 902 904 924 929 930 936~948」「主 903 909 913~915 917 922 926 955~963 972」「歷代 907」「一百 912」「十 927」「川万呂 932 934」「川万 933 935」「岡 950~954」「寺之 952-3」「上 964 965」「生 966」「疊 967」「政 968」「去 969」「三 971」「安 973」「大 977」の以上17文字、20種類を確認している。このうち複数の件数を数えるものは、「岡」(7点・10字)「建」(18点・23字)「主」(15点)「十」(2点)「上」(2点)「川万呂」(2点)の6種類である。とくに「岡」「建」「主」の3種類が顕著である。この3種類の文字について、少し説明をしていくことにする。なお、判読可能墨書については第28・29表にまとめておいたのでそちらを参照にされたい。

「建」「建」は18点出土している。そのうち、底部・体部とひとつの土器に2カ所にわたって書かれているものが5点ある。これらの土器は全て14・15区の掘立柱建物南群及び北群の溝状遺構に集中して出土しているものである。器種は、土師器が15点、須恵器が1点、灰釉陶器が2点となり、いずれの文字も壺または碗に書かれているものである。文字が施されている部位は外底部13点体部10点、共に書かれているものが5点となる。このうち4点は文字が読めるように置いた状態で横並びに読めるものであり、1点は縦方向に読めるものである。書体については、後述することにする。

「主」「主」は15点出土している。いずれも一文字である。出土場所も「建」ほど顕著ではないがやはり掘立柱建物南群に多く、畠状遺構からも多少の出土をみることができる。器種は、土師器が9点、須恵器が3点、灰釉陶器が3点とやや土師器が多いものの一応各種類のものが出土している。器型は土師器がすべて壺身であることがやや特徴的ともいえる。部位としては、底部が11点、体部が3点、天頂部が1点となっており、ここでもやはり普通の使用方法では見えないはずの底部に書かれているのである。「建」と異なりすべて1カ所のみに書かれている。

「岡」「岡」は7点出土しており、そのうち3点は複数の「岡」もしくは「寺之」のように他の文字を伴って書かれている。これらの出土場所は前述した2種類の文字と異なり、いずれも掘立柱建物群と直接関係のない所で確認されている。時期的なことに関しては墨書き以外の土器との関連もあり、別の節で改めて説明することにする。器種はこれもまた土師器のみであり、すべて壺身である。底部に書かれているもの5点、体部に書かれているもの5点、両方が3点である。

「建」  
「主」「歷代」「一百」  
「十」「川万呂」「万呂」  
「寺之」「上」「生」  
「疊」「政」「去」「三」  
「安」「大」

第28表 墨書文字一覧表1

番号	訛文	土器	器種	墨書部位	備考
1	900	□	灰釉陶器	碗	底部 中
2	901	□	灰釉陶器	碗	底部 中
3	902	建	灰釉陶器	碗	底部 中
4	903	建	灰釉陶器	双耳碗	底部 中
5	904	(主カ)	灰釉陶器	碗	底部 中
6	905	□・□	灰釉陶器	碗	体部 逆
7	906	(春カ)	灰釉陶器	碗	底部 中
8	907	屋・代	灰釉陶器	碗	体部 正
9	908	□	灰釉陶器	碗	内底 右
10	909	(主カ)	灰釉陶器	皿	底部 中
11	910	□	灰釉陶器	皿	体部 正
12	911	□	灰釉陶器	皿	底部 中
13	912	一・百	灰釉陶器	皿	底部 中
14	913	主	灰釉陶器	段 皿 B	体部 正
15	914	主	灰釉陶器	段 皿 B	底部 中
16	915	主	灰釉陶器	耳 皿	底部 中
17	916	□	山茶	碗	底部 中
18	917	主	須恵器	坏 蓋 C	天頂部 中
19	918	□	須恵器	坏 蓋 C	天頂部 逆
20	919-1	□・□	須恵器	有台坏 B	体部 正
21	〃-2	□・□	須恵器	有台坏 B	内底 中
22	920	□	須恵器	有台坏 B	底部 中
23	921	□	須恵器	有台坏 B	体部 逆
24	922	主	須恵器	有台坏 B	底部 中
25	923	□	須恵器	有台坏 B	底部 中
26	924	建	須恵器	有台坏 B	体部 右
27	925	□	須恵器	有台坏 B	底部 右
28	926	主	須恵器	無台坏 B	底部 中
29	927	十	土師器	坏 蓋	天頂部 中
30	928	□	土師器	坏 蓋	天頂部 中
31	929	建	土師器	有台坏	底部 中
32	930-1	建	土師器	有台坏	体部 右
33	-2	建	土師器	有台坏	底部 中
34	931	万	土師器	皿	底部 中
35	932	川万呂	土師器	無台坏 B	底部 上
36	933	川万	土師器	無台坏 B	底部 中
37	934	川万呂	土師器	無台坏 C	底部 中
38	935	万	土師器	無台坏 C	底部 中
39	936	建	土師器	無台坏 C	体部 左
40	937	建	土師器	無台坏 C	体部 右
41	938	建	土師器	無台坏 C	体部 右
42	939	建	土師器	無台坏 C	体部 右
43	940-1	建	土師器	無台坏 C	体部 左
44	-2	建	土師器	無台坏 C	底部 逆
45	941-1	建	土師器	無台坏 C	底部 中
46	-2	建	土師器	"	底部 右
47	942-1	建	土師器	無台坏 C	体部 中
48	-2	建	土師器	"	底部 中

「万」の上にサビが付着  
赤外線TVカメラで透過判読

読める向きに置いて、そのまま横に二文字とも読める

読める方向に置いて、縦に二文字読むことができる

読める方向に置いて、横に二文字読むことができる

第29表 楷書文字一覧表2

番号	訛文	土器	器種	墨書き部位	備考
49	943-1	建	土師器	無台坏C	体部右
50	-2	建	"	"	底部中
51	944	建	土師器	無台坏C	底部中上
52	945	建	土師器	無台坏C	底部中上
53	946	建	土師器	無台坏C	底部中左
54	947	建	土師器	無台坏C	底部中左
55	948	建	土師器	無台坏C	底部中
56	949	(主カ)	土師器	無台坏C	底部中
57	950-1	岡(足)	土師器	無台坏C	体部左
58	-2	"	"	"	底部中
59	951-1	岡(元)	土師器	無台坏C	体部左
60	-2	"	"	"	底部中
61	952-1	岡(亞)	土師器	無台坏C	体部中左
62	-2	"	"	"	底部中
63	-3	寺之	"	"	体部逆上
64	953	岡(三)	土師器	無台坏C	底部正上
65	954	岡(四)	土師器	無台坏C	体部正左
66	955	主	土師器	無台坏C	体部左左
67	956	主	土師器	無台坏C	体部上
68	957	主	土師器	無台坏C	底部上
69	958	主	土師器	無台坏C	底部上
70	959	主	土師器	無台坏C	底部上
71	960	主	土新器	無台坏C	底部中
72	961	主	土師器	無台坏C	底部上
73	962	主	土師器	無台坏C	底部上
74	963	主	土師器	無台坏C	底部中上
75	964	上	土師器	無台坏C	底部正中
76	965	上	土師器	無台坏C	体部中
77	966	生	土師器	無台坏C	底部中
78	967	疋政	土師器	無台坏C	底部中
79	968	去	土師器	無台坏C	底部中上
80	969	□(凡)	土師器	無台坏C	底部中上
81	970	三	土師器	無台坏C	底部中中
82	971	□	土師器	無台坏C	底部中右
83	972	安	土師器	無台坏C	底部中中
84	973	□	土師器	無台坏C	底部中中
85	974	□	土師器	無台坏C	底部中中
86	975	□	土師器	無台坏C	底部中
87	976	□	土師器	無台坏C	底部中
88	977	□	土師器	無台坏C	体部部
89	978	□・(口)	土師器	無台坏C	体部部
90	979	□	土師器	無台坏C	体部部
91	980	□	土師器	無台坏C	底部中
92	981	□	土師器	無台坏C	底部中
93	982	□	土師器	無台坏C	底部中
94	983	岡(四)	土師器	無台坏C	底部中
95	984	岡(五)	土師器	無台坏C	体部正

**川萬/万呂/昌** これら3種類の文字以外に気づいたものとして、「川万呂」「川万」「万呂」と書かれているものが合わせて4点出土している。圧倒的に一文字のものが多い中でおそらくは「川万」「万呂」とも「川万呂」に関わるものとして、三文字の、それも人名と覚しきものが出土していることは、何らかの意味をもつものと考える。この「川万呂」もまた土師器の坏身に、それも底部に書かれているものである。

#### 墨書部位について

文字が書かれている部位の位置については、外底部（A）、体部（B）、内底部（C）、天頂部（D）で分類し、また底部は中心部をaとし、上寄りをb、右寄りをc、下寄りをd、左寄りをeとして分類してみた（これは文字として読める正置の状態での分類である）。その結果は第28・29表の通りである。

**坏身外底部** これによると文字が書かれる位置は、坏身外底部（A）に記されるもの58点（61.1%）  
**坏身体部・坏身内底部** 坏身体部に記されるもの25点（26.3%）、坏身内底部で2点（2.1%）、蓋天頂部に記されるものが4点（4.2%）となっている。底部では中央部（a）に書かれたものが75.97%と圧倒的に多く、ついで上側（b）が17.2%、左寄り（e）が3.4%、右寄り（c）が3.4%、下寄り（d）が0%の順になっている。

文字別に部位の特徴を挙げてみると、まず「建」は、底部中央より書かれているが、底部、体部の両方に書かれているものは、書き手の土器の持ち方が示されている。おそらく右利きであろう書き手は左手で坏の口縁部分を持ち、体部、底部の順で横または縦に「建」を書いたものだと思われる。ために、底部の「建」はやや中央より左側に寄っている。文字の大きさはやや小さめである。「主」については、「建」のようにひとつ土器に複数書かれていないので、「建」ほど特徴はないが、灰釉、須恵器ではほぼ中央に、そして土師器では底部上側に書かれている。体部に書かれたもので、体部左に相当するものが2例あるが、これは右利きの人であれば、非常に持ちにくい不安定な状態で書いたことになる。あるいは、左利きの人の手によるものであろうか。しかし、「岡」などは、この体部左の例が多いし、同じ「主」で比べてみても右利き左利きの違いは判然としない。

**利き手** さて、部位についてであるが、普段通常の使用方法ではほとんど目にすることのない底底部 部に文字が書かれている例が非常に多いのはいかなる理由なのであろうか。「何故ここに文字を施す必要があるのか？」という疑問が生じる。この器の所有者や所属を確認するものであれば、器の管理保管は器を倒置（伏せた）状態であったことが推測されないだろうか。

**所持者** 「十」など数を示す文字は、その数ごとに器を重ねていたものであろうか。「建」「主」などが身分または所有者を示すものとして、その文字ごとにひとまとまりに重ねて管理・保管していたのだろうか。しかし、他の墨書土器と比較してこれらの文字の割合が多すぎるような気がする。これらの土器が出土した獨立柱建物の住人が特定の人物であり、その人物の所有物と考えられないこともないが、断定するには資料が少なすぎる。底部に文字があれば、使用する際に文字が目に留まらないため、使用者に対して変な不快感を与えるよりも思える。また、使用頻度に耐えられるように底部に記したものであろうか。

体部に書かれている文字についてはほとんど文字の向きには特定のものではなく、使用上の便を考えて書かれたものとも断定できない。置いた時に読みやすくするなら、正置または口縁を下にした倒置の状態で読めるように書かれるようと思われるが、特別にそのように考えていたとも認めがたい。通常の状態で読むことを優先して書いたものではない

ようだ。ただ、底部・体部と共に書く場合に、前述したように左手で口縁部分を摑み、体部・底部の順で書くことになりそうなので、その際、横読みの場合は体部右の部位になり、両方の部位に記す時に限り、読みにくくなるとも考えられなくはない。体部の左の部位の場合は、これも前述したように左利きのためである可能性もある。

土器に文字が記されること自体、この遺跡の性格を示していることになるが、それにもまして墨書の部位によってもこの土器自体が、かなり強く官有物であることを意識させるものである。土器一点一点を備品として管理しているような、また使用者を強調しているように思われてならない。

#### 判読不明の墨書について

#### 判読不明の墨書

墨痕が不鮮明で赤外線TVカメラよりも判読できなかったもの、また破片のため文字が欠けて読めなかつたものが29文字ある。簡単に各文字について述べることにする。

900 灰釉碗で底部中央に書かれているが、摩滅が激しく判読できなかつた。

901 灰釉碗で底部中央に書かれ、文字としては「主」の上の部分のよにも読めるが断定はできない。

904 「主」の四画・五画めの横画のように思われるが判然としない。

905 灰釉碗で体部に書かれている。二字あり、いずれも線が震えた感じで他の文字とは異なっている。正置にして右側の文字は「主」のよにも読めるが明確ではない。

906 灰釉碗で底部中央に書かれている。筆使いも雄大で「主」にみられるような特徴をもつてゐるが、中央部が欠けており、判読不能であるが、「春」または「若」とは読めないだろうか。

908 灰釉碗で内底に書かれているものであるが、内底に書かれているものの例が少なくまた、墨痕と断定しにくいものである。

909 「主」の最終画のように読めるが不明瞭である。

910 灰釉皿で体部に書かれている。「二」のよにも読めるが破片で文字がまだ続いているので断定はさけた。

911 灰釉皿で底部に書かれている。文字が大きくやや不鮮明であり、文字としては判読しがたいものである。

916 山茶碗で底部中央に書かれている。「南」のよにも読める。字体も、時期的にもIV層出土の土器群とは異なり、当研究所が発掘した「神明原・元宮川遺跡」から多く出土している墨書の字体とよく似ている。祭祀的な一見讀っているような文字である。

918 須恵器環蓋で墨痕のみで判読できない。

919 須恵器環で内底及び体部に同様の文字が書かれている。ともに墨痕が不鮮明であり、判読できない。やや草書的な文字のようである。

920 須恵器環で底部中央に雄大に書かれているが、一部欠けているところもあり、文字のバランスや偏などから「建」「走」などの文字が推測できるが不明である。

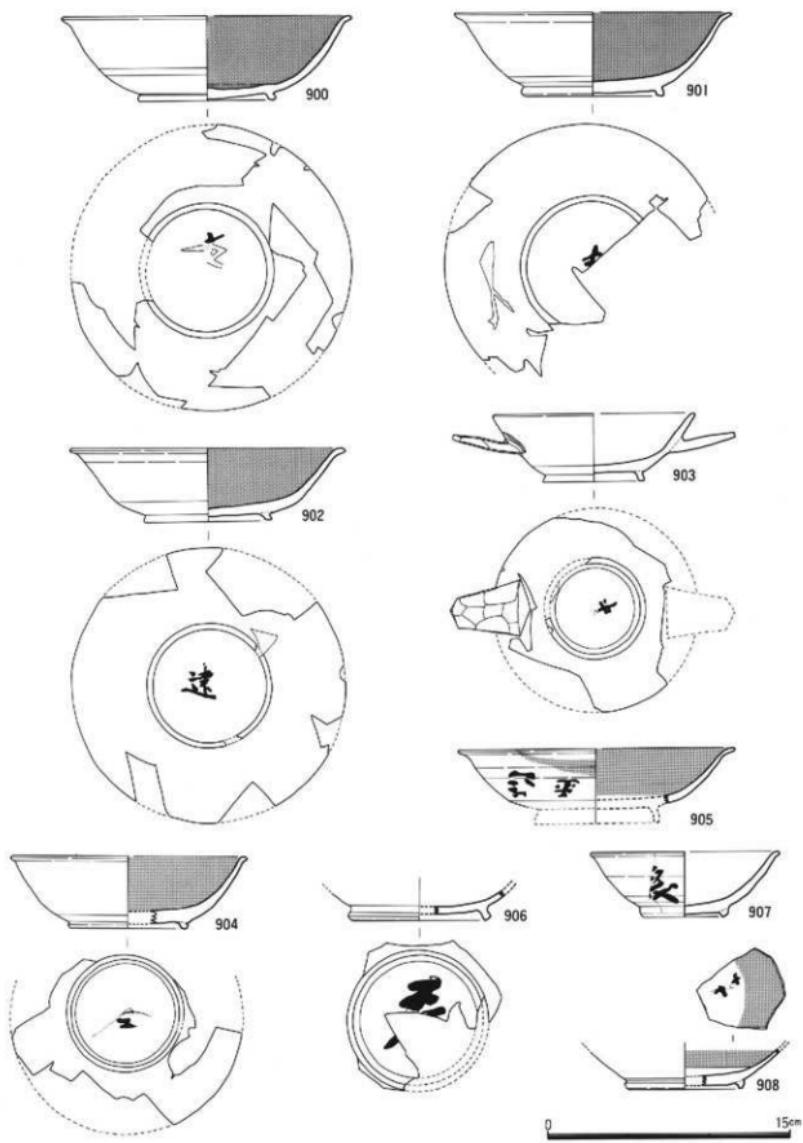
921 須恵器環で体部に書かれている。点のみの墨痕であり判読不能である。

923 須恵器環で底部中央に書かれている。「去」のよにも読めるがやや不鮮明である。

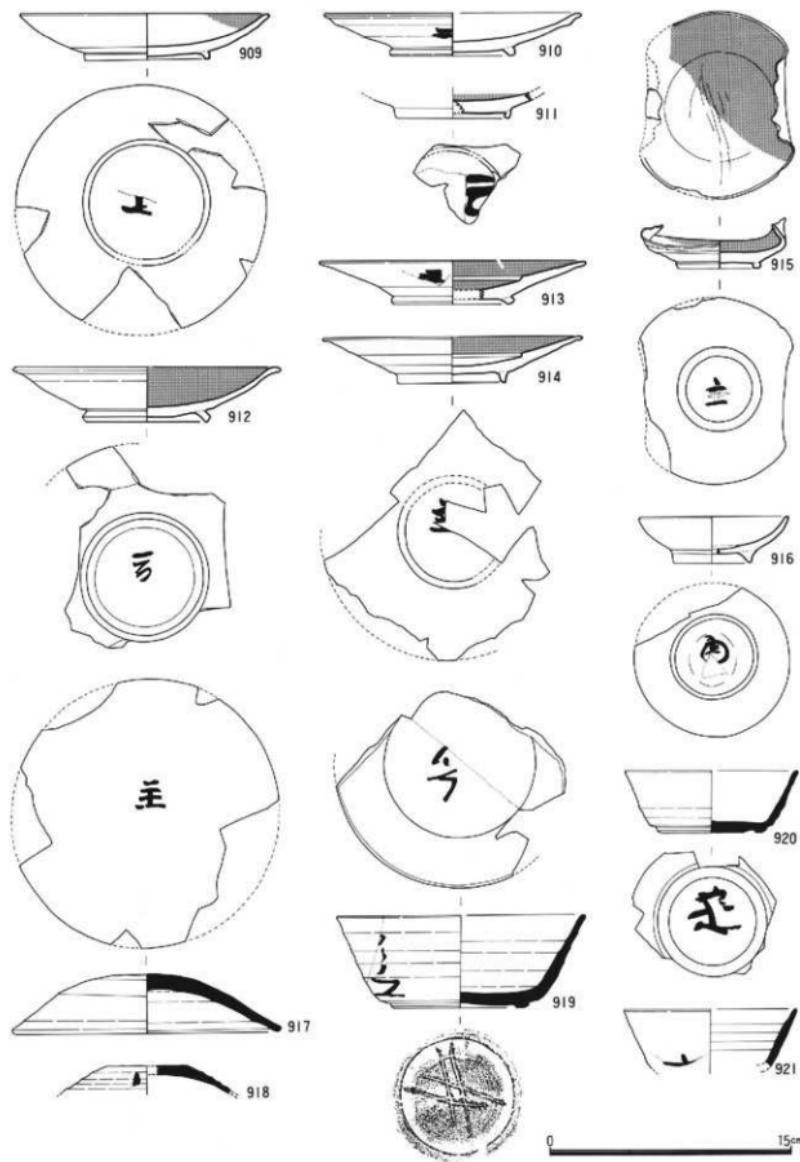
925 須恵器環で底部中央に書かれている。摩滅が激しく不鮮明である。

928 土器蓋中央に書かれている。点のみの墨痕である。

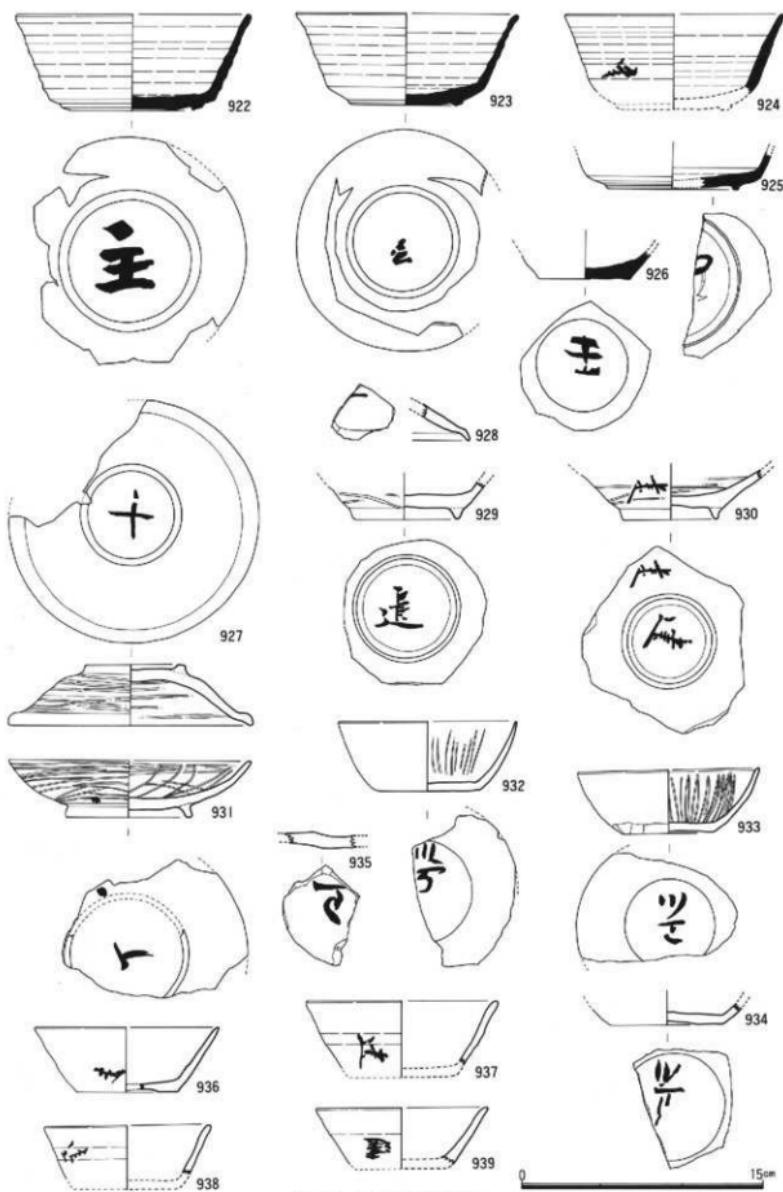
949 土師器環の底部に書かれている。上の部分が「主」のよにも読めるがはっきりしな



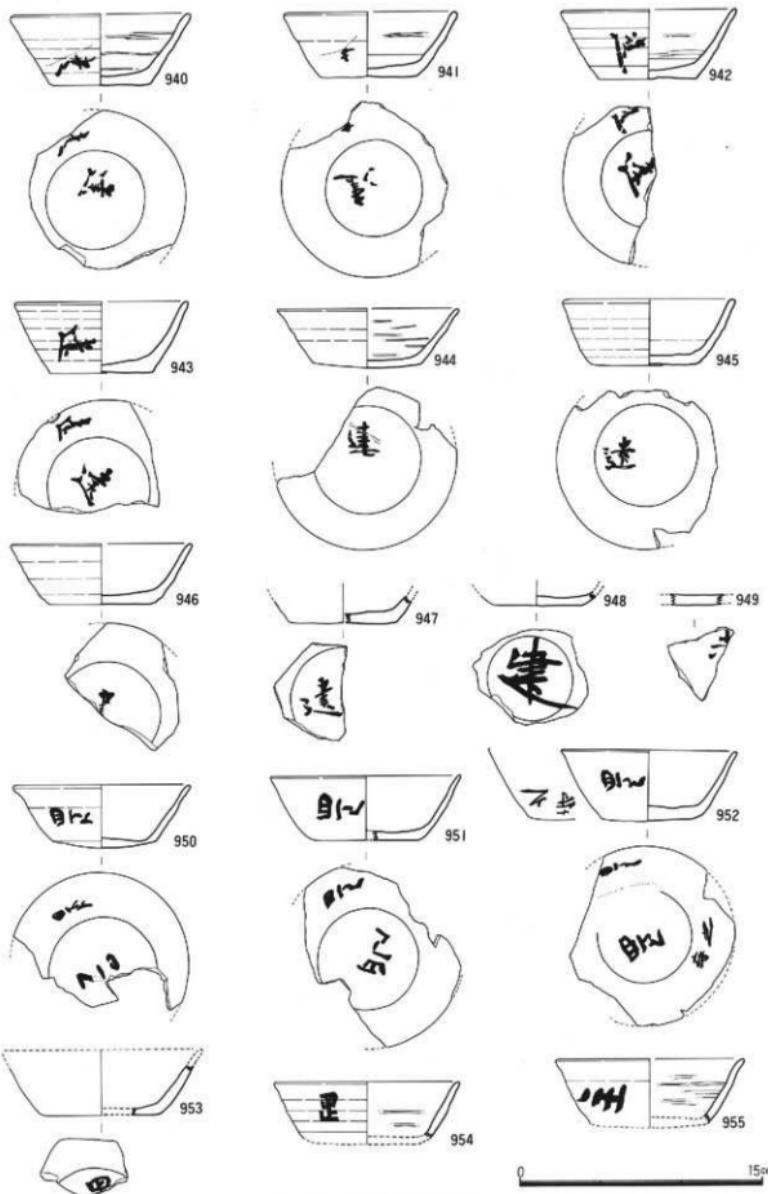
第43図 墓書土器実測図 1



第44図 星書土器実測図 2



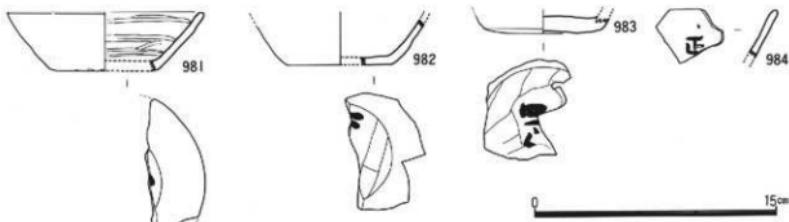
第45図 墓書土器実測図 3



第46図 墓書土器実測図 4



第47図 墓書土器実測図 5



第48図 墨書土器実測図 6

い。

970 土師器環で底部に書かれている。文字自体は鮮明であるが、「凡」の「点」が欠けているような文字である。

972 「主」の右側横画部分か? 書体などが主の特徴を出しているが、全体が不明なので断定できない。

974 土師器環の底部に書かれている。横画一本線であるので、不明である。

975 土師器環の底部に書かれている。これも墨痕のみで判読不明である。

976 土師器環の底部に書かれている。墨痕2ヶ所あるが不明である。

977 土師器環の体部に書かれている。三本線のように見えるが不明である。

978 土師器環の体部に書かれている。1文字または2文字のように見える。

979 土師器環の体部に書かれている。横画一本線である。「主」の第5画めのようにも読める。

980 「大」の一部分のように読めるが、全体が不明である。

981 底部の断面にかろうじて墨痕が残存している程度であるため、文字としの判読は不明。

982 底部上部に2点、墨痕が残存するが、これも文字として判読不能である。

第30表 墓書土器一覧表1

図 番号	実測図番号	器種	法量 cm			出土地点	備考	
			口径	器高	底径			
第 43	900	内荒67-1	灰釉 碗	17.5	5.2	8.4	E79 IV層 F79 IV層 C79 IV層 D79 IV層 表採	内面トチ
	901	内荒5-1	灰釉 碗	17.2	5.2	8.8	C79 SD1525-26 D79 SD1503 E79 III-IV層 C77 IV層	
	902	内荒19-1	灰釉 碗	17.1	4.5	7.9	F74 IV層 E78 IV層 C78 IV層上 D79 IV層 D78 IV層	
	903	内荒17-3	灰釉 双耳碗	12.5	4.3	6.4	E78 SD1482 D79 IV層 D79 IV層上	
第 44	904	内荒13-3	灰釉 碗	14.6	4.4	7.4	C79 SD1525-26 F77 IV層 F76 IV層 表採	内外面トチ ヘラ記号
	905	内荒69-1	灰釉 碗	17.1			E78 IV層	
	906	内荒163-2	灰釉 碗			8.4	D70 IV層上	
	907	内荒67-5	灰釉 碗	11.7	4.0	5.4	C77 IV層	
第 45	908	内荒69-6	灰釉 碗			7.1	G84 III-IV層	内外面トチ ヘラ記号
	909	内荒67-3	灰釉 盆	15.5	2.9	7.8	D78 IV層	
	910	内荒10-5	灰釉 盆	16.0	2.7	7.8	E78 SD1503 D80 SD1518 E79 IV層 D79 IV層	
	911	内荒68-3	灰釉 盆			7.0	D82 北トレンチ	
第 46	912	内荒69-2	灰釉 盆			7.4	D77 IV層	内外面トチ ヘラ記号
	913	内荒187-2	灰陶 段皿	16.4	2.7	7.5	D79-80 SD1529 C79 IV層	
	914	内荒67-2	灰陶 段皿	16.0	2.8	6.6	D79 IV層 D80-81 SD1520 覆土	
	915	宮下13-1	灰陶 耳皿	11.6	3.1	5.0	E77 SD1407	
第 47	916	内荒67-4	山茶碗 小皿	9.2	2.9	4.8	G69 III層	内外面トチ ヘラ記号
	917	内荒68-1	須恵 壺蓋	16.6	3.6		C78 IV層	
	918	内荒69-5	須恵 壺蓋			4.8	E78 IV層	
	919	内荒184-5	須恵 有台壺	15.3	5.8	8.4	SD1523	
第 48	920	内荒192-1	須恵 有台壺	10.4	3.9	6.7	E79 IV層	内外面トチ ヘラ記号
	921	内荒192-4	須恵 有台壺	10.6			G78 SD1410	
	922	内荒40-5	須恵 有台壺	14.5	5.9	8.7	D78 SD1544 D79 D78-79 SH1510 E78 SD1522	
	923	内荒30-2	須恵 有台壺	13.9	5.7	7.1	D81 IV層 E80 IV層 D78 IV層 C79 IV層	
第 49	924	内荒68-2	須恵 有台壺	13.5			C79 SD1526 下層	内外面トチ ヘラ記号
	925	内荒69-4	須恵 有台壺			8.2	C79 SD1527 SD1517 表採	
	926	内荒69-3	須恵 無台壺			5.6	E80 IV層	
	927	内荒182-1	土師 壺蓋	15.1	3.8	6.2	SD1440	
第 50	928	内荒187-8	土師 壺蓋				D78 C-D79	内外面トチ ヘラ記号
	929	内荒188-1	土師 有台壺			6.6	D79 SWS SD1523	
	930	内荒182-2	土師 有台壺			5.8	E78 SD1484	
	931	宮下58-4	土師 盆	15.0	3.5	9.8	E79 III-IV層	
第 51	932	内荒77-6	土師 無台壺	11.0	4.3	6.6	F79 SD1501	内外面トチ ヘラ記号
	933	内荒77-5	土師 無台壺	11.2	3.8	5.8	G78 SD1410	
	934	内荒186-1	土師 無台壺			6.8	F78 IV層	
	935	内荒186-3	土師 無台壺			6.8	D81 IV層	
第 52	936	内荒187-7	土師 無台壺	11.6	4.0	6.4	D80 SP1518 D79 IV層	内外面トチ ヘラ記号
	937	内荒185-1	土師 無台壺	11.6			SD1528	
	938	内荒191-3	土師 無台壺	10.2			E79 III-IV層	
	939	内荒192-2	土師 無台壺	10.4			C79 IV層	
第 53	940	内荒190-1	土師 無台壺	11.1	4.4	6.2	SD1523腐殖層内	内外面トチ ヘラ記号
	941	内荒190-4	土師 無台壺	10.7	4.1	6.0	C78 SD1528	
	942	内荒190-2	土師 無台壺	10.8	4.3	6.0	SD1518	
	943	内荒190-3	土師 無台壺	10.7	4.4	6.4	SD1518	

第31表 玄書土器一覧表 2

図 番号	実測図番号	器 種	法量 cm			出 土 地 点	備 考	
			口径	器高	底径			
第 46	944	内荒77-3	土師	無台坏	11.4	4.6	6.4	D78-79 SD1510
	945	内荒183-2	土師	無台坏	10.7	4.1	6.3	D78 SES SD1522
	946	内荒184-4	土師	無台坏	11.2	3.7	6.4	D78 III層
	947	内荒189-4	土師	無台坏			6.6	D78 SD1515 廉植土中
	948	内荒189-1	土師	無台坏			5.3	C78 SD1528
	949	内荒187-3	土師	無台坏			SP1548	
図 951	950	内荒77-1	土師	無台坏	11.0	4.9	6.6	D75 SD1431
	951	内荒77-4	土師	無台坏	11.8	4.5	6.2	F71 III層(下面)
	952	内荒77-2	土師	無台坏	11.0	4.4	5.8	D75 SD1430
	953	内荒192-3	土師	無台坏			7.0	F71 III層
	954	内荒191-2	土師	無台坏	11.5		D78 IV層	
	955	内荒191-4	土師	無台坏	11.6		D80 SD1518	
第 47	956	内荒189-2	土師	無台坏			5.9	SD1525
	957	内荒185-2	土師	無台坏			6.6	SD1526 下層
	958	内荒188-3	土師	無台坏	11.4	3.7	6.5	D80 SEN SD1517
	959	内荒183-3	土師	無台坏	11.6	3.9	6.4	D79 SD1413
	960	内荒186-4	土師	無台坏			7.1	E78 SD1510
	961	内荒186-2	土師	無台坏			E78 IV層	
	962	内荒187-1	土師	無台坏			D79 SD1413	
	963	内荒186-5	土師	無台坏			C77 SD14112	
	964	内荒189-3	土師	無台坏	12.0	3.7	7.0	C78 IV層
	965	内荒184-3	土師	無台坏	11.0		D80 SEN SD1517	
	966	内荒188-2	土師	無台坏			6.3	D77 SD1510
	967	内荒188-4	土師	無台坏			5.0	D78 IV層
	968	内荒187-5	土師	無台坏			6.4	E79 IV層
	969	内荒183-1	土師	無台坏	11.1	3.9	5.9	SD1440
図 970	970	内荒187-4	土師	無台坏			南壁排水溝	
	971	内荒184-1	土師	無台坏			6.4	D78 IV層
	972	内荒184-2	土師	無台坏			6.4	G79 IV層
	973	内荒186-6	土師	無台坏			D80 SD1517 下層	
	974	内荒186-7	土師	無台坏			D80 SD1529	
	975	内荒187-6	土師	無台坏			IV層 表採	
	976	内荒183-4	土師	無台坏	11.2	3.7	5.6	D79 IV層
	977	内荒192-5	土師	無台坏			5.8	E79 IV層
	978	内荒186-9	土師	無台坏			C79 NEN SD1525	
	979	内荒186-8	土師	無台坏			SD1526 下層	
第 48	980	内荒192-6	土師	無台坏			E78 SD1482	
	981	内荒212-4	土師器	坏	12.2	3.6	6.8	SD1526 下層
	982	内荒213-4	土師器	坏			6.4	SD1522
	983	内荒213-3	土師器	坏			7.4	F73 IV層
	984	宮下73-7	土師器	坏			不明	

### 第3節 木製品

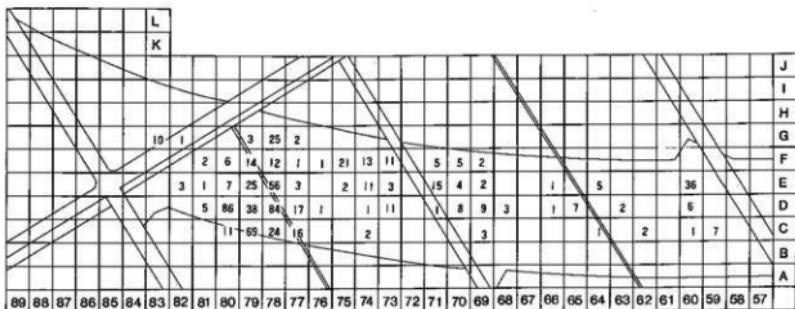
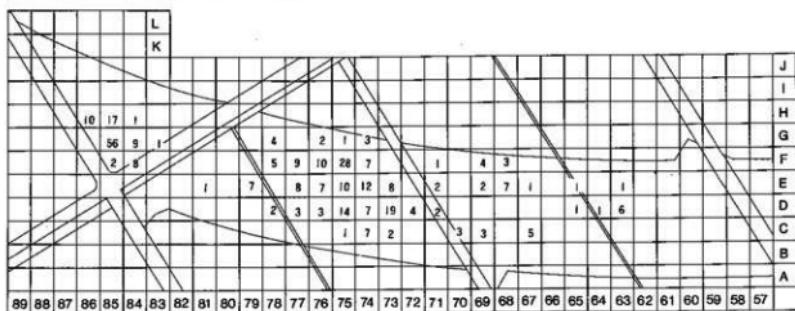
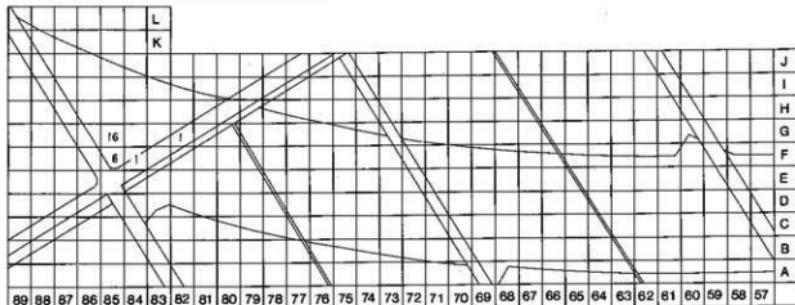
川合各地区は低湿地で地下水位の高いことから、木製品が水浸けの状態で保存されていて、多量の木製品が良い条件で出土している。

- 1824点 則として行っており、総登録数は1624点に及ぶ。ただ、14・15区掘立柱建物南群の周溝内からは、長さ20~30cm程度の細木片が多量に出土しており、これらは、1点1登録すると膨大な量になるため、一括り上げをし、1コンテナ単位で登録した。コンテナ数は23箱である。従って、出土木製品の総点数は上記登録総数1624点よりも、はるかに多いものとなる。
- これら木製品の中には、包含層・遺構から出土したものと、掘立柱建物の柱根、礎板、井戸の枠材、杭列の杭材などのように遺構を構成する部材がある。出土状況については第49図のような分布を示している。1624点の木製品のうち、分類可能な生活用品一般の木器が207点、遺構を構成する部材が497点、残りの920点は一部加工痕のある雑木類である。今回は残存状態の良くない一部の漆椀を除いたすべての生活用品と、柱根、礎板、井戸材の一部について報告する。各層位、各地区からの出土に関しては、次のような状況である。
- II 層 II層 16区のみで出土している。遺構としては、水田跡及びこれに伴う水路を検出し、水路 SD 1601、SD 1603などからは漆椀などが出土している。
- III 層 III層 III層は内荒遺跡東側の遺跡である川合遺跡においては水田遺構を検出したが、内荒遺跡では遺構検出していない。そのため遺物はいずれも包含層出土のものである。12区で7点、13区で43点、14・15区で184点、16区で104点の木器が出土している。16区G85グリッドで56点と多量の木製品を出土しているが、これはIV層面で検出したSX 1601出土の29点を含んでいる。SX 1601はSA 1601と切り合い関係をもつワラジ形の土坑で、遺構の時期を明確にすることはできないが、IV層の平安時代遺構より新しいことは確実であり、覆土がIII層の茶褐色土を主体とするものであるため、ここではIII層に伴う遺構として扱った。29点の中には釘を打った板材が3点含まれている。とくに14・15区で大量に出土しているが、内荒遺跡の中心である IV層との関連を考慮する必要があるが、とりわけ「遺構編」で述べた溝状遺構群の直上で多く出土しているような状況である。
- IV 層 IV層 12区で72点、13区で163点、14・15区で874点、16区で83点の木器が出土している。12区、13区では主として、井戸材及び井戸関連の遺物がほとんどである。14・15区では、特に15区の掘立柱建物南群の位置する一角から集中出土しており、とりわけ調査区南側の遺構及びグリッドに集中しているような状況であり、この南群遺構の中心が調査区外（南側）に存在し、広がっていることを示している。掘立柱建物南群の周溝からは前述した通り、細木片が多量に出土しており、これを加えれば内荒遺跡から出土した木製品の大多数がこの一角に集中していることになる。木器の出土分布からみれば、14・15区の掘立柱建物群の一群と、14区から13区にかけての溝状遺構群の一群とに分かれている様子である。

木器の種類については、次のように分類した。大きく生活用品一般と、遺構構成部材とに分け、さらに前者はA. 容器、B. 食事具、C. 服飾具、D. その他の生活具、E. 祭祀具、F. 用途不明品に分類し、後者はG. 井戸材、H. 細木片、I. 柱根とに分け、さらにその他を加えることにした。さらに前者については、一部の漆椀片を除き、すべてを報告することとし、後者についてはSE 1301の井戸材を始めとして、代表的な遺構部材を抽出

第32表 木製品地区別出土一覧表

出土層位	12区	13区	14区	15区	16区	計
II層	6				15	21
III層	8	71	78	11	18	186
IV層	11	124	283	558		976
レンチ、その他	51	34	83	55	11	234
合計	76	229	444	624	44	1,417



第49図 木製品グリッド別出土分布図

して報告することにした。以下、これら分類した各木器について説明していくことにする。容器と認められるものには曲物、挽物、剝物、漆器がある。

#### 器 器 A. 器器

容器として認められるものには曲物、挽物、剝物、漆器がある。

#### 曲 物 1. 曲物 (W1～W49)

II層5点、III層14点、IV層24点、層位不明が6点出土している。そのうち円形曲物が38点、楕円形曲物が2点、側板が9点を数える。また、周縁面に結合木釘(孔)が残存するもの13点、周縁に低い段を持つもの5点(うち3点には段を境に檜皮結合孔が残存している)となっている。径11.0～12.0cm(4寸)のものが7点と最も多く、ついで9.0～10.0cm(3寸)、15.0～16.0cm(5寸)、18.0～19.0cm(6寸)のサイズが4点となっている。曲物は水用、食膳用、食物貯蔵用、運搬用などに分けられるが、そのサイズから考慮して、ここでの曲物は食膳用が中心であるものと思われる。

円形曲物底板 円形曲物底板(W1～W27)内外面とも丁寧に仕上げており、ほとんどが周縁を垂直に落としている。W11・W16・W19・W25の4点はわずかに周縁面が傾斜している。周縁面には木釘孔が1～6孔確認されている。W9は完形で釘孔は6孔、周縁部に刻線が残存している。W10も完形で釘孔は3孔である。また表面に不規則に線状の刃痕が入っている。

円形曲物蓋板 円形曲物蓋板(W28～W33)縁部内側に刻線、側板の押圧痕、結合木釘孔がある。W28は周縁面は傾斜し周縁に刻線が入る。またW29・W33は縁部に檜皮によるとじ孔1孔、W30・W32は結合木釘孔がこれも1孔あいている。W28を除きほぼ同サイズになる。

楕円形曲物 楕円形曲物(W34・W35) W34は周縁に低い段が巡り、内面には黒色の漆のようなものが認められる。W35は周縁がわずかに傾斜し、とくに段は巡っていない。

桶または樽 桶または樽(W36～W40) W36はかなり大きな曲物となる。周縁には面取りのあとがあり、また木口面には補修もしくは組合わせ用の木釘孔が2孔ある。W37は円柱状の栓がはまつており、W36同様の木釘孔が2孔ある。W38～W40も木釘孔が同様の位置に4もしくは2孔認められる。

円形曲物側板 円形曲物側板(W41～W49) W41・W42・W49は斜格子のケビキ、W43・W45は縦平行のケビキが入っている。檜皮はW43・W44・W46～W49で確認され、W48は内外面ともに不規則な刃痕が走っている。W47はほぼ完形に近く復元径は11.0cmとなった。

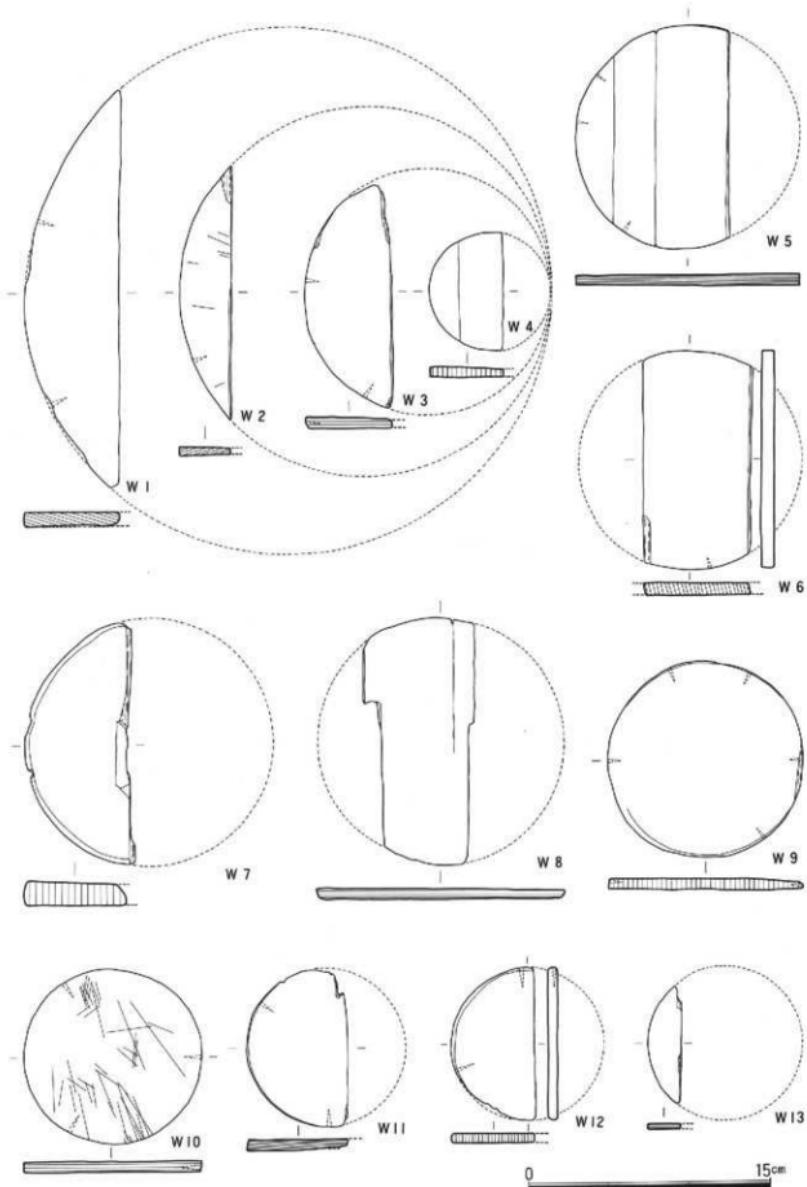
#### 挽 物 2. 挽物 (W50～W65)

内荒遺跡で出土した挽物は全部で16点であり、器種はすべて皿である。出土層もIV層平安時代の層である。木取りもすべて柾目材で横木取りである。サイズは1点11.5cmとやや小さいものもあるが、また1点23.7cmと大きめのものもあるが、残りは16～20cmの中にあてはまるものである。特徴的なのはW50～W58、W60～W64の底板内外面に線状の刃痕が不規則に入っていることである。また、口縁部にロクロ目がW50・W52・W54・W55・W57～W62・W64・W65などで認められロクロの使用が確認できる。さらにW50・W51・W63・W65ではロクロ爪跡が残存している。特にW51では5ヵ所の爪が顕著である。

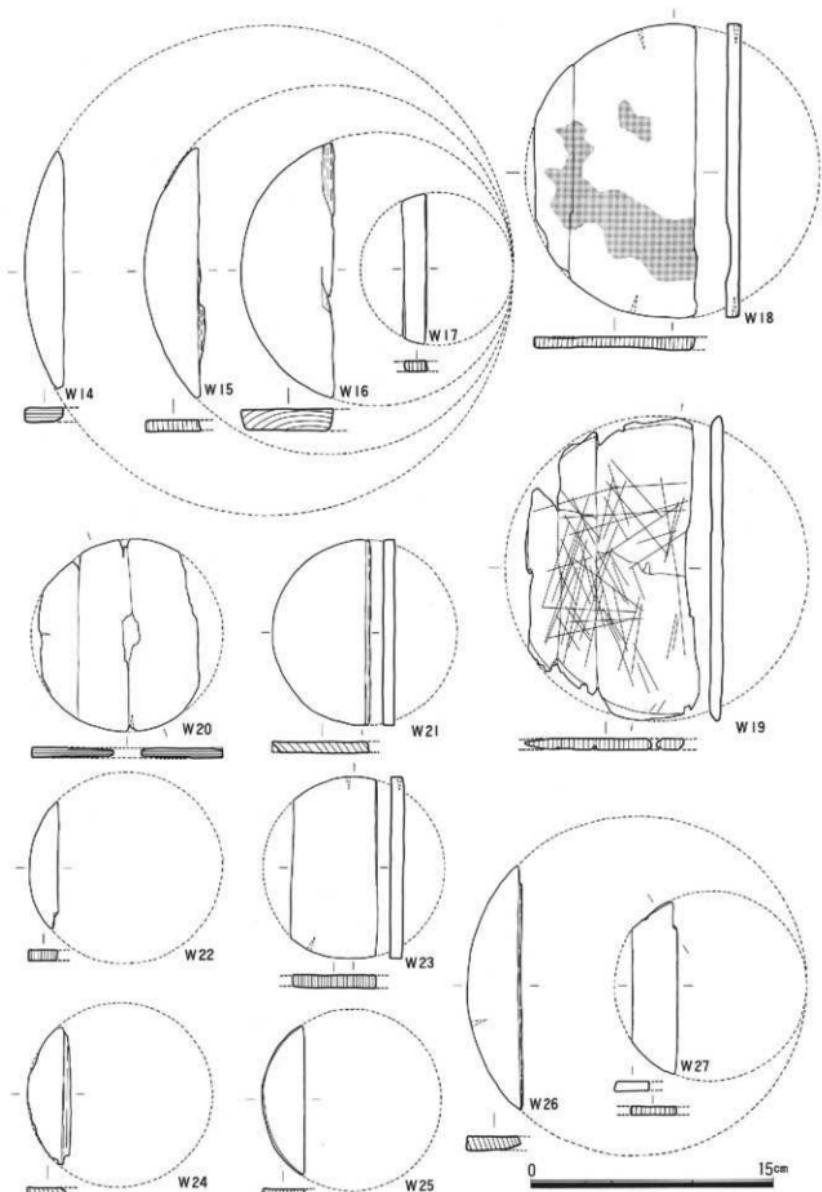
#### 剝 物 3. 剥物 (W66～W69)

III層で1点、IV層で4点出土している。W66は残存長33.7cmと大きなものであるがかなり薄く口縁部不明瞭であり、器形は不明である。W67は正方形に近い形をした完形の椀状剝物である。W68は皿、W69は円形鉢または椀と思われるが破片のため、器形は不明である。

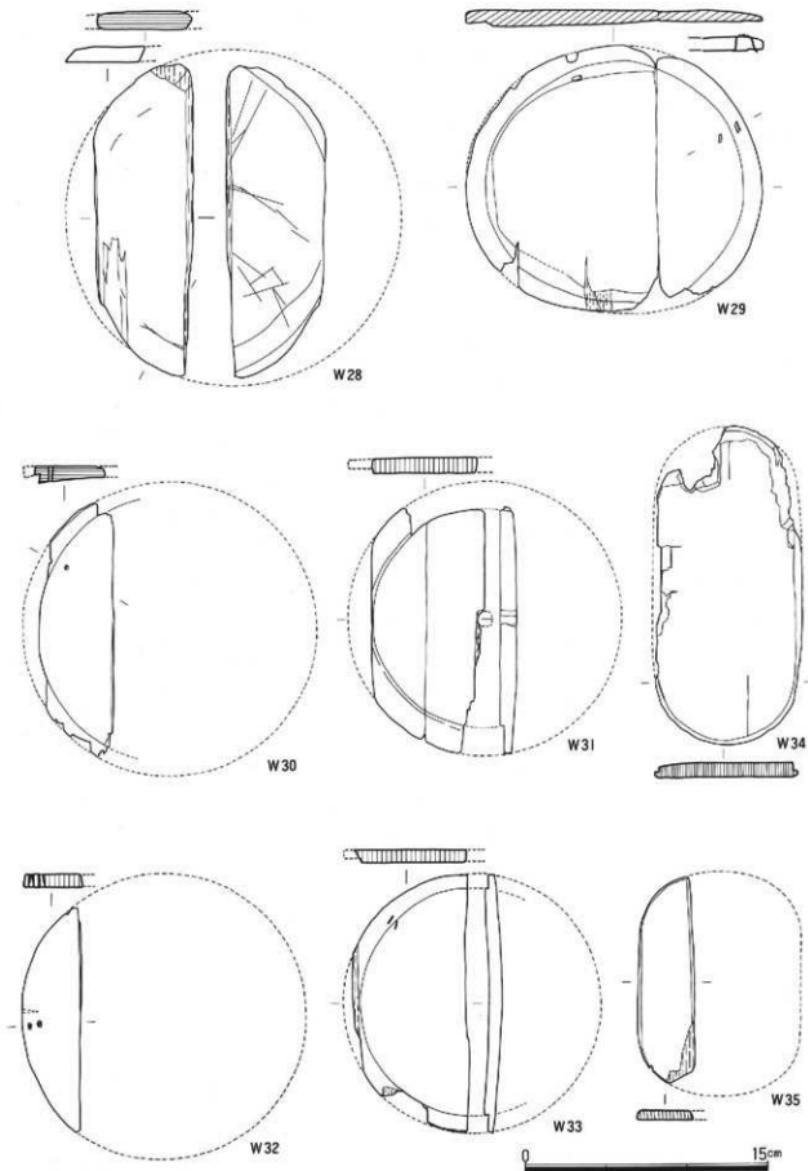
#### 漆 梗 4. 漆椀 (W70～W78)



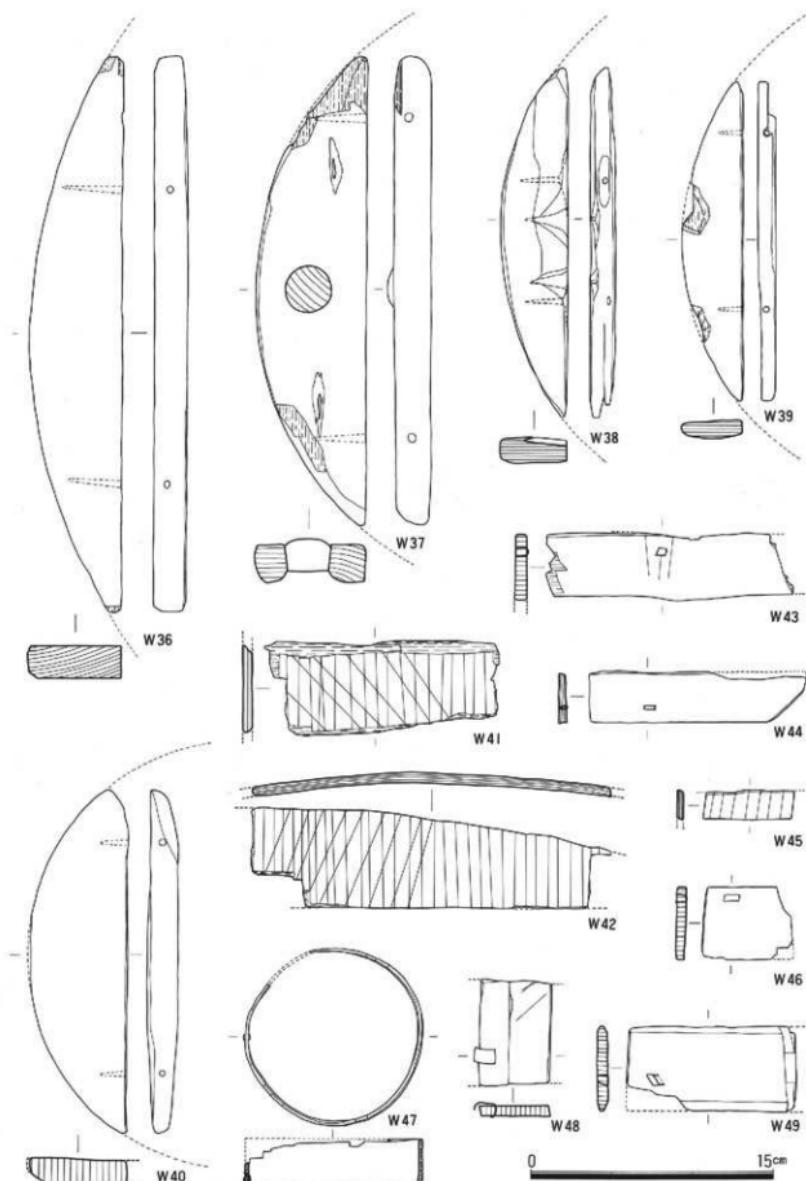
第50図 木製品実測図1 (曲物1)



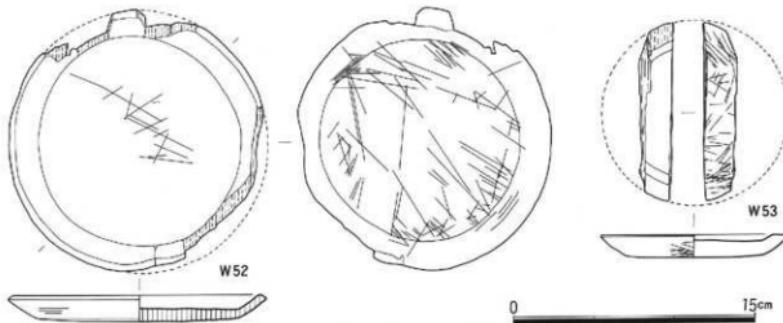
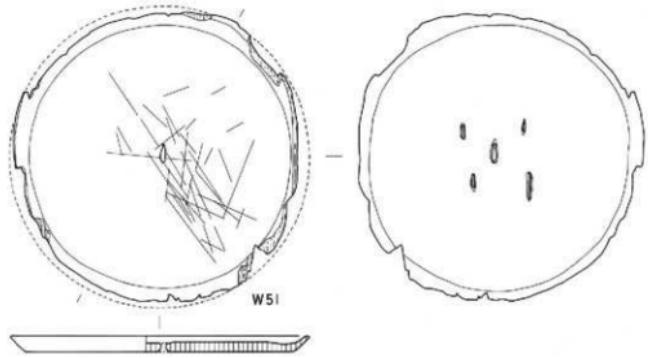
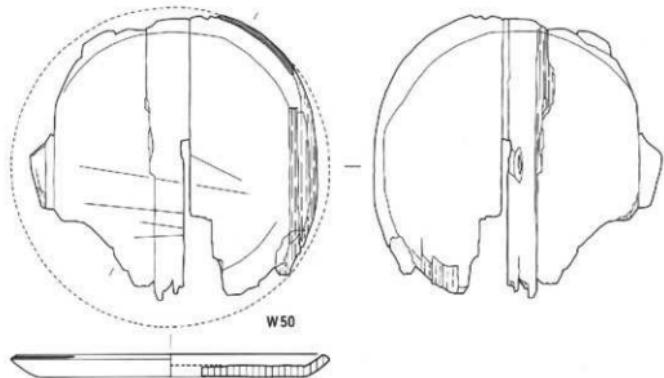
第51図 木製品実測図2 (曲物2)



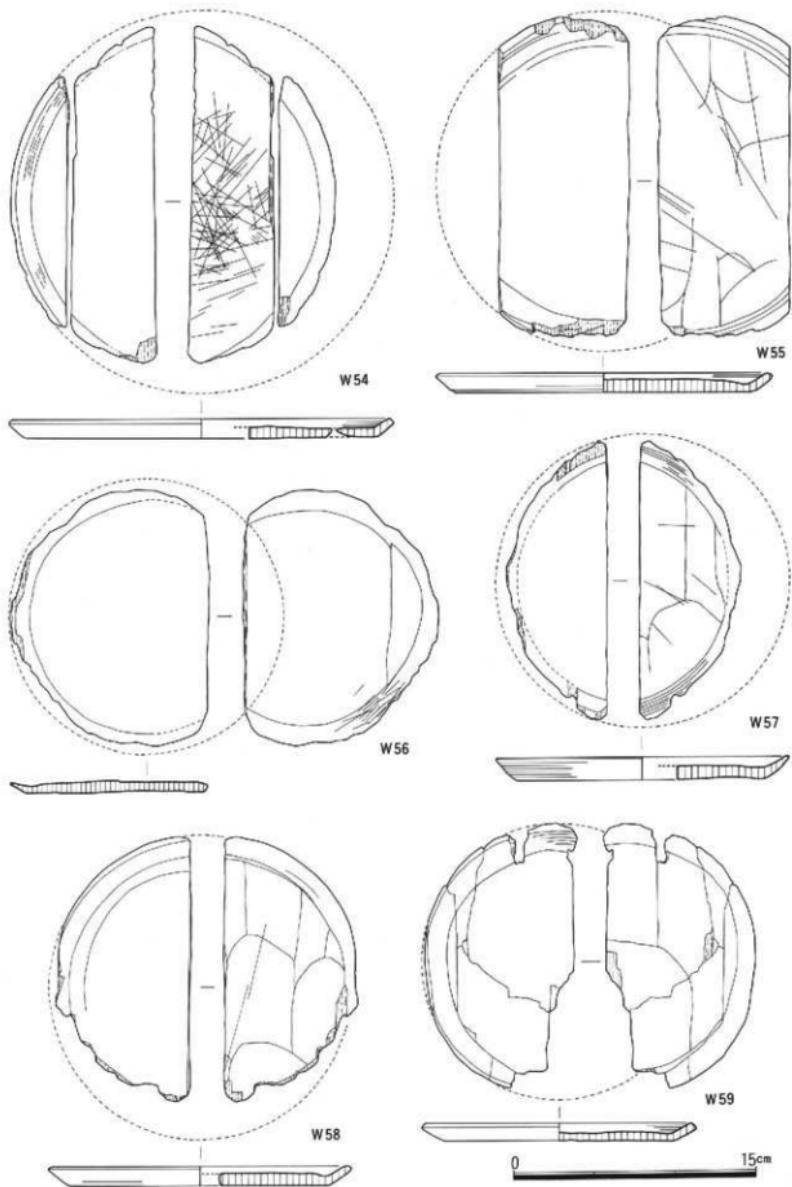
第52図 木製品実測図3（曲物3）



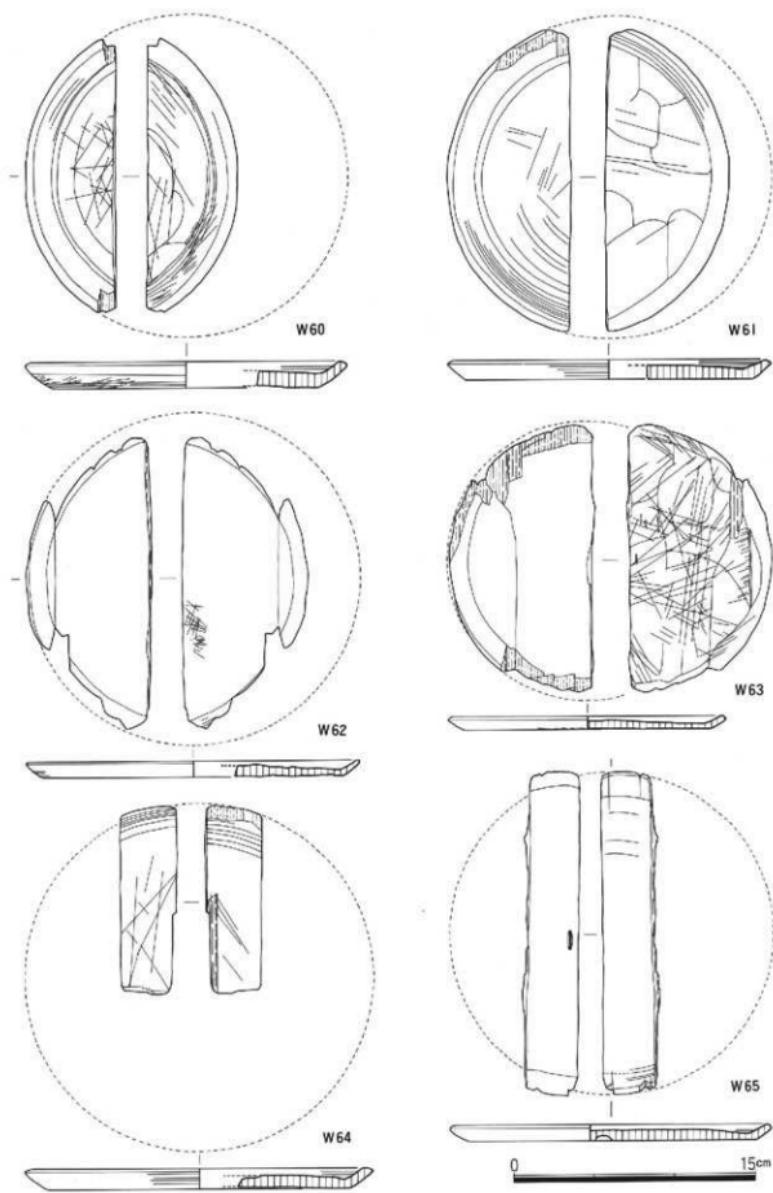
第53図 木製品実測図4 (曲物4・縛)



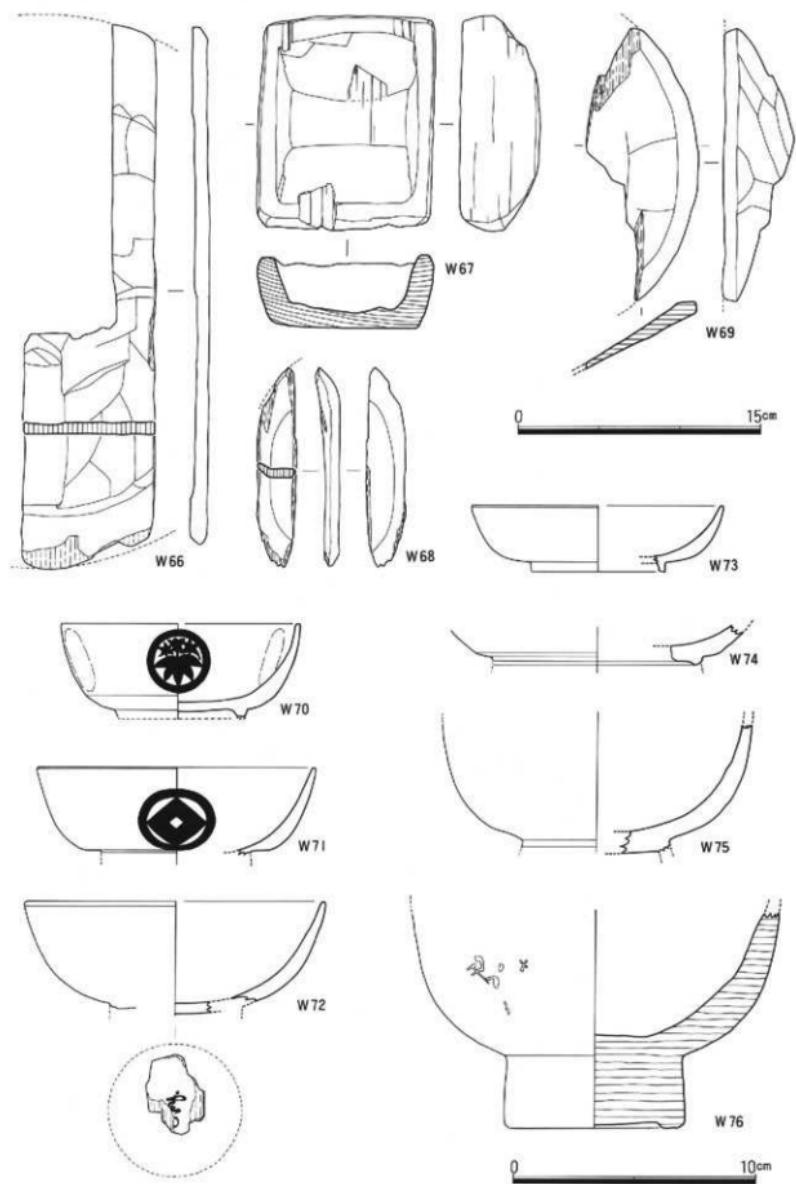
第54図 木製品実測図5 (挽物 1)



第55図 木製品実測図 6 (挽物 2)



第56図 木製品実測図7 (挽物 3)



第57図 木製品実測図 8 (刷物・漆椀)

II層で3点、III層で20点、IV層で14点出土している。実測図を作成した7点を以外は破片であるが、37点の形状はすべて椀となる。塗られている漆の色その内訳は、内面外面とも朱色が10点、内朱外黒が17点、内黒外朱が2点、ともに黒が6点、内面が朱で外面不明が1点となる。さらに筆跡を確認できるものが12点ある。W70はII層出土であり、時期的には新しいものであるが、ほぼ完形に近いものであり、内外面とも黒漆が塗布され3ヵ所に均等に朱色で家紋が施されている（丸に竜胆）。W71はIV層出土で、内面朱色、外面黒漆で3ヵ所に均等に朱色で紋が施されている（丸に菱形）。残りの筆跡10点はいずれも破片に施されたもので、外面に黒の筆跡が3点、内面に朱色の筆跡が1点、面不明で黒の筆跡が1点となっている。W72は内外面とも朱漆で、底部外面に判読不明の黒漆の文字跡が認められる。またW76には内面口縁部分及び外面高台にロクロ目が認められ、外面に朱漆の上絵のようなもののがみられる。

#### B. 食事具

食事具には箸形木器、杓子形杓子及び異形杓子がある。

##### 1. 箸形木器 (W77～W85)

III層で11点、IV層で6点の計17点出土している。木片を小割にし、棒状に整形したものである。断面が丸く整えられたものはほとんどなく、一部面取りをしたものが多い。完形品は少なく、W77・W78・W87の3点だけであるが、W77は長さが46.9cmもあり箸と断定しがたいものである。また、W87も長さが7cmと箸としては非常に短いものになっているが、ここでは一応端部の一方が先細りしているものを箸として登録したものである。W89はほぼ正方形に四面ともに面取りを行っている。

##### 2. 杓子形木器 (W98～W98)

1点出土層位が不明だが、3点とも14・15区の掘立柱建物群の一角より出土している。W96は身の先縁を一直線に、先縁部の両サイドを半円状につくっている。W97はこれもW96同様に身の先縁を一直線につくり身が長方形に整形されており、やや身幅が狭いものである。W98は身の先縁に向かって幅が狭くなり、先端部を半円状につくっている。身部分が17.3、柄部分が11.1cmと杓子としては大型のものである。W98は「めししゃくし」というより攪拌の用途をもったものではなかろうか。

##### 3. 異形杓子 (W115)

W115 1点だけ出土している。完形品である。奈文研の「木器集成」にもあるように板材を杓子形に象ったもので先端部をU字形に整形し、二股のフォーク状の形になっている。厚さはほぼ均等で2.5～2.8cmである。図版では工具として扱った。

#### C. 服飾具

服飾具としては、横櫛と下駄が出土している。

##### 1. 横櫛 (W99～W102)

W101・W102はIII層、W99・W100はIV層で出土している。W99はほぼ身部分は完形に近く、長方形のもので肩部がほぼ直に落ちる形のもので3cmあたりの歯数は25枚を数える。W100は身の部分が緩く弧を描いた形である。中央部分しか残存せず肩部については不明である。歯数は23枚である。W101は他の3点とは異なり歯の長さも短く、歯数も9枚と非常に疎離な感じのするものである。髪とは別のものに用いたものであろうか。W102は身の部分がこれもやや緩く弧を描き、端部は直に落ちている。歯数は21枚であり漆塗りの痕跡が認められる。

#### 筆 跡

家 紋  
丸に筆電組  
丸に菱形

#### ロ ク ロ 目

#### 食 事 具

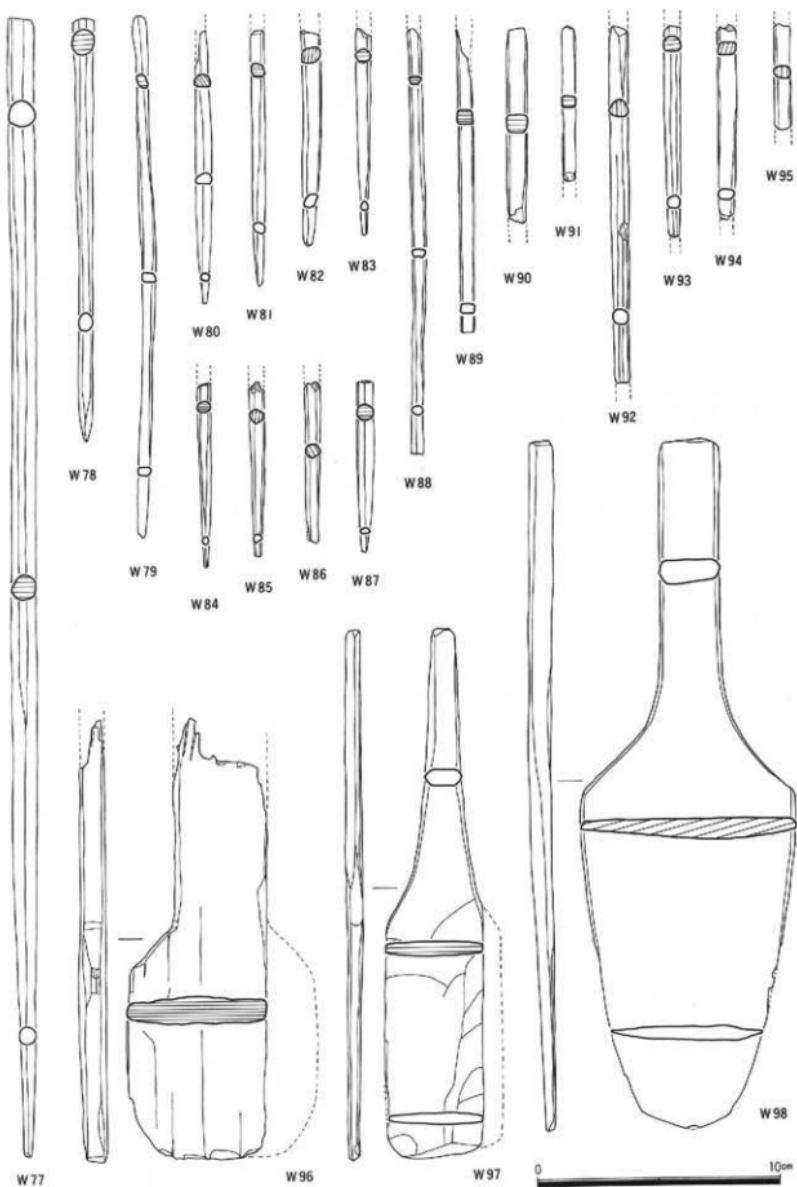
#### 箸 形 木 器

#### 杓 子 形 木 器

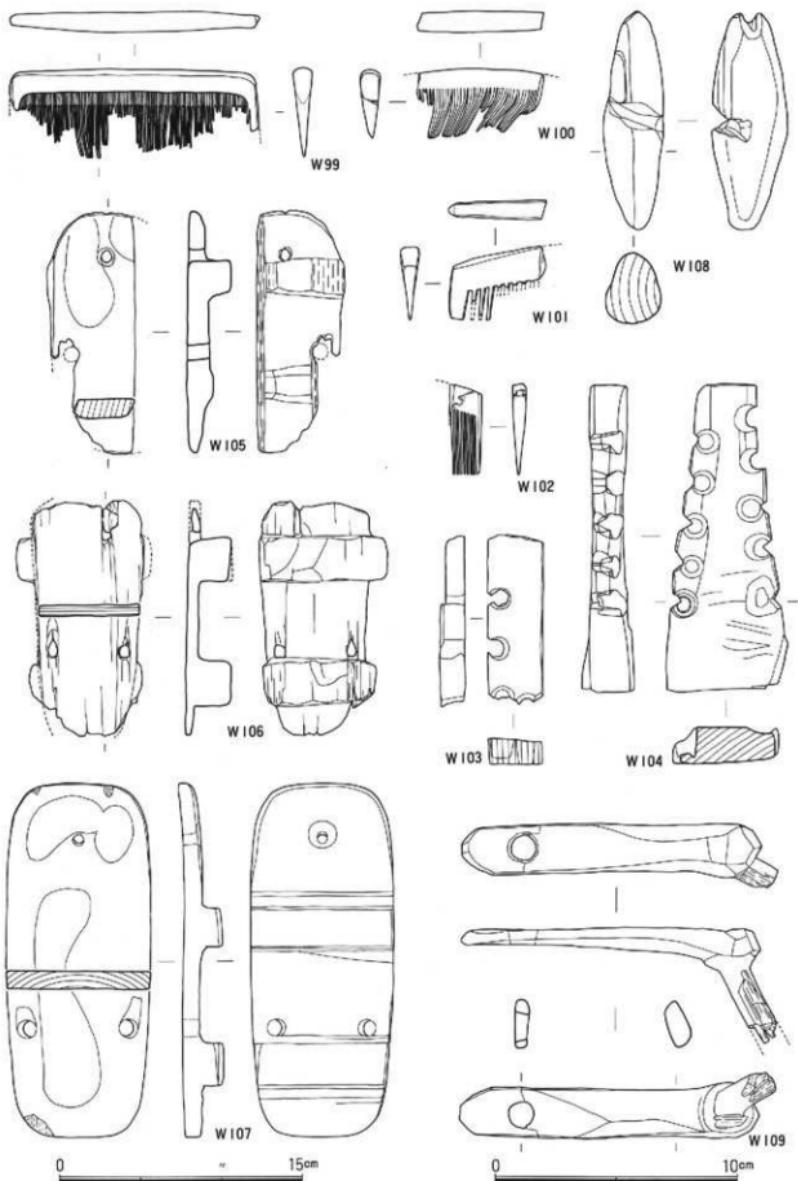
#### 異 形 杓 子

#### 服 飾 具

#### 横 櫛



第58図 木製品実測図 9 (食事具)



第59図 木製品実測図10（服飾具他）

## 下 駄 2. 下駄 (W105~W107)

### 連 畫 下 駄

3点いずれも連駄下駄である。W105・W106はIV層、W107はII層出土の新しいものである。W105は平面形で前幅が後幅よりも広くなり、前後両孔とも歯の前にあけられている。前孔の位置はほぼ中央である。W106は平面形でこれも前幅の方が広くなり、前孔は右寄りにあけられ左足を示している。両孔とも歯よりも前にあけられている。この下駄の特徴として台部に比べ歯部がかなり大きくつくられていることに気が付く。また、両方とも長さが14~15cm前後とかなり小さいことである。W107はII層出土であり、時代的には新しいものであり出土状態もかなり良いものである。前孔の位置は中央で後孔に比べ孔の径が小さくなっている。やはり孔は歯の前部分にあけられている。平面径は隅丸の長方形であり、前歯から前先端部分までの距離がやや長めであるのが特徴である。

### その他の生活具

#### D. その他の生活具

ここでは火錐板、鎌、鋸、鎌、砧、櫛形木器をあげる。

### 火 锥 板

#### 1. 火錐板 (W103・W104)

III層で2点出土している。W103は4個の臼を持ち木口部分に臼が2つあけられている。W104は片側端部が狭くなるもので10個の臼があけられ1個は未使用である。

### 農 具

#### 2. 農具 (W110・W111)

ともにIV層出土である。W110は一本鋤の身部分である。肩部の張りがやや小さく、鉄鋤先をはめる着装部があまり明瞭ではないが、縁部が画面から斜めに削り込んで、刃先状に整えられており鋤の鋤先をつけたことを示しているものと思われる。W111は鋤の未製品である。形状はなすび形で柄部分の着装部があまり顕著ではないが残存している未製品である。

### 鎌

#### 3. 鎌 (W112)

IV層出土。上面の両端から中央部を残し、両側を深く削り橋形の握り柄をつくり出す。平面形はほぼ隅丸長方形、中央部は平面平坦であるが、長軸方向両端部は曲面をなす。完形品。

### 横 棒

#### 4. 横棒 (砧) (W113・W114)

IV層出土。W113は削材からつくり出したもので、身と柄が明瞭に分かれさらに柄尻をやや太く削り残している。完形品である。一面がかなり摩滅しており殴打による窪みであると思われる。W114は心持丸太材からつくり、これも身と柄が明瞭に分かれるものである。断面は正方形に整形されている。W113に比べやや身部分が短めであるが、全長はほぼ同じである。殴打面はあまり明瞭ではないが一面がかなり摩滅しており、ここが使用面であろう。柄尻はとくに顕著な加工は施していない。

### 杓木(櫛)形木器

#### 5. 斧子(櫛)形木器 (W116)

IV層出土である。柄の部分と水かきにあたる身の部分に分かれる。肩部が片方だけ残存し、この肩部から水かき先端部に向かって片面だけを薄く削り出す。水かき先端部は半円状にやや鋸く作り出している。柄部断面はほぼ長方形を示し、先端部は尖っている。完形品である。櫛にしてはやや短い感じであり、斧子として搅拌用に用いたものである可能性もある。

### 祭 記 具

#### E. 祭記具

祭記具は位牌、陽物形、剣形、刀形、斉串(5)、木簡状木片(2)が出土している。出土層位は位牌がIII層、刀形がIV層上面の礫層の他はすべてIV層である。

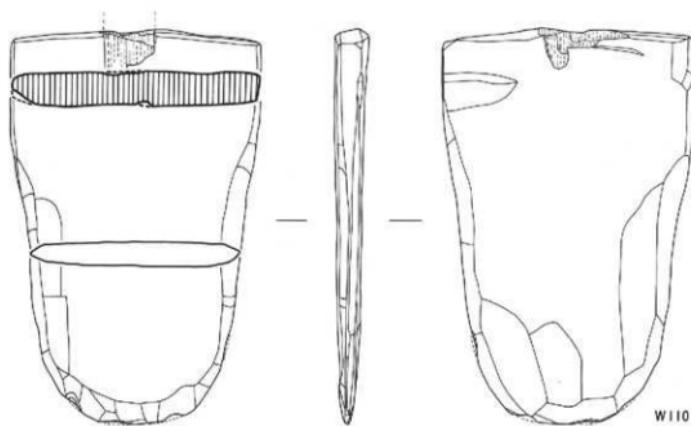
### 位 牌

#### 1. 位牌 (W117)

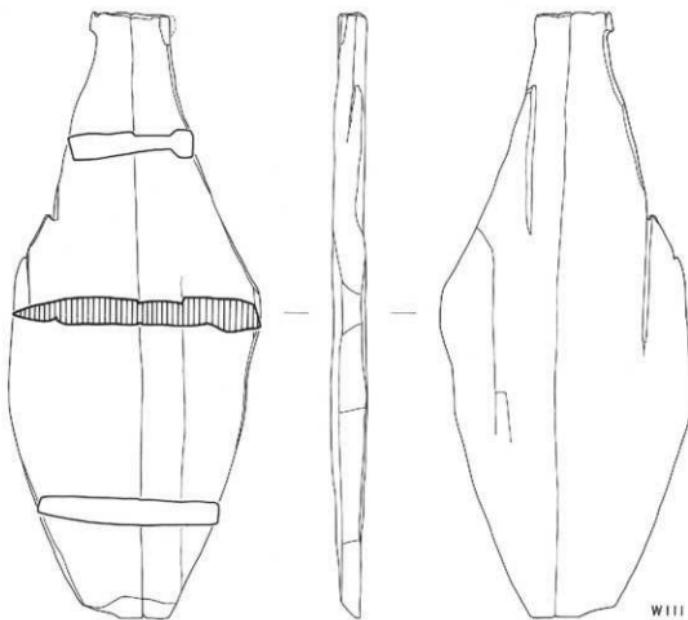
表裏に部分的に漆塗が残存する。頭部が完形品となっている。

### 陽 物 形

#### 2. 陽物形 (W118)



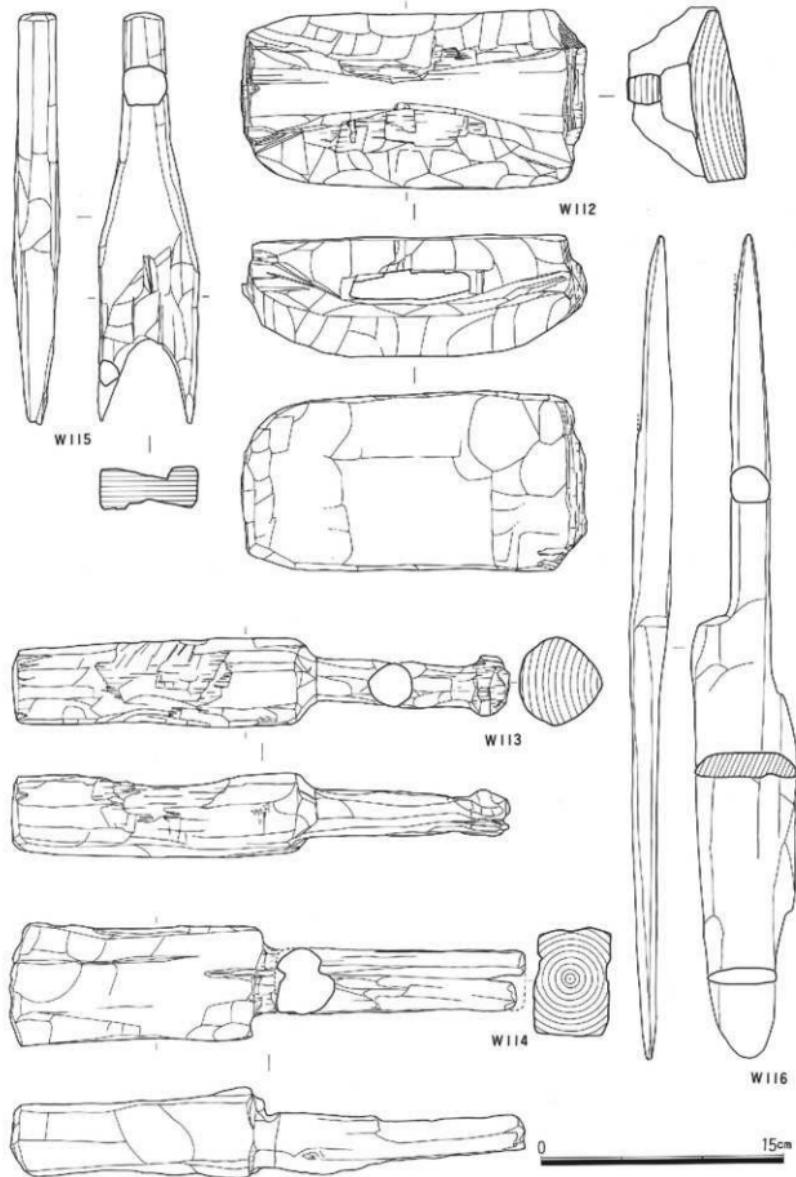
WIII



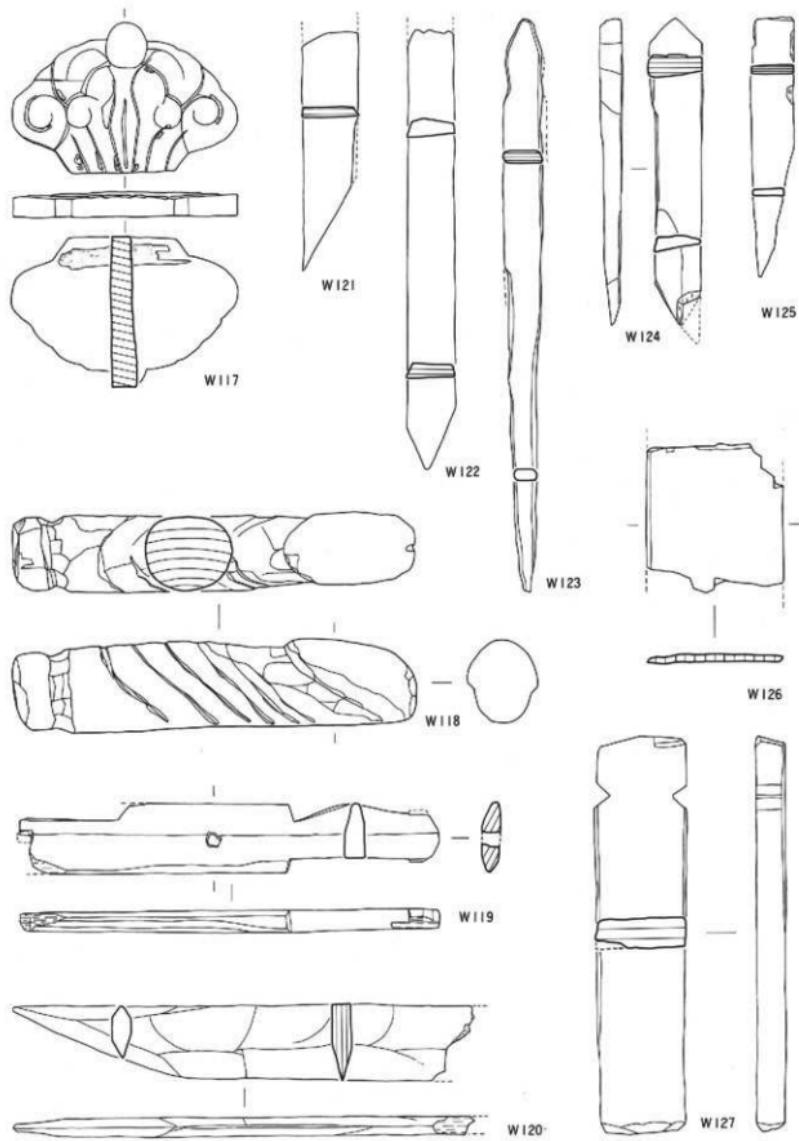
WIII



第60図 木製品実測図11（農具）



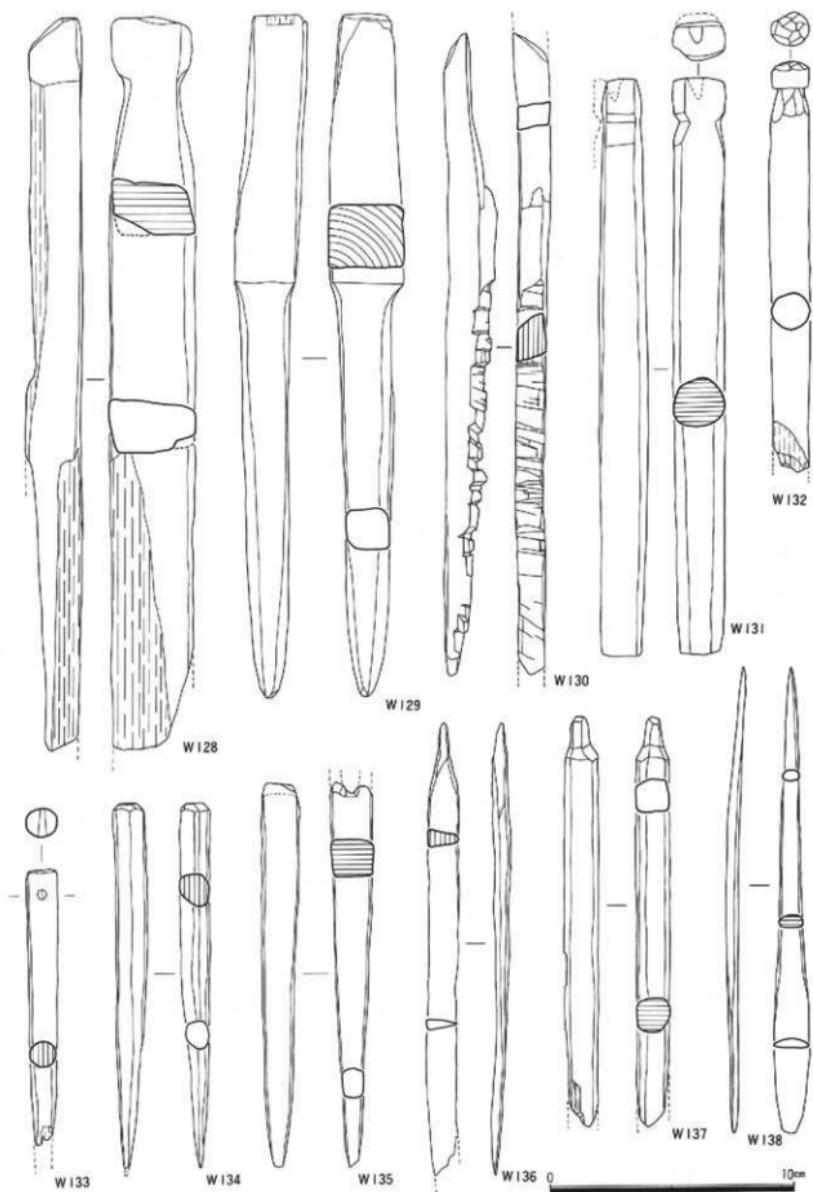
第61図 木製品実測図12（その他の生活具）



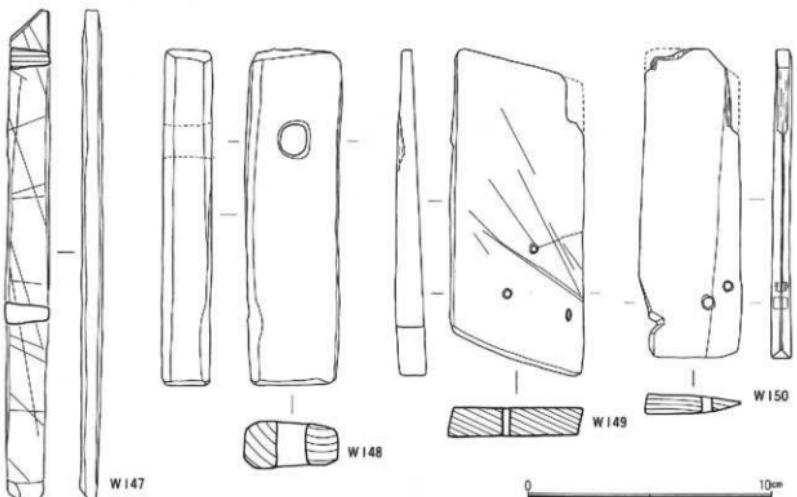
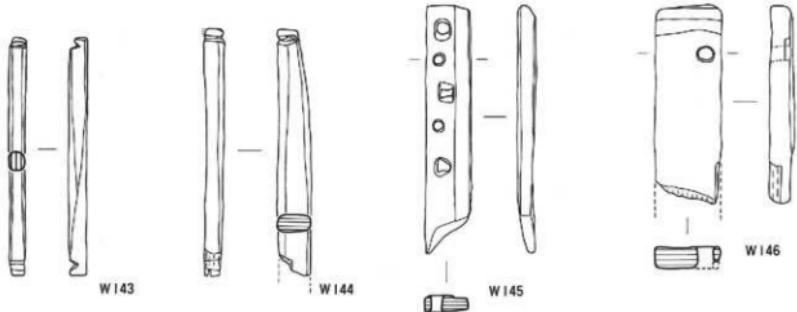
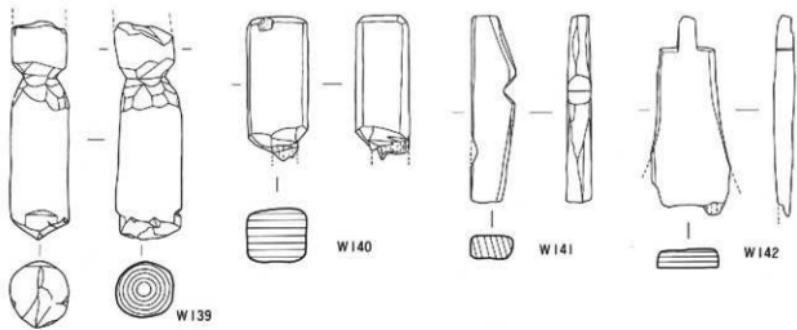
0 10cm 0 5cm

第62図 木製品実測図13（祭祀具）

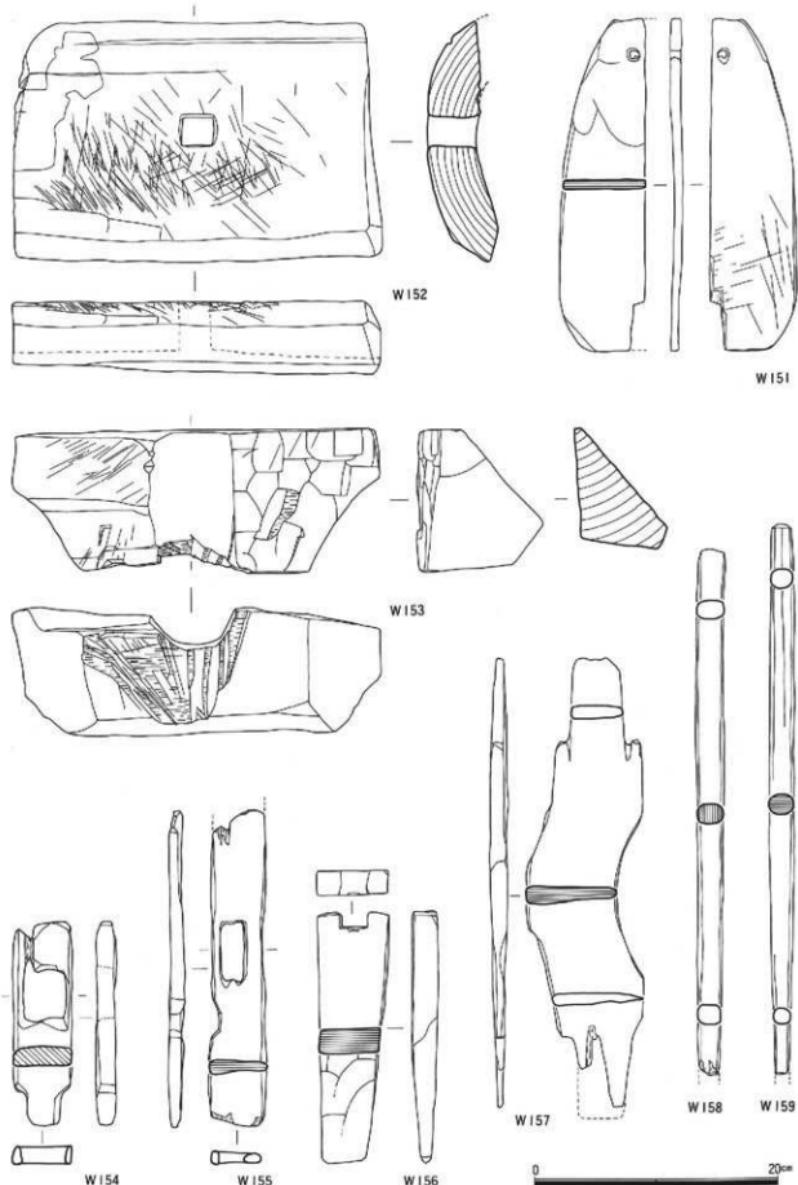
- 割材の一端を写実的に亀頭形に加工した完形品である。亀頭の対部に紐でも掛けるような溝状の抉りが入る。また、中央部には5筋の溝が螺旋状に刻まれている。
- 刀 形 3. 刀形 (W119)**  
W119柄の部分と身の一部が残存する。柄の片側が弧を描き、他の側が直線に削られるところが特徴であろう。
- 劍 形 4. 剣形 (W120)**  
W120 1点出土している。端部が欠けているが、刃の部分はナイフ状に加工され片刃がつけられている。
- 簫 軸 5. 簫軸 (W121～W125)**  
W121は劍形に類似するが、刃が削り出されていないので一応、簫軸状木片として分類した。端部は一側面から斜めに切り落とされている。また他の端部は片側がやや斜めに切られているが明瞭ではない。W122は一端を圭頭状につくったものであり、W123は一端部を圭頭状に削り出し、さらに片側に切り込みを1ヵ所いれているが明瞭ではない。また、反対の端部は少しづつ細く削っている。W124は一端部を圭頭状に加工し、反対の端部はW121同様一側面より斜めに切り落とす。W125は端部を斜めに切り落とし、他の端部は平らである。
- 木 簫 6. 木簫 (W126・W127)**  
W126は両端部が欠損しており墨と思われる痕跡もあるが、文字として判読することが困難である。W127は一端部の両側に切り込みを1ヵ所ずつ入れた完形品であるが、墨痕は認められない。
- 用途不明品 F. 用途不明品**
- 棒状木製品 1. 棒状木製品(W108・W109・W128～W135・W137・W139・W140・W158・W159)**  
W108は割材で浮き形をした完形品でⅢ層出土である。一側面と、片側木口面に不規則な溝が刻まれている。留め具のようなものであろうか。W109は枝と幹を利用した有孔木器である。ちょうどゴルフのバターのような形をしている。先端部は明瞭ではないが刃のように削り落されているように見える。W128は端部に抉りを入れ有頭状にくり出している。W129はやす状につくられた完形品である。柄と身の部分につくり出されており、柄部の断面はほぼ正方形である。また身部は先端部に向け四面とも面取りされ細く削り出され尖っている。W130は一側面に刃物による無数の凹凸が認められ、刃物による切り出しの練習か、なにかをつくり出す途中の未製品であろうか。両端は炭化し消失している。W131は有頭状に加工されこの有頭部木口に茎孔状の溝が刻まれている完形品である。W132は心持材の有頭棒である。有頭部は丁寧に加工されている。W133は木目に平行に木釘が貫通している。端部は欠損している。W134は基部が面取りされており、先端部は細く尖らせている。W135は断面がほぼ正方形の先端部は細く尖るもので、他の端部には中央部に円形の孔が穿たれていたと思われる窓みが認められる。W137は角棒状品で端部が四方から削り出され一段細く加工されている。W139は心持材を利用した有頭棒の有頭部分である。欠損している。Ⅲ層出土。W140は断面が長方形をしている有頭棒の有頭部と思われる。W158、W159はそれぞれ長さ(43.4cm)(45.3cm)、幅2.3cm、2.0cm、厚さとともに1.7cmというように非常に類似した形をしている。出土遺構も同じであり、共通する木製品であろうと思われる。
- 板状木製品 2. 板状木製品 (W136・W138・W141～W157)**  
W136は端部を鋭角に尖らせた板材である。W138もまた一端部を鋭角に錐状に尖らせ、他の端部を箆状に削り出している。完形品である。W141は一側面を切り欠いている完形品



第63図 木製品実測図14（用途不明品 1）



第64図 木製品実測図15（用途不明品 2）



第65図 木製品実測図16 (用途不明品 3)

である。切り欠きは紐等を掛けるためのものであろうか。馬形か?。Ⅲ層出土。W142は端部を角状に削り出し、他の材と組合わせるような形をなしている完形品である。W143・W144は共に両端もしくは片端に切り欠きを持つものである。紐を引っ掛けたか結びつけて使つたものであろうか。W143はⅢ層出土である。W145は5つの孔を持つ板材である。孔は互い違いに両面から開けられている。W147は端部を片側から斜めに切り落としており、片面には無数の刃痕が刻まれている。Ⅲ層出土。W148は端部近くに径1cm程度の孔が開けられた完形品である。W149は平面形では平行四辺形となり、端部片側に偏って3つの孔が三角形を描くように開けている。紐を通したものか。Ⅲ層出土。W150は端部片側に紐を掛けようの切り欠きが1つあり、その反対側に2つの大小の孔が開けられている。また孔側の側面には刃状のものがつくられている。孔に紐を通し、手のひらに引っ掛けたか使うようなものではなかったか。(木包丁?)W151は瓜を1/4に縦割りし両端を切り落としたような形をしている。瓜でいうへたに近い側に孔が開けられ、対側に他の材と組合さるような切り欠きがある。W152は断面がやや弧を描くように反り、中央部にやや横長の角孔が開けられている。また外面にあたる面には無数の不規則な刃痕がある。この面を上に置いた座りがやや傾斜して作業台等に使い勝手が良さそうである。W153は平面形では台形となりその中央部に半円筒形の切り欠きを持つ。この切り欠き部に杭などの丸太材が組合ったものだろうか。W154は板材の一木口に穴をつくり、さらに角柱など角材を挿込む柄孔が開けられている。W155は両端を欠き、中央部に柄孔を開いた板材である。柄孔の脇側には切り欠きがつくられている。W156は一木口に切り欠きを持つ楔状の木器である。W157は軸の前後輪のような形をしている。両木口を他の部材と組合せたものか。棒のようなもの的一部分か。

#### 井戸材

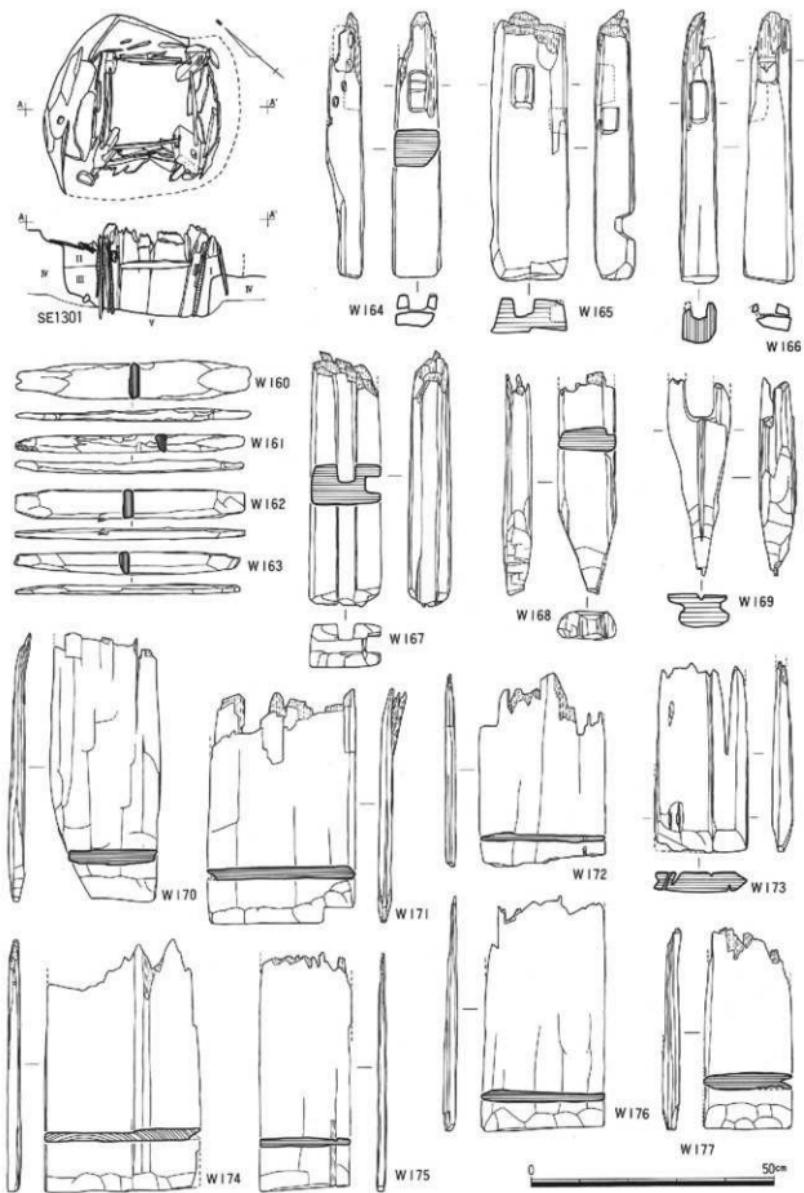
##### G. 井戸材 (W160～W177)

W160～W177は13区北西隅に検出されたSE1301の井戸材である。W160～W163は北、西、南、東の各辺で検出した横木である。サイズはいずれもほぼ同じであり、両端がやや細く両側から削られ各柱材と組合さるよう加工されている。W164～W167はそれぞれ北、南、東、西側の内側の柱材である。W164は上部に柄孔がつくられ、W165は柄孔が上部の平面及び側面につくられている。また、下部には片面に木目に直角に溝がつくられ柱等の建築部材を紐などで引くための一次的な加工であろうか。W166も上部に柄孔が開けられ孔を開けた同面に木目に平行して溝がつくられている。W167は柄孔はないが、直交する2面に他の板材等と組合さるような溝が木目に平行してつくられている。W168・W169は各柱材の外側にさらに立てられていた柱でそれぞれ東、西にあったものである。補強のためであろうか。両方とも一端部を両側より削り先端を尖らせ、土に打ち込みやすくしている。W169は他の端部中央に角状の切り欠きを持ち、他の材と組合さるよう加工されている。

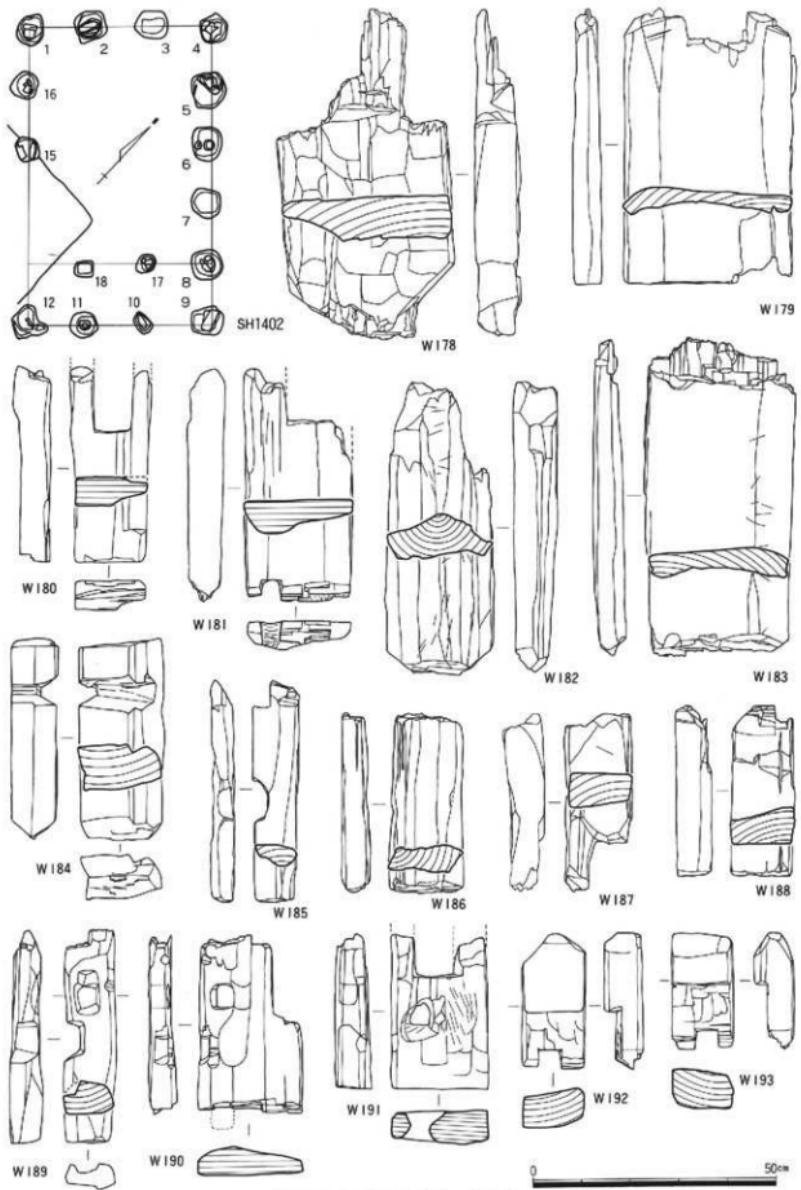
W170～W177は各側面の井戸板材になる。W170・W171は西側で検出されたもので、ともに先端を両側から削り打ち込みやすく加工し、両側面に板剥ぎの仕口が入る。W172・W173は北側で検出されたもので、ともに先端を両側から削り打ち込みやすくしたものであり、また両側面に板剥ぎの仕口が入る。W172は先端に円形の小孔が開いている。W174は南側の板材で、先端は片側より削り、また片側面に板剥ぎの仕口が入っている。W175は東側の板材で、先端は片側より削り、横木の装着痕が残存する。W176は北側の板材で、先端は片面より削り、片側面に板剥ぎの仕口が入る。W177は東側のこそぎであり、両側より削り、両側面に板剥ぎの仕口が入る。

#### 襍 板

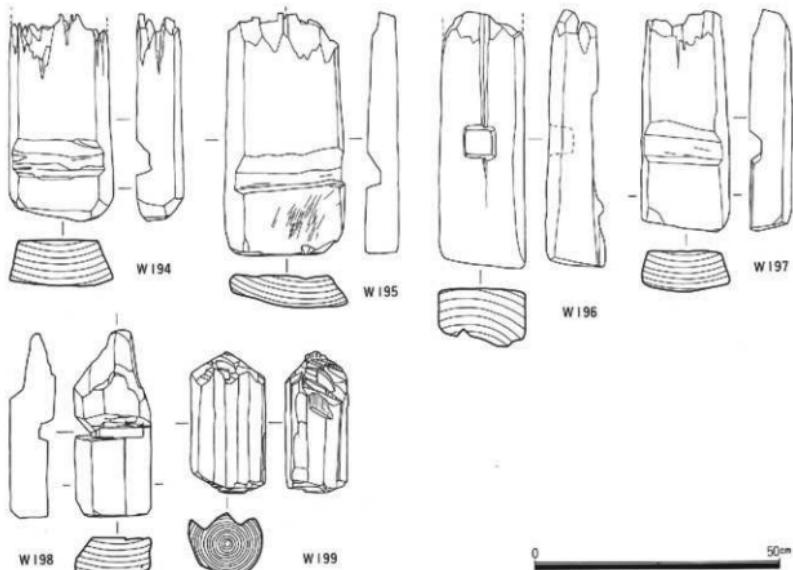
##### H. 襪板 (W178～W183)



第66図 木製品実測図17（井戸材）



第67図 木製品実測図18 (硬板)



第88図 木製品実測図19(柱根)

W178～W193は14区IV層の掘立柱建物群中のSH1401出土の礎板である。内荒遺跡全体で礎板は90枚確認されている。このうち16枚を紹介する。木取りはすべて板目である。W180・W181・W190～W193は柄孔を持ち、W181・W187～W190は切り欠きを持ち、W184・W191は木目に直交する溝を持っている。これらの礎板の内、W179とW183、W187とW188、W192とW193は同一個体と思われる。また、W181の加工痕より使用した工具の刃幅を測定し、5.2cmという数値を得た。

#### 1. 柱根 (W194～W199)

柱 根

W194～W199は柱根である。14・15区IV層出土のもので、掘立柱建物、柵列からのものである。木取りはW199を除き板目の割材である。この柱根は内荒遺跡全体で61点確認されている。W194はSH1504出土のもので切り欠き溝を持った割材である。W195はSH1502出土のものでやはり切り欠き溝を持つ。W196は掘立柱建物とは認識できなかったが、SP1589から出土したものである。柄孔と仕口をもつた割材である。W197はSH1501出土のもので切り欠き溝を持つ。W198はSA1402からのもので、やはり切り欠き溝をもつ。W199はSH1401出土のもので木目と平行し、並列で2本の溝を持っている。木取りは心持ち材である。

#### その他

なお、前述したように15区掘立柱建物群の溝からは先端が焦げたもえさしのような木片もえさしがコンテナにして23箱出土している。このや焼け焦げは両端もしくは片端にあるもので、特に顕著な加工痕は認められず、小刀のようなもので割り裂いたような感じである(図版46)。

第33表 木製品一覧表1

図	番号	遺物名	出土地点	出土層位	直径	厚さ	木釘数	樹種	木取	備考	
	W1	円形曲物(底板)	F74	III	(32.6)	0.9	2	スギ	板目		
	W2	円形曲物(底板)	SD1510	IV	(22.8)	0.6	1	スギ	板目	縫状の刃痕	
	W3	円形曲物(底板)	D79 SD1510	IV	(15.2)	0.7	2	スギ	板目		
	W4	円形曲物(底板)	E78 SD1484	IV	7.3	0.6	-	モミ	板目		
第	W5	円形曲物(底板)	D60	IV	14.0	0.7	3	スギ	板目		
	W6	円形曲物(底板)	SD1603	II	(13.8)	0.8	1	ヒノキ	板目		
50	W7	円形曲物(底板)	E75	III	(15.3)	1.5	-	スギ	板目	周側面に溝状の着装痕	
	W8	円形曲物(底板)	SD1517	IV	15.3	0.7	-	スギ	板目	表面黒色(漆塗りか)	
図	W9	円形曲物(底板)	SD1601	II	12.2	0.7	6	モミ	板目	完形 局部に刻線	
	W10	円形曲物(底板)	F79 SD1419	IV	11.0	0.7	3	ヒノキ	板目	完形 表面に縫状の刃痕	
	W11	円形曲物(底板)	G78 SD1416	IV	(9.8)	0.7	2	スギ	板目	周側面がわずかに傾斜	
	W12	円形曲物(底板)	D79 SD1510	IV	9.4	0.6	2	スギ	板目		
	W13	円形曲物(底板)	D73	IV	(9.5)	0.4	-	スギ	板目		
	W14	円形曲物(底板)	D75	III	(30.3)	1.0	-	スギ	板目		
	W15	円形曲物(底板)	D74	III	(22.7)	0.7	-	サワラ	板目		
	W16	円形曲物(底板)	排水溝		(16.8)	1.3	-	スギ	板目	表面黒色(漆塗りか) 周側面がわずかに傾斜	
	W17	円形曲物(底板)	D63	III	(9.4)	0.7	-	ヒノキ	板目		
第	W18	円形曲物(底板)	F74 SD1421	IV	18.2	0.8	2	スギ	板目	焼痕	
	W19	円形曲物(底板)	F74	IV	18.8	0.7	-	ヒノキ	板目	周側面が傾斜 表面に縫状の刃痕、焼痕	
51	W20	円形曲物(底板)	麦採		(11.8)	0.6	2	スギ	板目		
	W21	円形曲物(底板)	SD1601	II	11.5	0.7	-	モミ	板目		
図	W22	円形曲物(底板)	E79	III	11.8	0.7	-	スギ	板目		
	W23	円形曲物(底板)	F78	IV	11.2	0.8	2	スギ	板目		
	W24	円形曲物(底板)	E68	III	11.4	0.7	-	スギ	板目		
	W25	円形曲物(底板)	C64	IV	(11.2)	0.6	-	スギ	板目	周側面がわずかに傾斜	
	W26	円形曲物(底板)	E75	IV	(21.0)	0.9	1	スギ	板目		
	W27	円形曲物(底板)	D69	IV	(11.8)	0.5	-	スギ	板目		
図	番号	遺物名	出土地点	出土層位	外径	内径	厚さ	縫穴数	樹種	木取	備考
	W28	円形曲物(蓋板)	F74 SD1402	IV	(20.8)	-	1.1	-	スギ	板目	周縁に刻線(櫛板のアタリ) 周側面は傾斜
	W29	円形曲物(蓋板)	F79 SD1417	IV	18.3	16.0	1.0	2	スギ	板目	
第	W30	円形曲物(蓋板)			(18.2)	(16.3)	1.2	1	スギ	板目	
52	W31	円形曲物(蓋板)	F79 G79		(17.0)	(13.6)	1.0	-	スギ	板目	表面黒色(漆塗りか)
図	W32	円形曲物(蓋板)	D80		(17.6)	-	0.9	1	スギ	板目	結合木釘が1カ所
	W33	円形曲物(蓋板)	G84	III	(16.0)	(14.0)	0.8	1	スギ	板目	

第34表 木製品一覧表2

図 番号	遺物名	出土地点	出土 層位	長辺	短辺	厚さ	樹種	木取	備考
第 52 回	W34 檜円形曲物	SD1601	II	19.7	9.0	0.9	ヒメコマ ツ又は チョウセ ンゴヨウ スギ	板目	周縁に段 内面に黒色の 漆?
	W35 檜円形曲物	C67	III	12.7	3.5	0.7	スギ	板目	周縁面にわずかに傾斜
第 53 回	W36 櫛あるいは櫛 表探			(66.0)		2.1	-	板目	木口面に補修(組合せ)用 木釘2カ所 周縁に面取 り
	W37 櫛あるいは櫛 SD1601		II	(39.6)		2.3	スギ	板目	円柱状の栓 木口面に補 修(組合せ)用木釘2カ所
第 53 回	W38 櫛あるいは櫛		櫻層	(35.8)		1.6	スギ	板目	木口面に補修(組合せ)用 木釘4カ所
	W39 櫛あるいは櫛 SD1527		IV	(32.6)		1.1	スギ	板目	木口面に補修(組合せ)用 木釘2カ所
第 54 回	W40 櫛あるいは櫛 E79		III	(26.5)		1.9	スギ	板目	木口面に補修(組合せ)用 木釘2カ所 周縁に面取 り
図 番号	遺物名	出土地点	出土 層位	長さ	幅	厚さ	樹種	木取	備考
第 55 回	W41 曲物(舞板)	D79 SD1510	IV	[14.6]	[5.8]	0.6	スギ	板目	斜格子のケビキ
	W42 曲物(舞板)	SD1510	IV	[22.3]	[6.0]	0.6	スギ	板目	斜格子、継平行のケビキ
第 56 回	W43 曲物(舞板)	F77	III	[15.3]	[4.0]	0.8	スギ	板目	桺皮 縦平行のケビキ、 切欠き
	W44 曲物(舞板)	D74	III	[13.4]	3.2	0.5	ヒノキ	板目	桺皮
第 57 回	W45 曲物(舞板)	G84	III	[5.6]	[1.8]	0.4	スギ	板目	継平行のケビキ
	W46 曲物(舞板)	E78 SD1484	IV	[5.5]	4.5	0.6	スギ	板目	桺皮
第 58 回	W47 曲物(舞板)	F78	IV	-	3.0	0.3	ヒノキ	板目	縫じ合せ用桺皮、側板に よる復原径 内面に黒色 のヨゴレ?
	W48 曲物(舞板)	F75	III	[4.4]	6.6	0.6	スギ	板目	桺皮 内外面ともに線状 の刃痕
第 59 回	W49 曲物(舞板)	E64	IV	[10.5]	5.2	0.6	スギ	板目	桺皮 斜平行のケビキ
図 番号	遺物名	出土地点	出土 層位	外径	内径	底径	高さ	樹種 木取り 木取材)	備考
第 60 回	W50 挑物(皿)	E78 SD1478	IV	(19.8)	(16.8)	(16.6)	1.4	ヒノキ 横木取り 板目	口縁端部にロクロ目 底 部内面に線状の刃痕、底 部外面にロクロ爪跡
	W51 挑物(皿)	E78 SD1478	IV	(18.5)	(16.1)	(16.5)	1.0	ヒノキ 横木取り 板目	底部内面に線状の刃痕 底部外面にロクロ爪跡が 中央、上下左右に計5カ所
第 61 回	W52 挑物(皿)	SD1513	IV	16.5	12.2	12.4	1.7	ヒノキ 横木取り 板目	口縁部外面にロクロ目 底部内外面に線状の刃痕
	W53 挑物(皿)	C59	IV	(11.5)	(8.3)	(8.8)	1.4	ヒノキ 横木取り 板目	口縁部、底部外面に線状 の刃痕
第 62 回	W54 挑物(皿)	F74 SD1421	IV	(23.7)	(21.5)	(21.1)	1.2	ヒノキ 横木取り 板目	口縁内面にロクロ目 底部外面に線状の刃痕
	W55 挑物(皿)	SD1510	IV	(20.9)	(17.5)	(18.3)	1.2	ヒノキ 横木取り 板目	口縁部内外にロクロ目 底部外面に整形痕と縦状 の刃痕
第 63 回	W56 挑物(皿)	F79 SD1418	IV	-	(14.4)	(13.3)	0.8	ヒノキ 横木取り 板目	口縁部外面に線状の刃痕

第35表 木製品一覧表3

図	番号	遺物名	出土地点	出土層位	外径	内径	底径	高さ	樹種 木取り 木取(材)	備考	
第 55	W57	挽物(Ⅲ)	E78 SD1482	IV	(18.1)	(15.1)	(15.3)	1.4	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁部外面にロクロ目 底部外面に整形痕・縦状の刃痕	
	W58	挽物(Ⅲ)	G78 SD1410	IV	(18.7)	(15.3)	(15.7)	1.3	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁外面にロクロ目 底部外面に整形痕・縦状の刃痕	
	W59	挽物(Ⅲ)	SD1523	IV	(17.0)	(13.8)	(14.2)	1.1	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁部内面にロクロ目	
第 56	W60	挽物(Ⅲ)	C62	IV	(19.9)	(16.7)	(16.3)	1.6	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁部内外面、底部内面にロクロ目 底部内面に縦状の刃痕、底部外面に整形痕・縦状の痕	
	W61	挽物(Ⅲ)	SD1510	IV	(20.0)	(16.2)	(17.6)	1.2	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁部内外面、底部内面に縦状の刃痕、底部外面に整形痕・縦状の痕	
第 56	W62	挽物(Ⅲ)	E77 SD1407	IV	(20.6)	(18.0)	(18.4)	1.0	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁外面にロクロ目 底部外面に縦状の刃痕	
	W63	挽物(Ⅲ)	SD1510	IV	(17.2)	(14.6)	(15.0)	0.9	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁部外面に縦状の刃痕 底部外面に整形度・縦状の刃痕、ロクロ爪跡	
図	W64	挽物(Ⅲ)	SD1510	IV	(21.6)	(18.6)	(18.8)	1.3	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁部外面にロクロ目 底部内面に縦状の刃痕	
	W65	挽物(Ⅲ)	E78 SD1478	IV	(19.9)	(16.9)	(17.7)	1.0	ヒノキ 横木取り 縦目	口縁部、底部内面にロクロ目 底部外面にロクロ爪跡	
図	番号	遺物名	出土地点	出土層位	長	幅	高	樹種	木取り 木取(材)	備考	
第 57	W66	剝物(Ⅲ)	F74	III	[33.7]	[8.2]	-	1.1	スギ	横木取り 縦目	
	W67	剝物(Ⅲ)	F74	IV	13.3	10.8	4.9	-	スギ	横木取り 縦目	
図	W68	剝物(Ⅲ)	D78 SD1510	IV	[12.3]	[2.4]	1.5	ヒノキ	横木取り 縦目	完形	
	W69	剝物(円形鉢)	SD14137	IV	[16.9]	[7.0]	[4.4]	スギ	横木取り 縦目	横木取り 縦目	
図	番号	遺物名	出土地点	出土層位	口径	底径	高さ	厚さ	樹種 木取り 木取(材)	備考	
第 57	W70	漆 梵	SP1601	II	-	9.8	5.3	3.8	0.7	トチノキ 横木取り	一本作り、丸に管電線の 板を3カ所均等に配する 内・外面、黒漆
	W71	漆 梵	E81	IV	(11.4)	(6.2)	-	3.5	0.6	トチノキ 横木取り	一本作り 内面朱、外面 黒漆で?の板を3カ所均 等に配する
	W72	漆 梵	D74	IV 上面	(12.4)	(5.4)	-	4.4	0.6	トチノキ 横木取り	一本作り、底部外面に黒 漆の文字跡 内・外面朱 漆
	W73	漆 梵	G76	III	(10.4)	(5.5)	-	2.7	0.6	トチノキ 横木取り	一本作り 内・外面朱漆
	W74	漆 梵	D77	IV	-	(8.6)	-	1.7	0.7	シオジ 横木取り	一本作り 内・外面朱の 漆塗
	W75	漆 梵	D77	III	-	(6.1)	-	5.4	0.8	ケヤキ 横木取り	一本作り 内面が朱の漆 塗、外面が黒の漆塗
	W76	漆 梵	G85 SX1601	III	-	-	(7.6)	9.6	1.5	クリ 横木取り	一本作り、内面口縁部、外 面高台にロクロ目 内面 朱漆の上繪らしきもの

第36表 木製品一覧表4

図	番号	遺物名	出土地点	出土層位	長さ		径		樹種	備考
第 58	W77	箸形木器	SD1517	IV	46.9		1.1	スギ	完形品	
	W78	箸形木器	D60	III	17.4		1.0	-	完形品	
	W79	箸形木器	E79	III	[21.4]		0.6	ヒノキ	端部炭化消失	
	W80	箸形木器	E74	III	[11.2]		0.7	スギ	端部欠損	
	W81	箸形木器	E80	IV	[10.5]		0.6	-	端部欠損	
	W82	箸形木器	C78	IV	[8.8]		0.8	-	端部欠損	
	W83	箸形木器	G78	III	[8.5]		0.7	スギ	端部欠損	
	W84	箸形木器	F74	III	[7.6]		0.6	スギ	端部欠損	
	W85	箸形木器	C67	III	[7.2]		0.7	スギ	端部欠損	
	W86	箸形木器	D73	IV	[6.6]		0.7	スギ	端部欠損	
第 58	W87	箸形木器	H86	III	7.0		0.7	スギ	完形品?	
	W88	箸形木器	E81	III	[17.6]		0.6	スギ	端部欠損	
	W89	箸形木器	SH1502	IV	[12.4]		0.7	トウヒ	端部欠損、因角すべてに面取りをほどこす	
	W90	箸形木器	15区内出土地		[8.0]		0.8	-	端部欠損	
	W91	箸形木器	不明		[6.4]		0.6	-	端部欠損	
	W92	箸形木器	E79	IV	[14.6]		0.8	ヒノキ	両端欠損	
	W93	箸形木器	D75	III	[8.7]		0.7	ヒノキ	両端欠損	
	W94	箸形木器	C74	III	[8.0]		0.8	スギ	両端欠損	
	W95	箸形木器	D72	III	[4.4]		0.7	スギ	両端欠損	
	W96	杓子形木器	E80	IV	18.1	身長 柄長	9.6 (7.8)	1.1 スギ	木取	備考
第 58	W97	杓子形木器	北側排水溝		21.8		3.7 (4.8)	1.1 板目		
	W98	杓子形木器	SD1418	IV	28.4	9.8	1.8	0.6 スギ		柄の部分に面取り
					11.1	17.3	8.8	0.9 スギ		柄の部分に面取り
第 59	W99	横櫛	SD1510	IV	[10.3]	幅	3.7	2.8 イスノキ		
第 59	W100	横櫛	SD14137	IV	[5.2]	高さ	2.9	2.5 2.1 イスノキ		
第 59	W101	横櫛	C69	III	[4.0]	厚さ	[3.0]	2.3 1.65 ディフリ		
第 59	W102	横櫛	D73	III	[1.4]		[3.7]	9.9 2.7 ボク ツゲ		漆塗りの痕跡あり
第 59	W103	火燭板	F74	III	7.0	幅	2.3	1.1 スギ	板目	4個の火燭臼をもつ
第 59	W104	火燭板	D65	III	12.7		5.0	2.1 スギ	板目	10個の火燭臼をもち、うち1個は未使用
第 59	W105	通齒下駄	C79	IV	15.0	幅	[5.4]	2.7 スギ	板目	備考
第 59	W106	通齒下駄	SD1515	IV	[14.6]	高さ	6.8	2.8 -	板目	
第 59	W107	通齒下駄	SD1601	II	21.9	樹種	8.9	2.6 ヒノキ	板目	

第37表 木製品一覧表5

図 番号	遺物名	出土地点	出土 層位	長さ	幅	高さ	樹種	木取	備 考
第 59 回	W108 用途不明品	G78	III	8.9	3.1	2.5	イヌマキ		1個面、木口面に切欠き 溝、留め具か？ 完形品 枝と幹を利用した有孔木 器
	W109 用途不明品	C69	IV	[13.0]	2.2	4.8	イヌガヤ		
第 60 回	W110 一本轆	SH1402	IV	[32.6]	20.7	2.8	アカガシ 属	板目	
	W111 軸	SD1510	IV	49.6	20.3	2.9	アカガシ 属	板目	
第 61 回	W112 軸	SD1510	IV	21.2	11.1	7.4	-	板目	完形品
図 番号	遺物名	出土地点	出土 層位	全長	身長	身幅 柄幅	身厚 柄厚	樹種 木取	備 考
第 61 回	W113 横柱(砧)	G78 SD1410	IV	30.4	18.8	5.5	5.0	板目	完形品
	W114 横柱(砧)	E74	IV	31.9	15.7	2.7	2.9	板目	
第 61 回	W115 異形杓子	SD1510	IV	25.6	17.6	4.1	3.8	心持材 スギ	完形品
	W116 矛子(櫛)形木器	G78	IV	51.1	27.4	(6.8)	2.5	板目	
図 番号	遺物名	出土地点	出土 層位	長さ	幅	厚さ	樹種	木取	備 考
第 62 回	W117 位牌	G83	III	6.2	9.3	1.0	スギ	板目	表裏、部分的に漆塗が残 存 完形品
	W118 薬物形	G78 SD1410	IV	16.5	3.0	3.6	-	板目	
第 62 回	W119 刃形	SD1478	IV	[17.1]	2.9	0.9	スギ	板目	端部欠損
	W120 刃形	16区	探層	[18.9]	3.1	0.8	スギ	板目	
第 62 回	W121 端串	C59	IV	[9.8]	2.3	0.4	スギ	板目	端部欠損
	W122 端串	C60	IV	[18.1]	1.9	0.8	スギ	板目	
第 62 回	W123 端串	D70	IV	23.5	1.6	0.5	スギ	板目	完形品
	W124 端串	SD1510	IV	[12.6]	2.2	0.9	ヒノキ	板目	
第 62 回	W125 端串	F80	IV	10.6	1.7	0.4	スギ	板目	完形品
	W126 木簡	G82	IV	[3.1]	2.8	0.1	スギ	板目	
第 62 回	W127 木簡	16区	探層	8.1	1.9	0.6	スギ	板目	完形品
第 63 回	W128 用途不明品	SD1517	IV	[30.3]	3.5	2.3	スギ	板目	有頭棒、端部欠損 完形品
	W129 用途不明品	E78 SD1484	IV	28.1	3.1	2.6	ヒノキ	削材	
第 63 回	W130 用途不明品	SD1510	IV	[26.4]	1.4	2.0	ヒノキ	板目	1側面に無数の刃根によ る凹凸、両面、炭化焼失 完形品、有頭棒、(稍)木口 に茎孔か？ 有頭棒、端部欠損
	W131 用途不明品	D78 SD1440	IV	23.7	2.1	2.0	スギ	削材	
第 63 回	W132 用途不明品	D70	IV	[16.9]	1.5	1.5	ヒノキ	心持材	木目に平行に木釘が貫 通、端部欠損 完形品、基面部取り
	W133 用途不明品	D60	IV	[11.3]	1.3	1.2	スギ	削材	
第 63 回	W134 用途不明品	SD1527	IV	15.0	1.3	1.2	ヒノキ	削材	端部欠損側、中央部に円 形の孔が穿たれていたと 思われる 端部欠損
	W135 用途不明品	D68	IV	[15.9]	1.7	1.5	スギ	削材	
第 63 回	W136 用途不明品	E79	IV	[18.6]	1.3	0.7	スギ	板目	端部欠損 完形品、へら状木器
	W137 用途不明品	D69	IV	[16.9]	1.4	1.4	スギ	削材	
63	W138 用途不明品	SD1510	IV	19.1	1.5	0.5	ヒノキ	板目	

第38表 木製品一覧表 6

図	番号	遺物名	出土地点	出土 層位	長さ	幅	厚さ	樹種	木取	備考
第	W139	用途不明品	F85	III	[8.9]	2.7	2.4	-	心持材	端部欠損
	W140	用途不明品	E73	IV	[5.9]	2.4	2.2	スギ	割材	端部欠損
	W141	用途不明品	E73	III	7.7	1.8	1.0	サワラ	割材	完形品、1側面に切欠きをもつ
	W142	用途不明品	D73	IV	[8.1]	3.2	0.8	スギ	板目	端部欠損
	W143	用途不明品	F76	III	9.8	0.7	0.8	スギ	割材	完形品、両端に切欠きをもつ
	W144	用途不明品	E71	IV	[10.2]	1.4	0.9	スギ	割材	一端に切欠き、他端は欠損
同	W145	用途不明品	SD1517	IV	[10.2]	1.9	0.7	スギ	板目	完形品、有孔板材
	W146	用途不明品	F75	III	[8.2]	2.7	1.0	スギ	板目	有孔板材、端部欠損
	W147	用途不明品	E75	III	20.2	1.8	0.9	ヒノキ	板目	片面に線状の刃痕
	W148	用途不明品	SH1402	IV	13.8	3.8	2.0	スギ	板目	完形品、有孔板材
	W149	用途不明品	D63	III	13.5	5.5	1.2	スギ	板目	完形品、有孔板材
	W150	用途不明品	D60	IV	12.7	4.2	0.8	スギ	板目	完形品、有孔板材
第	W151	用途不明品	E60	IV	27.5	[7.1]	0.9	スギ	板目	有孔板材、線状の刃痕
	W152	用途不明品	SD1411	IV	30.2	19.9	6.0	-	板目	中央部に納孔、無数の線状の刃痕、工作台か
	W153	用途不明品	D80 SP1594	IV	30.1	11.8	10.5	-	割材	半円筒形の切欠きをもつ
	W154	用途不明品	E79	IV	16.9	4.8	1.7	-	板目	納孔をもつ
	W155	用途不明品	F76	IV	[26.1]	4.7	1.2	-	板目	納孔、切欠きをもつ、端部欠損
	W156	用途不明品	SD1510	IV	20.6	5.9	2.1	スギ	板目	木口に切欠きをもつ、楔形木器
同	W157	用途不明品	SD1517	IV	[30.7]	9.6	1.4	スギ	板目	端部欠損
	W158	用途不明品	SD1510	IV	[43.4]	2.3	1.7	ヒノキ	板目	端部欠損
	W159	用途不明品	SD1510	IV	[45.3]	2.0	1.7	スギ	板目	端部欠損
	W160	井戸材	SE1301	IV	48.0	7.9	2.6		板目	横木(北)
	W161	井戸材	SE1301	IV	47.3	3.7	2.7		板目	横木(西)
	W162	井戸材	SE1301	IV	47.2	5.9	2.0		板目	横木(南)
第	W163	井戸材	SE1301	IV	46.0	4.6	2.0		板目	横木(東)
	W164	井戸材	SE1301	IV	[54.6]	9.7	7.5		板目	柱材(北、内側)
	W165	井戸材	SE1301	IV	[55.3]	16.0	8.1		板目	柱材(南、内側)
	W166	井戸材	SE1301	IV	[55.8]	10.2	7.6		板目	柱材(東、内側)
	W167	井戸材	SE1301	IV	[52.8]	14.7	8.7		板目	柱材(西、内側)
	W168	井戸材	SE1301	IV	[45.6]	12.0	5.8		板目	柱材(東、外側)
同	W169	井戸材	SE1301	IV	[40.4]	12.8	7.4		板目	柱材(西、外側)
	W170	井戸材	SE1301	IV	[55.2]	22.6	3.0		板目	板材(西) 先端、両面から削り、両側面板はぎの仕口
	W171	井戸材	SE1301	IV	[48.2]	30.4	2.6		板目	板材(西) 先端、両面より削り、両側面板はぎの仕口
	W172	井戸材	SE1301	IV	[39.7]	26.0	1.6		板目	板材(北) 先端部に円形の小孔
	W173	井戸材	SE1301	IV	[39.0]	19.0	4.0		板目	板材(北) 先端、両面から削り、両側面板はぎの仕口

第39表 木製品一覧表7

図	番号	遺物名	出土地点	出土層位	長さ	幅	厚さ		木取	備考
第	W174	井戸材	SE1301	IV	[51.6]	31.8	2.6		板目	板材(南) 先端、片面より削り、片側面板はぎの仕口
	W175	井戸材	SE1301	IV	[49.0]	18.8	1.8		板目	板材(東) 横木接着痕
	W176	井戸材	SE1301	IV	[48.2]	25.3	2.3		板目	板材(北) 先端、片面より削り、片側面板はぎの仕口
図	W177	井戸材	SE1301	IV	[41.4]	18.0	3.4		板目	板材(東) 先端、片面より削り、両側面に板はぎの仕口
	W178	檻板	SH1402 柱穴4	IV	68.2	36.8	9.6		板目	
	W179	檻板	SH1402 柱穴9	IV	57.8	45.2	6.1		板目	W183と同一個体
	W180	檻板	SH1402 柱穴5	IV	40.2	16.6	7.6		板目	納孔をもつ
	W181	檻板	SH1402 柱穴15	IV	47.7	22.3	7.5		板目	納孔、切欠きをもつ、加工痕より使用した工具の刃幅を測定(5.2cm)
第	W182	檻板	SH1402 柱穴2	IV	58.0	21.7	9.0		板目	
	W183	檻板	SH1402 柱穴9	IV	64.7	30.4	6.8		板目	W179と同一個体
	W184	檻板	SH1402 柱穴1	IV	41.4	17.7	9.3		板目	切欠き溝をもつ
	W185	檻板	SH1402 柱穴8	IV	45.7	9.4	4.8		板目	切欠きをもつ
67	W186	檻板	SH1402 柱穴17	IV	36.7	15.4	5.9		板目	
	W187	檻板	SH1402 柱穴4	IV	37.0	13.6	8.6		板目	切欠きをもつ、W188と同一個体
図	W188	檻板	SH1402 柱穴4	IV	35.0	13.6	7.4		板目	切欠きをもつ、W187と同一個体
	W189	檻板	SH1402 柱穴6	IV	43.8	10.7	6.8		板目	切欠きと瘤みをもつ
	W190	檻板	SH1402 柱穴16	IV	36.5	21.4	5.8		板目	納孔、切欠きをもつ
	W191	檻板	SH1402 柱穴4	IV	32.0	20.0	7.2		板目	納孔、溝をもつ
	W192	檻板	SH1402 柱穴8	IV	27.8	12.8	8.0		板目	納孔、仕口をもつ、W193と同一個体
	W193	檻板	SH1402 柱穴8	IV	24.1	12.5	8.1		板目	納孔、仕口をもつ、W192と同一個体
第	W194	柱根	SH1502 柱穴5	IV	[42.3]	21.4	9.4		板目	切欠き溝をもつ
	W195	柱根	SH1502 柱穴3	IV	[49.6]	24.8	6.9		板目	切欠き溝をもつ
	W196	柱根	D79 SP1589	IV	[52.8]	17.6	12.1		板目	納孔と仕口をもつ
図	W197	柱根	SH1501 柱穴	IV	[45.2]	18.0	8.7		板目	柱穴、切欠き溝をもつ
	W198	柱根	SA1402 Pit10	IV	[38.0]	15.6	10.4		板目	切欠き溝をもつ
	W199	柱根	SH1401 柱穴8	IV	[29.0]	15.2	13.0		心持材	2本の溝をもつ

数値の単位はcm  
 ( ) 内の数字は復原値  
 [ ] 内の数字は残存値

## 第4節 金属製品

内荒遺跡からは銅製品18点、鉄製品32点、鉛製品の合わせて50点の金属製品が出土している。各層毎の内訳はII層2点、III層29点、IV層16点、表探3点である。銅製品には銅印・鉄帶金具・錢貨・飾金具・きせる、鉄製品には短刀・金槌・釘・馬鍔・容器・用途不明品、鉛製品には鉄砲玉がある。これら金属製品のうち奈良・平安時代の律令期に属することが確実なものは神功開寶・銅印・銅などごくわずかである。大半はII～IV層の包含層から出土したもので、錢貨・きせる・釘・馬鍔等は宮下遺跡・川合遺跡のII～IV層中からも共通して出土している。

### A. 銅製品

#### 1. 銅印 (M1)

E72IV層から出土したもので、印面は方3.5cm、全高4.1cmの完形品である。保存状態は良く、出土時には部分的に赤銅色を呈していた。銅質・鋳上がりはあまり良好ではなく、器面全体に湯孔が見られるほか印面周縁部の3ヶ所に鋳潰れがある。

紐は3種の苔紐をなすが、左右の切り込みは明瞭ではない。紐頭は最大幅2cm、厚さ0.5cmを測り、下端中央部には径4mmの円孔が穿たれている。同様の紐形態は日光男体山出土の「酒廣嶺印」印に見られる。印文は「造大神印」の4字で、印面の周縁を方形に枠取りしたなかに陽鋳されている。「造」「大」「神」の3字は楷書体であるが、「印」の1字は会田氏が第2類とした隸体様の独特な書体である（会田1947）。押印による印面の摩滅は認められない。

#### 2. 鉄帶金具 (M2・M3)

鉄帶は革帶に鉄と呼ぶ金属製の飾金具をつけた腰帶で、革帶をとめる鉄具、巡方・丸柄の飾金具および帯の末端につく鉈尾の各部品からなる。今回の調査では鉈尾と丸柄が各1点出土した。このうち丸柄は8区表探であるが、内荒遺跡に関連する遺物として本報告で扱った。鉈尾・丸柄には革帶に装着するために同形の裏金具が組み合わされるが、今回出土したものはいずれも表金具である。なお、礼服・朝服・制服それぞれにおける腰帶を規定した養老衣服令には、鉄帶に金銀装と烏油装の2種があることが知られている。銅鉄の表面に黒漆が塗られている鉄帶が正倉院に伝世しているほか、遺跡から出土する銅鉄にも黒

銅 製 品  
銅 印

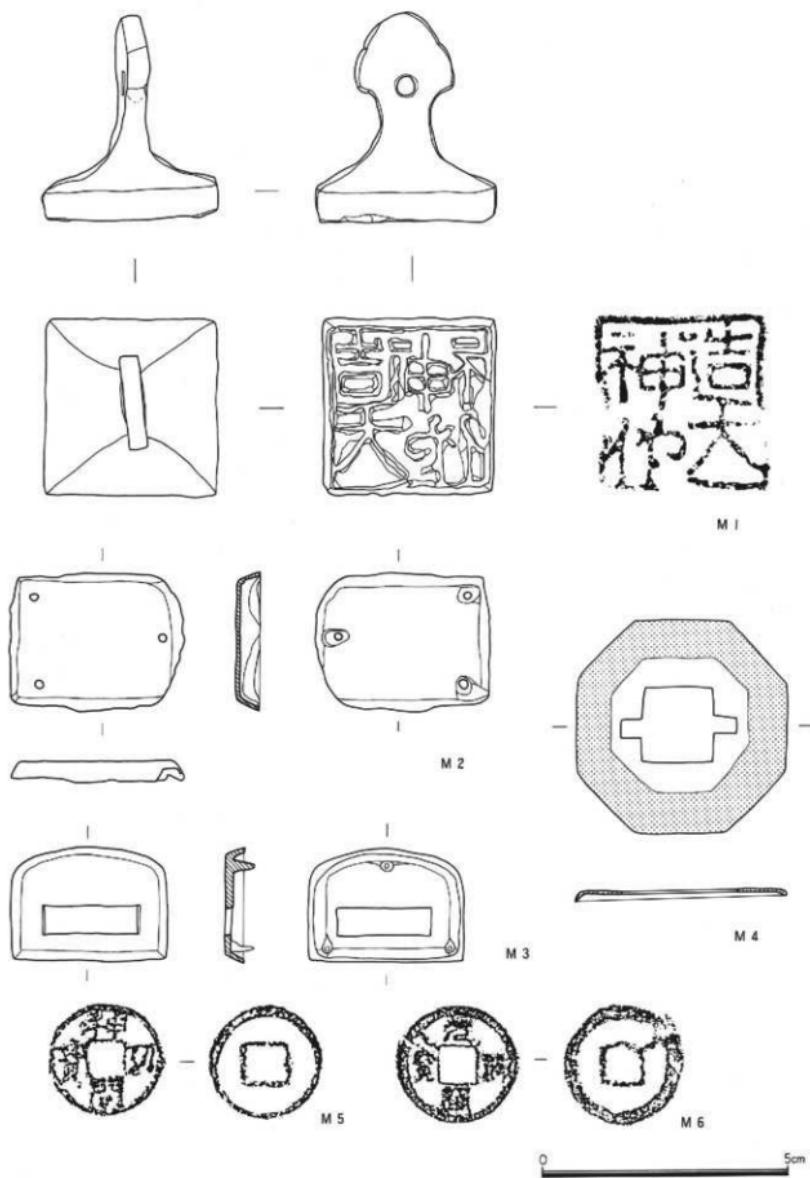
苔 紐

造 大 神 印

鉄 帶 金 具

第40表 金属製品地区別出土一覧表

層位	区	12区		13区		14区		15区		16区		計	
		銅	鉄	銅	鉄	銅	鉄	銅	鉄	銅	鉄	銅	鉄
II層		0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
III層		1	0	1	2	7	15	1	2	1	8	9	29
IV層		0	1	1	8	15	1	2	8	8	9	11	18
その他		0	0	0	3	2	5	2	8	0	0	4	16
合計		1	2	2	6	11	22	3	10	1	9	18	50
		1	1	4	11	7	10	9	32				



第69図 金属製品実測図1 (銅印・幕金具・錢貨)

漆を塗った例が多くあり、これらが烏油腰帯に当たるものとされている。今回出土した鉢尾・丸柄には墨漆は認められないが、烏油腰帯である蓋然性は高いといえよう。

鉢尾（M2）完形品であるが全体に鋳化しており遺存状態は良くない。横長の矩形の先端を弧形にしたもので、基端部の上下と先端中央の3ヵ所に1mm径の円孔を穿つ。側縁はハの字形に開いて断面は台形を呈する。裏面は窪んでおり円孔の位置には鉢足の痕跡が認められる。のことから円孔は使用中に鉢足がとれたため後補として穿ったものであることがわかる\*。縦2.8cm、横3.5cm、高さ0.4cm、厚さ0.1cm。13区D70III層出土。

\*）後補のたる円孔を穿つ例は平城宮SD650出土の鉢尾にもある。

丸柄（M3）完形品。横長の矩形で上辺が弧形をなすもの\*\*。下寄りの部分には垂飾りを佩用するための長方形の透かし孔をもつ。側縁は斜めに面取りされており、断面は台形を呈する。裏面は窪み下辺の両端と上辺中央の3ヵ所に鉢足をついている。縦2.3cm、横3.2cm、高さ0.4cm、厚さ0.1cm。

\*\*) 形態的には巡方に近いものであり、『平城宮報告VU』では巡方に分類されている（佐藤興治1975）が、大阪府伽山遺跡の墳墓から出土した銀製鉢帶では圓形のもの6個が巡方4個とセットをなしており、丸柄に分類されることが確実となった。

なお、この伽山例について佐藤は『和名抄』革帶条に「其体有純方丸柄幡上等之名」とある欄上に相当するものとしている（佐藤1986）。また、亀田博も通有の半円形の丸柄が養老令で規定されたものと考えられるに對して古い形のもので『続日本紀』和闌5年5月5日条の「六位己下は白銅及び銀をもって革帶を飾ることを禁ず」と記載される鉢帶にあたるものとしている（亀田1983）。

### 3. 銭貨（M5・M6）

皇朝十二銭のひとつ「神功開寶」と中国渡来銭である「元祐通寶」が各1点出土している。

「神功開寶」（M5）神功開寶は皇朝十二銭の3番目にあたるもので、天平神護元年（765）9月に新鋲の詔が出され、延暦15年（796）11月に隆平永寶の初鋲をみるとまでの33年間にわたって鋳造されている。M5はD78SD1540（SH1403の東周溝）から出土したもので掘立柱建物南群の年代を知る資料として重要である。完形品であるが鋲上がりが悪く全体に鋳化しているため線文は不明瞭である。背面も外縁・内郭と肌の部分の厚さはほとんど差がない、のっぺりとした感が強い。また範の合わせがずれたためか外縁幅も一定ではなく、上辺（A）が幅広となっている。錢文は不明瞭であるが、4文字にはそれぞれ以下の特徴がみられる。

神：第1画が点ではなく横にねて「一」（右あがり）になる。

功：「エ」の第2画が内郭側縁と平行せず右傾する。功の旁は「刀」で、ややいかり肩をなす。「刀」の第2画が長くのびる。

開：門がまえは「謙開」と呼ばれるもので「門」となる。かいの部分は鋲上がりが悪くて判読できない。

寶：他の3文字に比べると長いつくりである。「ム」の第2画と第3画のはねがそれぞれ外開きになりハの字形をなす。「貝」が小さめである。

神功開寶は錢文、錢型の大小などによっていくつかに分類することができる。上記の錢文の特徴からM5は古錢分類の「長刀」、『平城宮報告VU』の分類におけるEタイプにあたるものである。また、錢径では26mm弱のものと24mmを標準とするものの2種に大別でき、前者

鉢尾

丸柄

錢貨

神功開寶

は「大様」、後者は「中様」と呼ばれている。M5は外縁外径が23.6mmで後者に属する。『平城宮報告VI』に報告された27点の計測値では最小が24.30mm (No.169) で24mmをきるものはなく、また、「長刀」のEタイプに属する12点の平均値が24.71mmであることから、「中様」でも小ぶりのものといえる。なお、外縁内径の計測値20.5mmはEタイプ12点の平均値20.67mmとほぼ等しいことから、小ぶりの原因は外縁幅が狭いことによる。

**元祐通寶** 「元祐通寶」(M6) 1086年初鋳の北宋錢である。完形品であるが全体に鋳造が著しく、「元」と「寶」の間には亀裂がはいつている。「元祐通寶」の錢文は真書と篆書の2種があるが、M6は篆書のものである。宮下遺跡では真書のものも出土している。14区III層上面出土。

**飾金具 4. 飾金具 (M4)**

平面形が8角形を呈する薄板で、取手の飾金具と考えられるもの。中央には2辺に突出部をもつ方形の透かし孔がある。周縁には幅1cmの枠をつけ、細かな目打ちがされている。

**きせる 5. きせる (M7～M17)**

すべて銅製・真鍮製の部品でラウのついた完形品はない。雁首7点、吸口4点の計11点が出土している。出土層位はM15がIV層、M17が表採である以外はすべてIII層からの出土である。大半が破損品で、雁首と吸口をセットで把握できるものもなく雁首・吸口の比率も約2:1とばらつきのあることからこれらは雁首・吸口の各部品毎にこわれたものが捨てられたのであろう。

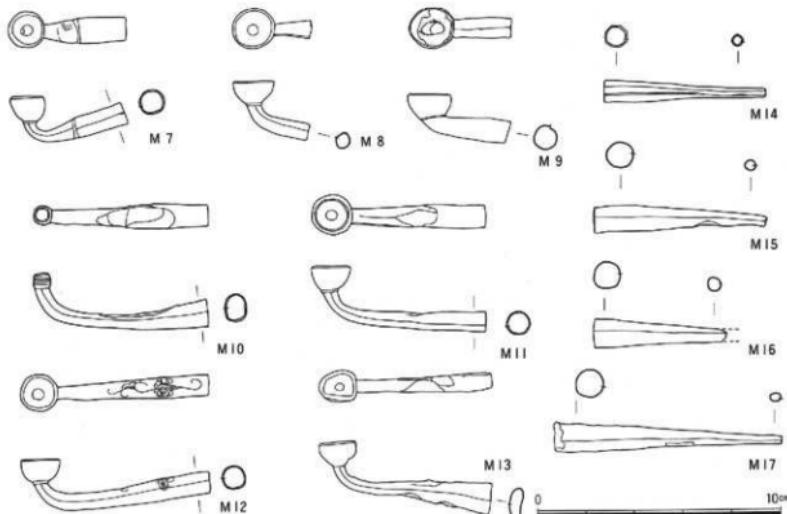
**雁 首** 雁首 (M7～M13) 火皿やラウを差し込む部分（肩部）を欠失したり、肩部の継ぎ目がはげているなどの破損品が大半である。全長は43～75mmの幅があり1.5寸のもの (M7)、2.5寸のもの (M11～M13) の2種類に大別できる。形態では火皿にとりつく部分（脂返し）が湾曲する河骨形と呼ばれるもの（雁首A）と湾曲が消失したものの（雁首B）の2種類がある。雁首BはM9の1点のみである。火皿はすべて椀形のものであるが、雁首BのM9は雁首Aのものに較べて底径が大きい。

一方、製作技法では火皿と首部の接合部に補強帯を巻くものと巻かないものがある。今回出土したもので明瞭に補強帯をもつものはM10の1点のみで、補強帯は7mm幅を廻り上面には5本の沈線が描かれている。首部高も28mmと他に較べて高く河骨形の顕著な形態である。またM7・M8・M11・M12の4点は接合部に凸線が巡っており補強帯の一環かもしれない。首部のつくりでは一本の管でつくるものと脂返しと肩部を別々の管でつくり接合させたものの2種がある。後者は「肩つき」と呼ばれるもので、前者に較べて製作工程は多く手間はかかるが技法的には容易であることからより古い技法と考えられる（古泉1983）。M7の1点が出土したのみである。前者のなかには肩部の上面に花文を毛彫りしたもの (M12) がある。管の製作時における鋼板の継ぎ目は左側にもつものがほとんどであるが、M9の1点のみは継ぎ目を上側にもつ例である。なお、M7とM11の首部には吸い盤を落とす際のタタキ痕が観察できる。M7では首部の上側から左側にかけて、M11では首部の上側についており、使用者のくせの違いをみることができ興味深い。

**吸 口** 吸口 (M14～M17) 4点のうち3点は吸い口のつぶれた破損品である。全て一本の管でつくられており肩部が有段となるものはないが、M14は肩部を断面八角形に作り出している。継口部径は9～10mm、吸口部径は3mmに集中するのに対し、全長は66mmから93mmまでの幅をもち2寸、3寸の2種類に大別できる。

**鉄 製 品 B. 鉄製品**

**馬 錢 1. 馬錢 (M18～M25)**



第70図 金属製品実測図2(きせる)

馬鉤(静岡平野では「マンガ」と呼ばれる)は横の台木に櫛状の歯をつけ牛馬に引かせて代かきや田畠をかきならす農具。横柄に装着する歯が6点出土している。出土層位はIII層4点、IV層2点である。川合地区では宮下遺跡、川合遺跡でも各1点ずつ出土しており第71図には川合地区から出土した8点すべてを掲載した(M18:宮下遺跡C16IV層出土、M24:川合遺跡II層SX1032出土)。全長は20.3~22.7cmでほぼ7寸につくられている。断面が扁平な平鉤状のものA(M18~M21・M25)と方形にちかい角鉤状のものB(M22~M24)の2種に大別でき、さらに頭部形態によって基端部を肥厚させた1類と片側に折り曲げて頭部をつくる2類に細分できる。Aには1類(M21・M25)と2類(M18~M20)の両者があるが、Bは1類のみである。内荒遺跡ではAがIII層、BがIV層から出土しており両者を層位的に分別できるが、宮下遺跡ではAがIV層、川合遺跡ではBがII層から出土してい内荒遺跡における出土の在り方とは一致しない。

#### 2. 短刀(M26)

14区IV層上面から出土した完形品の1点がある。1尺ものの平造りの直刀。全長30.2cm、刃長20.7cm、元幅2.3cm、先幅1.8cm、棟幅0.5cm、茎長9.7cmを測る。

短 刀

#### 3. 容器(M27)

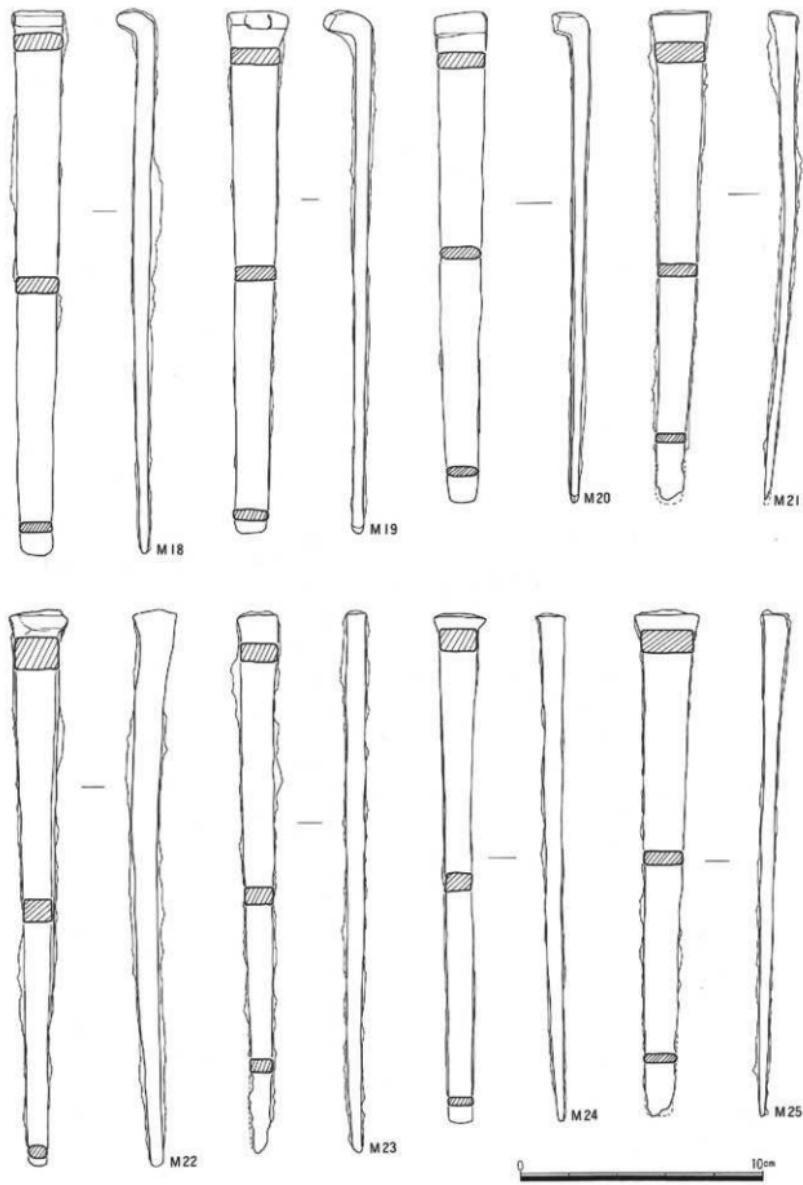
周溝SD1513から湾曲をもった体部破片が1点出土しているが、5.9×4.5cmほどの小破片であるため全形を知ることができない。

容 器

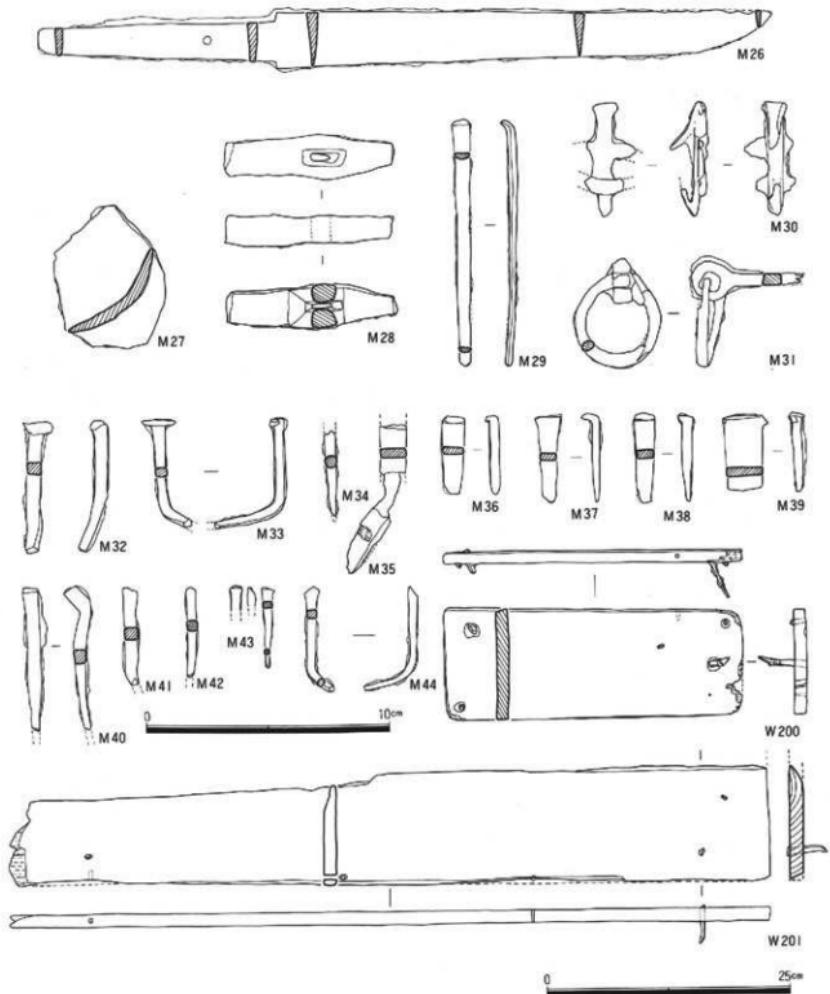
#### 4. 金槌(M28)

M28の1点がある。片端を尖頭につくるもので断面は方形を呈する。尖頭側によった位置に方形の柄孔を穿っている。全長7.0cm、幅1.8cm、厚1.3cm。12区表採。

金 槌



第71図 金属製品実測図 3 (馬鉤)



第72図 金属製品実測図4 (刀・釘・その他の鐵製品)

- 釘** 5. 釘 (M32～M44・W200-1～4・W201-1・2)  
角釘14点、平釘5点の合わせて19点が出土している。出土層位はII層4点、III層11点、IV層3点。III層出土のうちの8点は16区SX1601から出土したものであり、6点は平板W200・W201に打たれたままの状態で出土している。
- 角 釘** 角釘 (M32・M33・M40～M44・W200-1～4・W201-1・2) 頭部をつくり出すもの (M32・M33) と切り放しのままのもの (M40～M44・W200-1～4・W201-1・2) の2種がある。頭部や先端を欠失したものが多いため1寸釘と2寸釘の2種類に分かれるようである。
- 平 釘** 平釘 (M35～M39) 片側に折り曲げた頭部をもつ。M35は頭部側を欠くが残存部でも6.5cmを測る。2.5寸釘あるいは3寸釘であろう。ほかはすべて1寸釘である。M39は幅広でM36～M38の倍の幅がある。
- 用途不明品** 6. 用途不明品 (M29～M31)  
このほか用途不明のものも出土している。M29は基礎を片側に折り曲げて頭部をつくる棒状のもので、断面はかまぼこ形を呈する。完形品。全長10.0cm、幅0.7cm。15区IV層出土。M30は両端を片側に折り曲げた金具。15区D70IV層出土。M31は環状の先端部に径3.8cmの輪をつけたもの。断面は方形を呈する。13区C69IV層出土。
- 鉛 製 品** C. 鉛製品
- 鉄 球 玉** 1. 鉄砲玉 (M45～M47)  
14区C77III層 (M45) およびD77IV層 (M47) から1点ずつが出土している。図版49には宮下遺跡4区II層SX1437から出土した1点も掲載した (M46)。M45は径1.30cm、重量12.4g。M47は径1.27cm、重量11.6g。

#### 引用文献

- 龟田 博 1983 「帶と石帶」『関西大学考古学研究室三十周年記念論叢』関西大学  
佐藤興治 1975 『平城宮発掘調査報告書V1』奈良国立文化財研究所  
佐藤興治 1986 「律令制の時代」『季刊考古学』第5号 雄山閣出版  
古泉 弘 1985 「江戸の街の出土遺物-その展望-」『季刊考古学』第13号 雄山閣出版

第41表 金属製品一覧表(きせる・馬鉄・釘)

番号	遺物	出土地点	出土部位	規										特徴等	調査日	たき痕	備考
				全長	金属性	中央部幅	中央部厚	頭部幅	頭部厚	頭部斜面	頭部斜面厚	頭部側面	頭部側面厚				
M7	きせる(頭部)	D77	II 築	43	26	4	6	10	40	15	10	20	有	左	ヒ~左	火薙接合がわれる 頭部・施錆し焼成り、真っこう?	
M8	×	E82	+	(32)	(24)	17	7	9	(22)	(15)	—	—	有	左	調査付近欠失		
M9	×	南側	三頭と片頭の形	(42)	(18)	17	10	9	(27)	5	—	—	無	上	調査付近欠失 頭部が17mmにわたりねじる 頭部六方		
M10	×	E76	II 築	(69)	(28)	—	—	—	69	28	31×9	—	頭部等	左		頭部付近がつぶれる(たき痕?)	
M11	×	南側	+	71	26	16	7	9	67	15	9	—	有	左	上		
M12	×	C80	II 築	75	26	16	7	9	71	15	9	—	有	左	上	上面に花文を彫り	
M13	×	D74	+	72	<25>	16	5	10	<66>	<16>	—	—	無	左	火薙、頭部付近がつぶれる		
			規	全長	頭口幅	頭口後	頭部斜									備考	
M14	（頭口）	E74	II 築	66	9	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
M15	×	F81	IV 築	72	<11>	<3>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
M16	×	E63	II 築	(55)	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
M17	×	表張	—	98	<12>	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

番号	遺物	出土地点	出土部位	規						特徴等	調査日	たき痕	備考
				全長	頭口幅	頭部幅	頭部厚	頭部斜面	頭部斜面厚				
M18	馬鉄(頭)	C19	IV 築	22.5	—	1.6	—	0.7	—	1.5	富士通跡	—	—
M19	×	C75	II 築	21.5	—	1.6	—	0.5	—	2.0	—	—	—
M20	×	D76	+	20.8	—	1.6	—	0.4	—	1.6	—	—	—
M21	×	G77	+	(20.1)	—	1.5	—	0.4	—	1.1	先端を若干欠失	—	—
M22	×	B70	IV 築上面	22.7	—	1.2	—	0.9	—	1.6	—	—	—
M23	×	C68	IV 築	22.8	—	1.2	—	0.7	—	0.8	—	—	—
M24	×	SX1032	II 築	21.0	—	1.1	—	0.7	—	1.1	川合通跡	—	—
M25	×	E77	II 築	(20.7)	—	1.5	—	0.5	—	1.6	先端を若干欠失	—	—

番号	遺物	出土地点	出土部位	規						特徴等	調査日	たき痕	備考
				全長	頭口幅	中央部幅	中央部厚	頭部幅	頭部厚				
M32	釘	SD1601	II 築	(5.5)	0.6	0.5	1.2	0.7	0.7	3.6	先端欠失	—	—
M33	×	B74	IV 築	(6.5)	0.4	0.35	1.4	0.6	0.6	0.4	先端欠失	—	—
M34	×	SX1205	II 築	(3.4)	0.6	0.4	—	—	—	—	頭部・先端欠失	—	—
M35	×	SD1501	IV 築	(6.5)	1.0	0.4	—	—	—	—	頭部欠失	—	—
M36	×	SD1501	IV 築	3.2	0.8	0.4	0.9	0.9	0.5	0.4	—	—	—
M37	×	SD1001	II 築	3.6	0.7	0.3	1.1	—	0.7	0.3	—	—	—
M38	×	—	—	3.6	0.7	0.3	0.8	—	0.7	0.5	—	—	—
M39	×	C67	II 築	3.1	1.5	0.4	1.9	1.6	0.5	—	—	—	—
M40	×	D75	II 築	(5.9)	0.6	0.65	—	—	—	—	頭部・先端欠失	—	—
M41	×	SD1001	II 築	(4.0)	0.65	0.5	—	—	0.6	—	先端欠失	—	—
M42	×	E78	II 築	(3.7)	0.4	0.4	0.45	—	0.4	—	先端欠失	—	—
M43	×	G86 SX1801	II 築	3.2	0.85	0.25	0.5	0.4	0.3	—	W15-060に付いていたもの	—	—
M44	×	G86 SX1801	II 築	5.4	0.4	0.35	0.7	0.5	0.4	—	—	—	—
W209-1	×	G86 SX1801	II 築	—	0.35	0.2	0.8	—	0.5	—	—	—	—
-2	×	—	—	—	0.5	0.4	0.5	—	0.3	—	—	—	—
-3	×	—	—	5.1	0.5	0.45	0.8	—	0.4	—	—	—	—
-4	×	—	—	—	0.5	0.4	—	—	—	—	—	—	—
W201-1	×	G86 SX1801	II 築	4.0	0.5	0.4	0.8	0.5	0.5	—	—	—	—
-2	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

( ) 案存標  
< >推定復原版

## 第5節 石製品

石製品は砥石のみである。合わせて13点が出土しており、このうちの6点を図示した。13点のうちS6がII層(SD1601)から出土した以外はすべてIV層からの出土である。

砥石の規模・材質によって置き砥石、手持ち砥石および軽石製砥石の3種類に大別できる。

### 置き砥石 置き砥石(S1-S2)

川原石を使用した大型の砂岩製砥石。2点ある。S1は完形品で全長32cmを測る。両端面を除く4面を砥面としているが、特に表裏両面は使用が著しく中央部分が窪んでいる。粗粒砂岩を用いておりS2に較べて肌理が粗い。S2は両端を欠失していて全形はわからないが、横断面が砲弾形を呈するもので3面を砥面としている。やや凝灰質中粒砂岩で硬質のため砥面は光沢を帯びている。

### 手持ち砥石 手持ち砥石(S8-S11)

砂岩製のもの3点(S8-S10)と凝灰岩製のもの6点(S3-S7・S11)の2種類がある。大半が残資料で全形の不明なものが多いが、形態的には方柱状のものと板状のものの2種に分類できる。S6は方柱状の完形品で全長11.5cmを測る。表面および両側面の3面を砥面として使用し、裏面と両端面には方柱に切り出した際の線状の整形痕が残っている。S5は白色の非常に肌理の細かな石材を使用している。4面を砥面に使用しているが、特に一側面を斜めに使っているため横断面が台形となっている。板状のものはS4の1点がある。端面からやや内側のところに紐掛け用の孔が両面から穿たれている。携帯用砥石として用いられたものであろう。砥面は表面1面で使用によって内湾している。両側面および端面には刃をあてた溝状の研ぎ痕が認められる。

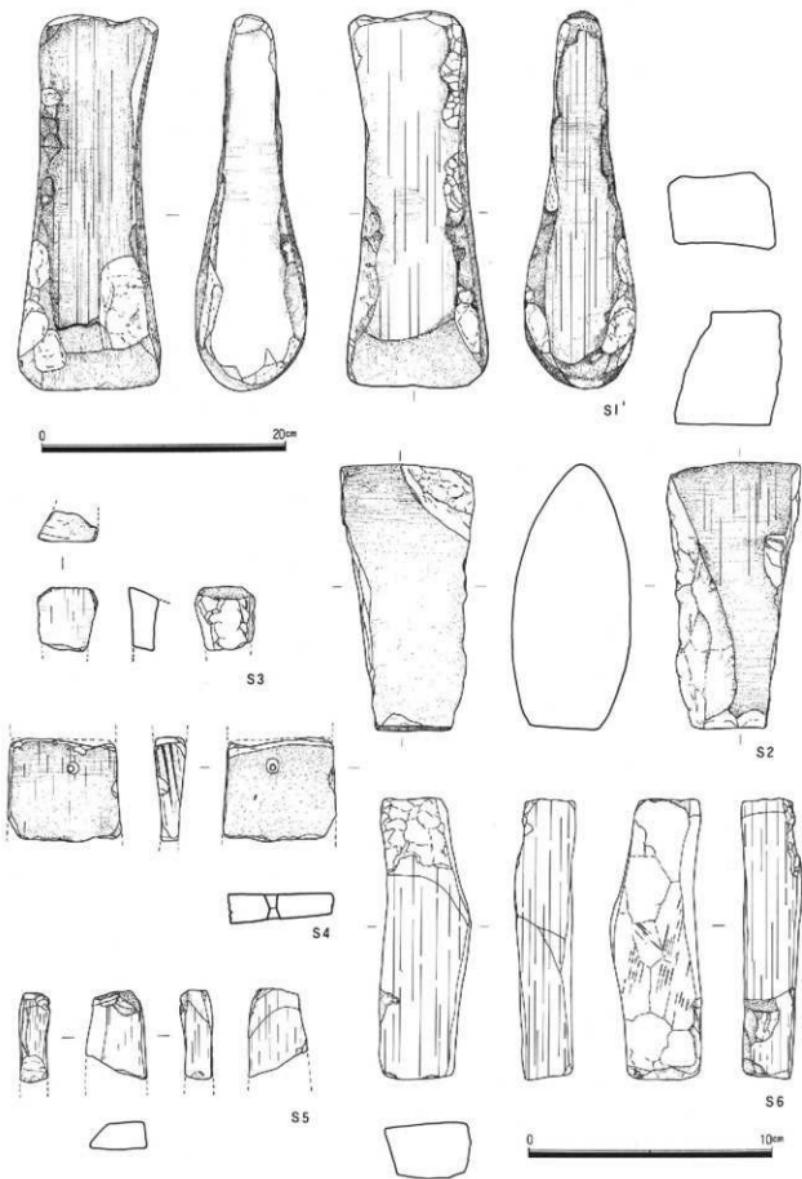
### 軽石製砥石 軽石製砥石

今回の調査で4点の軽石が出土したが、このうちの2点には人為的な平坦面が認められることからこれを砥石として扱った。いずれも8×6×5cm前後のもので、握りやすい大きさである。

第42表 出土砥石一覧表

遺物	出土地点	出土層位	法量 cm			砥面	備考	
			長	幅	厚			
S 1	砥石(砂岩製)	SD1414	IV層	32.0	11.6	9.1	4	完形
S 2	" "	D77 SD1422	IV層	(10.9)	21.8	9.7	3	両端欠
S 3	" "	SD1517	IV層	(2.6)	2.5	(1.2)	3	一端部残
S 4	" "	G78	IV層	(4.3)	4.7	1.3	1	一端部残
S 5	" "	E81	IV層	(3.6)	2.5	1.3	4	一端部残
S 6	" "	SD1601	II層	11.5	3.7	2.5	3	完形
S 7	" "	D82	IV層	(8.8)	4.5	3.8	2	均縁残
S 8	" "	C77	IV層	(3.6)	(4.6)	(4.1)	1	砥面の一部残
S 9	" "	D79 SD1413	IV層	(2.8)	2.7	1.4	4	一端部残
S 10	" "	F75	IV層	13.0	4.5	2.2	3	完形
S 11	" "	SD1301	IV層	(5.5)	2.9	2.5	4	両端欠
S 12	" (軽石製)	E78 SD1510	IV層	8.0	6.5	4.5	2	完形
S 13	" ( " )	D79	IV層	8.5	6.5	5.0	1	完形

( )は残存値



第73図 石製品実測図（砥石）

# 第3章 考察

## 第1節 掘立柱建物南群出土の一括資料について

第2章において内荒遺跡から出土した遺物の概要を記した。これら出土遺物のなかでとくに注目される遺物としては黒笹14号窯式に比定できる狼投窯産灰釉陶器の大量出土や皇朝十二錢の一錢「神功開寶」・鉈尾・丸駒の銅鏑、「造大神印」と陽鏘された銅印などの出土をあげることができる。これらの遺物はいずれも内荒遺跡の性格を考えるうえで欠くことのできない資料である。

ところで静岡県内における灰釉陶器の出土資料については1986年に静岡県考古学会が『灰釉陶器の時代とその流通』のテーマでシンポジウムを開催し、資料集成を行っている。同資料を参考にしながら県内での黒笹14号窯式の灰釉陶器を出土した遺跡をみてみると、浜松市伊場遺跡、城山遺跡、磐田市御殿二之宮遺跡、鎌田鉄影遺跡、遠江国分寺跡、掛川市梅橋北遺跡、原川遺跡、藤枝市御子ヶ谷遺跡、静岡市神明原・元宮川遺跡、内荒遺跡、宮下遺跡、沼津市御幸町遺跡、南伊豆町日野遺跡などの遺跡がある。これらの遺跡は灰釉陶器を出土する遺跡のなかでもごく限られた一部の遺跡であり、遺跡の性格をみても大半が官衙的な性格をもった遺跡であることが指摘されている。また、出土量をみても数点という遺跡が大半を占めており、黒笹14号窯式の灰釉陶器の希少性が伺われる。こうしたなかで内荒遺跡では黒笹14号窯式の灰釉陶器がまとまった量出土したのみでなく灰釉陶器の基本的な器種をすべて網羅しているという際立った特徴をもっている。また、これら灰釉陶器とともに使用したと考えられる須恵器や土師器などもまとまった量が出土しており、器種も豊富である。そこで本節では黒笹14号窯式の灰釉陶器に伴う土器類の一括資料を整理し、当該期における供養形態器種の在り方についても言及してみたい。

### 1. 出土状況の整理と一括資料の抽出

内荒遺跡における土器類の出土状況についてはすでに第2章第1節で概観したように大半はIV層から出土したもので、なかでもC・D・E77~80グリッドからは大量の土器類が集中して出土している。黒笹14号窯式の灰釉陶器も大半がこの一画から出土したものである。

この一画は「掘立柱建物南群」と呼んだ地点で、調査では周溝によって区画されたなかに計画的に配置された掘立柱建物を4棟検出している。掘立柱建物南群における遺物の出土

状況については『内荒遺跡（遺構編）』の第6図・第7図に遺物出土状態図の一部を示した。

土器類は掘立柱建物の周溝を中心としながらも掘立柱建物南群の全域にわたって散布した状態で出土しており、こうした出土状況からは掘立柱建物の廃絶に伴って不要となったものが一括投棄された可能性が伺われた。そこで資料整理にあたっては遺構単位・グリッド単位での接合作業を行った後にすべての破片を灰釉陶器・須恵器・土師器等の種類別に分け、さらに各種類ごとに碗・皿・壺・甕等の各器種単位に分類して徹底した接合作業を行った。接合作業の結果、周溝・柱穴・畝状遺構などの遺構から出土したものと包含層から出土したものが接合した資料、また複数の遺構から出土したものが接合した資料は相当数にのぼった。各資料の接合関係については土器一覧表の出土地点の項に示したので参照していただくとして、ここでは接合資料のなかで異なった遺構から出土した破片が接合した資料について第43表にまとめてみた。また、第74図には遺構間における接合関係を図示した。

遺構間における  
接合関係

黒笛14号窯式の灰釉陶器もこのなかに数多く含まれている。この図表で明らかのように建物周溝間の接合関係はすべての周溝に認められることから南群周溝出土資料の総体が一括資料としてのまとまりをもつことは確実である。そしてこれらの周溝出土資料が畝状造構や包含層出土資料とも複雑な接合関係をもつことから掘立柱建物南群の一画から出土した資料をほぼ同時期に廃棄された一括性の高いものととらえて大過ないと考える。いっぽう出土量は少ないが掘立柱建物北群の一画でも SD 1410などの周溝を中心として黒笛14号窯式の灰釉陶器を含む土器類が出土しており、掘立柱建物南群の一括資料と同時期の一括資料として掌握することができる。

ここでは掘立柱建物南群の周溝出土資料を中心とした一括資料および掘立柱建物北群の一括資料を黒笛14号窯式の灰釉陶器に伴う土器類の一括資料として把握し、次項でその内容を示す。

## 2. 一括資料の展示

### A. 供應形態

供應形態

供應形態には灰釉陶器、綠釉陶器、須恵器、土師器、内黒土師器の5種類があり、器種は碗類、皿類、有台杯類、無台杯類に大別できる。

#### a. 碗類

碗類

碗には灰釉陶器碗1・2類、綠釉陶器碗、須恵器碗、内黒土師器碗があり、灰釉陶器碗1類と須恵器碗で主体を占める。このほか特殊な形態の碗として灰釉陶器双耳碗が1点(903)出土している。体部形態は碗1類と同形で底部外面に「建」墨書がある。E 78 SD 1482(畝状造構2群)とD 78IV層の接合資料。

灰釉陶器碗1類は猿投窯編年黒笛14号窯式に比定できるものである。南群周溝 SD 1503、SD 1510、SD 1513~SD 1515、SD 1522~SD 1527、SD 1530、SD 1531、SD 1544、SD 1479から出土している。周溝以外の出土資料もほとんどが掘立柱建物南群の一画から出土したものである。902は底部外面に「建」墨書がある。法量は口径10.4~18.2cm、器高3.5~5.9cmの幅があり径高指数30~33前後で3.5寸(10.5~11.2cm)、4寸(12.3cm)、4.5寸(13.0~14.4cm)、5寸(15.2~15.7cm)、5.5寸(16.1~17.3cm)、6寸(17.6~18.2cm)に法量分化している。

碗2類は猿投窯編年黒笛90号窯式に比定できるもので1類よりも後出型式であるが、周溝 SD 1503、SD 1510、SD 1511、SD 1515、SD 1525・26、SD 1527で1類と共に出土している。高台形態、施釉部位によってa~dに細分したが、周溝から出土した2類はa~cで、典型的な三日月高台であるdはC79グリッドIV層で53が1点出土しているのみで周溝からは出土していない。2類の主体をなすa・bは1類と同じ体部形態で施釉も体部内面に限定されており、高台も黒笛90号窯式を特徴づける三日月高台にはなっていない。これらの特徴は1類のトチンによる重ね焼きから直接重ね焼きへと移る過渡的な段階における試行型式として位置づけることのできるものであり、黒笛90号窯式のなかでも最初期のものと考える。法量は13.4~19.3cm、器高4.1~5.9cmで径高指数30~33前後で4.5寸(13.4~14.1cm)、5寸(15.0cm)、5.5寸(16.5~16.8cm)、6.5寸(19.3cm)に法量分化する。ただbの40およびcの49は浅身のつくりで径高指数27、またbの48は深身のつくりで径高指数41となっている。

なお、3類に分類した折戸53号窯式の碗底部破片77が周溝 SD 1533から出土しているが、これは畝状造構3群の耕作による混入の可能性が強い。

灰釉陶器碗



第74圖 据立柱建物南群土器接合關係圖

第43表 土器出土地点一覽表

**縁釉陶器** 縁釉陶器は内荒遺跡全体で11点が出土しているに過ぎない。しかもすべて小破片資料であり、このなかには接合できないものの胎土・釉調等から同一個体と考えられるものもあつて個体数とすれば5~6点前後であろう。南群周溝から出土したものはないが、221・223・225の3点は掘立柱建物南群の一画の段状遺構2群SD1487およびIV層から出土しており一括資料に含まれる可能性が高い。このうち221・225は229とともに椎崎氏によって畿内産とされたもので、同一個体となる可能性が高い。口径5.5寸(16.4cm)の切高台の碗。第15図には図上復元したものを示した。

**須恵器** 須恵器碗もまとまった量があり、灰釉陶器碗1類との量的関係は灰釉陶器碗1類：須恵器碗=2:1前後である。南群周溝SD1503、SD1510、SD1513、SD1515、SD1523、SD1525・26、SD1527、SD1531、北群周溝SD1410から出土しており、周溝以外の出土資料も大半が掘立柱建物南群の一画から出土したものである。法量は口径11.5~16.8cm、器高4.9~6.7cmの幅があり、口径4寸(11.5cm)、4.5寸(13.1~14.2cm)、5寸(15.2cm)、5.5寸(16.0~16.8cm)の4種に法量分化している。径高指数36~39前後で灰釉陶器碗に較べて深身のつくりであり、体部形態をみても忠実な模倣形態とはなっていない。猿投窯では同形の須恵器碗が灰釉陶器碗の生産に先行して鳴海32号窯式の段階に出現しており、井伊ヶ谷78号窯式段階では有台坏Aの生産と拮抗するまでになっている(日進町教育委員会1984)。静岡県内の古窯跡ではいまのところ出土例がないが、浜松市城山遺跡から出土した須恵器碗はその胎土から湖西窯産と考えられており、湖西窯で須恵器碗の生産されていた蓋然性は高い(後藤1983)。城山遺跡出土資料を実見していないため細かな検討はできないが、実測図で見るかぎりでは内荒遺跡のものに較べて灰釉陶器碗1類の模倣形態に近いようだ、この傾向は碗とセットをなす皿において顕著である。

**内黒土師器碗** 内黒土師器碗は709が周溝SD1503から出土している。口径17.1cmの5.5寸碗。内黒土師器碗は今回の調査では709を含めて3点しか出土しておらず、基本器種とはならない。

### **皿類 b. 皿類**

皿類には灰釉陶器皿1・2類、須恵器皿1・2類、土師器皿1類の磁器型有台皿のほかに灰釉陶器の段皿A、段皿B1・2類、三足盤、耳皿などの特殊な形態のものがある

**灰釉陶器皿** 灰釉陶器皿1類は猿投窯編年黒窓14号窯式に比定できるもので、南群周溝SD1503、SD1513~SD1515、SD1517、SD1518、SD1520、SD1523、SD1525・26、SD1527、SD1528、SD1540から出土している。周溝以外の出土資料もほとんどが掘立柱建物南群の一画から出土したものである。法量は口径13.0~16.4cm、器高2.0~3.3cmの幅があり径高指数18前後で4.5寸(13.0~14.2cm)、5寸(14.4~15.6cm)、5.5寸(16.0~16.4cm)の3種に法量分化している。灰釉陶器碗1類とセットで使用されたものであるが出土量には碗に較べて少ない。これは皿の法量分化が碗に較べて少ないとによるものと考えられる。

皿2類は猿投窯編年黒窓90号窯式に比定できるもの。碗2類bに対応する高台形態ものが3点あり、周溝SD1515、SD1518、SD1525・26で1類と共に共伴して出土している。法量は口径15.2~16.6cm、器高2.7~3.3cmで5寸(15.2cm)、5.5寸(16.2~16.6cm)に2種に法量分化している。

**須恵器皿** 須恵器皿1類は須恵器碗とセットをなすもので、碗同様に灰釉陶器皿に較べて深身のつくりで忠実な模倣品ではない。南群周溝SD1513~SD1515、SD1525・26、SD1530から出土しており、周溝以外の出土資料もほとんどが掘立柱建物南群の一画からの出土である。法量は口径14.0~15.6cm、器高3.0~3.3cm、径高指数21~23でほぼ5寸皿のみの単一法量

と考えてよいだろう。灰釉陶器皿1類との量的関係は灰釉陶器皿1類：須恵器皿1類=4:1前後で、碗に較べてもその占める割合は少ない。

このほか灰釉陶器皿1・2類を模倣した須恵器皿2類489・490や土師器皿1類の704・931などはいずれも南群周溝からの出土ではないが掘立柱建物南群の一画から出土したものであり、量的にみて基本器種とはならないが型式的には一括資料に含まれる可能性が高い。

いっぽう灰釉陶器皿3類を模倣した土師器皿2類の702・707が周溝SD1510から出土しているが、型式的にみて後出段階のものであることは確実であり、灰釉陶器碗3類と同様に耕作の擾乱による混入である可能性が高い。

段皿Aと三足盤は高台形態の違いによって分類しているが、体部形態は共通しており口縁部破片で両者を分離することはできないためここでは一括して扱う。法量は口径6~6.5寸(18.0~19.6cm)の大型のものに限定されている。南群周溝SD1515、SD1525・26、SD1528、北群周溝SD1410から出土している。猿投窯編年黒窓14号窯式に比定できるものである。

段皿B1類は猿投窯編年黒窓14号窯式に比定できるもので、南群周溝SD1503、SD1510、SD1517、SD1520、SD1525・26、SD1527から出土している。周溝以外の出土資料もほとんどが掘立柱建物南群の一画からの出土である。法量は口径13.6~18.5cm、器高1.9~2.7cmの幅があり径高指數は16前後で皿よりもやや浅身につくられている。4.5寸(13.6cm)、5寸(14.3~14.6cm)、5.5寸(16.7cm)、6寸(18.2~18.5cm)に法量分化している。

段皿B2類は碗2類bに対応する高台形態のものが南群周溝SD1520から出土している。口径16.0cm、器高2.8cmの5.5寸皿で、底部外面に「主」墨書がある。

耳皿は猿投窯編年黒窓14号窯式に比定できるもの。基本器種を構成するものであるが量は少ない。南群周溝SD1523から1点出土しているほか、鉢状遺構2群のSD1407からも底部外面に「主」墨書があるものが出土している。

#### c. 有台坏類

有台坏には須恵器有台坏B、土師器有台坏A1・2・3類、有台坏B、内黒土師器有台坏Bがあり、須恵器有台坏Bと土師器有台坏A2類が主要器種である。内黒土師器有台坏Bを除く有台坏類は坏蓋と組み合わさせて有蓋形態をなす。

須恵器有台坏Bは高台を回転ヘラケズリによって削り出した特徴的な有台坏で、南群周溝SD1503、SD1510、SD1513~SD1515、SD1517、SD1520、SD1522、SD1523、SD1525・26、SD1527、SD1528、SD1544、北群周溝SD1410から出土している。周溝以外の出土資料もほとんどが掘立柱建物南群の一画からの出土である。法量は口径10.4~15.3cm、器高3.8~6.5cmの幅があり、口径では3.5寸(10.4~11.0cm)、4寸(11.6~12.2cm)、4.5寸(13.5~13.9cm)、5寸(14.3~15.3cm)の4種に法量分化している。器高は3.5寸、4寸の2種は3.8~4.2cmで4cm前後、5寸は5.8~6.5cmで6cm前後にそれぞれまとまっており、4.5寸には4cm前後と6cm前後の2種のものがある。

有台坏Bは藤枝市助宗窯で生産されたことが確実な資料で、内荒遺跡のほか藤枝市御子ヶ谷遺跡(藤枝市教育委員会1981)、郡遺跡(藤枝市教育委員会1986)、宮下遺跡などから出土した資料によって1~3類に大別でき1類から3類への型式的変遷をたどることができる(第77図)。

1類 助宗窯で削り出し高台の生産が開始された最初期のもので、郡遺跡SD26上層から有台坏Aとともに出土している。体部形態ははりつけ高台の有台坏Aと同形で底部から直立

段皿A

三足盤

耳皿

須恵器有台坏B

助宗窯

有台坏Bの  
型式分類

気味に立ち上がり口径と底径との差が小さい。底部中央が窪んで回転糸切り痕跡を残すものもある。概報では墨書の底部破片を含めて5点が図示されているが、いずれも口径3.5寸の小型のものである。郡遺跡SD 26上層での有台坏Aと有台坏Bの比率からみても1類段階における助宗窯の有台坏生産は有台坏Aが主体をしめ有台坏Bは限定されたものであったと考えられる。内荒遺跡の349・351は底部破片で全形はわからないが底部中央が窪んで回転糸切り痕跡を残しており、胎土も有台坏Aに共通したもので1類に分類できるものと考えている。349はF76IV層、351はD72III層出土。

**2類 削り出し高台の主体を占める段階のもので、内荒遺跡の掘立柱建物南群の一括資料がこれにあたる。助宗窯における有台坏は有台坏Bに限定されたものとなる。胎土は有台坏Aにみられた黒色の吹き出しをもつ灰褐色のものがとなって灰白色を呈する軟質の焼き上がりのものが多い。色調が灰白色になるのは灰釉陶器の灰白色の精良な胎土を意識したためであろう。器形では1類と較べて体部の開きが大きくなる特徴がある。こうした体部の開きが大きくなる傾向は碗形態を指向した型式変化と考えられ湖西窯の有蓋無台坏身にも共通してみることができる(坏身B 2—坏身B 3)。体部内面の屈曲は鋭く底部と胴部の境に沈線をもつものも多い。底部は回転ヘラケズリ調整を施して平坦にしたあと外縁部分に斜めにヘラをあてて高台を削り出す。高台の位置には底部と胴部の境につけるものと底部の内側につけるものの2種がある。後者のなかには口縁端部が引き出されたものが御子ヶ谷遺跡から出土していて金属碗写しと思われる。**

**3類 削り出し高台の最末に位置づけられるもので、器形的には碗形態にちかく、底部から胴部への屈曲は緩やかで、2類に較べてさらに体部の開きが大きくなり口径が底径の2倍以上になる。量的にも少ない。宮下遺跡から完形に復元できる資料が出土している。内荒遺跡の352~354は底部資料で全形を知ることはできないが、底部調整が粗雑化して回転糸切り痕を残したままで高台部にのみ回転ヘラケズリを施している。353は掘立柱建物南群の一画であるD78IV層からの出土である。**

有台坏Bとセットになる坏蓋には削り出しの環鉢をもつ坏蓋Bと鉢をもたない坏蓋C 1類の2種がある。坏蓋Bは南群周溝SD 1503、SD 1510、SD 1515、坏蓋C 1類は南群周溝SD 1510、SD 1513、SD 1514、SD 1515、SD 1517、SD 1523、SD 1525~26から出土しており、また両者とも周溝以外の出土資料もほとんどが掘立柱建物南群の一画からの出土である。両者はSD 1510、SD 1515では共伴していることからも併用されていたことは確実であろう。口径は坏蓋Bが口径13.5~16.5cm、坏蓋C 1類が12.0~17.6cm。

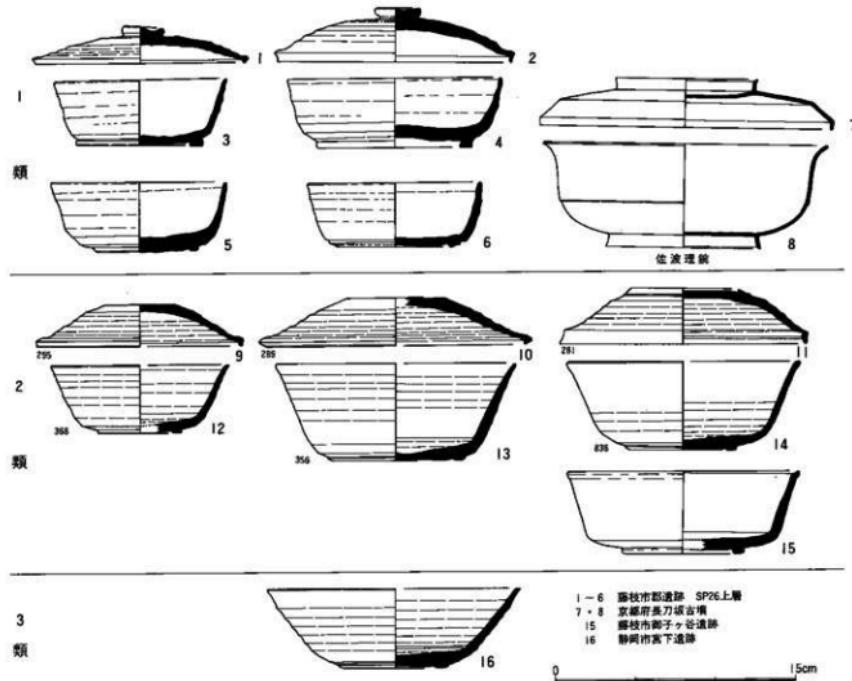
**須恵器坏蓋B** ところで坏蓋Bは御子ヶ谷遺跡の報告書では高台皿として扱われているものであるが、本稿では以下の理由によって坏蓋と考えている。①坏蓋Bの環鉢の削り出し技法は有台坏Bの高台の削り出し技法とまったく同じであることから両者をセットでとらえることに問題はない。②後述するように土師器の有台坏A 2類や有台坏Bとセットになる坏蓋は環鉢の坏蓋B以外ではなく、当該期の土師器では環鉢の蓋が通有の形態である。③とくに土師器有台坏Bは助宗窯に特徴的な削り出し高台技法をもつもので須恵器有台坏Bを忠実に模倣したものと考えられることから、須恵器有台坏Bに削り出しの環鉢をもつ坏蓋Bが組み合わさる蓋然性はきわめて高いと考える。環鉢をもつ蓋は本来金属碗写しの有台坏に組み合わさるものであり、坏蓋Bがやや外傾気味に折られた受け部をもつもこうした金属碗写しの系譜につながる証拠であろう。須恵器有台坏Bのなかにも金属碗写しの形態と考えられるものがあることは上述したとおりであるが量的には少なく、内荒遺跡では明確に金

属碗写しといえるものは出土していない。土師器有台坏A 2類が金属碗写しとは考えられないのに環鉢の坏蓋B 2類とセットになる在り方からみて当該期には金属碗写し有台坏との組合せに限定することない使用が一般化していたと考えられる。いっぽう鉢をもたない坏蓋C類は助宗窯以外にも湖西窯、猿投窯、兵庫県札馬窯、京都府篠窯、東京都南多摩窯、埼玉県南比企窯、福井県城ヶ谷窯、石川県南加賀窯、富山県末窯など全国各地の窯で生産されており、いずれも坏蓋Aの系譜のなかで成立する形式と考えられる。

ここでは坏蓋Bを金属碗写しの系譜の坏蓋、坏蓋C 1類を坏蓋Aの系譜の坏蓋として理解し、2種の異なる系譜の坏蓋が有台坏Bに併用されていたと整理した。量的には坏蓋C 1類が主体を占めており坏蓋Bと比率は2.5~3:1前後である。しかし両者を合わせてもまだ有台坏Bの出土量にはおよばない。

なお、内荒遺跡では坏蓋Cが1類以外に2類、3類と分類したものが1点ずつ出土している。2類の814は南群周溝 SD 1525-26、3類の917は頂部に「主」の墨書があるものでC 78IV層から出土しており、両者とも掘立柱建物南群の一括資料と考えられるものである。

2類は平坦な頂部に回転糸切り痕を残すもので口径15.0cm。内面を覗として利用している。湖西窯のHK36-VI号窯では平坦な頂部をもつ坏蓋Cが出土している。この窯の場合は法



第75図 有台坏B型式分類図

量によって頂部調整に違いがあり15cm以下のものは回転糸切り痕の2類、15cm以上のものは回転ヘラケズリ調整の1類となる。814はこの在り方と一致するものであり、胎土での判断はむずかしいが湖西窯産の可能性が高いと考えられる。3類の917は頂部を回転ヘラケズリ調整によって丸く仕上げたもので受け部をつくり出さないという特徴をもつ。口径16.6cm。同形のものがやはり湖西窯のHK24-II号窯から出土しており湖西窯産としてよいだろう。坏蓋C 2・3類が湖西窯産とするとこれとセットになる杯身は湖西窯分類で坏身B 2とした平底無台坏であるが、この型式に該当するものは内荒遺跡では出土していない。なお、湖西窯編年では坏蓋C 2類をVII期第1小期、坏蓋C 3類をVII期第2小期にあて両者の間に時間的前後関係を想定している（後藤1983）。

**須恵器坏蓋A** このほかに須恵器坏蓋A249-250が南群周溝 SD 1518、244がSD 1514から出土している。249-250は甲高なつくりのもので、口径15.2~16.0cm。助宗窯産。244は口径24.4cmの大型品である。いずれも掘立柱建物南群の一括資料のなかでは型式的に先行するもので、掘立柱建物位南群の一画からは同時期のものと考えられる有台坏A 2類や坏蓋Aの破片が少量ではあるが出土している。

**土師器坏蓋A** 土師器有台坏A 2類は南群周溝 SD 1510、SD 1511、SD 1522、SD 1523、SD 1526、SD 1533から出土しており、周溝以外の出土資料もほとんどが掘立柱建物南群の一画からの出土である。法量は口径13.7~14.2cm、器高6.2~6.6cm、径高指数44~48で、4.5寸の單一法量である。深身のつくりは須恵器有台坏Bと共に通している。929-930は「建」墨書があり、930は書体・墨書き部の共通性から須恵器有台坏B 924と同時に使用したことが明らかとなっている。有台坏A 2類とセットになる坏蓋B 2類ははりつけの環鉗をもつもので、掘立柱建物南群の一画からまとまった量が出土しており、南群周溝 SD 1510、SD 1526では有台坏A 2類と共に通している。口径14.5~16.2cm。

土師器有台坏A 1類は須恵器有台坏Aの模倣と考えられるもの。量的には少なく図示された6点はすべて破片資料で全形を復元できるものはない。南群周溝 SD 1510とSD 1528から出土している。他のものも685が掘立柱建物北群の一画であるF79IV層から出土した以外はすべて掘立柱建物南群の一画からの出土である。法量は680-681の2点が口径15.1cmの5寸に復元できる。685はこれより大きな法量となる。有台坏A 1類とセットになる坏蓋A 1類の679も南群周溝 SD 1528から出土している。口径17.0cm。

有台坏A 1類・坏蓋A 1類の組合せは前述の須恵器坏蓋Aと同じく掘立柱建物南群の一括資料のなかでは型式的に先行するものである。

土師器有台坏A 3類は体部が大きく開いて碗形態に近いもの。700の1点のみで、破片が南群周溝 SD 1517とSD 1523から出土している。法量は口径18.6cm、器高6.1cm。これとセットになると考えられる坏蓋A 2類も南群周溝 SD 1503、SD 1526などから出土している。口径17.8~20.0cm。器形的には有台坏A 4類や須恵器有台坏B 3類と共通しており有台坏のなかでは最終段階に位置付けることができるもので、後出型式の混入である可能性もある。

**土師器有台坏B** 土師器有台坏Bは須恵器有台坏Bを模倣したもの。量的には少なく図示し得た3点はすべて破片資料で全形を復元できるものはない。このうち高台を回転ヘラケズリでつくり出した687が南群周溝 SD 1515から出土しており、他の2点も掘立柱建物南群の一画からの出土である。法量は不明であるが底径には2種がある。セットになる坏蓋B 1類は削り出しの環鉗をもつもので、659が南群周溝 SD 1527、660がD79IV層から出土している。口径は659が12.8cm、660はこれよりひとまわり大きく14cm前後を測る。これから有台坏Bの法量に3.5

寸と4寸のものを想定できよう。

内黒土師器有台坏Bは無台坏Bの底部外縁に回転ヘラケズリによって沈線をいれ高台を削り出したもの。削り出し高台の技法は助宗窯須恵器有台坏Bの技法を模倣したものであるが高台自体は装飾に近く、本来は無台坏の範疇で考えてよいもので蓋も伴わない。量も少なく底部破片が2点出土しているのみで、このうちの718が南群周溝SD1523から出土している。

#### d. 無台坏類

内黒土師器  
有台坏日

無台坏類

無台坏には須恵器無台坏A 4類、無台坏B、土師器無台坏A、無台坏B、無台坏C、内黒土師器無台坏B、無台坏Cがあり、須恵器無台坏Bと土師器無台坏Cが主体を占める。無台坏には蓋が伴わない。

須恵器無台坏Bは南群周溝SD1503、SD1510、SD1511、SD1514、SD1515、SD1517、SD1522、SD1523、SD1525・26、SD1527、SD1528、SD1530、北群周溝SD1410から出土している。周溝以外にも掘立柱建物南群の一画から多数出土している。法量は口径11.1~13.8cm、器高3.6~5.3cmの幅があり、径高指数3.3前後で口径4寸(11.1~12.2cm)4.5寸(12.8~13.8cm)の2種に法量分化しているが、量的には4寸のものがほとんどである。無台坏Bは細かくみれば、体部が直線的に立ち上がり箱状を呈するもの、体部が緩やかに立ち上がり碗状のものあるいは、口径と底径との比率が2>1のもの、2<1のものなどでさらに細分することができるかも知れないが、両者とも南群周溝から出土しておりここでは細分しない。

無台坏A 4類は406が南群周溝SD1525・26から出土している。口径10.6cm、器高3.8cmの箱形の坏で、体部形態は有台坏Bに近似する。

土師器無台坏Aは遠江に分布の主体をもつもので、出土量はきわめて少ない。537が南群周溝SD1525から出土している。口径11.4cm、器高3.8cm。

無台坏Bは「甲型型坏」である。南群周溝SD1513、北群周溝SD1410、SD1416、SD1501から出土している。法量は3.5~4寸(口径21.6cm、器高6.5cm)の大型品がある。内荒遺跡から出土した甲型型坏は547(C76款式遺構2群SD14115)の1点を除いて底部内面の放射暗文を消失した段階のもので、平林将信氏の分類(平林1983)ではCe類、Cf類にあたるものである。北群周溝およびこの一画から出土した4点はすべてCe類でこのうち932・933・934の3点には「川万呂」「川万」の墨書がある。これに対して南群周溝およびこの一画から出土したものには口縁端部が肥厚し底径が4~5cm台のCf類が多い。

無台坏Cは「駿東型坏」で、内荒遺跡から出土する無台坏の主体を占めるもの。このうち体部内面に放射暗文あるいは山形の縦位暗文を施した1群のものは胎土・成形技法は駿東坏の範疇に入るものであるが、体部内面の施文方法は無台坏Bに共通したもので本来の駿東坏にはない特徴である。2章では細分していないがここでは無台坏Cを形式細分し本来の駿東坏を無台坏C 1、前出の1群を無台坏C 2として記述をすめる。

無台坏C 1は無台坏Cの主体を占めるもので、墨書された無台坏Cはすべてこの無台坏C 1である。掘立柱建物南群ではSD1511とSD1524を除いたすべての南群周溝や包含層からまとまって出土している。北群でも周溝SD1410や包含層から出土している。掘立柱建物南群の一括資料はすべて底部内面の放射暗文を消失した段階のもので、平林将信氏の分類B II e、B II fに分類できる。器面が荒れていて観察できない資料もあるが大半は体部内

須恵器無台坏A

土師器無台坏A

土師器無台坏B  
「甲型型坏」

土師器無台坏C  
「駿東型坏」

面に横ヘラミガキのあるB II eである。北群周溝 SD 1410から出土した605は体部の屈曲が鋭く口径と底径の差の小さい箱型の器形で内面全体には丁寧なヘラミガキ調整が施されいて、掘立柱建物南群の一括資料よりはやや古い様相をもつものである。法量は口径10.1~12.7cm、器高3.3~5.5cmの幅があるが、すべて口径3.5~4寸のなかに納まるもので単一法量と考えてよい。器高は4cm前後に集中している（径口指數30）が一部に5cm前後の深身のつくりのもの（径口指數43）がある。

無台坏C 2も南群周溝 SD 1503、SD 1510、SD 1513、SD 1515、SD 1525・26、SD 1533から出土しており、周溝以外の資料もほとんど掘立柱建物南群の一画からの出土である。法量は口径11.6~14.8cm、器高4.2~5.6cmの幅があり、4寸（11.6~12.6cm）、4.5寸（口径13.0~13.4cm）、5寸（口径14.8cm）の3種に法量分化している。無台坏C 1にはない4.5寸、5寸のものがある点特徴的である。

**内黒土師器  
無台坏B** 内黒土師器無台坏Bは土師器無台坏Bの体部内面を黒色処理したもの。南群周溝 SD 1517、SD 1518、SD 1528から出土しており、周溝以外の資料もすべて掘立柱建物南群の一画からの出土である。全形を復元できる資料は南群周溝 SD 1517、SD 1518から出土した713の1点のみで、口縁端部が肥厚して玉縁状を呈し、底径が小さいことから土師器無台坏BのCf類に比定できるものである。体部内面には土師器無台坏Bにはみられない放射暗文と螺旋暗文を組合せた装飾が施される。法量は5寸（口径14.6cm、器高4.8cm）。底径から判断して716は土師器無台坏Bの3.5~4寸と同法量、715・717は713と同じく5寸前後の法量となると考えられる。714は土師器無台坏B 539の9寸に対応するものだろう。土師器無台坏Bの法量が3.5~4寸にほぼ单一化しているのに対して内黒土師器無台坏Bではこれよりもひとまわり大きな5寸前後のものが多く、両者の間には法量の補完関係があったのかもしれない。こうした在り方は土師器無台坏CにおけるC 1とC 2の関係にも共通するものである。

**内黒土師器  
無台坏C** 内黒土師器無台坏Cは土師器無台坏C体部内面を黒色処理したもの。712の1点が南群周溝 SD 1525・26から出土している。法量は4寸（口径12.0cm、器高3.6cm）。

#### B. 貯藏形態

貯藏形態には灰釉陶器と須恵器の2種類のものがあり、器種は壺類、瓶類、甕類に大別できる。

##### 壺類 a. 壺類

灰釉陶器短頸壺、須恵器短頸壺、須恵器小型広口壺がある。

**灰釉陶器  
短 頸 壺** 灰釉陶器短頸壺は2点あり166が南群周溝 SD 1525・26から出土している。また、165も掘立柱建物南群のD78IV層からの出土である。蓋も2点が南群周溝 SD 1503、SD 1513から出土している。

**須恵器短頸壺** 須恵器短頸壺は506の底部破片1点のみで、南群周溝 SD 1514・15から出土している。

**須恵器小型  
広 口 壺** 須恵器小型広口壺は3点あり、このうち509が南群周溝 SD 1525、510が掘立柱建物南群のC79IV層から出土している。

##### 瓶類 b. 瓶類

灰釉陶器手付瓶、平瓶、長頸瓶、須恵器長頸瓶がある。瓶類としてはこのほかに瓶子が器種組成に含まれる可能性がある。

**灰釉陶器手付瓶  
水 注** 灰釉陶器手付瓶は148・149の2点あり、いずれも南群周溝からの出土である。また、注口部の破片147もC79IV層から出土しており、148と接合して水注になる可能性が高い。なお小型手付瓶150は歟状遺構4群のSD 1519、SD 1529からの出土であるが手付瓶とセットで

使用された可能性が高い。

灰釉陶器平瓶は大小 2 種のものが南群周溝 SD 1515 から出土している。転用碗の 809 も南群周溝 SD 1526、SD 1530 からの出土である。

灰釉陶器長頸瓶は 180・183・189・195・197～199・202・203 が南群周溝から出土しているが、いずれも破片資料で全形は復元できない。また小型長頸瓶の 167 も南群周溝 SD 1503 から出土している。須恵器長頸瓶は平底の 515 が南群周溝 SD 1528 から出土している。

#### c. 壺類

須恵器壺がある。517～519・521・525・529・530 が南群周溝から出土している。517～519 の大型壺は掘立柱建物南群の一画から出土した多くの破片資料を接合したもので南群周溝間ににおける接合関係も複雑である。519 は胴部を欠失しているが平底になるものである。517 は器面に鉄袖を塗布する特徴をもつ。こうした大型の平底壺や鉄袖を塗布した壺は猿投窯産のものにみることのできる特徴であり（日進町教育委員会 1984）、灰釉陶器陶器とともに搬入された可能性も高い。

#### C. 煮沸形態

煮沸形態はすべて土器器で壺類と鍋類がある。

#### a. 壺類

壺類は長胴壺と小型壺の 2 種に大別でき、長胴壺には長胴壺 A、長胴壺 B、小型壺には小型壺 A 1・3 類、小型壺 B、小型壺 C がある。

長胴壺 A は遠江に分布の主体をもつもので、南群周溝 SD 1533、SD 1540 から出土しており、周溝以外の資料もほとんど掘立柱建物南群の一画からの出土である。これに対して長胴壺 B は出土量も少なく、掘立柱建物南群からの出土資料は南群周溝 SD 1513 と SD 1515 から出土した破片の接合資料である 747 の 1 点のみである。長胴壺についてはほぼ長胴壺 A に限定しても問題ないであろう。

小型壺は小型壺 A 1 類が南群周溝 SD 1510、SD 1513、SD 1515、SD 1525・26、SD 1528、小型壺 A 3 類が SD 1510、小型壺 B が SD 1528、SD 1540、小型壺 C が SD 1525 から出土しているが、量的にみて小型壺 A 1 類が主体を占める。小型壺 A 1 類は駿河に分布の主体をもつものであり、長胴壺と小型壺の組合せで系譜の違うものがセットをなしている点興味深い。

#### b. 鍋類

鍋 C が南群周溝 SD 1525・26 から出土している。鍋類は壺類に較べて出土量は極端に少なく、器種組成では客体的な在り方といえよう。

#### 3. 墓書土器による使用段階の一括性の検証

以上やや冗長な記述となってしまったが、2 項において南群周溝出土資料を中心として掘立柱建物南群に伴う一括資料を抽出し、各器種毎に型式、法量などの説明を行った。この掘立柱建物南群の一括資料は前述したように掘立柱建物南群に廃絶に伴って周溝部分を中心として掘立柱建物南群の一画に一括収集されたものと考えられる資料で、型式的にみると灰釉陶器碗・皿類における 1 類・2 類のように前後の型式をもつ器種もあるが、ほぼ灰釉陶器の黒帯 14 号窯式を主体として黒帯 90 号窯式古段階までの幅をもった時期の一括資料といえよう。これよりも明らかに先行型式と考えられる須恵器環蓋 A・有台环 A 等も周溝や建物群の一画から出土しているが、量的にはきわめて少ない。これらは掘立柱建物南群が機能していた段階に周溝などに埋没したものであろうが、建物が機能している間は建物の周囲や周溝を清浄に保つために溝さらえや清掃が定期的に行われていたはずであり、出

灰釉陶器平瓶

灰釉陶器長頸瓶

須恵器長頸瓶

壺類

須恵器壺

煮沸形態

壺類

長胴壺 A

長胴壺 B

鍋類

鍋 C

土量の少なさはこれを反映したものであろう。ところでこうした資料のひとつとして南群周溝 SD 1540からは「神功開寶」が出土している。「神功開寶」がその鋳造期間（765～796年）のなかで内荒遺跡に持ち込まれ周溝に埋没したとすれば、先行型式の実年代を知ることのできる資料として重要であろう。一方これとは逆に周溝からは灰釉陶器碗3類や土師器皿2類などのような後出型式の資料も少量であるが出土している。建物が廃絶されたあとは欹状造構4群にみると建物の跡地に畠が開削されており、これら後出型式の資料は畠を耕作する際に混入した可能性が強い。こうした畠作による搅乱の状況は欹状造構からの出土資料が周溝出土資料と接合する例からも伺われる。いずれにしろこれら先行型式あるいは後出型式の資料は量的にはきわめて少なく、量的に安定している器種の一括性については問題ないと考えている。

#### 墨書土器

ところで掘立柱建物南群の一括資料のなかには多数の墨書土器が含まれている。第2章第2節でみたように今回の調査では85点の墨書土器が出土しており、墨書の判読が可能なものは57点65字ある。このうち「建」(18点23字)「主」(15点)「岡」(7点10字)「川万呂・川万」(3点)「上」(2点)の5種類の文字については( )内に記したような複数例がしられる。これら複数例がしられる墨書資料はすべて掘立柱建物南群の一括資料として抽出した型式の土器に墨書されたものである。このうち「岡」「上」は土師器無台坏C1、「川万呂・川万」は土師器無台坏Bの單一器種・單一型式に墨書されたもので型式の組合せをみるとことはできないが、「建」と「主」の2種類はそれぞれ灰釉陶器・須恵器・土師器に墨書されており、施業段階の一括性ではなく使用段階における一括性を把握できる資料として重要である。もちろん同一の文字が墨書されているからといって一概に同時使用されたものであるとはかぎらない。ここでは墨書土器の書体や墨書部位などを検討し使用段階における一括性を整理してみたい。

#### 使用段階における一括性

「建」 「建」 18点23字は今回の墨書資料のなかで最もも多いもので、灰釉陶器碗1類(902)・同双耳碗(903)、須恵器有台坏B(924)、土師器有台坏A2類(929・930)、同無台坏C(936～949)の各器種に墨書されている。すべて掘立柱建物南群の一画から出土したもので924・937・940～945・947・948は建物周溝からの出土である。

#### A～Cタイプ

墨書の書体については第3章第2節で検討したとおり、A～Gタイプの7種類に分類した。Aタイプは23字のうちの15字を占めるものでほぼ同筆のものと考えてよい。またほかのB～GタイプについてもAタイプと顕著な違いをもつものではない。

1字墨書のものと2字墨書のものの2種類があり、墨書部位は底部外面と体部外面の2ヶ所がある。有台坏A2類929と無台坏C940～943は2字墨書の例で底部外面および体部外面の2ヶ所にAタイプの書体で墨書されている。このうち929と940・942・943の4点は底部と体部左に並列して墨書する例、941は底部と体部下に縦列して墨書する例である。須恵器有台坏B924は底部を欠失した資料であるが、Aタイプの書体で体部左に墨書されていることから上述した929・940・942・943とおなじ並列の2字墨書であった可能性が高い。これらは周溝出土である点でも共通している。このことから土師器有台坏A2類・無台坏Cと須恵器有台坏Bが同時に使用された蓋然性は極めて高い。

また灰釉陶器碗1類902に書かれたBタイプの書体は6画面のあとに「」を置いてから「」に入る書き方のくせがAタイプと共に通じていている。この書き方のくせが同筆書体の根拠になるとすれば、902は1字墨書ではあるが、灰釉陶器碗1類が土師器有台坏A2類・無台坏C・須恵器有台坏Bと一緒に使用されていた可能性は高いといえよう。

「主」 灰釉陶器段皿B 1類(913) 2類(914)・同耳皿(915)、須恵器環蓋C類(917)・同有台環B(922)・同無台環B(926)、土師器無台環C(955~963)の各器種に墨書きされている。出土地点はE77区画溝SD14077から出土した915を除けばすべて掘立柱建物南群の一画から出土したものであり、914・922・926・955~960・962は建物周溝からの出土である。

すべて1字墨書きで、墨書き部位は955・956の2点が体部外面に書かれている以外は底部外面である。書体はAタイプ、Bタイプの2種類に明確に分類できる。

Aタイプ 灰釉陶器段皿B 1類913、須恵器環蓋C 3類917、土師器無台環C957~959・961~963

Bタイプ 灰釉陶器段皿B 2類914、須恵器有台環B922・同無台環B926、土師器無台環C 955・956・960。灰釉陶器耳皿915は墨書きが不鮮明で明確ではないがBタイプか。

Aタイプ、Bタイプはそれぞれ同筆であると考えられることから各タイプごとのまとまりは同時に使用された可能性が高い。A、Bの両タイプに共通する器種の型式をみてみると灰釉陶器段皿Bの場合はAタイプが1類、Bタイプが2類で型式差がある。これに対して土師器無台環Cでは両者の間に型式差は認められない。また、須恵器有台環Bは「建」資料で灰釉陶器碗1類との同時使用の可能性を述べたが、ここでは灰釉陶器段皿B 2類と共通するBタイプの「主」が墨書きされている。Aタイプ、Bタイプの使用的同時性を証明することはできないが、土師器無台環Cおよび須恵器有台環Bの型式時間幅のなかで灰釉陶器1・2類が使用されたことは確実であろう。

以上「建」のAタイプ、「主」のAタイプ、Bタイプの3種類の書体資料によって掘立柱建物南群の一括資料のなかで同時に使用された可能性の高い器種型式を整理すれば、灰釉陶器1・2類、須恵器有台環B、同環蓋C 3類、同無台環B、土師器有台環A 2類、同無台環Cとなる。これらは須恵器環蓋C 3類をのぞけば掘立柱建物南群の一括資料を構成する主要器種と一致している。

#### 4. 供膳形態の器種構成

1項~3項で整理した掘立柱建物南群の一括資料のなかで、出土量の大半を占めるのが供膳形態器種つまり食器類である。西 弘海氏は律令期の土器の特徴として「金属器指向型」を基調として環皿等の食器類が法量によって多様に分化し、規格性をもっていること(法量による器種分化)、質的に異なる土師器・須恵器の各器種間にほとんど同一の法量をもつ類似した器形をもつこと(法量による互換性)を指摘した。そして食器類の多様な器種分化とその前提となる法量の規格性、多様な器種分化の結果としての法量による互換性の成立は、律令制古代国家の中核をなす官僚制の発展と、それにかかる大量の官人層の出現とその特殊な生活形態を前提としてはじめて理解できるものであるとし、こうした食器類を中心とした土器様式を「律令的土器様式」として把握した(西1982)。「律令的土器様式」は7世紀後半に畿内において成立し、律令制に基づく国家体制の整備とともに畿内を中心とする広範な地域に齊一性をもった土器様式として発展するが、9世紀初頭における晚唐越州系磁器の影響による「磁器形」瓷器-綠釉陶器・灰釉陶器-の出現とこれらに代表される「磁器指向型」への転換によってあらたな土器様式へと変化していく。

今回整理した掘立柱建物南群の一括資料は黒笠14号窯式の灰釉陶器を主体とするもので、ちょうど「律令的土器様式」が「磁器指向型」への転換によってあらたな土器様式へと変化していく時期に相当する一括資料であり、当該期の地方官衙における「律令的土器様式」

「主」

A・Bタイプ

西 弘海

律令的土器様式

## 木製容器類

の実態を知ることのできる良好な資料と考えられる。ここではこうした視点にたって、掘立柱建物南群の一括資料における食器類の器種構成について整理しておきたい。ただここで注意しておきたいのは木製容器類の存在である。掘立柱建物南群の周溝からは土器類とともに曲物類、挽物類、削物類などの木製容器類が出土しており、掘立柱建物南群の一括資料として把握することができる。これらの木製容器類は土器類の供膳形態器種とともに食器として用いられたものと考えられる。律令制下における食器類は土器類を主体としていることは間違いないが、土器類のほかにも金属製容器類や木製容器類をその構成要素としてあげることができ、西の指摘した「律令的土器様式」の基本的な性格・食器類の多様な器種分化とその前提となる法量の規格性・多様な器種分化の結果としての法量による互換性は土器類のみならず金属製容器類や木製容器類も含めた食器類の総体にもあてはまる概念といえよう。したがってここでは木製容器類も含めて食器類の器種構成をみていただきたい。

## 食器類の器種構成

### 碗皿類

A. 碗皿類

碗皿類は越州窯系磁器を指向して成立した器種であり、掘立柱建物南群の一括資料における供膳形態器種のなかでもっとも特徴的な器種といえる。灰釉陶器・綠釉陶器・須恵器・土師器・内黒土師器の各種類のものが出土しているが、基本的には灰釉陶器と須恵器の2種類に限定でき、なかでも猿投窯産の灰釉陶器1類が主体をなしている。

### 碗類

a. 碗類

碗類には灰釉陶器・綠釉陶器・須恵器・内黒土師器の4種類のものがあり、口径3.5寸から6.5寸までの法量分化が認められる。ただこの寸単位の法量は実測図の計測値をから口径を基準にして5分単位に前後に7mmの幅をもたせて器械的に分割したものであり、碗の主体をなす灰釉陶器の法量分布図（第5図）をみると4.5～5寸と5.5～6寸のところにドットが集中しており、それぞれを1群としてとらえることができる。また3.5～4寸のものは1類に3点あるだけで量的に少なく明確ではないが、後述する有台杯類や無台杯類では3.5～4寸に集中して1群としてまとまりを示すことから碗でも1群としておきたい。いっぽう大型の6.5寸のものは2類に1点ある。1類のものは出土していないが猿投黒窯5号窯などの窯資料（愛知県教育委員会1980）で確認できることから1群として扱う。以上灰釉陶器碗から碗類の法量は3.5～4寸、4.5～5寸、5.5～6寸、6.5寸の4群のまとまりに整理できる。ここでは碗I、碗II、碗III、碗IVとして記述をすする（第44表）。須恵器碗には4寸、4.5寸、5寸、5.5寸のものがあり、碗I、碗II、碗IIIの3群で灰釉陶器との互換性をもつ。綠釉陶器・内黒土師器は各1点ずつであるがともに5.5寸で碗IIIに含まれる。このほかに特殊な形態の碗として4寸の双耳碗が1点出土している。碗では碗IIIの5.5（～6）寸碗が最も使用頻度が高く、ついで碗IIの4.5（～5）寸碗となる。このほかの法量のものは少ない。また量的には主要器種である灰釉陶器碗1類と須恵器碗がともに4.5寸と5.5寸、灰釉陶器碗2類は5寸と5.5寸に集中している。

### 皿類

b. 皿類

皿類には越州窯系磁器写しの皿のほかに段皿A、段皿B、三足盤、耳皿の各器種がある。皿には灰釉陶器・須恵器・土師器の3種類のものがあるが、段皿A以下の特殊形態の皿はすべて灰釉陶器に限定されている。

皿は碗に較べると法量が限定されていて4.5寸から5.5寸までのなかに納まり、主要器種である灰釉陶器1類と須恵器1類はいずれも5寸に集中している。灰釉陶器皿2類では5.5寸、須恵器皿2類は4.5寸に集中するが出土量自体が少ない。また土師器皿1類も5寸のも

のが1点あるのみである。灰釉陶器皿の法量分布図(第5図)をみると5~5.5寸で1群としてとらえることもできることから、皿はほぼ5(~5.5)寸の単一法量としてみてよいだろう。

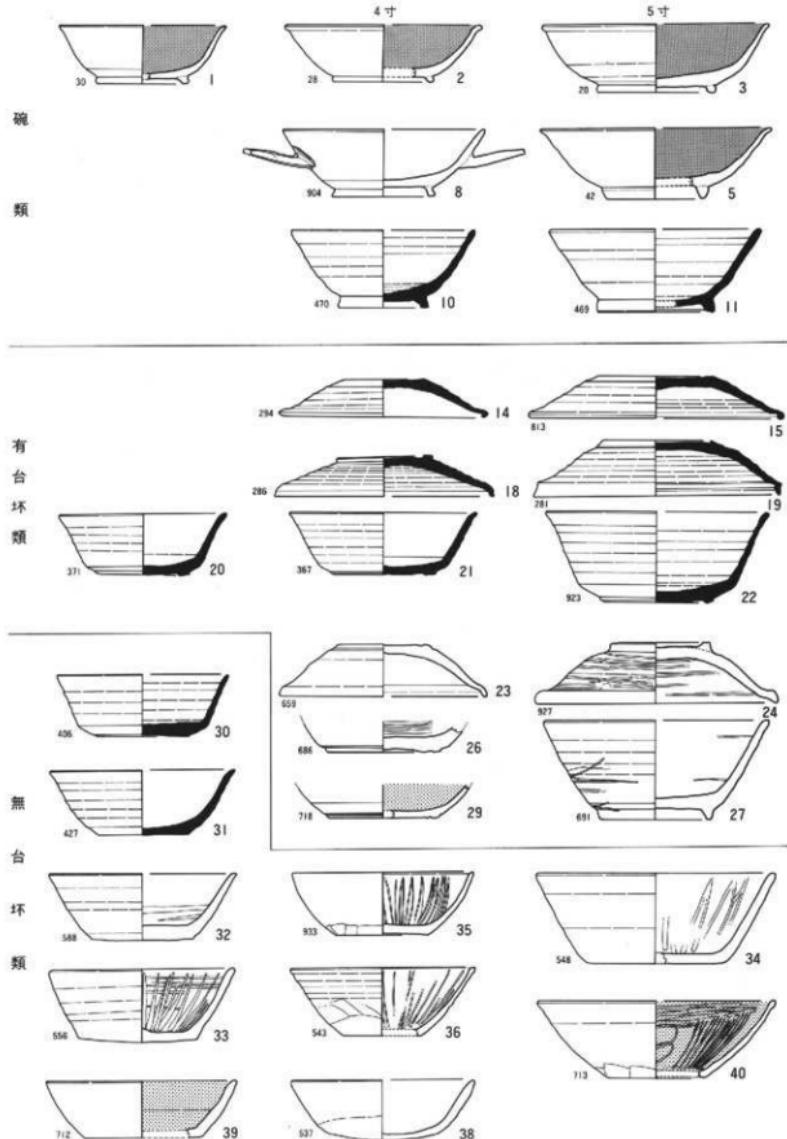
段皿は「延喜式」などにみえる「擎子」\*にあたるものと考えられ、碗台として碗とセットをなして用いられたものである（檜崎1973）。

\* 吉田恵二氏は「擎子」について「盛御膳盤謂之擎子覆膳上謂之蓋擎子」(17-450)の記載から御膳を盛る盤で蓋が付くものとし、鉛釉陶器坏Bないし皿B（本書の分類では須恵器有台坏Aの形態）に比定している（吉田1982）。

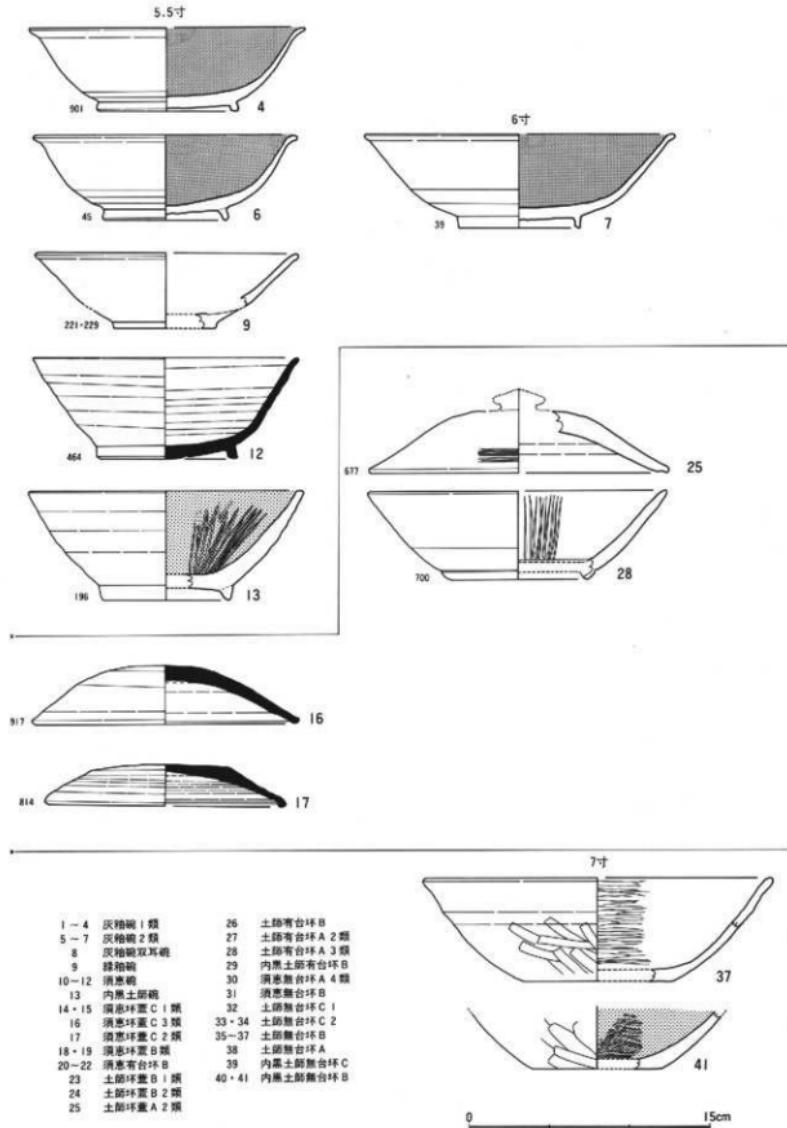
碗台としての機能を考えれば体部内面の段下端径が碗の高台径と対応すると考えられる。段皿Bでは口径に4.5寸から6寸までの法量分化が認められるが、段下端径は口径4.5～5.5寸のものは7～8cm、6寸のものは9～10cmに集中しており2群に分けることができる。ここでは段下端径も考慮して口径4.5～5.5寸のものを段皿I、6寸のものを段皿IIとしておく。段下端径を灰釉陶器碗1類の高台径にあててみると段皿Iは4.5（～5）寸碗の碗II、段皿IIは5.5（～6）寸碗の碗IIIの高台径とほぼ対応する。しかし、量的には碗に較べて圧倒的に少ない。一方段皿Aと三足盤は口径6寸、6.5寸の2種類の法量分化が認められるが、法量分布図（第5図）にみるとおり18～19.6cmの幅のなかに納まるものであり両者を合わせて段皿IIの1群としてとらえて問題ない。段下端径もほぼ14cm前後に集中している。この段下端径は段皿Bの6寸ものに較べて大きく、これに対応する碗はない。三足盤については「密教の法具として大檀供のうちにあり、名古屋市八事堂跡出土の一括遺物のなかにもみられて仏具として用いられたものと思われる」との指摘があり、食器類としての用途からははずれるのかもしれない（檜崎1973）。

耳皿は箸置きとして使用されたものである。2点が出土しているのみである。

第44表 供體形態器種構成表



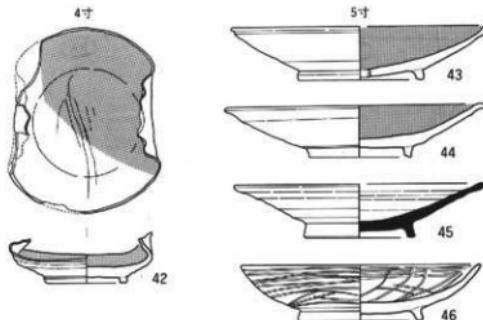
第76図 供膳形態器種構成図（1）



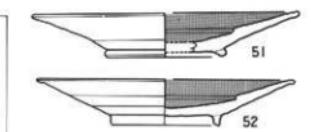
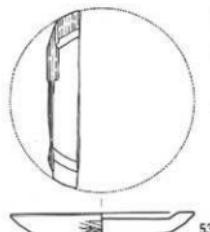
皿

- 42 灰釉耳皿  
43 灰釉皿 1 類  
44 灰釉皿 2 類  
45 青瓷皿 1 類  
46 土陶皿 類  
47 灰釉三足盤  
48・49 灰釉紋皿 B  
50・51 灰釉紋皿 B 1 類  
52 灰釉紋皿 B 2 類

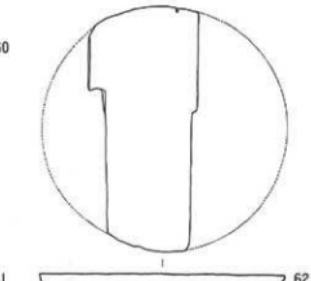
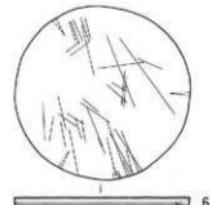
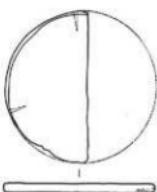
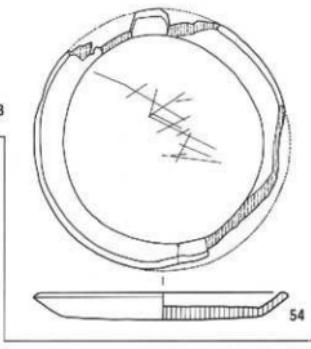
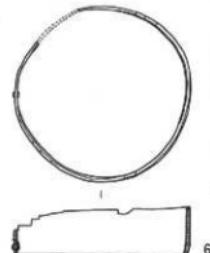
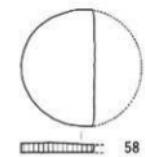
類



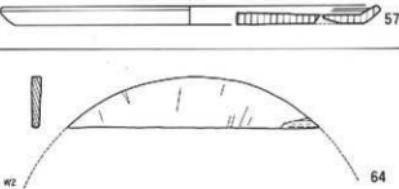
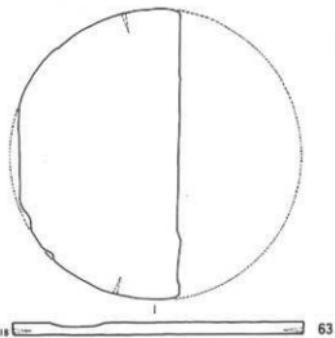
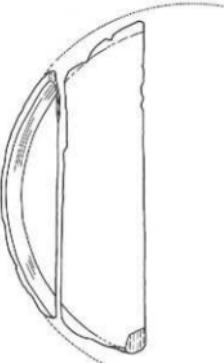
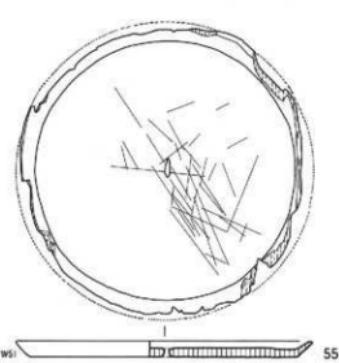
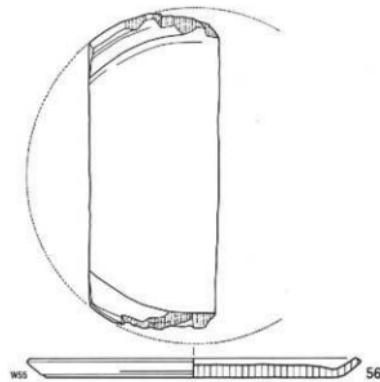
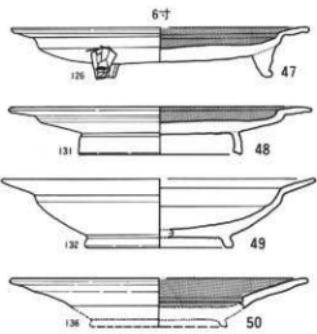
挽物皿



曲物容器



第77図 供膳形態器種構成図（2）



0 15cm

「延喜式」に記載された器種の器種  
名称と法量

ところで『延喜式』「民部省式」年料雜記尾張國瓷器条には「尾張國瓷器。大碗五合、径各九寸五分。中碗五口、径各七寸。小碗・径各六寸。茶碗廿口、径各五寸。盞五口、径各四寸七分。中擎子十口、径各五寸。小擎子十口、径各四寸五分。花盤十口、径各五寸五分。花形塙坏十口、径各三寸。瓶十口、大四口、小六口。」の記載があり、尾張國から年料として納められた「瓷器」の各器種の名称とその数量、法量規定を知ることができる。「瓷器」は正倉院文書の『造仏所作物帳』などによって三彩・綠釉などの鉛釉陶器を指すことが明らかであることから、ここでいう「尾張國瓷器」は猿投窯産綠釉陶器を示していると考えられる。内荒遺跡での綠釉陶器の出土は極限られたものであるが、綠釉陶器と灰釉陶器の碗皿類は越州窯系磁器写しの食器として成立したもので両者の器種、法量は共通し互換性をもつことから、ここでは灰釉陶器の碗皿類の在り方を『延喜式』の記載内容と比較検討してみたい。

『延喜式』はさきに編纂されていた弘仁・貞觀の二式およびその後の式を取捨して集大成したもので、編纂は10世紀前半（905年～927年）に降るものである。上記「民部省式」の記載内容がいつの時期のものであるかを明確にはできないため、かならずしも灰釉陶器1・2類の法量と一致するものとはいえないが、法量の点から上述した出土資料を『延喜式』に記載された各器種の呼称にあてはめてみれば、碗IIは5寸の「茶碗」と4.7寸の「盞」、碗IIIは6寸の「小碗」にあたる。「茶碗」と「盞」の2種類の器名に対応する碗IIは前述したとおり法量分布図で4.5～5寸にドットが集中することから1群としたものであり、0.3寸の法量差を出土資料による法量分布によって群別することは難かしい。ただ『延喜式』にはこのほかにも「盞一口、径五寸、料、漆一合…」（十七内匠寮）「盞二百五十口、百五十口径五寸、百口径四寸五分。」（二十三民部下、凡大宰府年料条）「酒盞、汁漬坏各廿合、各口径五寸、受五合。」（主計上）「坏作土師酒盞六十合、径五寸。」（主計上）など「盞」についての記載がみられ、「盞」には4.7寸以外にも4.5寸、5寸の法量のものもあったことが確認できる（関根1969）。「大碗」「中碗」「小碗」が大きさを基準とした呼称であるのに対して「茶碗」「盞」は用途を示す呼称であり、瓷器では若干の法量差があったにしろ、ほぼ同一法量の碗が用途によって使い分けられていたことを示している。碗IVは5分ほど小さいが7寸の「中碗」に対応するものという。9.5寸の「大碗」に相当する法量のものは出土していない。いっぽう3.5～4寸の碗Iについては記載された器名のなかには対応する法量をもつものはない。「花形塙坏」は形態的には碗とした器種になると考えられるが、出土資料のなかには輪花を施して花形に仕上げたものではなく、また3寸という法量も碗Iよりもひとまわり小さく該当するものはない。ただ碗I類における碗Iの内訳は3.5寸碗が3点、4寸碗が1点であり、3.5寸碗の場合は5分ほど大きいが「花形塙坏」の法量に対応するとみてよいかもしれない。碗類の場合『延喜式』に記載された器が「花形塙坏」を含めれば3寸から9.5寸までの法量幅があるのに対して、出土資料は3.5寸から6.5寸までの幅に納まり、数量の点も考慮すれば大型品がなく「小碗」以下の小型品にはほぼ限定されるという特徴がある。このことは灰釉陶器碗と互換性をもつ須恵器碗でも同様であり、碗類の主要器種が碗II、碗IIIであったことを示している。『延喜式』の記載をみても碗IIに対応する「茶碗」の数量20口は「大碗」「中碗」「盞」の数量5口の4倍にあたる量であり、需要の多さを知ることができる。また「小碗」については数量記載を欠くものの、「茶碗」「盞」に対応する碗IIの出土数量が16点（1類10点、2類6点）であるのに対して「小碗」に対応する碗IIIの出土数量が25点（1類21点、2類4点）であることを考慮すれば「小碗」は「茶

碗」の倍に近い数量だったことが想定できよう。

次に皿としては「花盤」と呼称された器があるが、その名称からして「花形塙坏」と同様に陰刻花文や輪花を施して花形に仕上げた皿であり、出土した灰釉陶器の皿類のなかには該当するものはない。ただ法量については5.5寸の単一法量であり、出土資料の皿が5(～5.5)寸の単一法量にまとまるのとほぼ一致する。

段皿は前述したように「擎子」にあたるもので碗台として碗とセットをなして用いられたと考えられる。『延喜式』に記載された5寸の「中擎子」、4.5寸の「小擎子」に相当する法量の段皿は段皿B1類にしかない。4.5寸、5寸それぞれ1点ずつしか出土していないため本稿では段皿Iとして1群にまとめたが、本来は2群に法量分化していることになる。ところで段皿Iは段下端径が7～8cmにまとまることから碗IIの碗台として使用されたものと考えたが、『延喜式』に記載された段皿Iの数量20口(「中擎子」10口、「小擎子」10口)はちょうど碗IIの「茶碗」の数量20口と一致している。碗IIが対応する「茶碗」と「盞」は用途に基づく呼称であり、「茶碗」として使用する時には「擎子」とセットで用いられるという想定ができるかもしれない。ただ出土資料の数量は碗IIが16点(1類10点、2類6点)に対して段皿Iは5点(1類4点、2類1点)で、『延喜式』に記載された数量とは逆に「茶碗」が「盞」よりも少なくなるという矛盾が生じてしまう。

最後に碗類と皿類の構成比率についてみておきたい。民部省に年料として納入される数量と地方官衙における保有量が一致するとは限らないが参考に比較しておこう。『延喜式』に記載された碗類の総量は「小碗」の数量記載を欠くため確実におさえることはできないが、「小碗」を除いた合計で35点、「花形塙坏」を碗類として含めれば45点となる。「小碗」の数量については前に考察したように「茶碗」の倍に近い数量であったと考えられることから仮に40点として碗類の総量を計算すれば75点(「花形塙坏」を含めれば85点)となる。これに対して皿類は「花盤」の10点のみで、碗類と皿類の構成比率は75(85)：10となる。「小碗」の推定数量に問題があるのかもしれないが、碗類に較べて皿類の数量の少ないことが特徴としてあげられる。いっぽう出土資料では碗類(碗I～碗IV)の合計が47点(1類35点、2類12点)、皿類の合計が27点(1類23点、2類4点)で、碗類と皿類の構成比率は47：27となり、『延喜式』に記載された構成比率に較べて皿類の比率が高いことが指摘できる。このことは灰釉陶器を模倣した須恵器碗とこれにセットになる須恵器皿1類の構成比率10：7でも同様である。こうした出土資料における皿類の比率が高いという傾向は、碗類の器種構成に「大碗」「中碗」などの大型品・中型品を欠いていることに関係しているかも知れないが、やはり『延喜式』に記載された皿類の数量の絶対的な少なさに起因しているといえよう。このことは中央の民部省と地方官衙とで食器組成に違いがあったことを示すものなのか、民部省では皿類に漆皿などの木製容器類が用いられていたためなのか。後述するように内荒遺跡でも皿類については挽物皿が多用されていたことが確認できる。

#### 碗類と皿類の構成比率

#### B. 坏類

坏類は「律令的土器様式」を構成する基本器種であり、蓋と組合わせて使用される有台坏類と無蓋の無台坏類に大別される。

##### a. 有台坏類

有台坏類には須恵器と土師器の2種類のものがあるが、量的には須恵器が主体を占ている。須恵器有台坏はセットをなす坏蓋のなかに湖西窯産と考えられる坏蓋C2・3類が各1点あるものの基本的には藤枝市助宗窯で生産された削り出し高台の有台坏Bが一元的に供

#### 坏類

##### 有台坏類

給されていたとみて大過ない。有台坏Bは口径に3.5寸から5寸までの法量分化が認められるが、法量分布図（第16図）にみるとおり10.4～12.3cmと13.5～15.3cmの2群に集中する傾向があることから、有台坏I（3.5～4寸）、有台坏II（4.5～5寸）の2群にまとめることができる。量的には5寸に最も集中しているが、2群にまとめればそれぞれの群はほぼ同数となる。いっぽう器高に着目すると有台坏Iは4cm前後、有台坏IIのうち5寸のものは6cm前後にまとまる傾向をもち、4.5寸のものには4cm、6cmの両者が存在している。つまり、有台坏IIは器高によって2種に細分できる。こうした在り方は西・弘海氏によって指摘された直碗形態の模倣にはじまる「径高指数が一致する同一器形による法量分化」によって説明することは難しく、法量分化に異なった基準があった可能性が考えられよう。すなわち器高の高低による基準と口径の大小による基準の2つの基準の組合せによる法量分化の在り方である。食器において身の深い・浅いは使い勝手に關係することを考慮すれば、器高、厳密にいえば身の深さは食器の法量を規定する基準として有効性をもつものであろう。こうした視点からたとえば御子ケ谷遺跡の須恵器有台坏法量分布図（藤枝市教育委員会1981表5）をみると器高4～5cmの幅のなかに口径が9.4cmから26cmまでのものが含まれており、「径高指数が一致する同一器形による法量分化」ではとらえにくい在り方が看取できる。

土師器有台坏にははりつけ高台の有台坏A・3類と須恵器有台坏Bを模倣した割り出し高台の有台坏Bの3種類があるが、量的には有台坏A2類が主体をなしている。有台坏A2類は口径4.5寸、器高6cm台の單一法量で、須恵器有台坏Bの有台坏IIの深身のタイプと互換性をもっている。有台坏Bには口径を知ることのできる資料はないが、セットになる坏蓋B2から3.5～4寸の有台坏Iが存在したことがわかる。有台坏A3類は体部が大きく開いて碗の形状に近いもので、法量も6寸で須恵器有台坏Bにはない大型のものである（有台坏III）。形態的にみればむしろ6寸碗（碗III）と互換性をもつ可能性が高い。蓋付きの碗については前に紹介した「延喜式」「民部省式」年料雜記条における大碗の数量が「五合」とあり、中碗以下の碗類の数量単位が「口」であることから蓋付きであったと考えられる。法量でみれば小碗に相当するものであるが、大型品に蓋をもつ在り方は一脈が通じるものがある。

有台坏類は奈良時代にあっては多様な法量分化をなし「律令的土器様式」の主要器種として機能していたのに対して、ここでは法量が5寸以下の有台坏I（3.5～4寸）と有台坏II（4.5～5寸）の2群に限定された在り方となり、量的にも碗類におよばない。こうした有台坏類の在り方は「磁器型指向」への様式の転換を象徴的に示すものであり、また土師器有台坏A3類や須恵器有台坏Bの型式変化にみると、有台坏類は腕形態に近づく型式変遷をたどって消滅する。

#### a. 有台坏類

無台坏類は掘立柱建物南群一括資料の供膳形態器種のなかで最も出土量の多い器種である。須恵器・土師器・内黒土師器の3種類のものがあり、量的には土師器が主体を占めている。法量は土師器・内黒土師器無台坏Bの7寸を例外とすればすべて5寸以下のもので、とくに3.5～4寸に集中する傾向が顕著である。

土師器無台坏には系譜を異なる無台坏A、無台坏B、無台坏Cの3種があり、「駿東型坏」で呼ばれる無台坏Cが主体をなしている。無台坏CにはC1とC2の2種があるが主体をなす無台坏C1の法量は口径3.5寸～4寸のみの單一法量である（無台坏I）。これに

対して無台環C 2は量は少ないが、4寸、4.5寸、5寸の3種類の法量分化が認められ、C 1にはない4.5～5寸の1群（無台環II）をもっている。無台環Bは「甲斐型環」と呼ばれるもので、法量は上述したように1点だけ7寸の大型品（無台環III）があるが、ほかは無台環C 1と同様に口径3.5～4寸の單一法量である。これに対して無台環Cの内面を黒色化した内黒土器無台環Bには口径を復元できるものに5寸のものがあり、無台環C 1と無台環C 2との間に見られたような法量の分化関係が無台環Bと内黒土器無台環Bの間にあったと考えられる。無台環Aは遠江に主体的に分布するもので、口径3.5寸の無台環Iが2点あるのみで量的にきわめて少なく客体的な在り方である。

須恵器無台環には無台環A、無台環Bの2種があり、無台環Bが主体をなしている。無台環Bは助宗窯産のものが有台環Bとセットで一元的に供給されている。法量は3.5～4寸、4.5寸、5寸のものがあり、3.5～4寸の無台環Iと4.5～5寸の無台環IIの2群にまとめることができる。底部をヘラケズリ調整した無台環Aは口径3.5寸の無台環Iが2点あるのみである。

なお、島田市居倉遺跡では時代的には降る資料ではあるが旗指窯第I期製品の切り離し無高台碗（須恵器無台環Cと同形のもので口径12.3cm、器高4.5cm）に「酒杯」と墨書したものが出土している（島田市教育委員会1987）。無台環Iの用途を推定するのに有力な資料といえよう。

#### C. 木製容器類

木製容器類

掘立柱建物南群の一括資料として把握することができる木製容器類には挽物類、曲物類、削物類がある。

##### a. 曲物類

曲物類

内荒遺跡からは完形のものはないが底板、蓋板、側板など曲物の部品が40点以上出土しており、IV層出土のものは底板15点、蓋板3点、側板5点を数える。このうち掘立柱建物南群の一画からは周溝SD1510で底板3点（W2・W3・W12）、側板2点（W41・W42）、SD1517で底板1点（W8）の合わせて6点が出土し、畝状造構2群SD1484からも底板と側板が各1点ずつ（W4・W46）出土している。また北群でも周溝SD1416とSD1419で底板が1点ずつ（W11・W10）、SD1417で蓋板が1点（W29）の合わせて3点が出土している。

曲物容器には大小さまざまのものがあり、用途もかならずしも食器に限定できるものではないが、『和名抄』には曲物製の「盛食器」として「筒」があげられており、『正倉院文書』などの文献にも「大筒」「小筒」「筒环・环代筒」「盤代筒」「田筒」等の筒類の記載をみることができる（関根1969）。掘立柱建物南群の一括資料として把握できる曲物は法量が2.5～7.5寸の幅に納まるものであり、土器類の供膳形態器種にみられる法量から極端に乖離するものはないことから文献にみえる筒類に比定して大過ないと考えている。

出土した曲物で法量のわかるものは径4寸に復元できる側板W47の1点のみで、器高3.0cmを測る。他は底板・蓋板・側板の部材で、底板では2.5寸、3寸、3.5寸、4寸、4.5寸、5寸、6寸、7寸、7.5寸の9種類、蓋板では内径法量で4.5寸と5.5寸の2種類のものがあり、土器類の碗類や壺類には見られない幅広い法量分化がみられる点に特徴がある。また、側板の幅（曲物容器の器高）には3.0cmから6.0cmまでのものがある。

##### b. 挽物類

挽物類

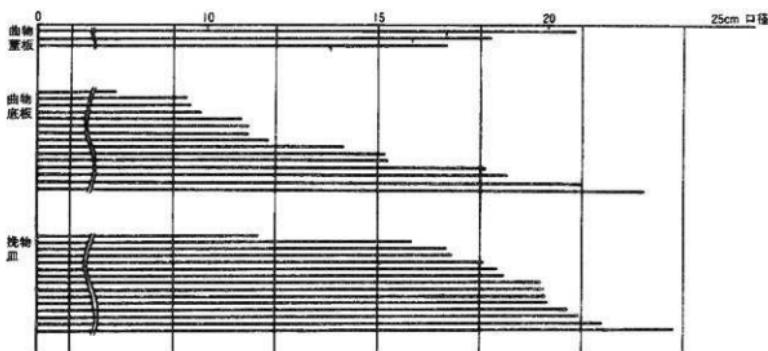
内荒遺跡から出土した挽物には挽と皿の2器種がある。

このうち挽はすべて漆挽である。合わせて37点が出土しているが、ほとんどが破片であ

り実測図を作成できたものは7点にすぎない(第57図)。漆椀の大半は後世(中世以降)の資料であり、実測図を作成できた7点のなかでも掘立柱建物南群の周溝から出土したものではなく、出土地点・層位からみて掘立柱建物南群の一括資料と共伴する可能性のあるものとしてはD77IV層から出土したW74の1点があるのみである。漆製品が金属製品に次ぐ高級食器であり、親王以下五位以上の貴族階級の食器であったことを考えれば、内荒遺跡では使用されたとしてもきわめて限定されたものであったといえよう。

挽物皿は『正倉院文書』などの文献に「木盤」「木佐良」とみえるもので、内荒遺跡からは合わせて16点が出土している。いずれも高台を挽き出さない白木の無台皿で、越州窯系磁器を指向して成立した土器類の有台皿とは形態を異にしている。出土状況をみるとすべてIV層からの出土で、このうち南群周溝からはSD1510で4点(W55・W61・W63・W64)、SD1513で1点(W52)、SD1523で1点(W59)、SD1478で3点(W50・W51・W65)の計9点が出土している。また北群周溝でもSD1410で1点(W58)、SD1418で1点(W56)の合わせて2点が出土しており、これらの挽物皿が掘立柱建物南群の一括資料の土器類と組み合わせて使用されたことは間違いない。法景は4寸、5.5寸、6寸、6.5寸、7寸、8寸の6種類のものがあり、量的には5.5~7寸に集中している。ここで注目されることは土器類の皿が4.5~5.5寸の単一法景であったのに対して挽物皿には土器類の皿には存在しない4寸、6寸、6.5寸、7寸、8寸のものがあり、両者の間には法量の補完関係がみられることがある。食膳具において挽物皿の役割の大きかったことが想像される。

なお、挽物皿と土器類との組合せについては富士市東平遺跡の125号竪穴住居跡でも確認できる(富士市教育委員会1981)。125号竪穴住居跡からは炭化した状態の挽物皿の破片が11点出土しており、このうち口径を復元できるものは9.5寸(28.4cm)1点、5.5寸(16.6cm)2点、5寸(14.8cm)1点ある。共伴した供膳形態の土器類には須恵器杯蓋A1点、同無台杯B4寸(口径11.2~12.2cm)3点、土師器無台杯C1~4寸(11.6~12.5cm)5点、同無台杯C2~4.5寸(13.4cm)1点、同無台杯B4寸(11.5cm)2点、6寸(18.7cm)1点があり、有蓋杯類1点と無台杯類12点の組合せとなっている。この資料は須恵器無台杯Bは同型式のものであるが、土師器無台杯C、同無台杯Bはそれぞれ平林氏分類の杯II Bb・



第78図 曲物・挽物皿法量図

B II c、杯 Cc に分類される先行型式のものであり、須恵器杯蓋 A が伴うことからも掘立柱建物南群の一括資料よりも先行する時期のものであることは確実である。駿河地域では越州窯系磁器を指向して成立した器種である碗皿類が導入される以前の奈良時代にあっても須恵器・土師器の土器類に皿形態の器種をほとんどみることができないという特徴があり、東平遺跡で確認できるような挽物皿の使用は奈良時代からの一般的な在り方であったと考えている。

#### c. 制物類

内荒遺跡からはⅢ層で1点、Ⅳ層で3点の合わせて4点の制物が出土しているが、このうち掘立柱建物南群の一括資料として把握できるもの南群周溝 SD 1510から出土したW68の1点のみである(第57図)。W68は破片資料で全形を知ることはできないが、平面形が小判形を呈する無台皿である。ロクロでは挽き出せない形態の皿を制物でつくったものと考えられ、本来的な在り方は挽物皿と同じだろう。現存長12.3cm、器高1.3cmを測るが、復元すれば長径が15cm前後の5寸物になると思われる。

#### 制物類

#### 参考文献

- 後藤健一1983 「第4章 まとめ」『静岡県湖西市東笠子遺跡群発掘調査概報 昭和57年度』湖西市教育委員会  
関根真隆1969 『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館  
船崎彰一1973 『陶磁大系5 三彩綠釉灰釉』平凡社  
西 弘海1982 「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』平凡社  
平林将信1983 「VII 奈良・平安時代土器の2・3の問題について」『三新田遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会  
吉田恵二1982 『『延喜式』所載の土器陶器』『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』平凡社  
愛知県教育委員会1980 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告書I』  
島田市教育委員会1987 『居倉遺跡発掘調査報告書』  
日進町教育委員会1984 『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』  
富士市教育委員会1981 『東平』  
藤枝市教育委員会1981 『日本住老公团藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書III-奈良・平安時代編-』  
藤枝市教育委員会1986 『静岡県藤枝市都遺跡発掘調査概報III』

## 第2節 土器墨書の同筆について

### 同筆について

#### 1. 同筆について

現在確認されている墨書例のうち、同文字が5例を越えるものが「建」「主」「岡」「川万呂」の4例を数える。これらの文字について簡単な観察表（第45表）を示しながら、同筆関係を考えていくことにする。

### 「建」

#### Aタイプ



①の第1画めが太く大きい。②の第2画めが右上がりで長い。③の各横画が左が細く、右に太くなる。④の「えんにょう」の第1画めの点がやや左に張る感じで書かれている⑤が左から右に長く、右下がりに書かれている。

上で挙げたように、字体としては全体的に上下左右のバランスが良く、右上がりである。23例のうち、Aタイプ及びこれに類するものが15例ある。Aタイプと顕著に異なるタイプはないが、微妙な部分で多少違うのではと思われるものとして、B～Gまでに分けてみた。948は全体に雄大に大きく書かれており、線の太さもほぼ一定になっている。929はやや縱長であり、各線も切れ切れで微妙に違があるような感じである。945・939・944の3点もそれぞれが少しずつ違があり、しかし共に全体のバランスが丸い感じがするところが、Aタイプと違うところである。ただし、複数の人物によってそれが書かれたものであるとの断定はしにくいものである。

### 「主」

#### Aタイプ

#### Bタイプ



「主」他の文字に比べてはっきりと複数の書き手であると言い切れるのがこの「主」である。「主」は全部で15例あるが、AタイプとBタイプの2種類に分類することができる。

Aタイプは全体的に線が細く、伸びのある筆使いをしており、やや右上がりの書体である。特徴的なところとしては、①の点がやや長めで、点というよりは横画のような感じで書いている。②の真ん中の横画がやや短い。③の縦画はまっすぐに下がり、太くない。④の最後の横画は左から右上に伸び上がるよう書いている。

Bタイプは全体的に線が太く、どっしりとした感じである。やや右下がりの書体である。特徴的なところとしては、①の点が他の画と同様に太く、点でなく横画の感じである。②の縦画が他の画に比べて太く、どっしりとした量感がある。③の横画は水平もしくは右下がり気味に書かれている。

全部で15例あるうち、Aタイプ及びこれに類するものが7例、Bタイプ及びこれに類するものが7例ある。この「主」の場合、はっきりと2種類の書体に分類することができ、それもそれぞれにかなり顕著な特徴を確認することができる。Aタイプはやや女性的な、伸び伸びとした律動感を感じ、それに対してBタイプは男性的などっしりとした重量感を感じ、悪く表現すれば一画一画が不揃いな、アンバランスな感じのする書体である。書き手がなんらかの意図をもって意識的に書体を変えたのでない限り、少なくともこの「主」

に関しては、2人以上複数の人間によって墨書きが土器に施されたものとなる。この書体の違いが時間差になるのか否かについては、他の墨書き土器及び墨書き土器以外の土器も含めた全体の検討によって、明らかになってくるであろう。なお、異なった器形に同書の「主」が書かれているが、事例が少ないのでこれだけにたよって墨書き土器による供膳様式を考えていくことは難しい。

『岡』 10例あるが、一応2つのタイプに分類できる。ただし、この2タイプの分類には「岡」 これといった明確なものはなく、一観した時の書体の違いで区別したものである。Aタイプの場合、上の部分「」がそれぞれ良く似ている程度のグループングであり、はっきり同一人物の手によるものとは断定できない。BタイプはAに比べ、比較的きちんと角ばって書かれており、Aとははっきりと区別することはできる。ただ、AとBが同一人物ではないとは、これもまた言い切れない。楷書風と行書風の違いであるとも考えられるからである。

『川万昌』 出土例のうち、「万」及び「川万」「川万昌」と判読できるものが8例ある。このうち宮下遺跡出土の3例（いずれも「万」）と内荒遺跡出土の5例とははっきりと分類できる。宮下の3例は須恵器・灰釉陶器に書いたものであり、土師器に書かれたものが1点もないのが特徴といえる。内荒遺跡の5例は何れも土師器に書かれたものであり、「川万昌」もしくは「川万」そして「万（昌）」と読むことができ、関連があるものと考えられるが、同筆であると言いつ切れるものがない。類似点はあるが、「建」「主」のような分類は難しい。

以上4種類の文字について、その同書、同筆について考えてきたが、これらの書き手が他の文字においても同じ人物の書体であると判断できるかが、問題になる。「上」の2例964・965は同一人物の手によるものであろう。第一画めがそっくりである。横線（画）部分のはいりと止めの部分の癖のあるところは「主」のBタイプに似ているようにも思われる。「安」973は「うかんむり」の最後の部分の跳ね方が、「建」などに表れる特徴に似ている。線のなんとなく元気のない感じが「建」938に類している。「三」971「生」966などは「主」Bタイプのような線の太い癖のある書体である。「建」「主」「岡」などと比較して、その書体の類似点を強調して観察しているため、特にこのような見方をしてしまっているとのおそれもあるが、少なくとも「建」「主」「岡」以外の文字もこれらを書いた同一人物の手によるものであることは確実であろう。また複数の人物によって書かれているものもある。

## 2. 文字の解釈

内荒遺跡出土の墨書きは前述したように、個体数で85点、文字数で95字を数える。そのうち判読可能のものは65例となる。改めてその文字を挙げると「建（23）」「岡（10）」「主（15）」「川万または川万昌（5）」「上（2）」「政」「安」「豊」「十」「三」「去」「生」「一百」しかなくこの点数から文字の意味を考えるのには多少無理が生じるが、これらの文字の中で一応の意味を考えていくこととする。墨書き銘というものは、「複数字書」と「一字書」のものとがあるが、「一字書」は平安時代のものにその例を多く見られるものであり、また書体も平安期へと時代が移行するに従って「楷書から行書へ」「行書から草書へ」と変化することなどが特徴とされている。内荒遺跡出土の墨書き土器はこうした特徴をもつものであり、「平安期」のものであることを示している。ここ内荒遺跡墨書きの特徴として、「建」「主」などのように特定の文字が同器型、同書体の器に書かれ、多量に出土していることがある。これらの文字に特定の意味が込められ、多量に消費されたものであろうか。破損率が高かつ

「岡」

Aタイプ  
Bタイプ

『川万昌』

文字の解釈



第79図 墨書文字集成図1



第80回 曼書文字集成図 2

第45表 墓書文字觀察表

文字	番号	タイプ	文 字 の 特 徴
建	930-2	A	いちばん多いタイプ。やや右上りで、左細、右太タイプ。「えんにょう」が左に張る。
	936	A	下の部分だけだが、「えんにょう」の下り方などが、Aタイプに近い。
	938	A	やや右上り。細い感じがするが、全体のバランスがA。
	940-1	A	やや右上り。細い感じがするが、全体のバランスがA。
	940-2	A	やや右上り。「えんにょう」が明確ではないが、Aタイプ。
	942-2	A	右上り。左細、右太タイプ。「えんにょう」が特徴的。典型的A。
	943-1	A	右上り。左細、右太タイプ。「えんにょう」の入りが張っていて典型的A。
	943-2	A	やや右上り。Aタイプの特徴を強くもつ。
	946	A	第1画が大きく、太く、左細、右太でAタイプ(一部分だが)。
	947	A	右上り。左細、右太。典型的Aタイプ。
	930-1	A'	Aにくらべ、ややたて長で、線が細い。
	942-1	A'	右上り。左細、右太タイプ。「えんにょう」の入りの部分が判然としないがA。
	924	A''	「主」に似た筆跡あり。左細、右太タイプ。
	941-1	A'	右上り。左細、右太。一部分だけだが、Aに近い。
	941-2	A''	右上り。線はぼ中太。バランスがややわるくAに近いタイプだが。
	902	B	灰軸。似た感じのものはない。線は太い。
	904	B	灰軸。3に似た感じであるが不明瞭である。
	937	C	たて長で、細い感じ。「えんにょう」などはAタイプに近い。
	929	C'	たて長で細い感じ。
	948	D	「えんにょう」が略された感じ。線が太い。
	945	E	右丸太。Aにくらべ、右上りの感じが弱い。「えんにょう」に特徴あり。
	939	F	Aタイプに近いが、「えんにょう」の左に張りがない。横棒は、左細く右太い。
	944	G	全体的に踊っている感じ。
主	957	A	うすく不鮮明だが、第5画めが右上りに伸び上がる。バネがある感じ。典型的A。
	958	A	全体的に右上り。特に5画めは伸び伸びとした感じ。典型的A。
	963	A	線の太さはほぼ同じ。最後の横棒が右上りになる。伸び上がる。典型的A。
	913	A'	横画はAに近いが、縦画はB、中間的存在。
	917	A'	第1画が横線となる。横画の伸び伸びした感じはA。A-Bの中間型。
	961	A'	やや右上りで、線は太い。左細、右太。「建」のAタイプに似ている。BとAの中間。
	962	A'	全体的に右上り。線が太く、左細、右太タイプ。Aに近いがBにも似ている。
	922	B	やや右上りだが、線は太く、どっしりしている。
	926	B	不鮮明ではあるが、線の太さ、横画のふぞろいなどころがBタイプ。
	955	B	線は太く、右下り。歛の貌がとくに太い。どっしりとしている。第1画も点でなく線。
	956	B	歛が太く、横画がふぞろい。
	960	B	線太く、1両めも線に。3本の横線が右上り、右下りとやや統一がとれてない。
	915	(B)?	丸太で左がやや太い。やや右下り気味。不鮮明。
	914	B'	部分的ではあるが、線は太く、AよりはBに近いタイプ。
	951	B'	第1画が横線となる。やや線が細いがBに近いタイプ。
問	950-1	A	やや太い感じがするが、Aタイプとしてよい。
	951-1	A	「四」に「正」を書く異体字。特にこれといって特徴ない。
	951-2	A	「正」の部分がやや異なるが、同筆だと思われる。
	952-1	A	他のAタイプと同様。
	952-3	A	他のAタイプと同様。筆の走らせ方が「主」のAタイプに似ている。
	950-2	A	他のAタイプと同様。「正」の部分が少し異なる。
	953	A	上の部分だけなので、何ともいえないがAタイプに近い。
	983	A	他のAタイプと同様。「四」の部分がやや大きい。横画がやや太い。
	954	B	やや角ばった感じのするタイプ。線の太さはほとんど同じ。
	984	B	「正」の部分がBタイプに近い。

たものであろうか。

さて、墨書のもつ意味を考えてみると、次のようなものに分類できる。

- a. 地名を表すもの
- b. 建物・施設、その場所等を表すもの
- c. 人名またはこれに類したものを表すもの
- d. 身分またはこれに類したものを表すもの
- e. 性別を表すもの
- f. 方角を表すもの
- g. 数量・大小を表すもの
- h. 物質を表すもの
- i. 吉祥句的な文句を表すもの
- j. 年紀を表すもの
- k. 無意味な文字の羅列
- l. 文字の省略
- m. その他

一応、分類をしてみたがこれらにはいろいろなタイプが考えられ、一般的な形で考えてみた。さて、内荒遺跡出土の墨書については、なにしろ一文字がほとんどであるため、はつきりとした判断は下せないが、各文字ごとにそれぞれの文字がもつ意味の可能性を挙げてみることにする。

「建」 「建部」等の人名、「造大神印」の出土から建物関係の略語、一時的な役職名の略などが考えられる。

「岡」 「岡部」等の人名、地名・地域名など。

「主」 「主典」「主帳」等の官職名（地方官）、「主人」等地域の「あるじ」的存在を示すもの。

「川万」「川万呂」「川万呂」という人名を示すもの。「万」も「万呂」を示ものであろう。この内荒遺跡周辺には、巴川、長尾川という両川が流れしており、江戸期にも清水江尻港からこの巴川を利用し、駿府城下まで諸々の物品を搬出入したことから、平安期に船による荷物の運搬、巴川河口（清水・江尻周辺）からのさまざまな物資の運搬等の河川交通の盛んであったことが考えられ、さらに「大神社」の造立に際しても、この河川利用の資材搬入をしていた可能性も高まるものと思われる。この人物はこうした河川交通に携わる人物であるとも推察できる。

「上」 場所、身分、所有者など。

「政」 人名、官職名など。

「安」 人名、地名などを示す。「安倍郡」の略とも考えられる。造構の性格上、「安倍郡」と読めると実に都合がよいと思われるが、一例しかなく「安」のみであるため、なんともいいようがない。

「豊」 「豊かさ」「豊作」をイメージするものであり、吉祥句的な意味をもつものであろう。また、人名とも考えられる。

「十」 数量、大小、ひとまとまりの単位など。または吉祥句的な意味も考えられる。

「三」 「十」と同様に数量、大小、単位など。そのほか人名、場所とも考えられる。

「去」 意味不明。

「一百」数量、大小、単位など。吉祥句とも。

「居代」「やしろ」と読めば「社」に関連する可能性もある。

「寺之」建物・寺など場所、地名などに関わるもの。

「生」　吉祥句、呪術的な意味をもつか。

以上、出土しているすべての墨書について、その文字の意味の可能性を考えてみた。結果として、官的な性格をかなり強くもつ印象を否定できず、遺構の性格を判断する傍証ともなるものではなかろうか。

## 付編 1

### 内荒遺跡・宮下遺跡出土の綠釉陶片の化学分析について

名古屋大学名誉教授 山崎一雄

#### 1. 試料

静岡平野北部の川合地区の宮下遺跡出土の綠釉3片（試料番号1-043-2・2-430・2-194）と同地区内荒遺跡出土の2片（試料番号13-013；実測図番号231 15-185；同223）である。

#### 2. 軸の分析

試料陶片が小さく、かつ釉層が薄くて、定量化学分析に必要な軸の量が得られないため、そのままエネルギー分散型の蛍光X線分析装置にかけ、化学分析済みの小牧市篠岡第5窯出土の綠釉陶片と比較して軸の含鉛量を表面から推定した。名古屋大学、省エネルギーセンターのエネルギー分散型装置を使用した。鉛のX線スペクトル（鉛のK $\alpha$ 線）の強度は次の順序である。

$$(1-043-2) > (13-013) > \left\{ \begin{array}{l} (2-194) \\ (2-430) \end{array} \right\} > (15-185)$$

篠岡陶片の含鉛量は57.0%（PbOとして）であるから、(1-043-2)と(13-013)の含鉛量はPbO 60%台（15-185）の含鉛量は篠岡より小さく、50%台の前半と推定される。他の二つは篠岡とほぼ同じ。釉の銅の含有量は、緑色が篠岡陶片（含銅量CuOとして1.1%）よりも濃い濃緑色の(1-043-2)、(2-194)、(2-430)、(15-185)では1.1%より大きく、淡緑の(13-013)ではそれよりやや小さいと推定される。

#### 3. 胎土の焼成温度の推定

胎土粉末のX線回折により、焼成の際に生成している鉱物を検出した。その結果は、二つの群に分かれ

A群  $\left\{ \begin{array}{l} (1-043-2) \\ (2-194) \\ (2-430) \end{array} \right\}$  石英のほかムライト（ $3 \text{Al}_2 \text{O}_3 \cdot 2 \text{SiO}_2$ ）が少量生成し、またクリストバライド（ $\text{SiO}_2$ ）も少量生成している。

B群  $\left\{ \begin{array}{l} (13-013) \\ (15-185) \end{array} \right\}$  石英のほかに、長石が一部未分解のまま残っている。ムライトは少量生成しているが、クリストバライドは生成していない。

これらの生成状況から考察するとA群の3個の陶片の焼成温度は1100~1200°C、B群の2陶片の焼成温度はそれより低く、1000~1100°Cと推定される。釉の詳しい組成は不明であるが、鉛釉であるからその融点は低く、したがって一度素焼してから、釉をかけて再度焼成されているのであろう。

#### 4. 產地の同定

產地の同定については綠釉陶片の場合は試料数が少ないため困難であるが、胎土中のルビジウム（Rb）とストロンチウム（Sr）の比を蛍光X線分析法によって測定した。三辻らが須恵器について研究している方法を応用したものであるが、ただし実験条件は少し異なっている。

装置は奈良国立文化財研究所の波長分散型蛍光X線分析装置で、実験条件は次の通りである。励起用管球：クロム、40 KV、20mA。

ルビジウム（Rb）とストロンチウム（Sr）のK $\alpha$ 線の強度とジルコニウム（Zr）のK $\alpha$ 線の強度とを比較して、実験条件の変動による影響を除いた。

試料は各地の窯址と遺跡出土の綠釉陶片である。

表1 窯址および遺跡出土の綠釉陶片のルビジウムおよびストロンチウムの量

試 料	強度比	
	Rb/Zr	Sr/Zr
<b>窯址</b>		
1 鳴海窯、第一試料(愛知県)	0.52	0.35
2 岩崎24号(愛知県日進町)	0.42	0.41
3 鳴海N N 245 窯 №1(愛知県)	0.41	0.35
4 " №2	0.25	0.31
5 鳴海N N 246 号	0.38	0.45
6 石作窯 №1(京都市右京区)	0.35	0.37
7 " №2	0.35	0.34
8 小堀窯 №1(同上)	0.79	0.64
9 " №2	0.82	0.71
10 水口山の神窯(滋賀県)	0.43	0.39
<b>川合地区</b>		
a. 1 - 043 宮下遺跡 緑釉	0.67	0.67
b. 2 - 194 宮下遺跡 "	0.43	0.40
c. 2 - 430 宮下遺跡 "	0.37	0.37
d. 13 - 013 内尻遺跡 "	0.61	0.39
e. 15 - 185 内尻遺跡 "	0.26	0.42
<b>その他の遺跡</b>		
11 原木窯 №1(神奈川県)	0.41	0.35
12 " №2	0.44	0.38
13 " №3	0.42	0.48
14 四崎市矢作 北野庵寺(愛知県)	0.42	0.40
15 名古屋市八事	0.49	0.34
16 愛知県豊根村	0.41	0.43
17 安土町大中の湖集落址(滋賀県)	0.45	0.45
18 京都市山科大宅寺址	0.36	0.44

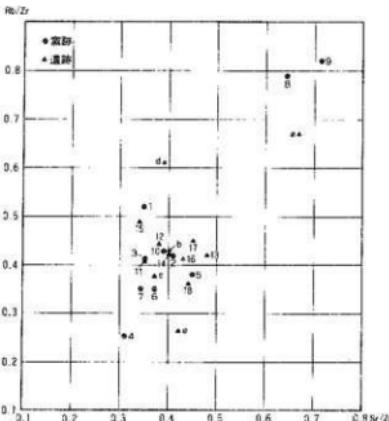


図1 窯址と遺跡から出土した綠釉陶片のルビジウムとストロンチウムの含有比

結果を表1と図1に示した。緑釉はルビジウムとジルコニウムのK $\alpha$ 線の強度比、横軸はストロンチウムとジルコニウムのK $\alpha$ 線の強度比である。これらのスペクトル線は近接した波長を持ち、強度比を比較するのが便利である。強度比は相対的な値であって、図1上で窯址の点と一致または近接している遺跡出土の陶片はその窯で焼成されたと考えられる。窯址出土の陶片が少ないため、一つの窯の陶片のルビジウムとストロンチウムの含有量の変動の幅が明確ではない。したがって僅か一、二個の陶片で、一つの窯址を代表させることは危険であるが、試料が入手し難いため已むを得ない。表1のa、b、c、dおよびeと窯址出土の陶片とを比較すれば

a (1 043 2) の产地は不明である。一致する窯址が見出せない。

b (2-194) は10 (滋賀県水口町山の神窯) および2 (愛知県日進町岩崎24号窯) に近いが、前者の方が値が接近している。

c (2-430) は特に近い窯はないが、強いて言えば6、7 (京都市右京区石作窯) に近い。

d (13-013) と e (15-185) はともに近い窯址は見出せない。

図1と表1を見れば明らかのように、同じ鳴海N N 245号窯の2個の陶片(3と4)がかなり異なる値を示し、1つの窯の製品でもかなり変動するルビジウムとストロンチウムの値を持っている。これは产地同定の困難さを物語っている。(1987年2月執筆)

## 付編 2

# 内荒遺跡の灰釉陶器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

### 1)はじめに

愛知県、静岡県下にある窯跡出土灰釉陶器の分析データは相当数、蓄積されてきた。この段階で遺跡出土灰釉陶器の分析データも蓄積され始め、灰釉陶器の伝播・流通に関する研究が少しずつ進展し始めた。灰釉陶器については、とくに大きな窯跡群である名古屋市の猿投窯跡と、静岡県大須賀町の清ヶ谷窯跡の製品の伝播・流通の様相が注目される。今回は灰釉陶器の伝播・流通の研究の一端として、静岡県東部地域の遺跡である内荒遺跡から出土した灰釉陶器の蛍光X線分析の結果について報告する。

### 2)分析方法

資料はすべて表面を研磨して灰釉を除去したのち、ダングステンカーバイド製乳鉢（硬度9.5）の中で200メッシュ程度に粉碎された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして約15トンの圧力を加えてプレスし、直径2cm、厚さ3~5mmのコイン状の錠剤試料を調製した。このような処理をするのは、蛍光X線分析法というは相対測定によって定量分析を行う。そのためには試料とX線源、試料と検出器との間に幾何学的条件を一定に保持しておかなければならぬためである。筆者らの基礎研究によって、このような方法で蛍光X線分析をすることによって、十分定量性のあるデータが得られることがわかつた。使用した装置は2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置である。Tiを2次ターゲットにして真空中でK、Caを、また、Moを2次ターゲットにして空気中でFe、Rb、Srの蛍光X線強度を測定した。勿論、一定時間、測定したのち、スペクトル線はガウス分析するようにスムージングされたのち、台形公式を使ってバックグラウンドを差し引き、ピーク面積より正味のカウント数を求めた。標準試料には岩石標準試料JG-1が使用された。分析値は観測によって得られた試料の蛍光X線強度と標準試料の対応する元素の蛍光X線強度の比で表示された。

また、各母集団の重心からのマクラノビスの汎距離の計算にはK、Ca、Rb、Srの4因子を使い、パソコンで計算された。

### 3)分析結果

表1には全資料の分析値をまとめてある。また、表2には各母集団の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗の計算値をまとめてある。マハラノビスの汎距離とは母集団の重心から何σ（標準偏差）分、離れているかを示す統計学上の距離のことである。正、負両方の値をとり得るので、計算上の煩雑さを避けるため、二乗して負符号を消去して使うのが普通である。母集団としては旗指I、II群、清ヶ谷群、猿投群、苗畠群、皿山群、吉名群、花坂群の8群が使われた。このうち、旗指群は多数の試料の分析の結果、2群に分かれることがわかつた。そのうち、多數派をI群としたが、清ヶ谷群と類似した化学特性をもっていた。他方、少數派のII群にはRb量が少し多く、逆に、Sr量がやや少なく、猿投群と類似した化学特性をもっていた。皿山群の化学特性は清ヶ谷群の特性に類似していたが、吉名群とは若干の差違があった。苗畠群と清ヶ谷群のRb-Sr分布図上における分布領域は図1に示してある。花坂群は上記の窯群とは少し異なる化学特性をもっていたが、表2よりわかるように、全資料の花坂群からのマハラノビスの汎距離の二乗の値は大変大きく、今回の分析資料の中には産地として花坂群に対応するものは一点もなかつた。

さて、内荒遺跡の灰釉陶器をどのようにして母集団に対応させるのかということについて説明する。全国各地の窯跡出土灰釉陶器と須恵器の分析データから、各母集団のサンプルの95%以上のものが、自

表1 内流遺跡出土灰軸陶器の分析データ

表2 各母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値

No.	器種	C <sub>a</sub>	F <sub>e</sub>	R <sub>b</sub>	S <sub>r</sub>
6	碗	0.445	0.120	0.789	0.370
9	碗	0.431	0.081	0.697	0.733
10	碗	0.480	0.088	0.591	0.606
13	碗	0.473	0.048	0.665	0.799
19	碗	0.357	0.173	0.746	0.553
20	碗	0.480	0.031	0.733	0.458
21	碗	0.572	0.125	0.684	0.632
25	碗	0.582	0.119	0.670	0.418
30	碗	0.444	0.079	0.654	0.800
41	碗	0.492	0.081	0.852	0.672
45	碗	0.441	0.068	0.658	0.790
42	碗	0.443	0.120	0.697	0.672
49	碗	0.470	0.067	0.849	0.766
99	碗	0.386	0.122	0.804	0.581
100	碗	0.437	0.162	0.777	0.583
104	碗	0.461	0.059	0.571	0.608
114	碗	0.480	0.068	0.565	0.582
117	碗	0.433	0.047	0.860	0.690
121	碗	0.469	0.058	0.593	0.785
131	碗	0.462	0.079	0.691	0.754
133	碗	0.398	0.057	0.676	0.545
137	碗	0.503	0.183	0.736	0.580
904	碗	0.528	0.155	0.794	0.744
151-126	高台杯	0.696	0.145	1.52	0.589
421	高台杯	0.672	0.20	1.41	0.644
518	高台杯	0.707	0.197	1.79	0.442
139	高台杯	0.711	0.122	1.69	0.641
351	高台杯	0.601	0.165	2.34	0.431
33	無台杯	0.502	0.156	1.95	0.317
52	無台杯	0.731	0.240	1.04	0.404
141	碗	0.851	0.058	0.444	0.232
345	碗	0.862	0.058	1.92	0.736
97	皿	0.896	0.039	2.58	0.714
211	皿	0.867	0.033	2.30	0.790

詞語番号		原語		訳語		翻訳解説	
		山名	花名	山名	花名	苗頭	苗頭
6	碗	33	67	17	4.2	6.1	17
9	碗	60	98	38	4.8	13	63
10	碗	4	18	3.8	12	10	8.4
13	碗	71	93	51	20	14	88
19	碗	44	136	13	20	18	7.8
20	碗	16	38	19	16	9.2	53
21	碗	18	58	2.1	21	33	15
25	碗	12	43	5.8	24	29	23
30	碗	93	107	55	11	13	74
41	碗	12	25	11	12	6.2	23
45	碗	88	102	52	15	12	72
42	碗	35	71	18	3.4	5.9	18
49	碗	55	72	38	12	8.2	62
99	碗	26	63	12	8.8	7	8.6
100	碗	37	124	10	11	14	4.8
104	碗	5.7	20	74	7.3	3.4	20
114	碗	0.46	8.2	3.6	20	13	13
117	碗	32	56	26	9.5	5.6	49
121	碗	65	83	45	16	10	74
131	碗	53	73	36	7.9	7.8	55
133	碗	5.6	25	7.9	3.7	5.4	14
137	碗	50	189	8.5	18	33	5.7
904	碗	77	197	34	10	46	52
15-126	盆地	55	158	1.5	109	142	100
503	盆地	26	78	7.3	78	91	69
518	盆地	159	407	57	191	275	69
139	盆地	49	93	10	79	107	73
351	盆地	140	243	24	55	103	43
421	盆地	123	199	41	80	102	66
33	盆地	73	368	45	203	238	178
52	盆地	105	639	67	342	442	380
141	碗	111	44	35	150	163	171
345	碗	123	71	40	171	176	193
97	碗	177	82	47	180	218	203
211	碗	104	62	43	180	263	208

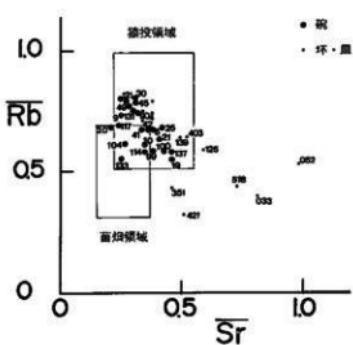


図1 内荒遺跡Rb-Sr分布図

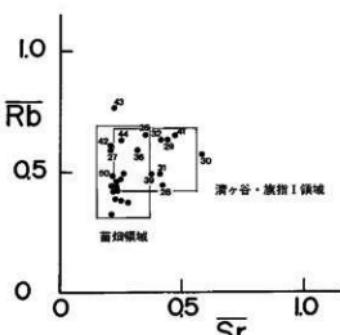
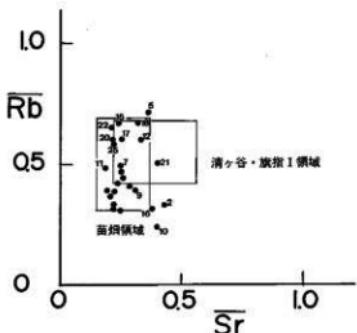


図2 宮下遺跡Rb-Sr分布図

群の重心から  $D^3$  の値にして 10 以下の領域に分布することが示された。このことから、筆者は遺跡出土灰釉陶器を母集団 (X) へ帰属させるための経験的条件として、 $D^3 \leq 10$  を採用することを提案した。この条件は決して甘い条件ではない。母集団に所属するサンプルでも、5%以下のものがこの条件を満足しない場合がある。何分にも、伝播・流通の基礎研究を固めている段階であるから、とくに、甘い条件はとらずに厳しくした。

表2をみると、No. 6 のサンプルで  $D^3 \leq 10$  の条件を満足するのは猿投群と苗畠群である。それで、距離の近い方を優先させて、猿投群、苗畠群を產地として推定した。しかし、両群とも產地としての可能性をもつことを断っておく。また、產地推定の結果を確認できるように、図1に Rb-Sr 分布図を示してある。この分布図は定性的にではあるが、產地に対応させる上で大変有効である。図1をみると、No. 6 は苗畠群よりも、むしろ、猿投領域内に深く入って分布している。猿投群産の可能性が高いと考えられる。このようにして、表2を点検していくと、第一候補の產地として猿投群と推定されたのは No. 6、9、10、42、904 の 5 点である。また、清ヶ谷群と推定されたのは No. 21、25、139 の 3 点、苗畠群が第一候補の產地となったものは No. 20、41、49、99、104、117、121、131、133 の 9 点にものぼった。しかし、これらは図1よりみて、苗畠領域をずれるものが多く、No. 20、41、49、99、117、121、131 の 7 点は苗畠領域よりも、むしろ、猿投領域に分布しており、猿投群産の可能性があるとみられる。なお、產地不明となったものは No. 13、30、45、15-126、403、518、351、421、033、052、141、345、097、211 の 14 点にものぼり、まだまだ、未発見の窯があることを示唆した。これら產地不明のもののうち何点かは猿投領域、又は、清ヶ谷領域に分布したが、No. 126、351、421、518、033、052 の 6 点はこれまでの灰釉陶器にはみられなかつた領域に分布し、全く、產地不明となつた。

図2には宮下遺跡の灰釉陶器の Rb-Sr 分布図を比較のため示した。両方の分布状況にはかなりの違いがあり、両遺跡への灰釉陶器の供給源は全

く異なることを明示している。内荒遺跡の灰釉陶器には猿投領域に片寄って分布するものが多く、これに対し、宮下遺跡の灰釉陶器には Rb 量がより少なく、苗畠領域に片寄って分布するものが多い。

このように、各遺跡の灰釉陶器の Rb - Sr 分布図を比較しただけで、供給の様相の違いがわかる。今後、一層多くのデータを集積することが必要であろう。

## 付編 3

### 内荒遺跡出土の木製品について

山内 文

遺物名とこれに使用された材の樹種名および出土数（又は調査数）を表1に示す。

遺物は、斎串、刀形、位牌、曲物、挽物（皿）、櫛、下駄、木錘、有頭棒、尖頭棒（箸形）、火切り白、鍔などの祭祀に關係のあるもののほか、生活用具、農耕具などが含まれているが、使途不明品も相当数存在している。遺物の出土時代は奈良時代後半から平安時代前期に亘るものであるといふ。

使用樹種はイヌマキ、イヌガヤ、モミ、トウヒ、アカマツ又はクロマツの二葉松類とヒメコマツ、又はチヨウセンマツの五葉松類、スギ、ヒノキ、サワラの針葉樹9種とクリカシ類、ブナ、ケヤキ、カツラ、ホオノキ、イスノキ、ザイフリボク（シデザクラ）、ツゲ、トチノキ、シオジの広葉樹11種（このうちカシ2点は同種か異種かは不明であるが同種と仮定して）である。

以下に遺物の製品名、出土数および材の識別に用いた材の解剖学的特徴を簡単に記す。

#### 使用樹種

**イヌマキ** *Podocarpus macrophyllus* 1点 使途不明木器

木部柔組織（樹脂細胞）が散在するが横断面では認め難い事が多いが、仮道管より薄膜で一般に放射径も小さい。放射断面での仮道管の有縁膜孔の開孔は交叉する。分野膜孔はヒノキ型である。

関東以南の暖地に自生する常緑の高木で、材は水温に強い。

**イヌガヤ** *Cephalotaxus harringtonia* 1点 不明品

仮道管に螺旋状肥厚（螺旋紋）が存在する。木部柔組織は散在状であるが、内容物が無いためイヌマキと同様横断面では認め難い事が多い。放射組織は1～6細胞高であるが、1～3～4細胞高のものが多く一般に低い。

岩手県以南に産する常緑の小高木であるが大木になることが多い。材は緻密で粘り強い。

**モミ** *Abies firma* 3点 曲物

樹脂細胞は年輪界に時に存在する。分野膜孔は縁部の極めて少ないスギ型である。放射組織細胞中に褐色物質を含有している。また時に藤酸石灰の結晶を含有している。

岩手県および山形県以南の各地の暖帯に多く、材は白色であるが埋木などの発掘材では肉眼的にはスギに似ている。耐朽性は低い。

**トウヒ** *Picea jezoensis var. hondoensis* 1点 箸形木器

水平・垂直樹脂溝が存在する。放射仮道管が存在する。分野の膜孔はトウヒ型。外縁は円形、開孔は狭いレンズ状で外縁を越える事が多い。仮道管、放射仮道管に螺旋紋が認められない。放射組織細胞中に結晶も認めないことなどから、ハリモミ、イラモミなどではなく、トウヒが試料に近い特徴を示している。

トウヒは本州北中部に産する常緑高木で、材質は粗で軟らかく、樹脂分も少ない。

**アカマツ又はクロマツ** *Pinus densiflora* or *P. thunbergii* 1点 箸形木器（尖頭棒）

水平・垂直樹脂溝が存在する。分野膜孔は大形の窓形。放射仮道管に鋸齒状肥厚が存在する。この特徴は二葉松材のものであるが、鋸齒状肥厚がきわめて鋭く強く現われているため、おそらくアカマツであると考えられる。

アカマツもクロマツとともに、本州北部から屋久島、朝鮮にまで分布する常緑高木で、材は水渴に耐える。

ヒメコマツ又はチョウセンマツ *Pinus himekomatsu* or *P. koraiensis* 1点 楕円形曲物底板?

前述の二葉松類ときわめてよく似た特徴を示すが、放射仮道管に鋸歯状肥厚がない。これらの特徴はヒメコマツ又はチョウセンマツなどの五葉松のものである。

ヒメコマツは北海道から本州中部、チョウセンマツは関東から朝鮮まで分布する。ともに常緑の高木で、材は二葉松より白く、樹脂分も少ない。

スギ *Cryptomeria japonica* 82点 曲物、挽物、火きり臼、刀形、下駄、有頭棒、箸形(尖頭棒)、杓子形、簾串、使途不明品

樹脂細胞は主として夏材部付近に散在する。分野膜孔はスギ型(外縁は楕円形、開孔は斜めのレンズ状)で1分野に1~3個。

青森県から屋久島まで分布する常緑の高木で、材は割裂し易く曲げ易く、臭いが少ないので良材である。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* 38点 曲物、挽物、有頭棒、使途不明品

樹脂細胞は夏材部に散在する。分野膜孔はヒノキ型。(外縁は円形、開孔は斜めのレンズ状で開孔は外縁を越えない。)

福島県から屋久島まで分布する常緑高木。材は白色で美しく芳香があり、狂いが少なく耐久性が高い。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* 3点 曲物、箸形木器(尖頭棒)、使途不明品

材の組織は上記のヒノキにきわめて似ているが、分野膜孔はヒノキのものより大形で、開孔も広く、ヒノキ型にスギ型のものが混在する。

岩手県より木曾地方まで分布する常緑高木。材はヒノキより脆いが割裂性に富んでいる。水湿に耐え、狂いが少ない。

クリ *Castanea crenata* 1点 高台付大漆椀

環孔材。春材部大道管の最大接線径は $350\mu\text{m}$ 、同放射径は $420\mu\text{m}$ 、小道管は集まってV字状、火炎状に分布する。放射組織は1細胞列。

クリとシノキとは組織的にはきわめて似たものであるが、クリの道管の太さはシノキより太くかつ春材部の大道管は輪初に密に配列する。

北海道南部から屋久島までの温帯・暖帯の山地に自生する落葉高木。材は水湿に耐える。椀木地としては、ケヤキあるいはクワの模擬材として用いられる。

アカガシ属 *Cyclobalanopsis* 2点 鐘、鉢? (鋤未製品)

放射孔材。広放射組織が存在する。2点が同一種か別種か不明である。

福島県・宮城県を東限とするものもあるが、一般に暖地に自生し静岡県下には多くの種類が自生しているが、一般にこの属の材の解剖学的特徴を用いての互いの識別はきわめてむずかしい。

ブナ *Fagus crenata* 8点 漆椀

散孔材。春夏材の移行は漸進的(道管は次第にその大きさを減少する)。放射組織は単列、2~3列および広列のものとが混在する。

ブナとイスブナとの識別はむずかしいが、輪初に厚膜細胞を蓄積する傾向の多いブナの型である。挽物には良質のブナ材を使用するのが一般である。従ってブナと同定した。

ブナは本邦各地の温帯に分布する落葉高木で、材は割れ難い性質を利用し挽とするが、耐久性に乏しいのが安価である。

ケヤキ *Zelkova serrata* 12点 漆椀

環孔材。孔圍は1層。年輪幅は狭く、小道管は集団となる。この形の組織を持つ材は軽く椀木地に多く見られる。放射組織は異性で1~5(6)細胞列、細胞内に結晶を含有している。

本邦各地に生育する落葉高木である。材は硬い有用材で用途が多い。漆器材としては狂いが少なく割

れる事が少ない。

**カツラ** *Cercidiphyllum japonicum* 1点 漆椀

散孔材。道管の切口は角丸の多角形で道管の大きさは接線径75 $\mu\text{m}$ 、放射径80 $\mu\text{m}$ に至る。複合道管が多く、2～3個各方向に接合する。道管の穿孔板は階段。放射組織と道管と交わる部分の膜孔は階段状。放射組織は異性で1～2細胞列。

北海道から九州までの温帯に分布する落葉高木。材は軽軟で工作が容易で狂いが少ない。

**ホオノキ** *Magnolia obovata* 1点 漆椀

散孔材。道管は、多くは2～数個ずつ主として放射方向に接合する、道管の穿孔板は単～階段でbar（横線）の数は少ない、穿孔の形は縦長の矩形～卵形、道管相互間の膜孔は階段状。放射組織は異性で1～2細胞列。

北海道から九州～中国まで分布する落葉高木。材は軽軟で工作が容易で狂いが少なく、ロクロにかけるのに良い材である。

**イスノキ** *Distylium rasemosum* 2点 横櫛

散孔材。道管の切口は多角形～矩形。直径は接線径60 $\mu\text{m}$ 、放射径100 $\mu\text{m}$ に至る。

道管の穿孔板は階段、bar（横線）の数は少なく、間隔が広い。接線状の木部柔組織が頗著で、時に結晶を含有している。道管と放射組織との交わる部分の膜孔は横長の矩形の階段状。放射組織は異性で1～2(3)細胞列。木部柔組織と放射組織との細胞中に黒褐色の物質を填充している。発掘材では、とくに木櫛の場合には一見してその色からイスノキ製と判る程である。

東海以南～済州島までの暖帯に分布する落葉高木。材は堅硬、緻密である。

**ザイフリボク** *Amelanchier asiatica* 1点 横櫛

散孔材。道管は多くは単独で、接線径は40 $\mu\text{m}$ に至る、道管の穿孔板は単、内壁に螺旋紋が存在する。木部柔組織は接線状、散在状でその存在数は多い。繊維状仮道管にも螺旋紋が存在する。放射組織は同性で1～2(3)細胞列。ザイフリボクに似た組織をもつものにズミ、アズキナシ、ウラジロノキ、ナナカマドなどがあるが、道管および繊維状仮道管に螺旋紋を持つことおよび道管の大きさなどから上記の種と同定した。

ザイフリボクは別名シデザクラと呼ばれる。新潟、岩手県以南の温帯及び暖帯に生育する落葉小高木。材は緻密で堅く、かつては梅材として使用されていた。

**ツゲ** *Buxus microphylla* var. *japonica* 1点 横櫛

散孔材。道管は単独のものが多く、切口は縦長の卵円形又は角丸の多角形、大きさは接線径で25 $\mu\text{m}$ 前後で小さい、道管の穿孔板は階段でbar（横線）の数は12～14本。木部柔組織は接線状および周囲状。繊維細胞は厚膜。道管と放射組織との交わる部分の膜孔は交互状。放射組織は異性で1～2(3)細胞列、直立細胞が高い。

新潟・山形以南～九州に分布する常緑小高木。材は緻密で堅く粘りが強く、材色が美しいので白木で用いることが多い。

**トチノキ** *Aesculus turbinata* 7点 漆椀

散孔材。道管は単独または2～3(4)個ずつ主として放射方向に接合する、道管の内壁にあらい螺旋紋が存在する、道管の穿孔板は単。放射組織は同性で1細胞列で接線断面（板目）で頗著な層階状配列を現わす。

北海道～九州まで分布する落葉高木。材は軽く木目は粗、板目に美しい模様があらわれる。（上記の放射組織の層階状配列がリップルマークとよばれる模様となる。）

**シオジ** *Fraxinus spaethiana* 2点 漆椀

環孔材。年輪幅が狭い。大道管が樹木時に2個、放射方向に接合し、接線径250μm、放射径300μmに至る、小道管は多くは2~3個ずつ放射方向、斜方向などに接合する、接合膜は厚い。放射組織は同性、1~2(3)細胞列。夏材部道管の状態、放射組織の並列細胞数などからシオジと同定した。

関東地方から四国・九州まで分布する落葉高木で、材は重く割れや狂いが少ない。

### 木製品

出土数の多い順に曲物、漆挽、挽物（皿類）、削物、尖頭拂（簪形木器）、杓子形木器、横櫛、有頭棒、火切り臼、刀形木器、下駄、鍬、木鎌、位牌および便途不明品などである。

**曲物** 46点。使用樹種は多い順にスギ（35）、ヒノキ（6）、モミ（3）以下、サワラ、ヒメコマツまたはショウセンマツの各1点ずつである。

**漆挽** 32点。ケヤキ（12）、ブナ（8）、トチノキ（7）、シオジ（2）、クリ、カツラ、ホオノキの各1点ずつである。

**挽物** 17点。削物 2点。挽物はすべてヒノキ。削物は2点ともスギであった。

**尖頭棒** 3点。スギ（2）、アカマツ又はクロマツ（1）

**簪形木器** 13点。トウヒ（1）、スギ（8）、ヒノキ（3）、サワラ（1）。

**杓子形木器** 5点。すべてスギ。

**横櫛** 4点。イスノキ（2）、ザイフリボク（シデザクラ）、ツゲ。

イスノキの自然分布はやや不明瞭なもの静岡県が北限と考えられている。しかし用材として利用する程の蓄積が遺跡の時代にあったか否やは不明であるが、静岡県では、現在茶畠の垣根に植えられているが大木は見られない。静岡県に限らず各遺跡から出土しているイスノキ製の横櫛の用材は、大木の豊富にある九州辺りから供給されたものと考えられる。高級品の木櫛はツゲといわれているが、これは白木造りが珍重された結果と考えられることと、ツゲは成長がおそらく大木が少ない。従ってツゲは高価であった。その多くはイスノキと同様九州あるいは伊豆新島辺りが産地である。

**有頭棒** 3点。イヌマキ、スギ、ヒノキ。

握り所のある棒製品である。丸木のまま材を使用することの多いイヌマキと蓄積の多いと考えられる

表1 内荒遺跡 樹種と木製品の関係表

樹種名	遺物名	曲物	漆挽	挽物	尖頭棒	有頭棒	簪形木器	火切り臼	恩・鉤	木鎌	杓子形	下駄	刀形	漆印	木櫛	不明品	位牌	計
イヌマキ																1	1	
メヌガヤ																1	1	
モミ		3																3
トチノキ																		1
アカマツ又はクロマツ						1												1
ヒメコマツ又はショウセンマツ		1																1
スギ		35	2	2	1	8	2				5	1	2	1	23		82	
ヒノキ		6	17		1	3				1	1				9		38	
サワラ		1					1								1		3	
クリ			1															1
アカガシ属											2							2
ブナ			8															8
クセキ		12																12
カラツラ		1																1
ホモノキ		1																1
イスノキ														2				2
ザイフリボク														1				1
ツゲ														1				1
トチノキ		7																7
シオジ		2																2
未詳																1		1
計		46	32	19	3	2	13	2	2	1	5	2	2	1	4	35	1	170

スギ、そして粘りのあるヒノキが選ばれている。

火堀り臼 2点。ともにスギ。

現在各地の神社で使用している火堀り臼はヒノキが圧倒的に多い。これはヒノキが火と関連づけられての事だと考えられる。

鉢 2点。ともにカシ。

奈良県唐古遺跡を始めとして、カシ属の自生のないか、または少ない地方を除いて、時代を越えて、そのほとんどがカシ類が使用されている。

下駄 2点。スギ、ヒノキ。

刀形 2点。ともにスギ。

簀車 1点。スギ。

木鎧 1点。ヒノキ。

位牌 1点。

針葉樹1種。草戸千軒町遺跡出土のものはヒノキであった。本遺跡のものは、材の保存状態が不良で種を決定することはできなかったが、内部組織が不鮮明な割には外見状の保存状態がよい。従ってヒノキである可能性が高いと考えられる。

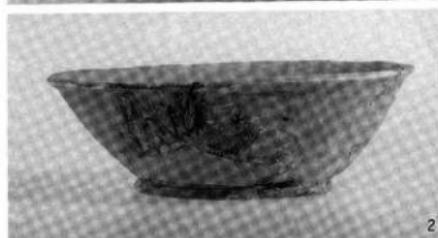
坂尻遺跡報告書にやや詳しく記してあるが、静岡県下の遺跡では時代を越えて、登呂遺跡を始めとして駿河国からはスギの出土例がきわめて多いのに対し遠江国からは少ない。

本遺跡でも各々項目の場で記したように、特別な製品、漆椀、櫛、鉢などの特殊な製品以外はそのほとんどの製品に使用され、全製品の48%強を占めている。

図 版



圖版 I 土器 I (灰釉陶器 I 碗)



図版2 土器2（灰釉陶器2 碗）



17



27



18



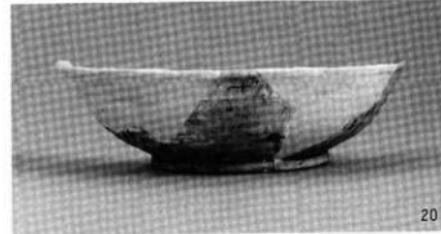
29



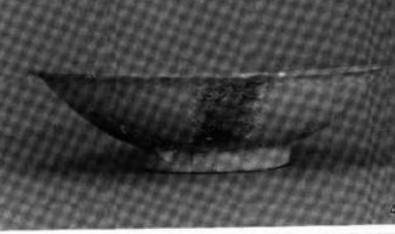
19



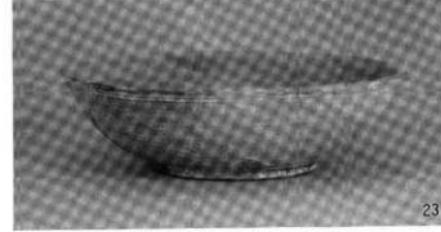
39



20



40



23



42



24

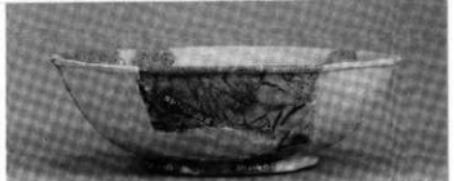


45

図版3 土器3（灰釉陶器3 碗・短頸壺蓋）



46



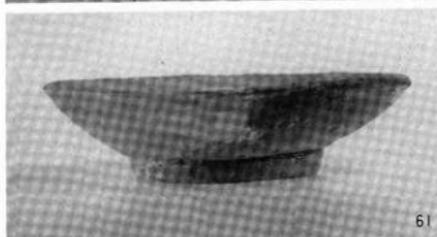
904



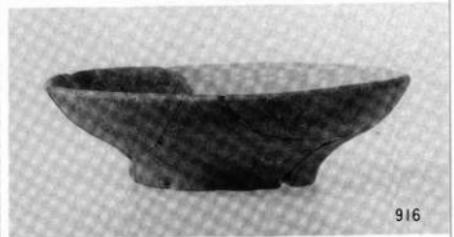
49



903



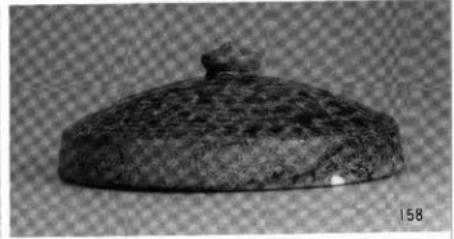
61



916



900



158



901



159

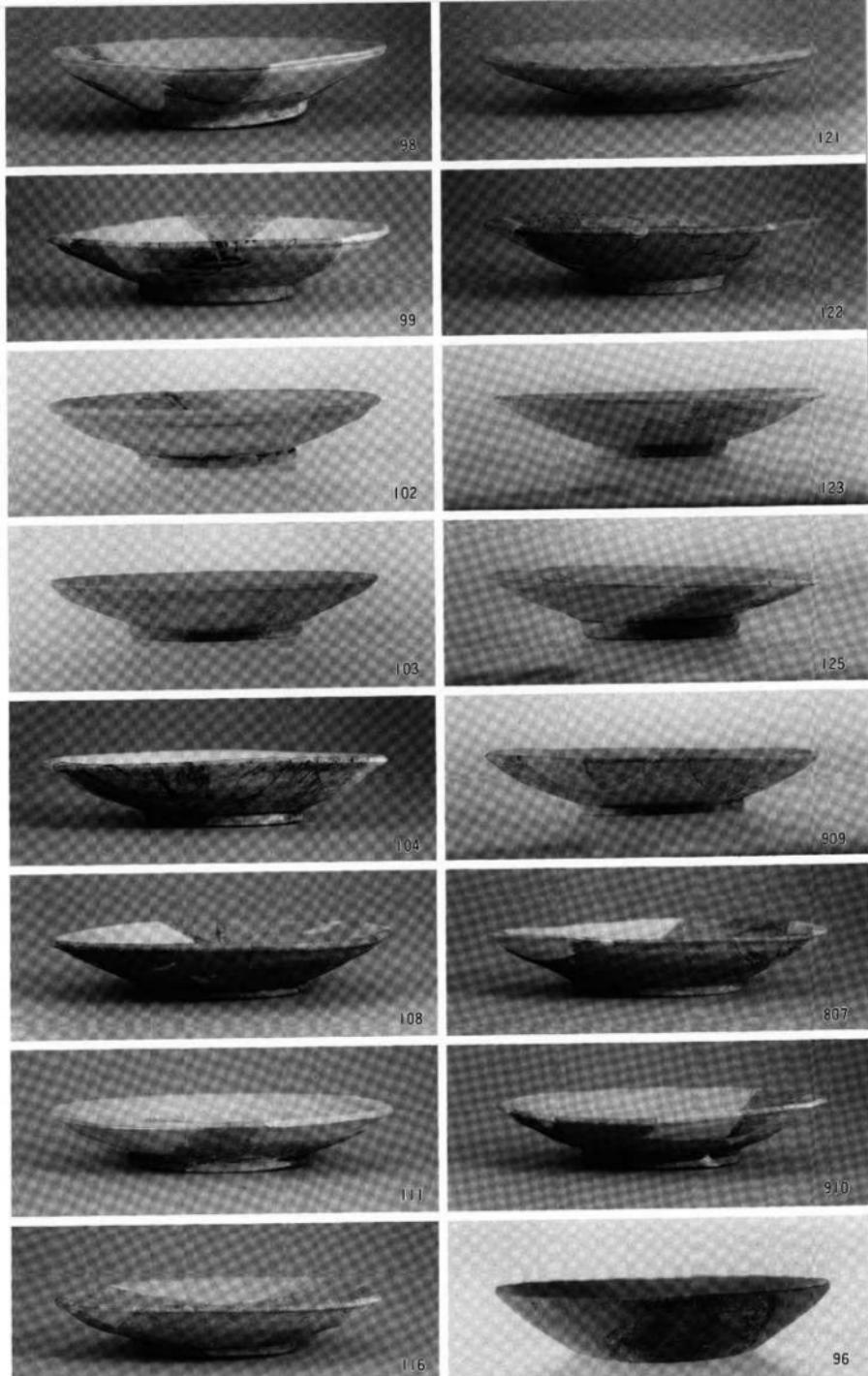


902

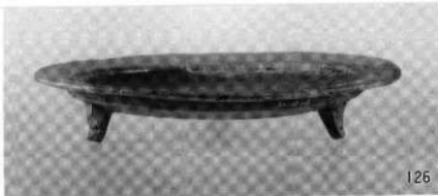


164

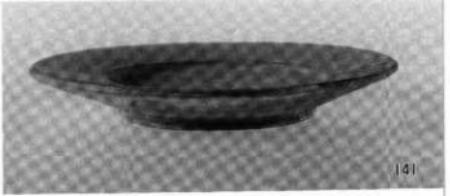
图版 4 土器 4 (灰釉陶器 4 盘)



圖版 5 土器 5 (灰釉陶器 5 三足盤・段皿・耳皿)



126



141



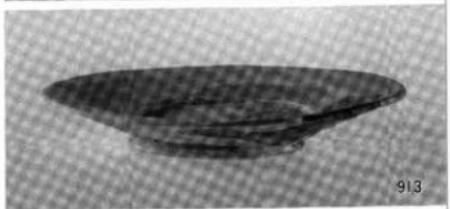
127



143



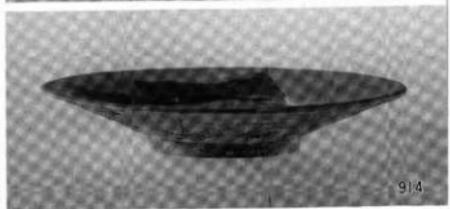
128



913



131



914



132



146



138



915



140

図版 6 土器 6 (灰釉陶器 6 手付瓶・長頸瓶)



150



167



148



173



149



175

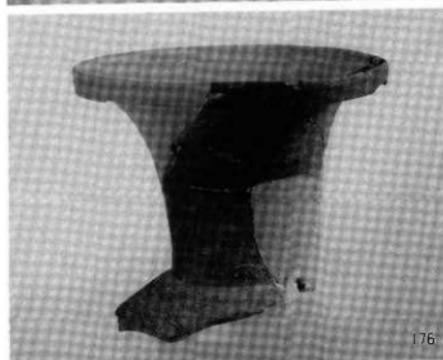
圖版 7 土器 7 (灰釉陶器 7 長頸瓶)



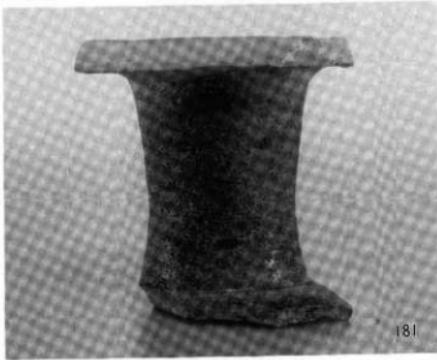
174



180



176



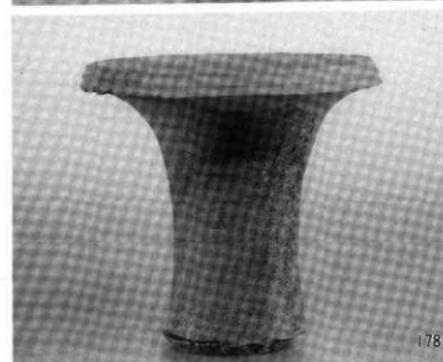
181



177



182

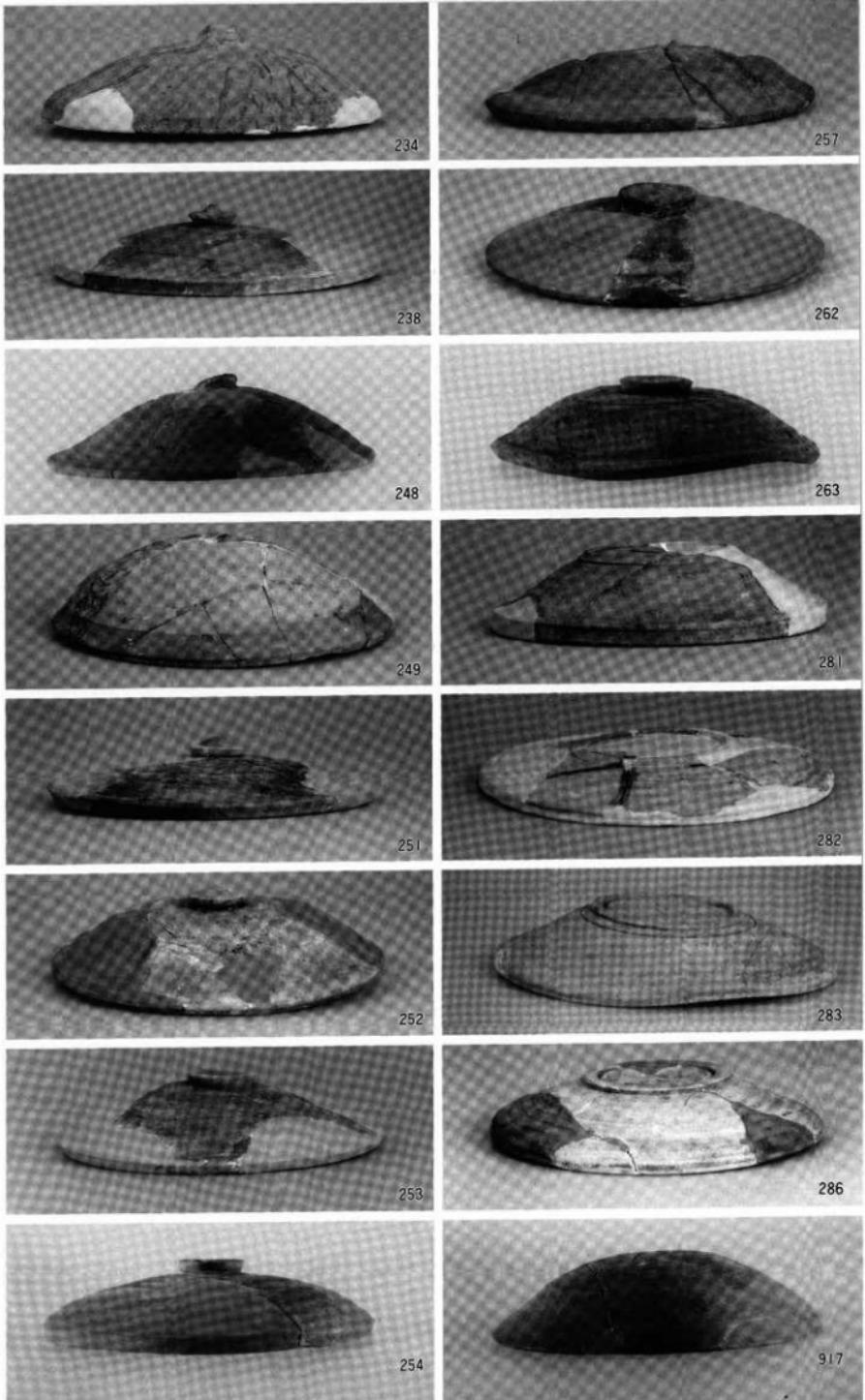


178



185

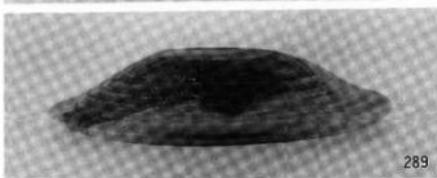
図版 8 土器 8 (須恵器 I 坏蓋)



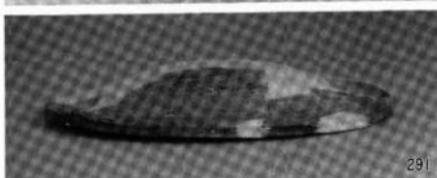
图版 9 土器 9 (须惠器 2 壶蓋・有台坏)



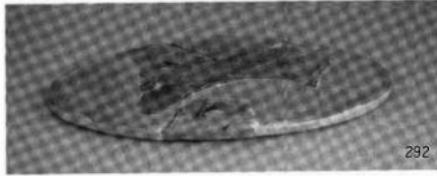
288



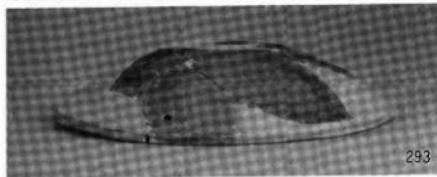
289



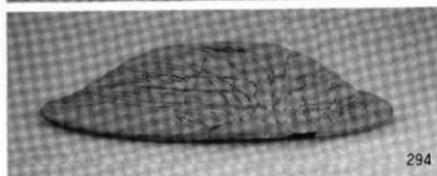
290



291



292



293



294



295



304



307



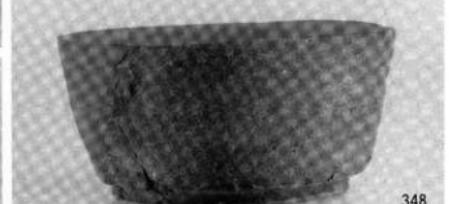
311



322



325

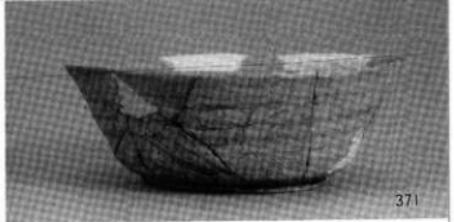


348





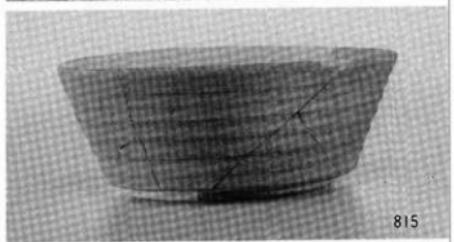
355



371



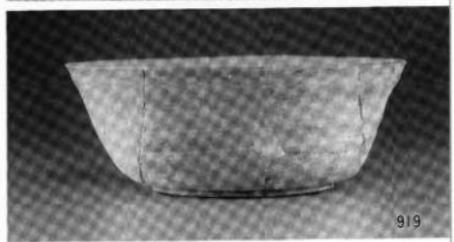
356



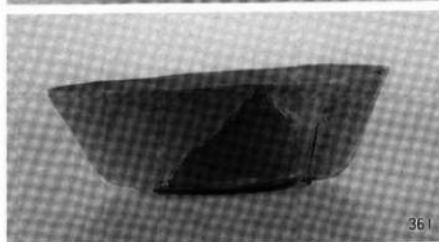
815



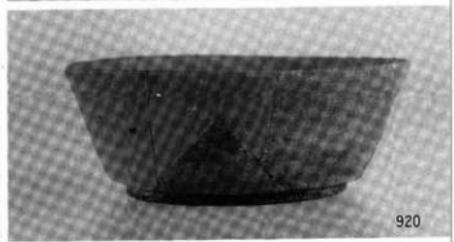
359



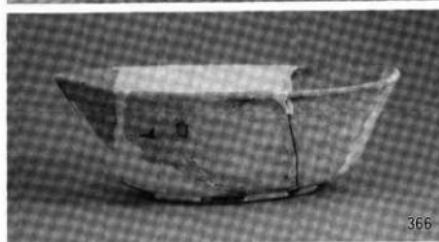
919



361



920



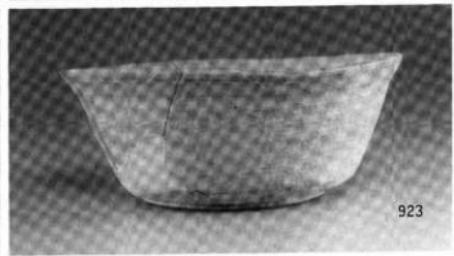
366



922



368

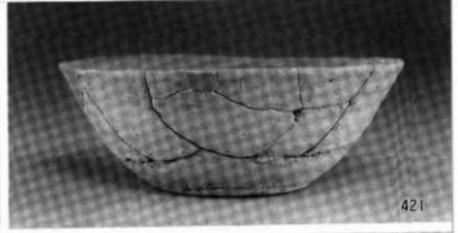


923

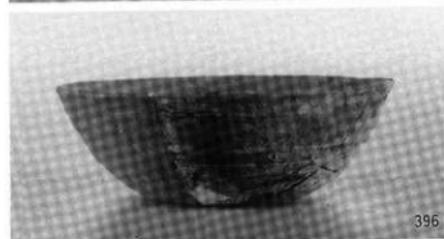
図版II 土器II（須恵器4 無台环）



389



421



396



422



397



424



403



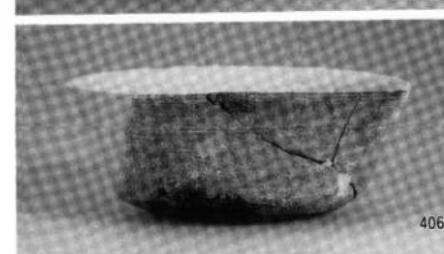
426



405



429

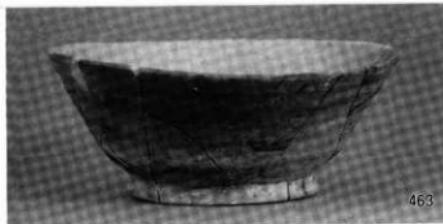


406

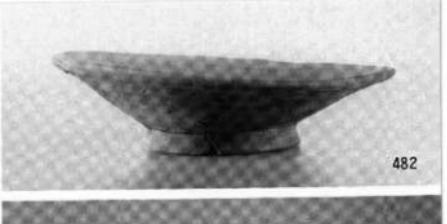


431

図版12 土器12（須恵器5 碗・皿）



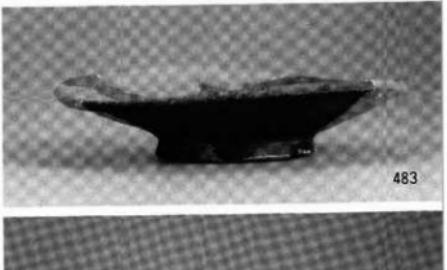
463



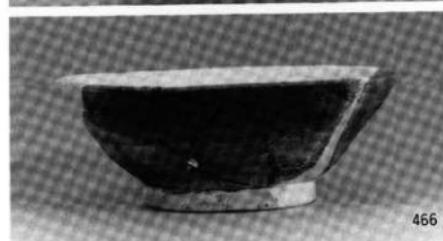
482



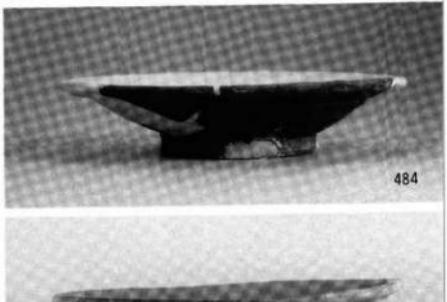
465



483



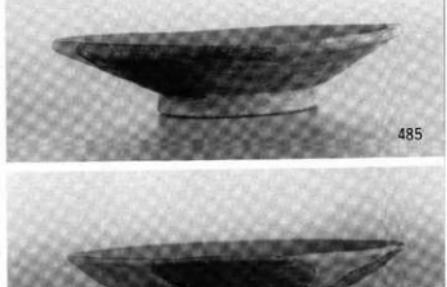
466



484



467



485



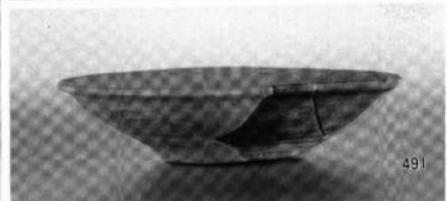
469



489



470



490

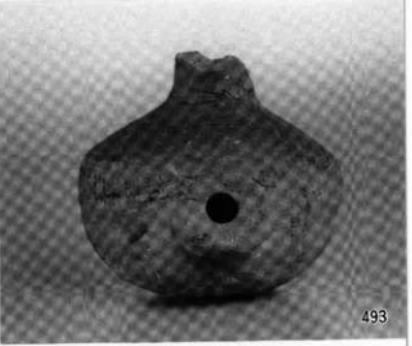


491

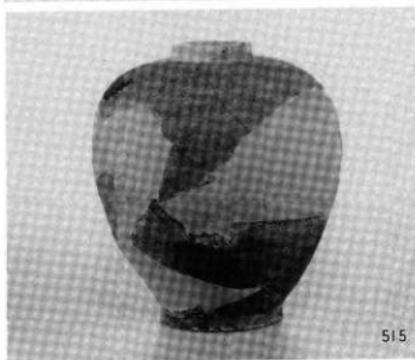
図版13 土器13（須恵器6 長颈瓶・甌その他）



512



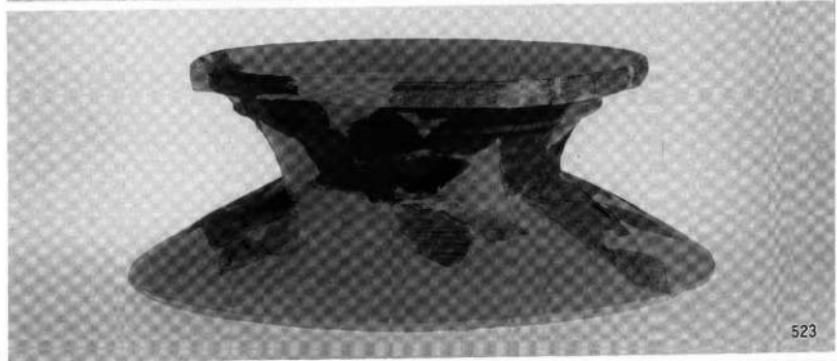
493



515



509



523



519

図版14 土器14（土師器 I 無台坏）



535



548



536



553



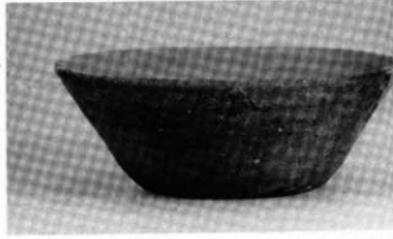
537



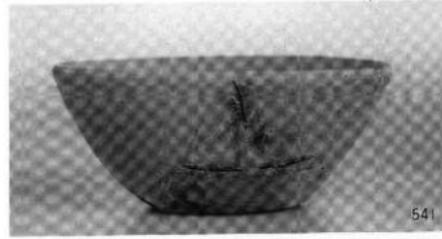
554



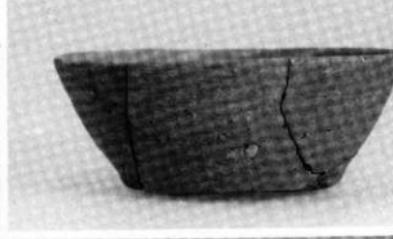
540



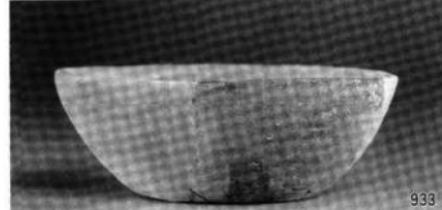
555



541



556

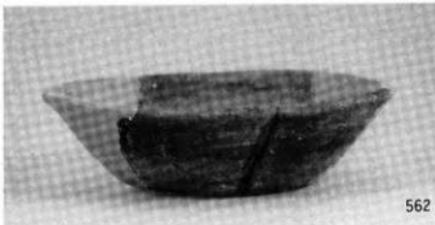


933



560

図版15 土器15（土師器2 無台杯）



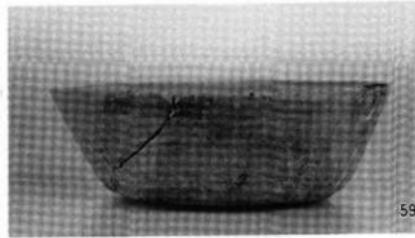
562



589



575



590



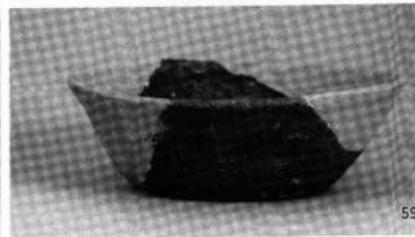
576



595



578



596



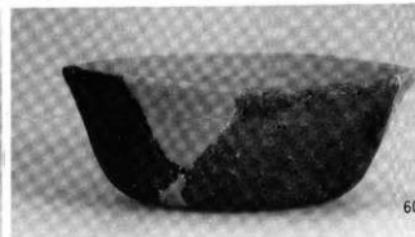
580



600



585



608

図版16 土器16（土器3 無台环）



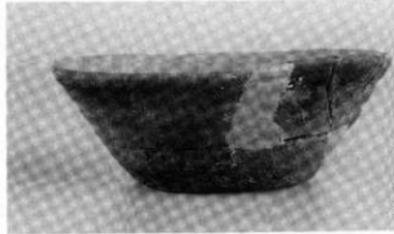
612



631



614



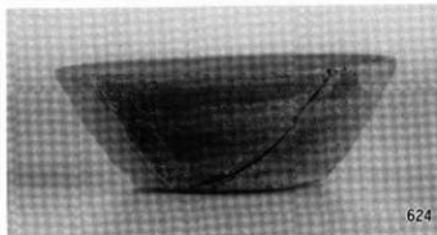
632



620



641



624



642



628



644

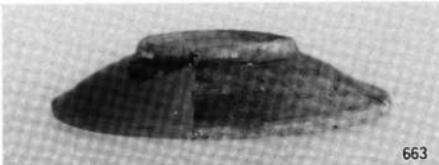


630

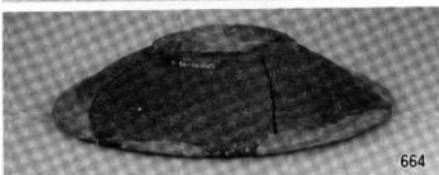


647

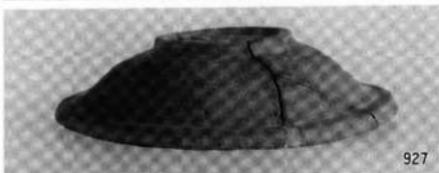
図版17 土器17（土師器 4 壱蓋・皿・有台坏・鉢 内黒土師器 無台坏・碗）



663



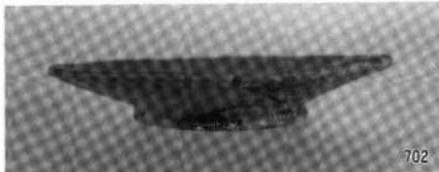
664



927



701



702



931



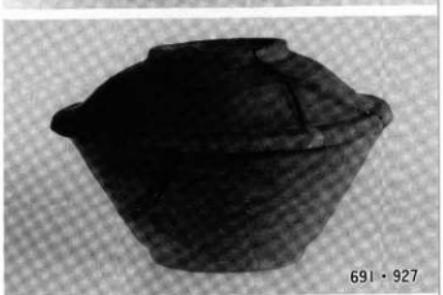
656



689



691



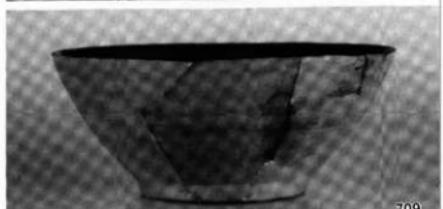
691・927



700

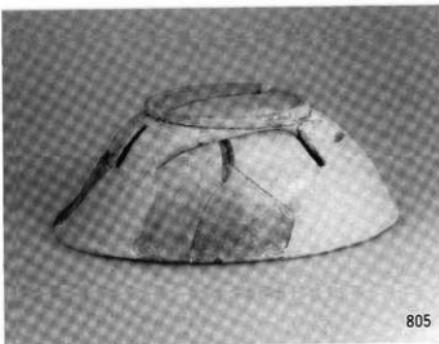


713

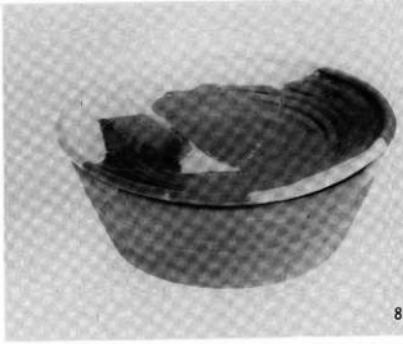


709

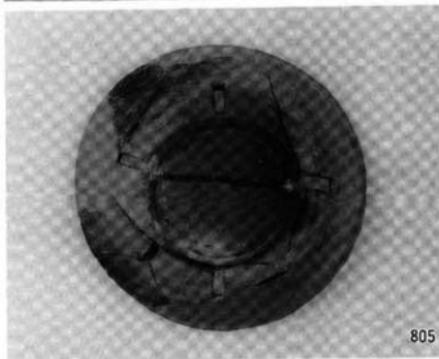
図版18 土器18（転用碗）



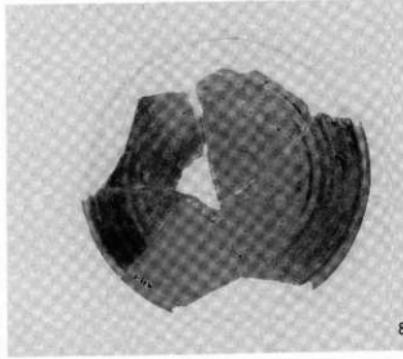
805



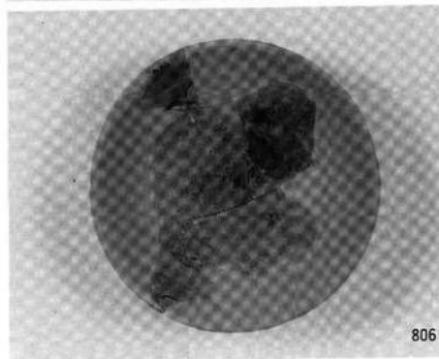
814



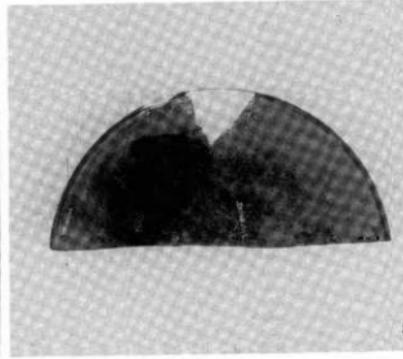
805



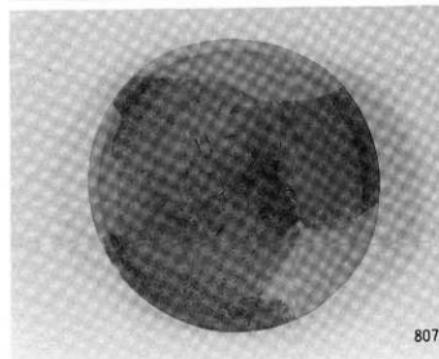
814



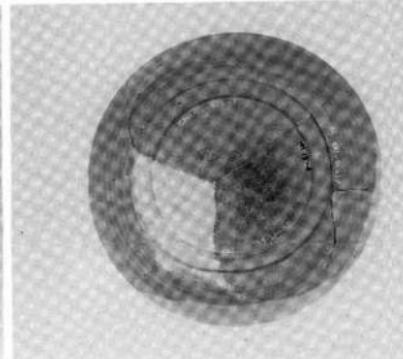
806



810

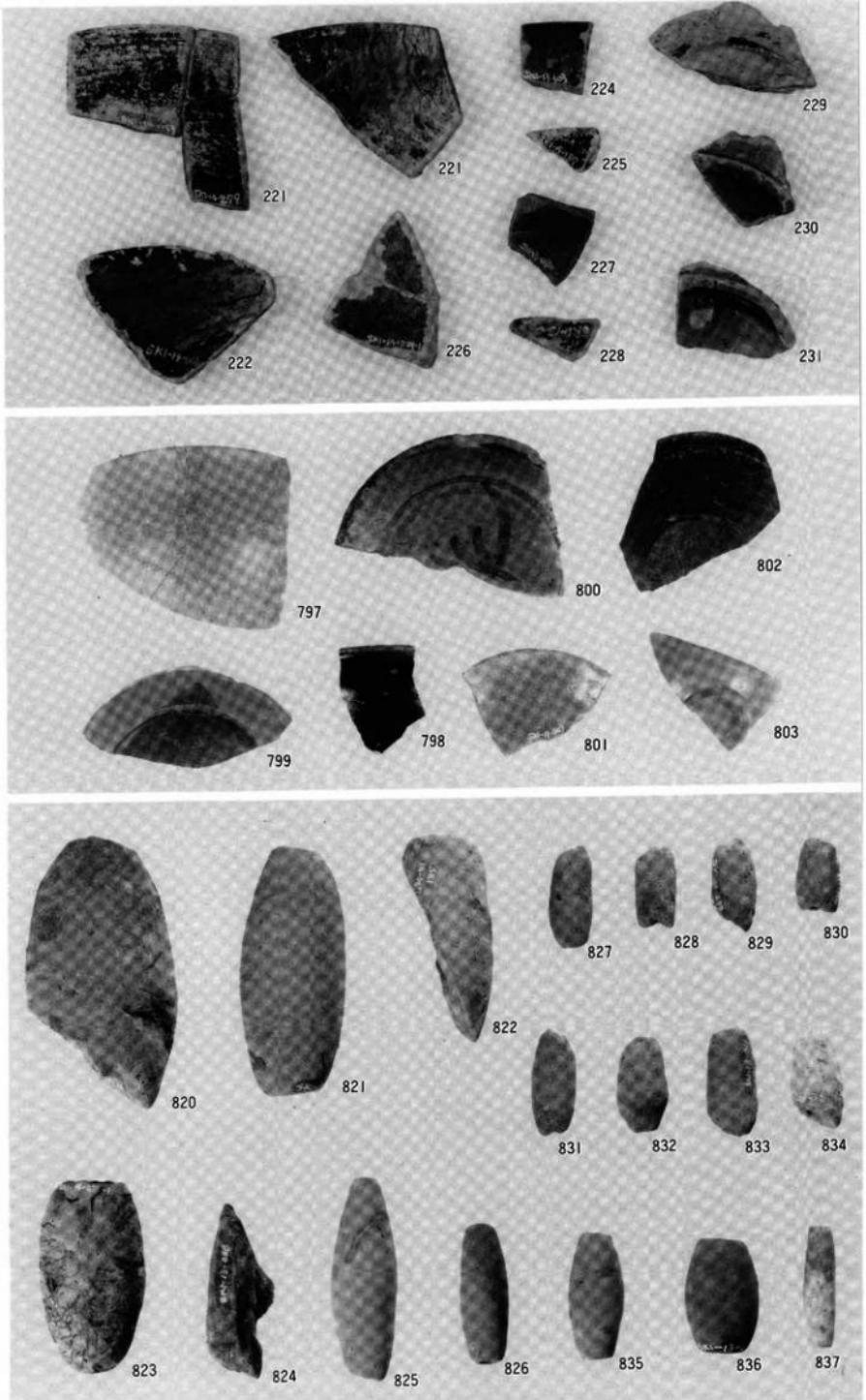


807

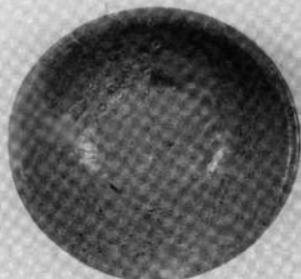


815

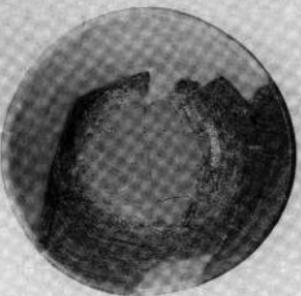
図版19 土器19・土製品（綠釉陶器・陶磁器・土錘）



圖版20 土器20（技法Ⅰ 灰釉陶器施釉方法）



17



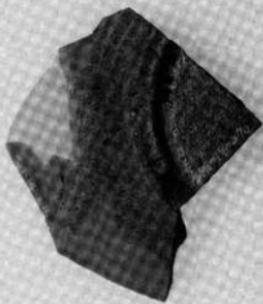
39



902



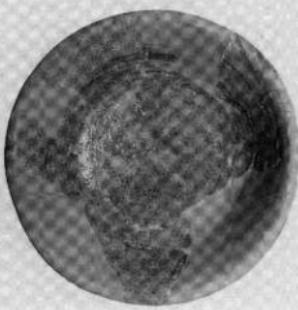
124



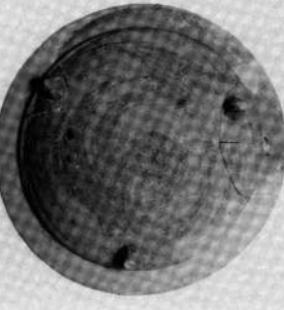
32



49

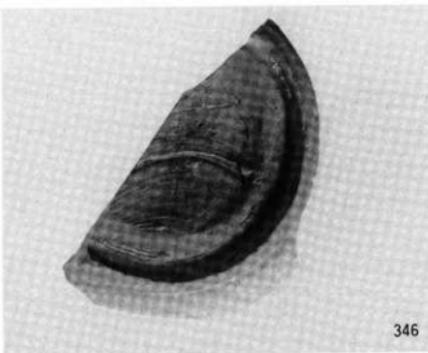


15

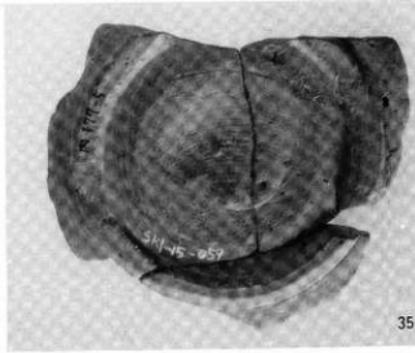


126

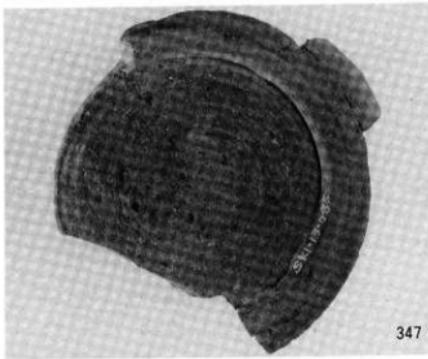
図版21 土器21（技法2 須恵器底部調整）



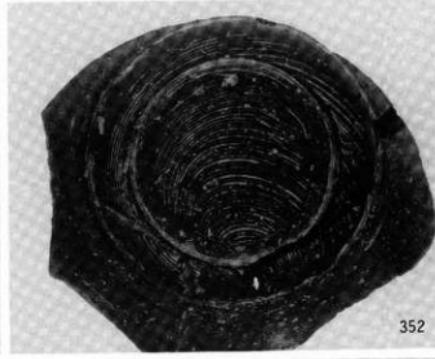
346



351



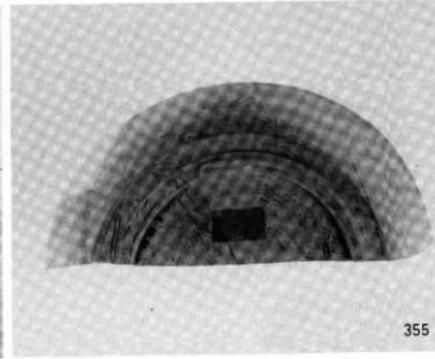
347



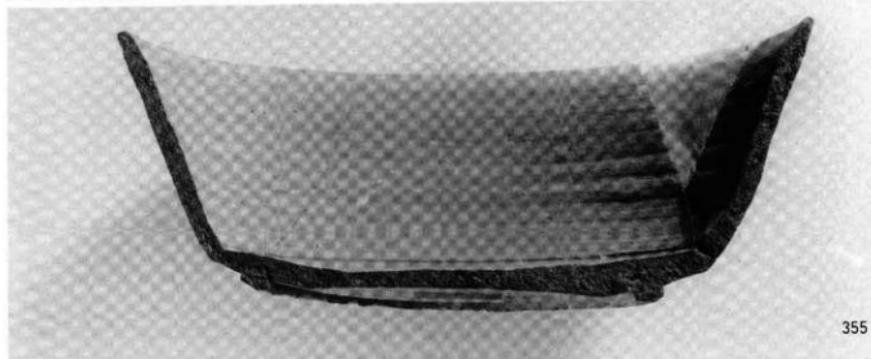
352



426

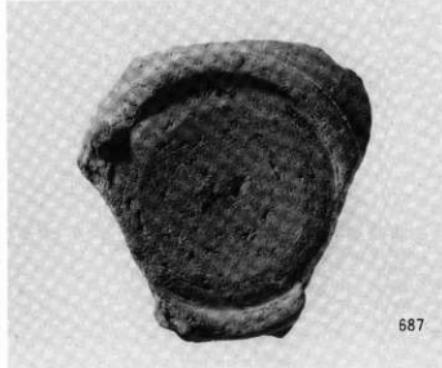
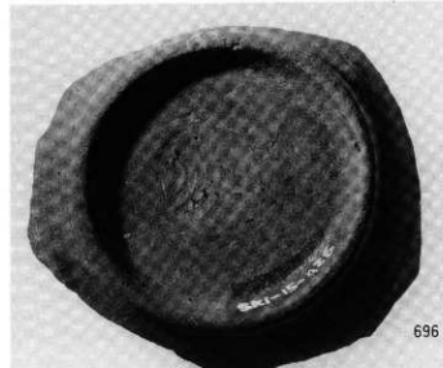
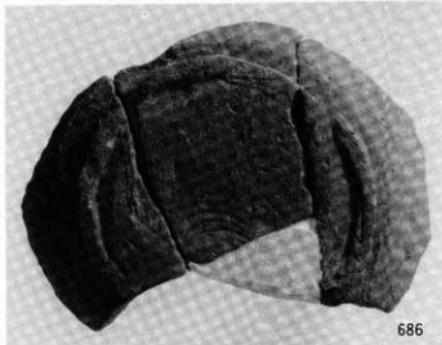
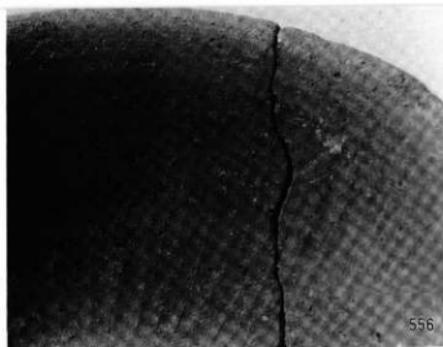


355

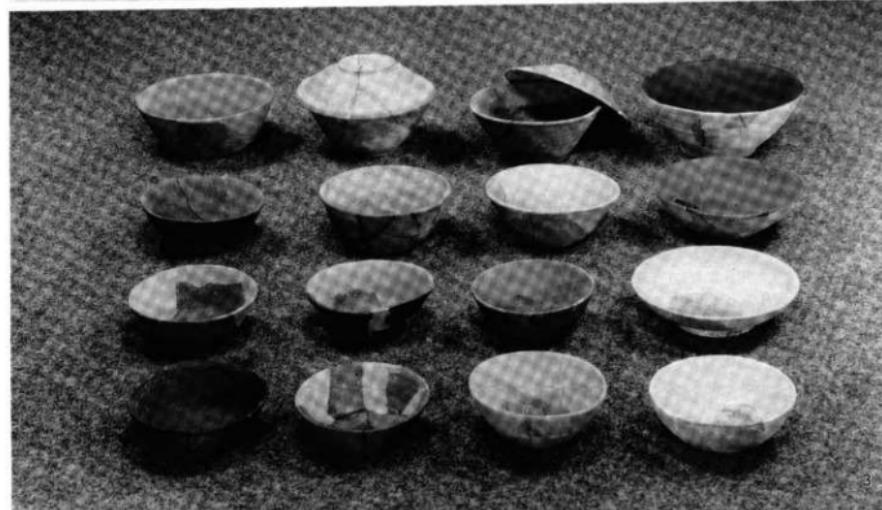
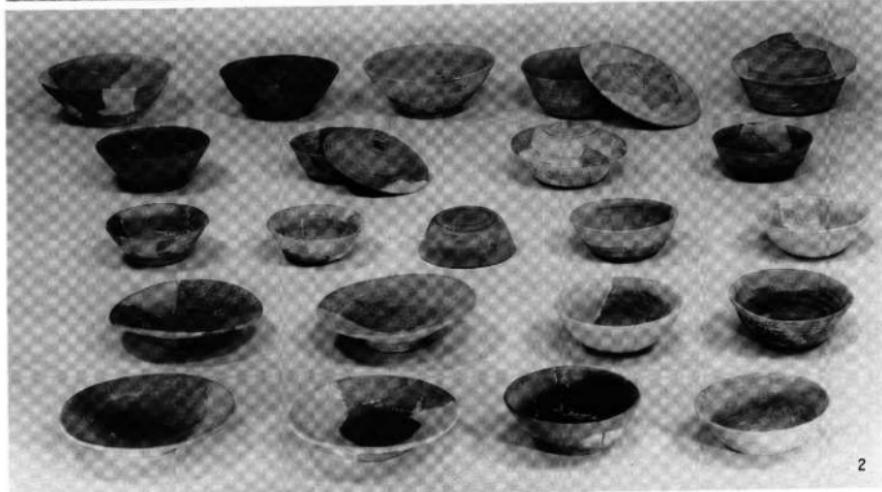
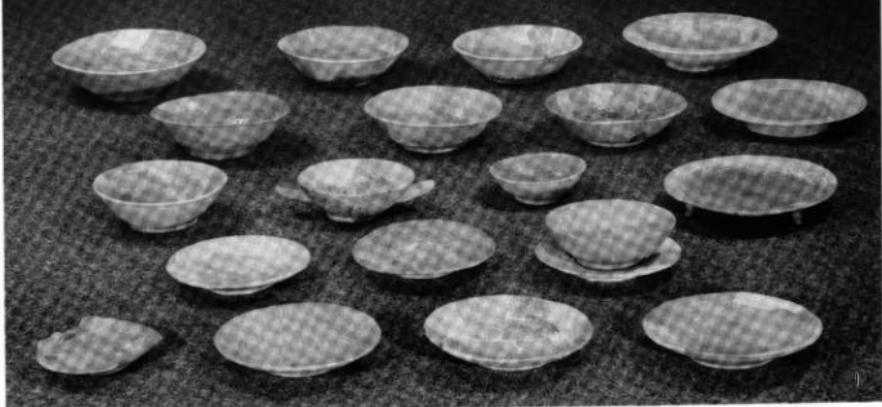


355

図版22 土器22（技法3 土師器内面・底部調整）



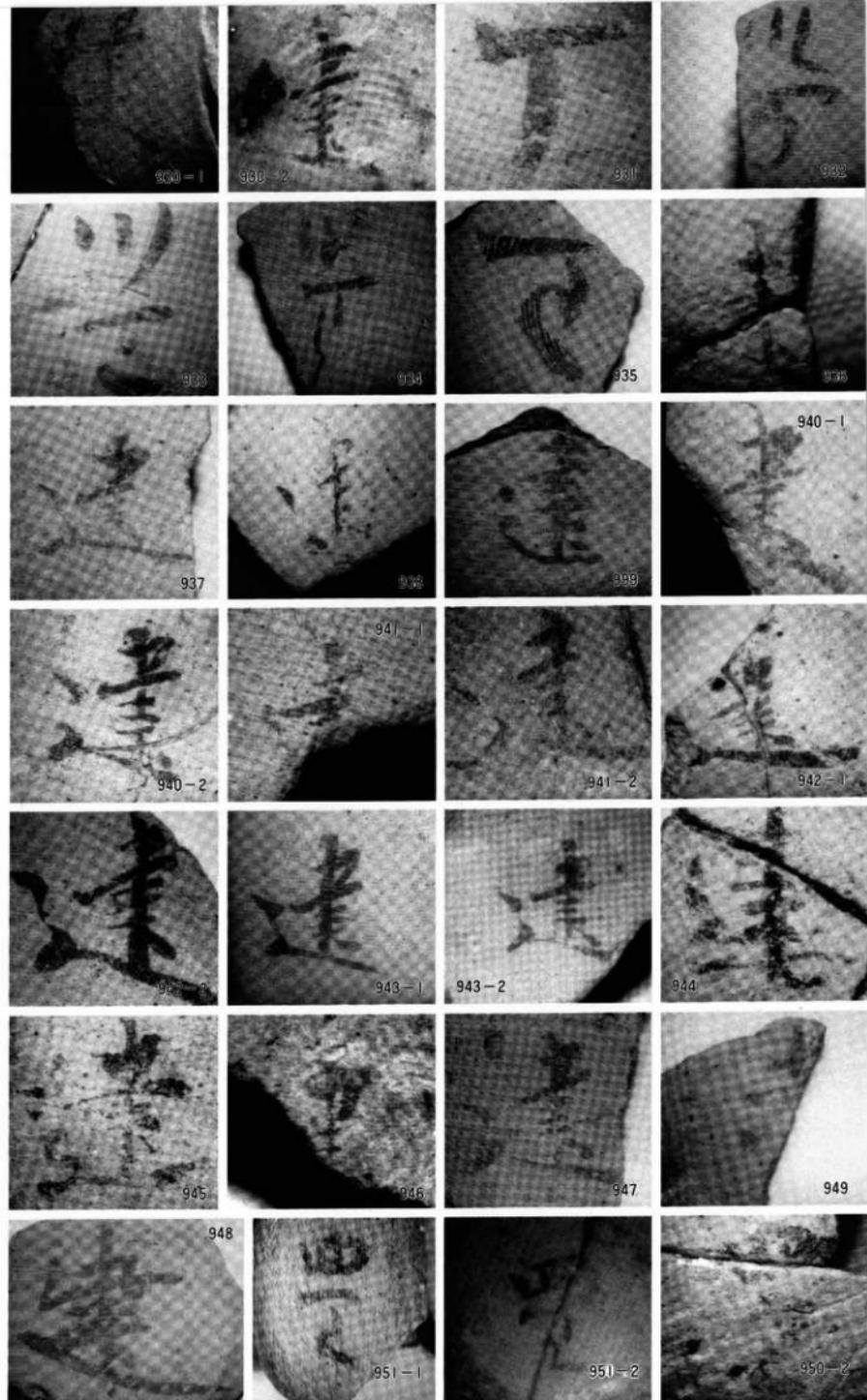
図版23 土器23（平安時代前期供膳形態器種 1.灰釉陶器 2.須恵器 3.土師器）



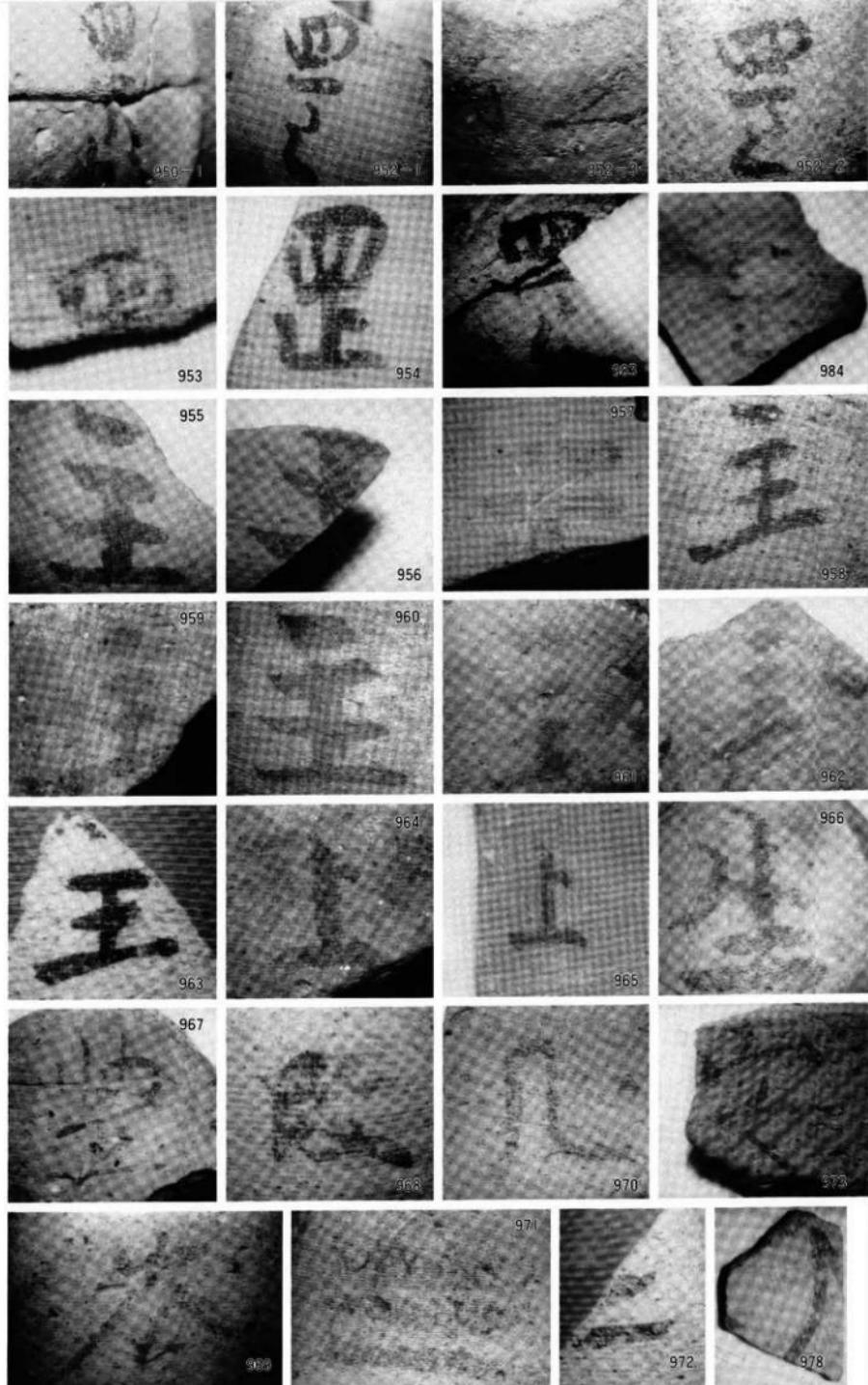








圖版26 墨書文字 3



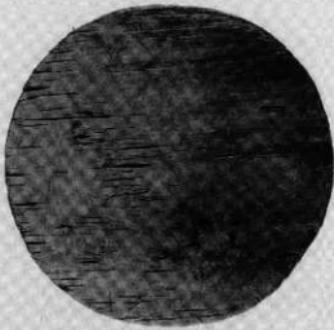
図版27 木製品 I (曲物 I)



W3



W23



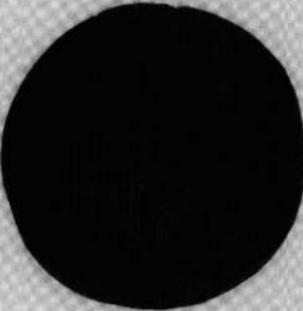
W10



W11



W12



W9



W27

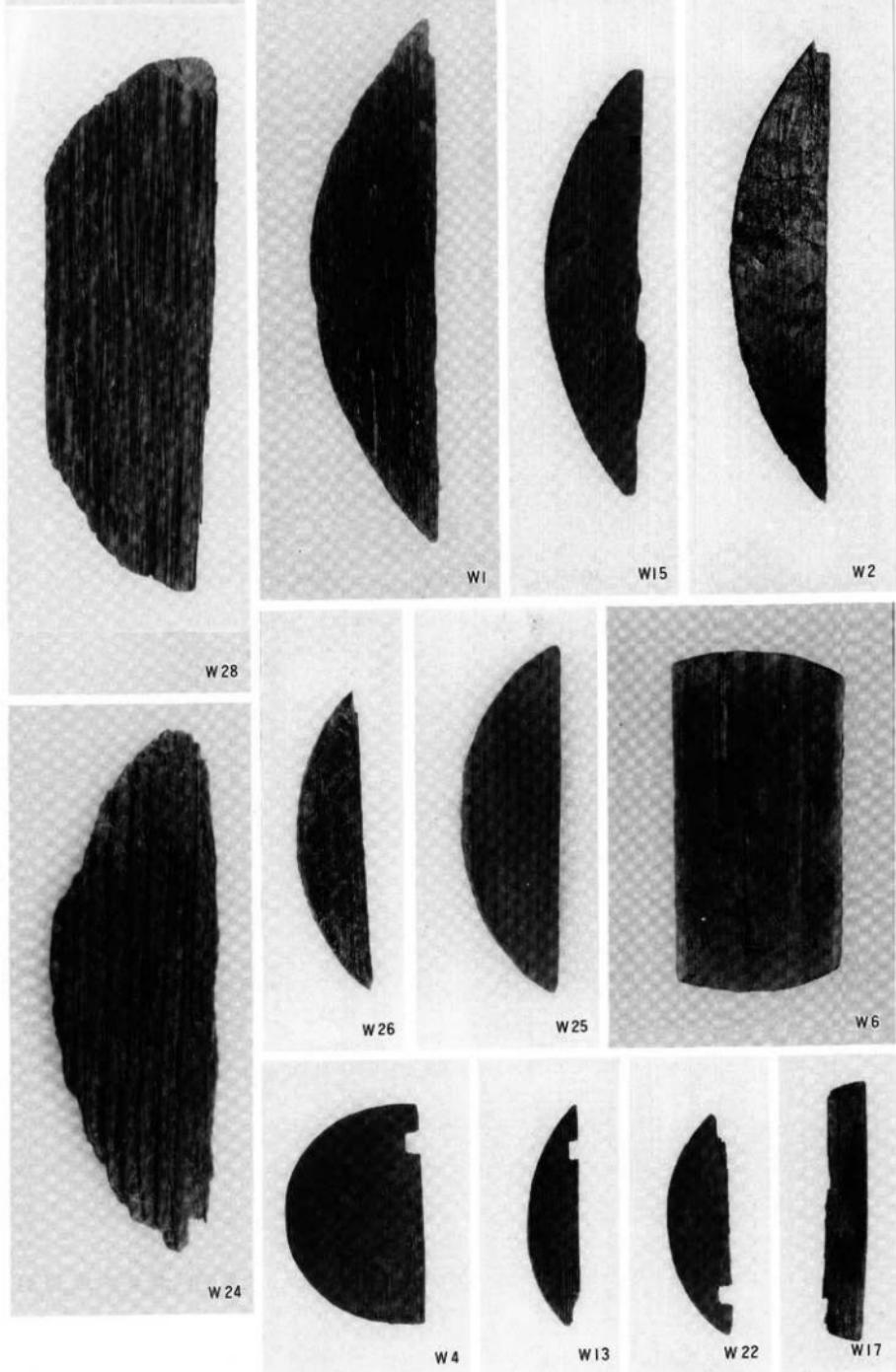


W16



W21

図版28 木製品2（曲物2）



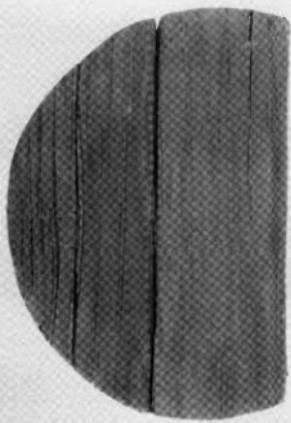
図版29 木製品3（曲物3）



W14



W20



W5



W8



W18



W19



W48



W42

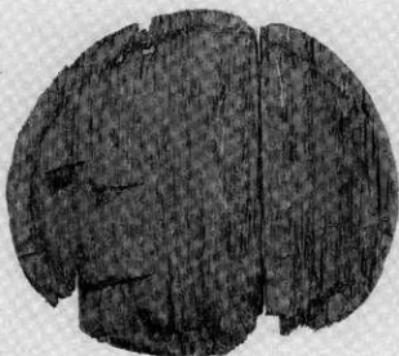
図版30 木製品4（曲物4）



W7



W32



W29



W33



W30



W31



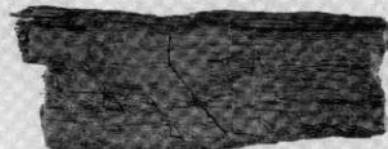
W35



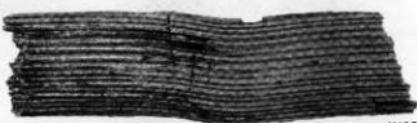
W45



W44

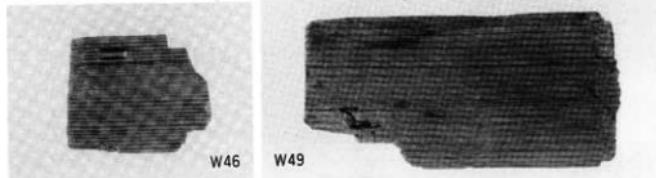
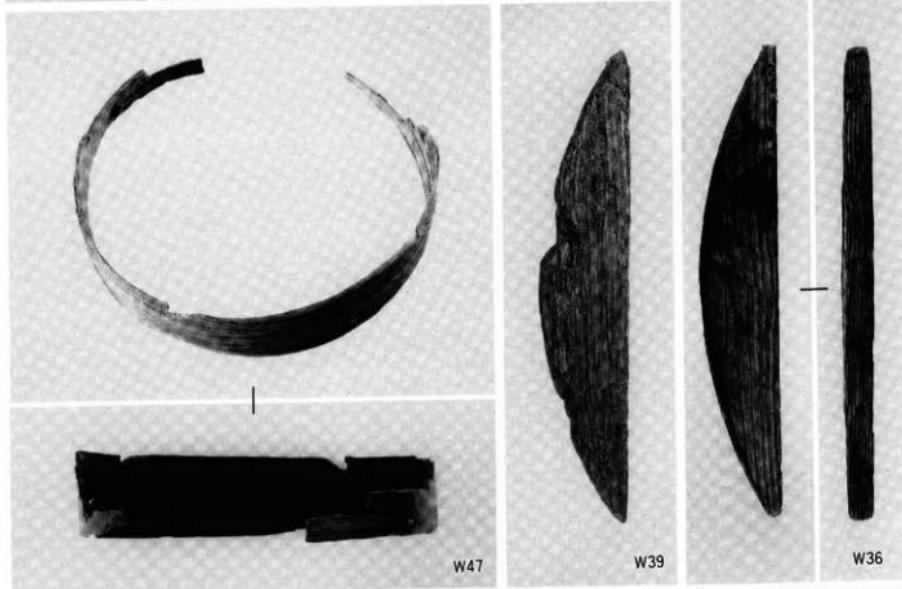
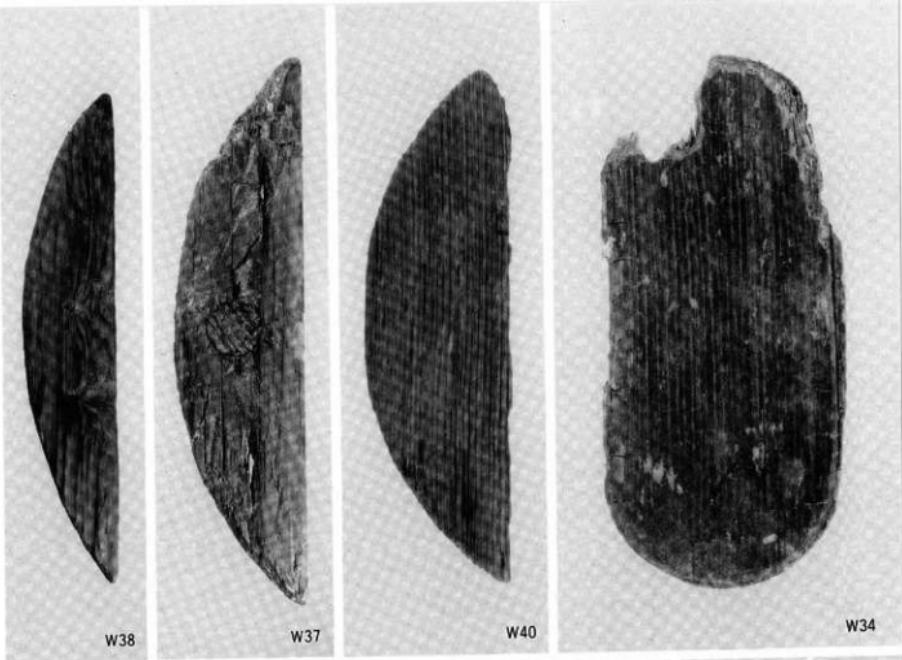


W41

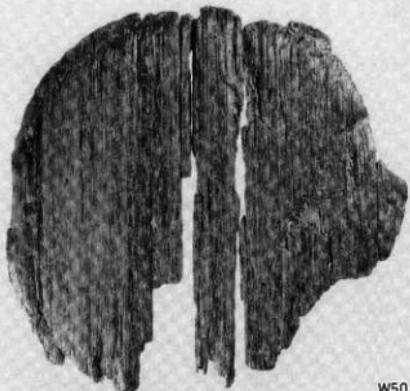


W43

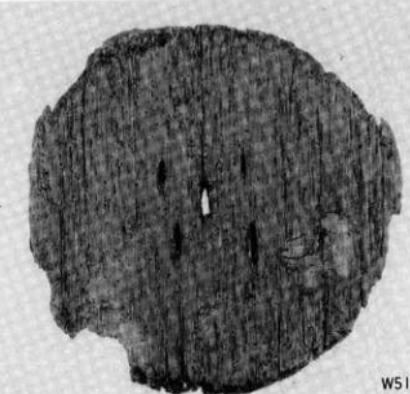
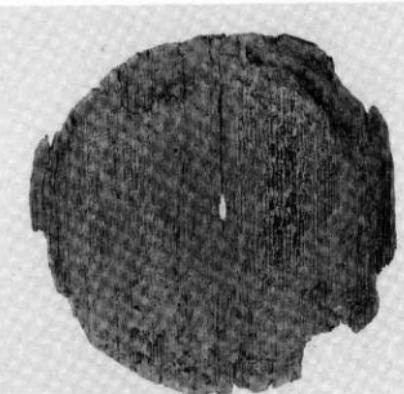
図版31 木製品5（曲物5・棒）



図版32 木製品6（挽物1）



W50



W51



W52

図版33 木製品7（挽物2）



W55

W66



W56



W64



W54



W54



W53

図版34 木製品 8 (挽物 3)



W62

W59



W60



W63

W60



W57

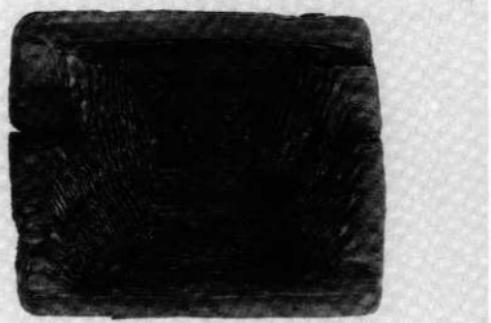
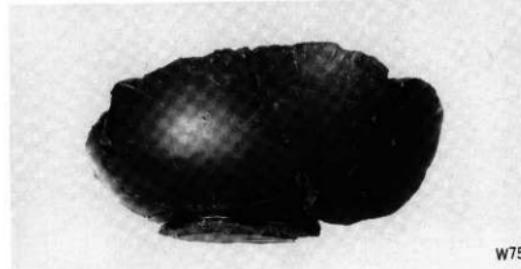
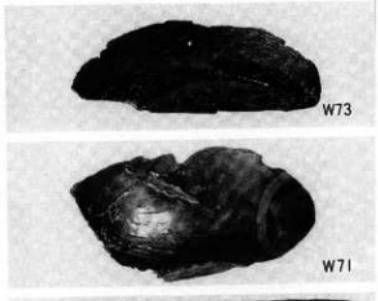
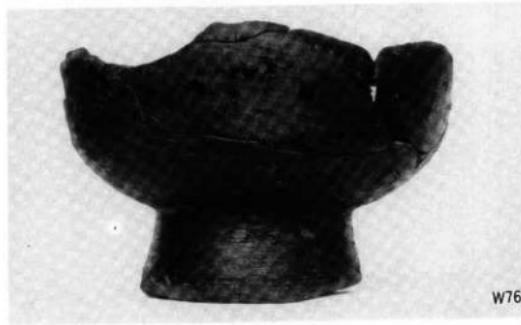
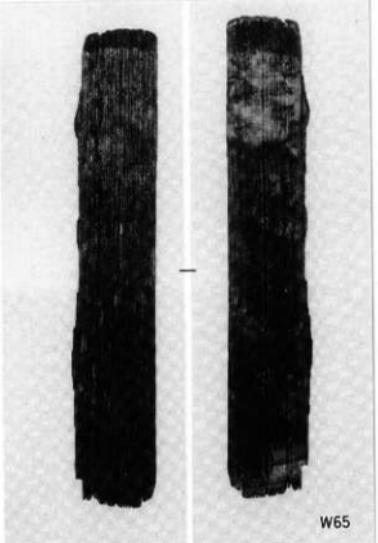
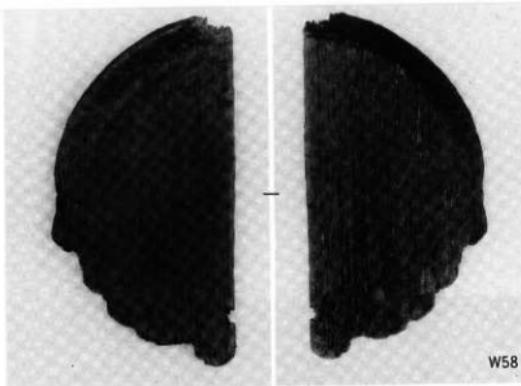


W61



W68

図版35 木製品 9 (挽物 4・剃物・漆椀)



図版36 木製品10（櫛・火鉢板・鏡・杓子）



W99



W100



W103



W104



W101



W102



W105



W106



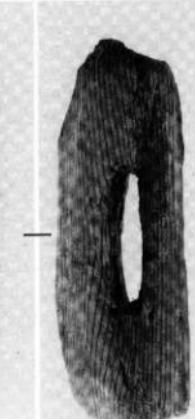
W96



W98

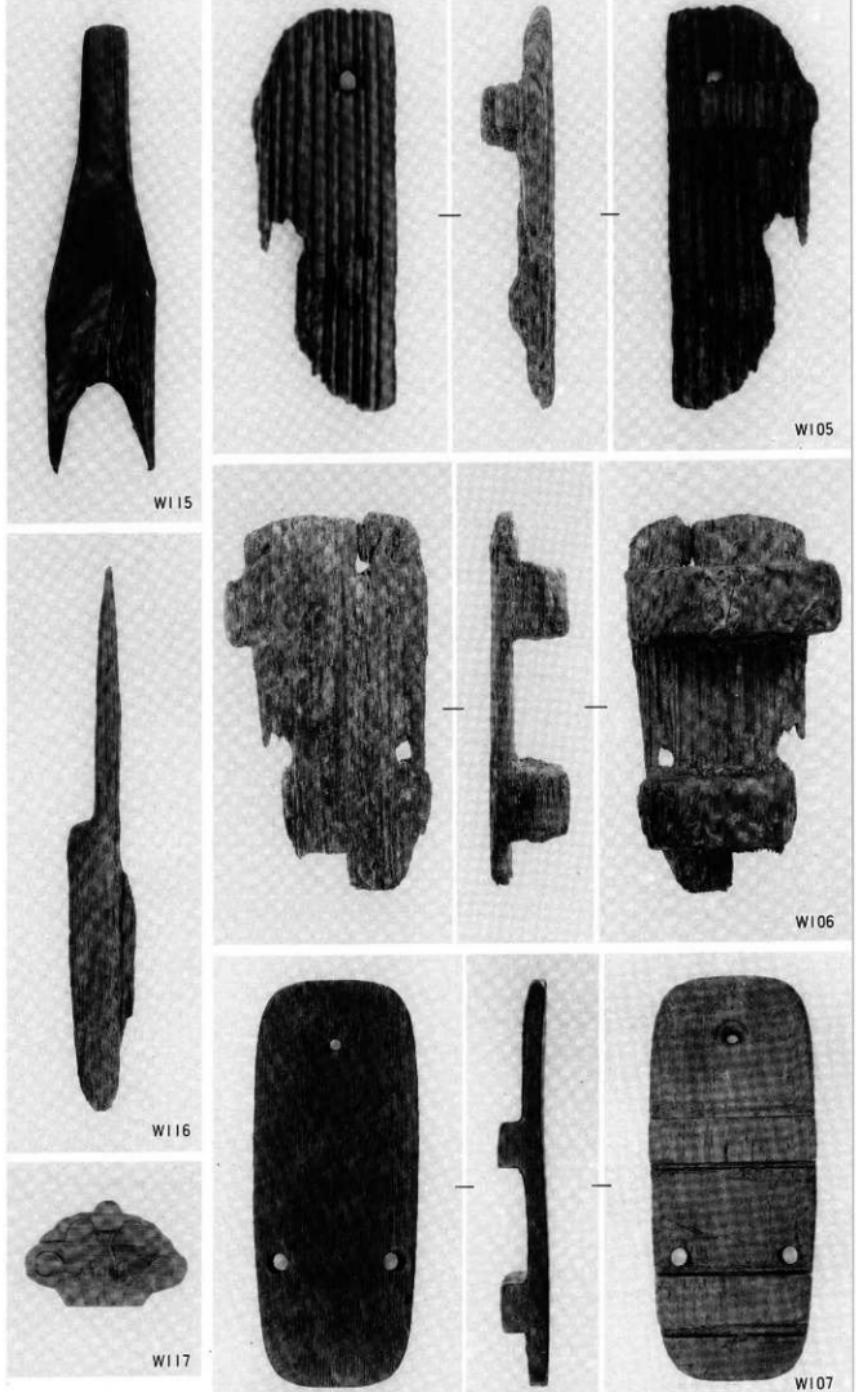


W112

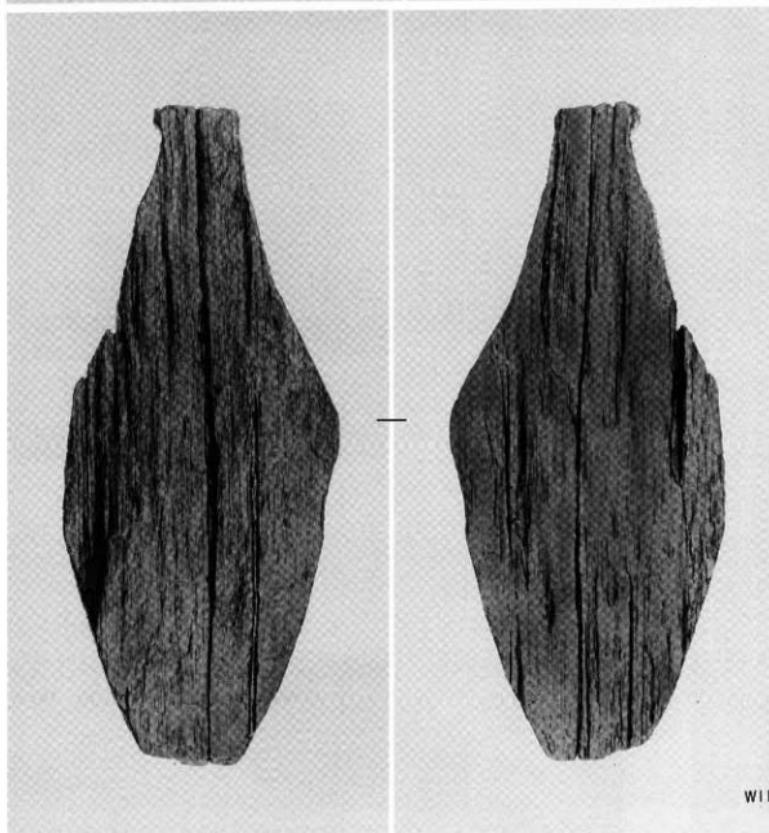
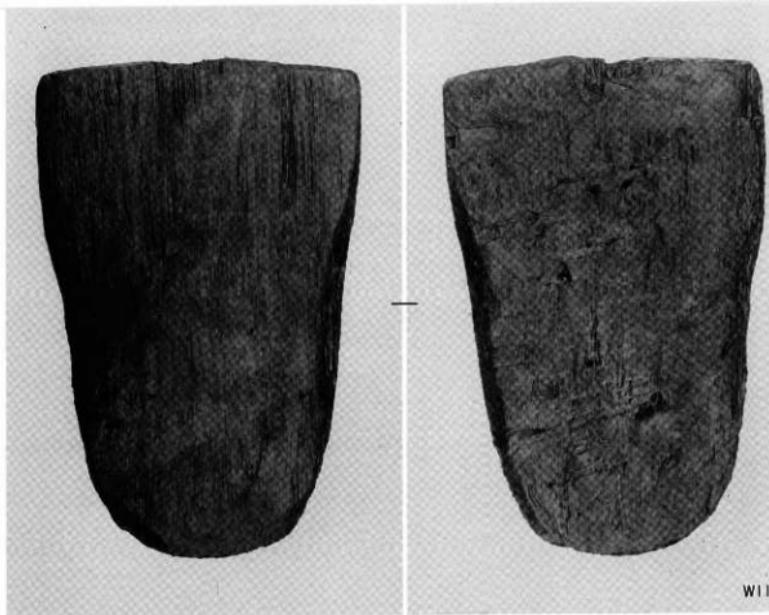


W97

図版37 木製品II（下駄・位牌・杓子（櫛）形木製品）



図版38 木製品12（錙）



図版39 木製品13（横槌・刀形・陽物形・その他）



W113



W114



W109



W119



W120



W129



W130

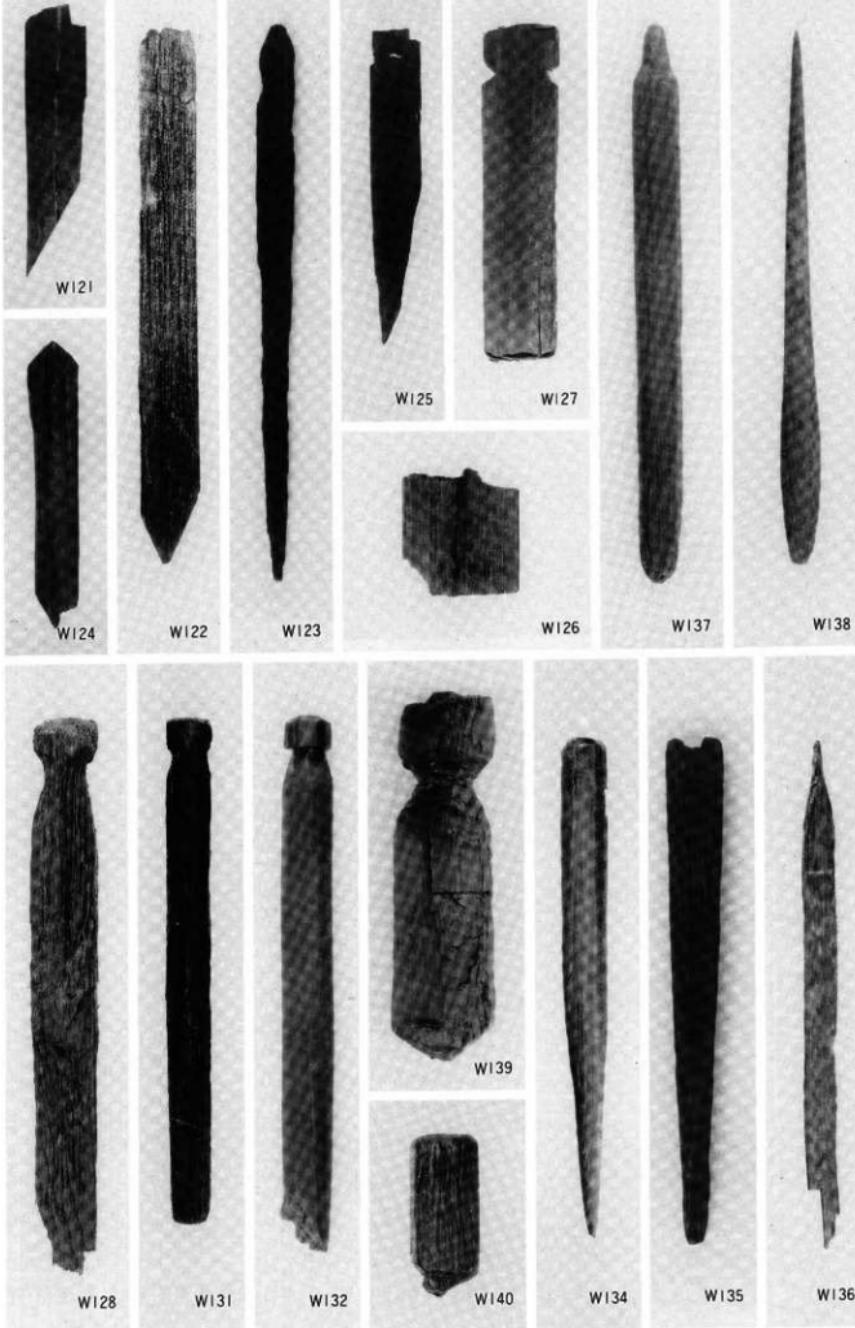


W118

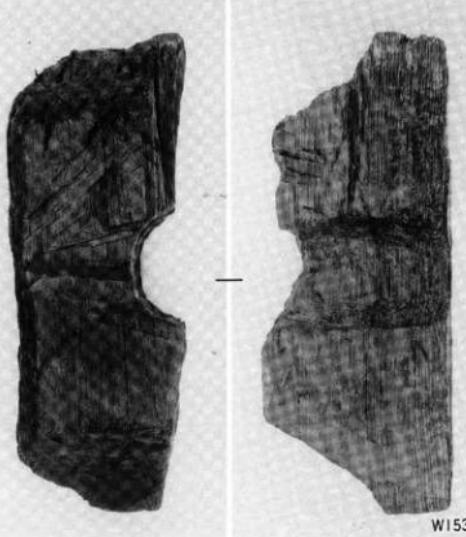
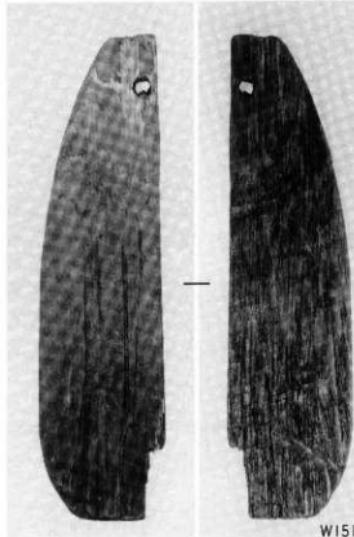
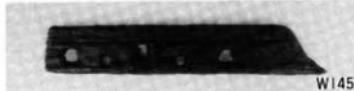
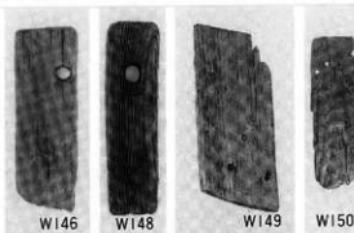


W142

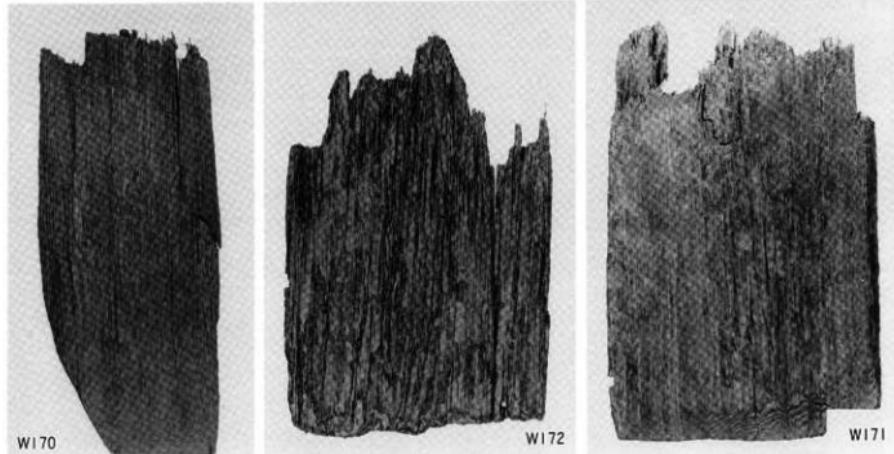
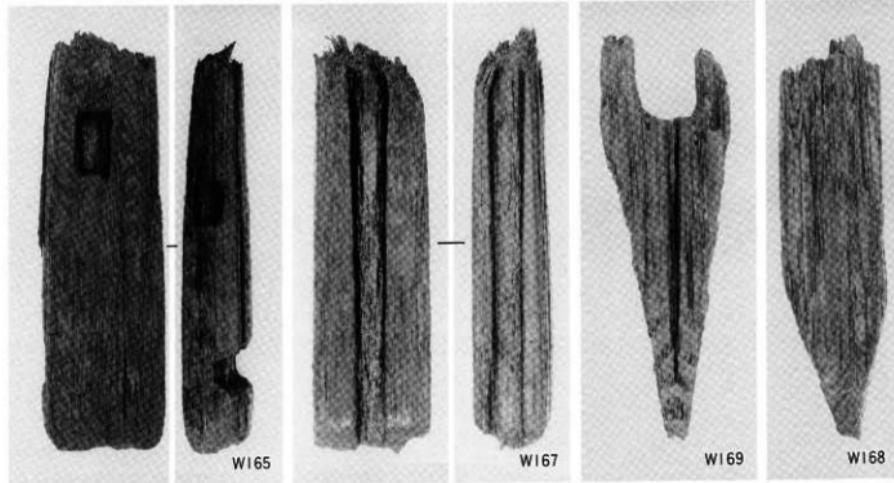
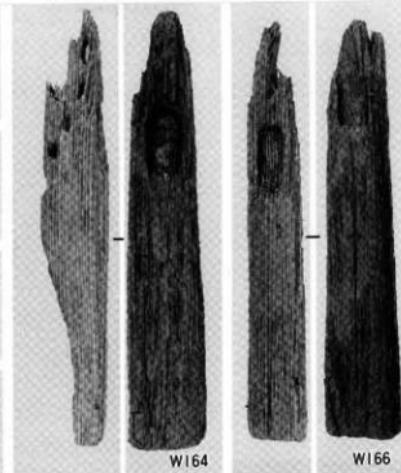
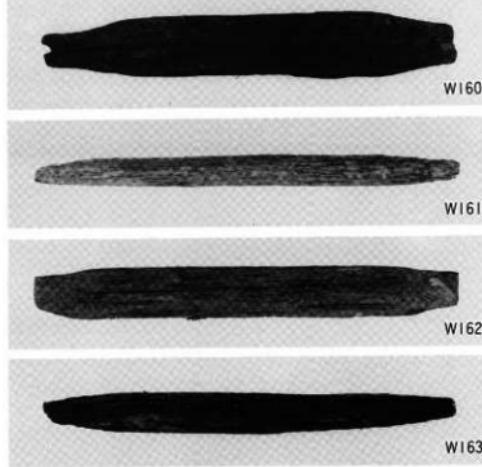
図版40 木製品14（斎串・木筒・用途不明品）



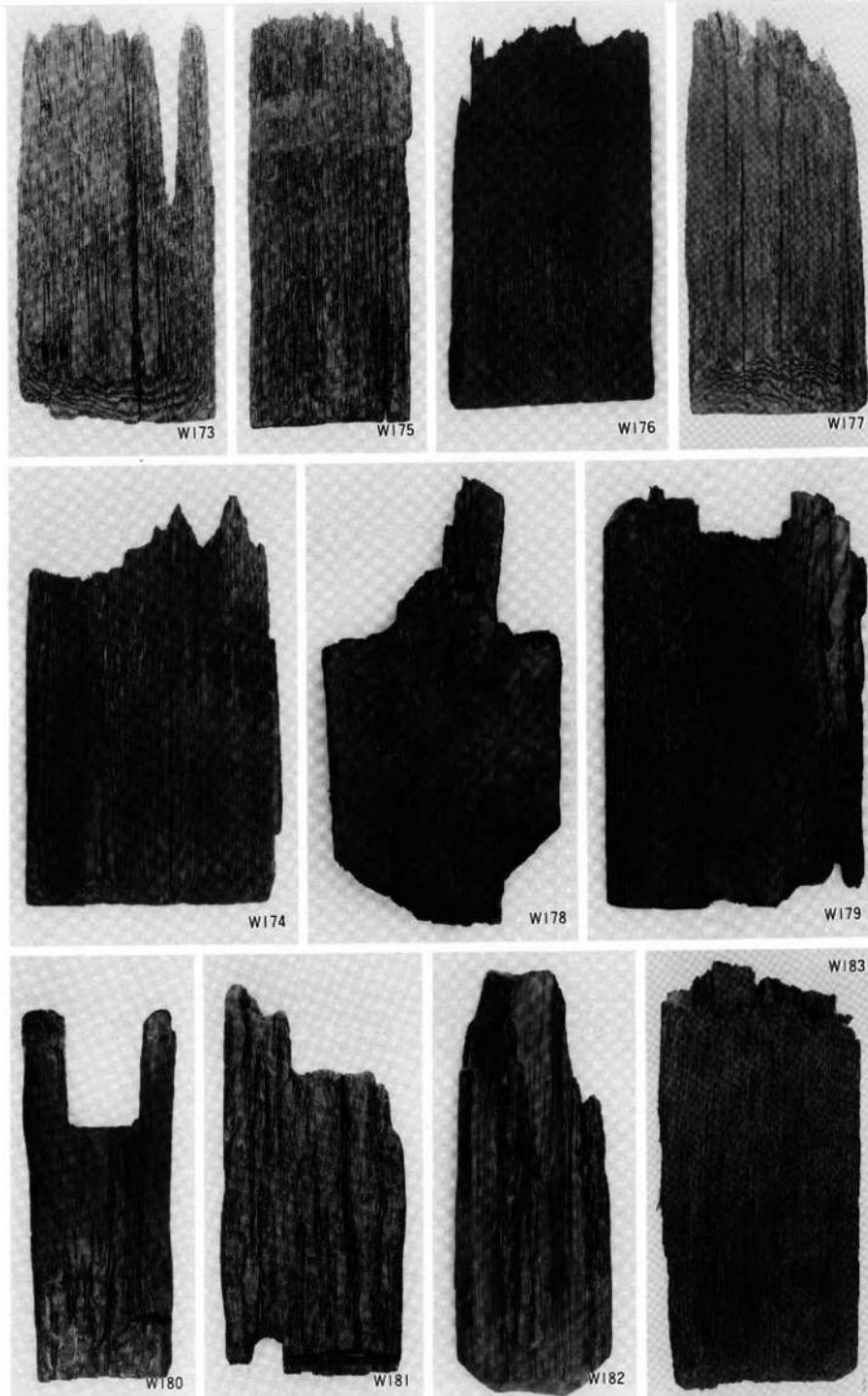
図版41 木製品15（用途不明品）



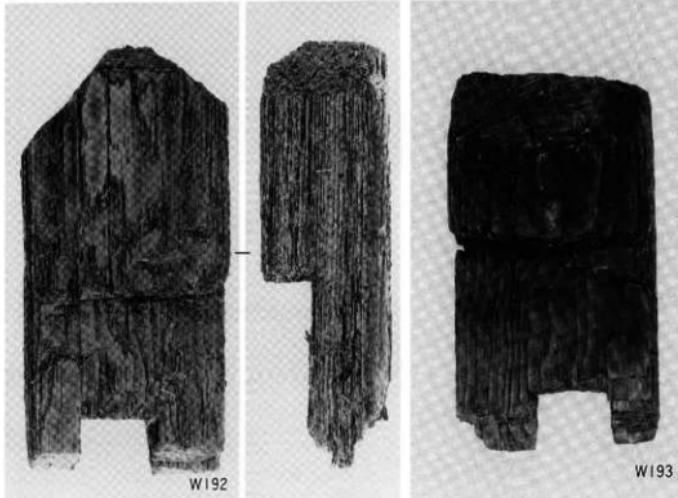
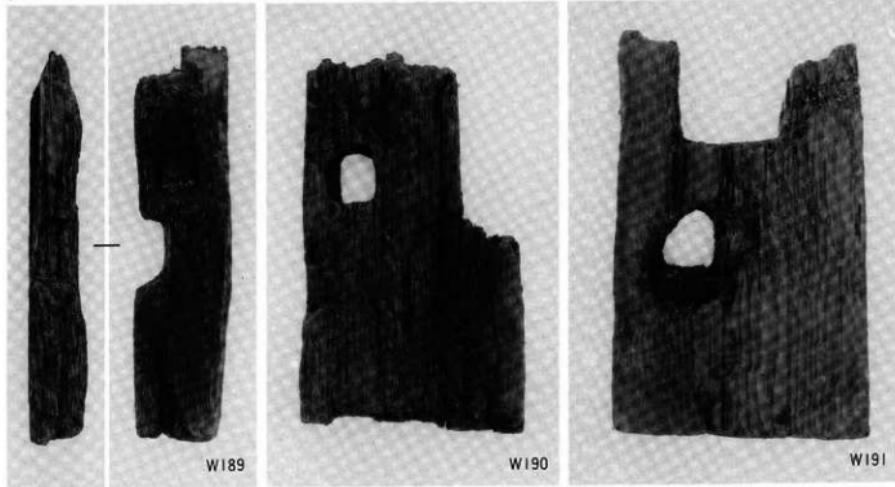
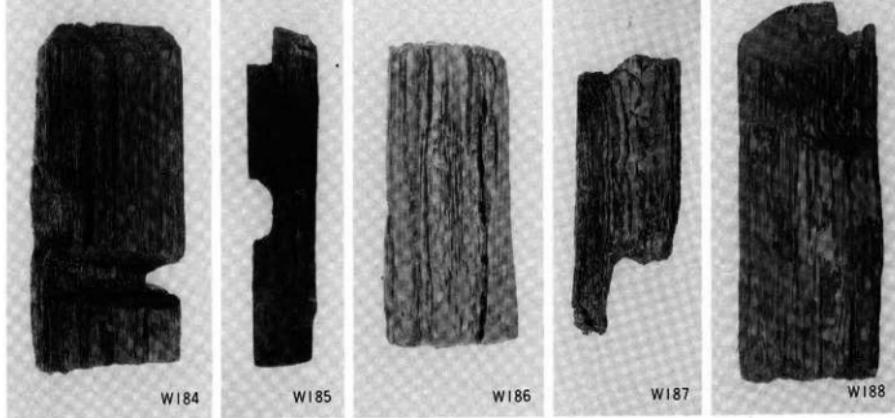
図版42 木製品16（井戸材）



図版43 木製品17（穀板1）



図版44 木製品18 (襖板 2)



図版45 木製品19 (棊盤 3)



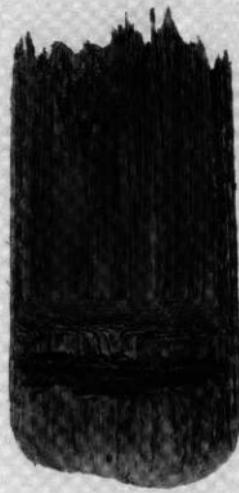
W195



W197



W198



W194

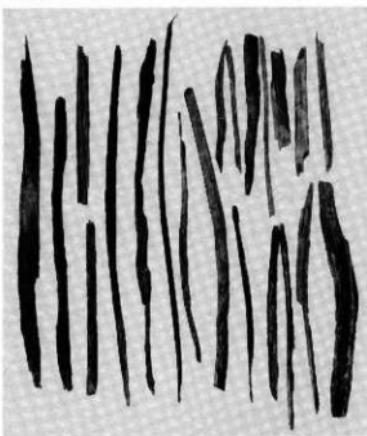
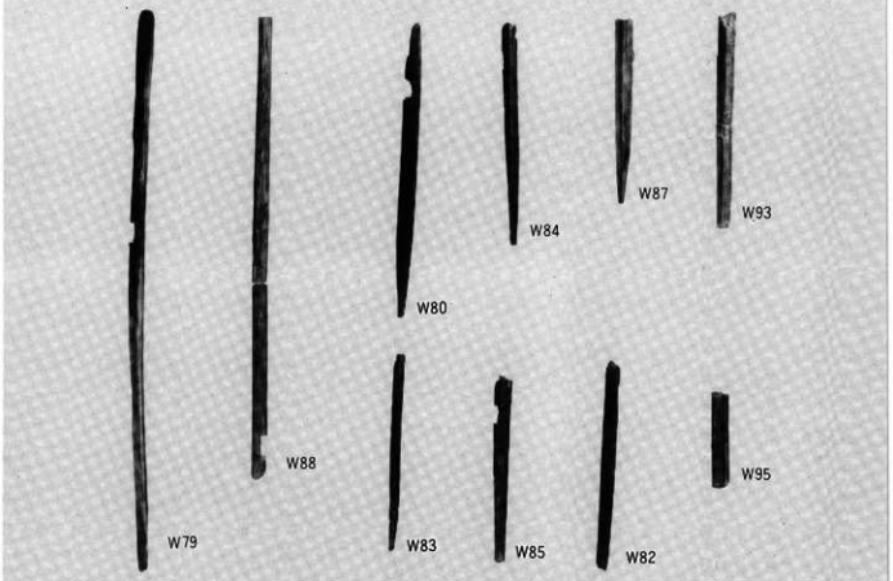


W196



W199

図版46 木製品20（箸形木器・釘付き板材）



W200

図版47 金属製品 I (銅印・鉄帶金具・錢貨)



M2

M3

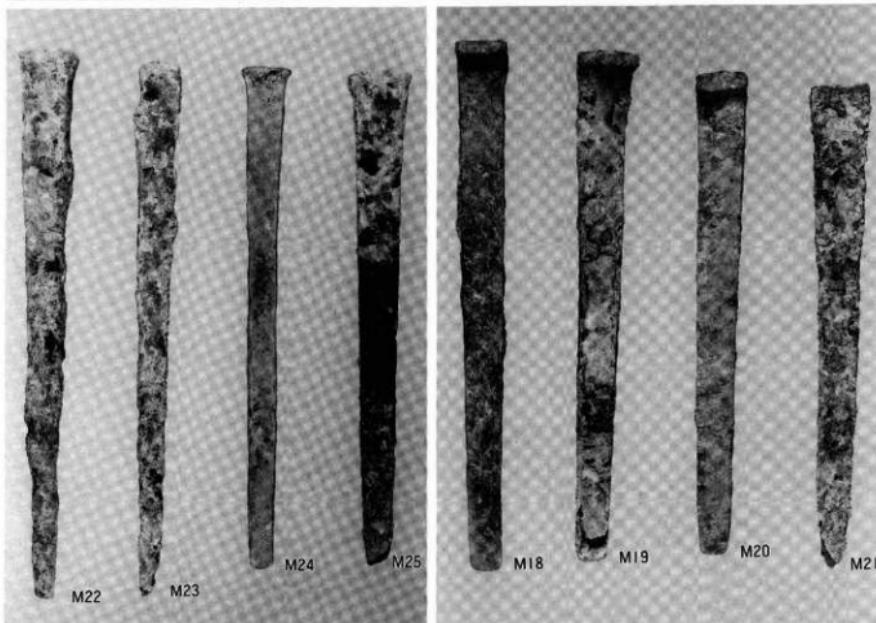
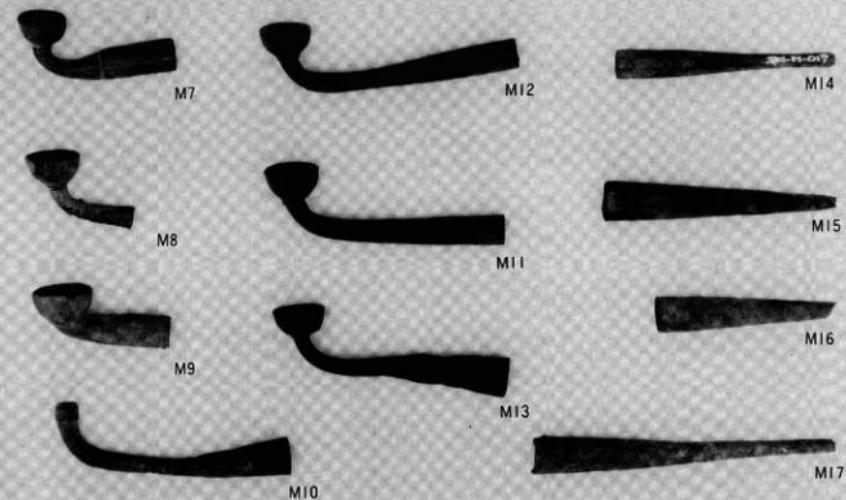


M5

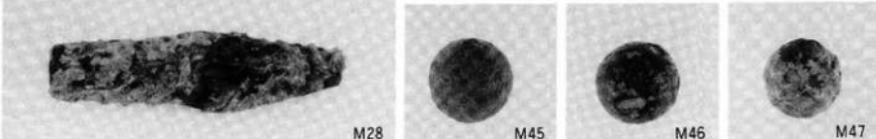
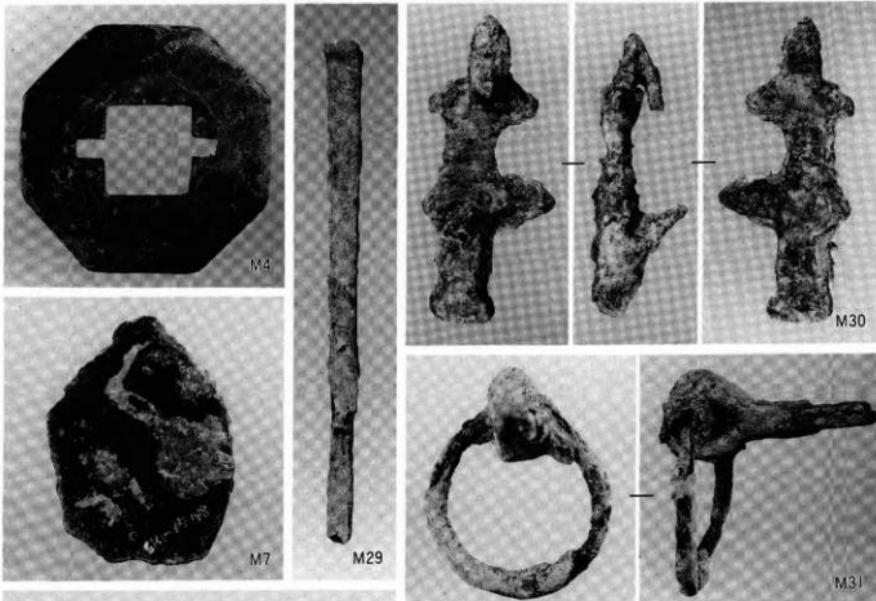
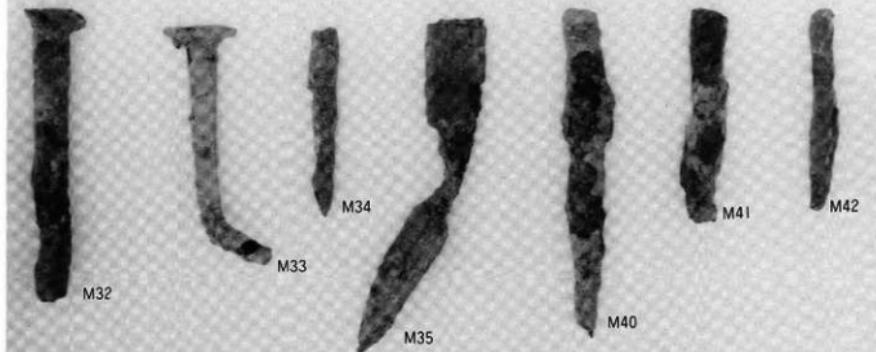


M6

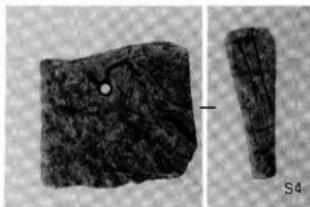
図版48 金属製品2 (きせる・馬鍔・刀)



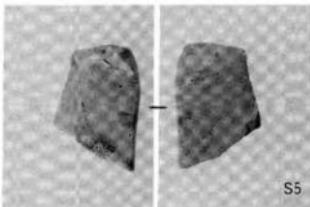
図版49 金属製品 3 (鉄釘・馬具・鉄砲玉・その他)



圖版50 石製品（砾石）



S4



S5



S6



S7

報告書抄録

ふりがな	うちあれいせき いぶつへん								
書名	内荒遺跡 遺物編								
副書名	昭和62年度静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告								
シリーズ番号	第16集								
編著者名	山田成洋・大石 泉(付属:山崎一雄・三辻利一・山内 文)								
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所								
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18-5				TEL. 0543-67-1171(代)				
発行年月日	1988年 3月 30日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村:遺跡番号	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因		
内荒遺跡	静岡県静岡市 川合新田字内荒 85地	22201	35度 0分 14秒	138度 24分 42秒	19840701~ 19860331	9,476 m <sup>2</sup> (川合遺跡 一部含む)	静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査業務		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
内荒遺跡	官衙 水田	奈良時代~ 平安時代	獨立柱建物・井戸・周溝・橋列・溝・道路状 遺構・散状小溝・地割	灰釉陶器・綠釉陶器・ 須恵器・土師器・墨壺 土器・陶器・銅印・銅 帶金具・神功開宝・曲 物・接物・利物・木簡 ・鹿具・陽陽形・土鏡 ・錢貨・陶磁器・漆器 ・櫛・下駄・きせる ・木鏡・位牌・刀形・劍 形・畜串	横列や溝等で方形に地 割されたなたに据立柱 遺物が計画的に配置さ れている。 「造大神印」鉛をもつ 印面9.5cm四方、印高 4.1cm、重さ72.1gの含 鉛印が出土。				
		江戸時代	水田		多量の灰釉陶器・墨壺 土器・銅印など注目す べき遺物から安倍郡衙 に比定できる可能性が 大きく、律令期における 重要な資料が得られ た。				

静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書は、以下の分冊で構成されている。

川合地区		
1区～4区	宮下遺跡	造構繩 造物繩
6・7・8・10・11・12区 13区横脚部分	川合遺跡	造構繩 造物繩 1 土器・土製品 (本文編・図版編) 2 石製品・金属製品 (本文編・図版編) 3 木製品 (本文編・図版編)
13～16区	内荒遺跡	造構繩 造物繩

内 荒 遺 跡  
(遺 物 編)

昭和62年度静清ハイバス(川合地区)  
埋蔵文化発掘調査報告書

昭和63年3月30日

編集発行 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印 刷 株式会社 三 創  
静岡市中村町166番地の1  
T E L (0542) 82-4031